ISSN 2432-244X

言語記述論集 第11号

言 語 記 述 研 究 会

言語記述論集 第 11 号

目 次

チベット文化圏に暮らすリス族の話すカムチベット語方言
—徳欽県霞若郷布亞培村の言語事情— ..... 鈴木 博之 1
カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言における口承文芸の記録と言語分析
..... 鈴木 博之・四郎翁姆 17
北ビルマ・カチン族の民話資料 ..... 倉部 慶太 39
チャクマ語音韻論 ..... 藤原 敬介 51
第 51 回国際漢蔵語学会開催報告 ..... 藤原 敬介 103
北パイワン語の接頭辞 ki-について ..... 大谷 青渚 141
ハイスラ語における再帰・相互表現について ..... ワットゥクンプ テロ 163
ルシャンの昔話—猫とおばあさん— ..... 岩崎 崇雅 181

鈴木　博之（2019）『言語記述論集』11：1-16

チベット文化圏に暮らすリス族の話すカムチベット語方言
——徳欽県霞若郷布亞培村の言語事情——

鈴木 博之
オスロ大学

キーワード：カムチベット語、Sems-kyi-nyila 方言群、方言所属、リス語、二重言語使用

1　はじめに

中国雲南省迪慶藏族自治州は、チベット文化圏の南東端に位置し、チベット系諸言語の分布地域の南東端を形成する部分である。同地域には、チベット系諸言語をはじめ、さまざまな少数言語が分布している。雲南省のチベット系諸言語は、すべてカムチベット語に属する。Suzuki (2018) が雲南省の 108 地点の地域方言を扱い、方言間の語彙的異同を概観できる。しかしながら、Suzuki (2018) はチベット族が話すカムチベット語しか扱っていない。すなわち、カムチベット語を第 1 言語とする、または多重言語併用の中の 1 言語とする非チベット族の存在に対して、特別な注意を払っていない。迪慶州には、民族としてはチベット族でなくても、カムチベット語の地域方言を母語としてまたは母語に準じる形で話す少数民族が暮らしている。

図 1　霞若郷の位置

迪慶州徳欽県霞若傈僳族郷（図１参照）は、その名のとおりリス（傈僳）族の人口が相対的に多い郷鎮の１つである。同郷の人口分布を統計資料から概観すると、郷内の各行政村でリス族とチベット族の雑居が認められるが、実際には、自然村レベルにおいて住み分けがなされており、川沿いの低地にはチベット族が、山の上の高地にはリス族が暮らしている（呉光范 2009:403-417）。これはまた、自然村レベルで見れば、カムチベット語を用いる村とリス語を用いる村に分けられることを示している。両言語が１つの村の中で用いられる事例は相対的に少ないが、民族間で通婚する事例が認められ、環境によっては二重言語併用が認められる家庭もある。リス族であるがカムチベット語を母語とする事例は少なくないが、チベット族であるがリス語を母語とする事例は少ない。いずれにせよ、カムチベット語とリス語をそれぞれ第１、第２言語として習得している住民が多い。

ところが、本稿で焦点を当てる霞若郷施壩行政村布亞培自然村（図２、３参照）の事例については、状況が若干異なる。布亞培村は、呉光范 (2009:409) によると 18 戸 74 人の人口があり、チベット族とリス族が居住している。実際のところ、住民のほとんどがリス族であり、リス族の家庭ではカムチベット語を母語として習得することはない。しかしながら、村で言語形成期を過ごした人々は、ほとんどがリス語とカムチベット語の二重言語併用を行う。ここにおけるカムチベット語とは、地域共通語（リンガ・フランカ）ではなく、村での日常生活において固定されて用いられる言語である。すなわち、特定の機会においては、カムチベット語だけを用いるという状況が存在する。

図２　布亞培村全景（2011 年）　撮影：余燕

図 3　布亞培村の自然環境（2011 年）　撮影：余燕

霞若郷施壩行政村は、行政村全体を見ると住民のほとんどがリス族である。その中で、布亞培自然村は谷の入り口に近い、すなわちチベット族の居住地域に近い地域に位置する村である。ただし、図２、３を見ても分かるように、村は山の中腹に位置し、チベット族の居住地域からは離れている。そのため、同地域のリス族とチベット族は密接な交流を持っているわけではない。しかし、霞若郷のみならず、迪慶州全体を見ても、長らく漢語が地域共通語の役割を果たす一方、どの民族でどの言語を母語とする者であっても、複数の言語に通じているという状況はまれではない（Suzuki 2017a 参照）。布亞培という地名はカムチベット語に由来し、最初の二字が「うさぎ」（文語形式 *spang g.yag*）の音写で、第三字が「地方」（直接対応する文語形式は不明。ただし *'phel* の可能性あり；鈴木 2011 参照）の音写であるという。このことから、過去には村がチベット系住民によって居住されていた可能性があるのではないかと土地の人々は考えている。民家の建築様式も霞若郷のチベット人の家屋と類似性がある（図 4 参照）。しかし、現在 70 代の村民によると、チベット人がまとまって居住していたという記憶はなく、日常会話はみなリス語を用いていたという。また、50 代以上の住民のほとんどは、戸籍に登録されている漢名以外に、チベット名もまたもっている。チベット名はトンバと呼ばれる村の宗教職能者に名づけてもらう習慣がある。現在でも、中高年以下の年代においても村民の半数程度はチベット名をもっている。また、リス名というのもあり、たとえば、ある家庭の 4 人きょうだいは、２人がチベット名をもち、もう２人がリス名をもつ、といった状況が認められる。

図 4　布亞培村の民家（2011 年）　撮影：余燕

布亞培村のリス族は、リス族としても異なる来歴をもつ。そもそも霞若郷のリス族は、200 年ほど前に他の地域から移住してきた人々に起源をもつ。大部分は隣接する迪慶州維西県からの移住者であるというが、布亞培村のリス族は、現在の麗江市華坪県のあたりから移住してきたという口承の歴史がある。両者の間には少なからず言語差（方言差）が認められ、木玉璋、孫宏開 (2011:12-13) によると、維西県のリス語は怒江方言に、華坪県のリス語は永勝方言に分類される。布亞培村の住民も自身の話すリス語が他の村の方言と異なりがあることを自覚しており、しばしば近隣の村のリス族とリス語によるやりとりに若干の支障が出るというが、意思疎通を阻害する程度ではない。そのほか、習俗や民族衣装も他のリス族の村のものと異なる。

以上のような移住の経緯をもつリス族であるが、彼らが話すカムチベット語とは何であろうか。それは年中行事と宗教行事において用いられる言語である。布亞培村の住民は、あらゆる宗教儀式において、チベット文語で書かれた経典を使用する。トンバはみな在家の俗人であり、僧ではない。また、ナシ（納西）族のトンバともその職能を異にするという。筆者はこの実態についての記録は行っていないものの、土地の人々から聞き及んだことを総合して考えれば、自然崇拝を伴うボン教の 1 形態であることがうかがえる。また、布亞培村の住民は周辺のリス族が信仰する宗教とは異なりがあることを認めている。チベット文語で書かれた経典を読誦する場合、土地の読書音を用い、口語形式とは異なる。しかし、宗教儀式におけるすべての会話がカムチベット語で行われ、リス語は用いられない。このときの会話がカムチベット語「布亞培方言」を用いて行われる。年中行事も宗教と関わりがあるが、儀礼的な場面での会話がカムチ

ベット語で行われる。

このカムチベット語が何に由来するのかは、口承からは知りえない。しかし、布亞培村へのリス族の移住前に居住していたであろうチベット人の言語である可能性は指摘できる。リス族が受容したチベット文語で書かれた経典についても、インタビューを行った人の家系に伝わっていた経典については伝来の経路が不明ということであった。仮に移住してきたリス族がもともと存在していたチベット文化を吸収したと考えるならば、自然な伝播経路として受け入れられる可能性がある。史実は現在のところ不明であるが、彼らの話す口語それ自体を記述言語学の対象として記述し、それに基づいて歴史言語学的に考察することは可能である。言語から歴史を検証する作業は現実的であり、かつ実現可能である。

本稿では、布亞培村のカムチベット語とリス語の語彙それぞれ 137 語の記述を提供し、その資料に見られる言語特徴を既知の方言と対照する。言語資料は同一の話者から採集した。調査協力者はツェリ・ジュマさん（女性；60 代）で、布亞培村出身、現在は香格里拉市建塘鎮在住である。

2　布亞培村のカムチベット語とリス語：語彙資料

本節では、布亞培村のカムチベット語とリス語の語彙を記述する。語彙の各音形式は音声表記に基づくが、超分節音素については分析済みの形式を掲げる[1]。カムチベット語については Suzuki (2016) を、リス語については鈴木 (2012) の表記を参照。

語義	カムチベット語	リス語
(1) 天	$^{-ɦ}$nɔ̃	mo^{H} lo
(2) 太陽	ˊn̥i ma	mi ɦ̃i
(3) 月	ˊ^{n}da wa	xɑ bɑ
(4) 星	$^{-h}$kɛː ma	kɯ mɑ zl̰^{H}
(5) 雲	$^{-h}$ʈĩ	mi tḭ^{H}
(6) 雷	ˋ^{n}dʑɔʔ ^{ɦ}luʔ	mo̰ gwɑ̰
(7) 風	$^{-ɦ}$lɔ̃ mɛː	mi^{L} ɦ̃i^{L}
(8) 雨	ˊʈʂ^{h}ɛː ba	mi^{L} xɑ^{L}
(9) 雪	ˊk^{h}ɑː	wɑ̰
(10) 雹	ˊs^{h}ɑː	lo^{H} ɦ̃ɑ̰^{H}
(11) 霜	ˊpa mwə	n̥ḭ
(12) 氷	ˊn̥ɔʔ	n̥ḭ t^{h}i^{H}
(13) 火	ˊn̥e	ʔa^{H} to^{H}

[1] カムチベット語の声調は語声調で最初の２音節のみが弁別的声調の領域をなし、次の４種が対立する：$^{-}$：高平、ˊ：上昇、ˋ：下降、ˆ：昇降。リス語の声調は音節声調で、次の４種が対立する：^{H}：高平、表記なし：中平、^{L}：低域、^{R}：上昇。きしみ音化母音を含む音節には、^{H}：高、表記なし：低の２種のみが現れ、ピッチが下降調になる場合がある。

語義	カムチベット語	リス語
(14) 煙	ˊtəʔ pa	jẹ̃
(15) 空気	ˋʱbɔʔ	ji^{H} se
(16) 干ばつ	ˋʱnɔ̃ ʰkɔ̃	ᵐba ji
(17) 世界	ˊⁿdzɔ̃ lĩ	lọ̃ ka
(18) 地	ˉsʰa	mi^{L} ne^{L}
(19) 山	ˊrə	tsə tso
(20) がけ	ˊrə ʱzɛː	rə̃^{H} tsə̃^{H}
(21) 川	ˉʈʂʰuː ʈʂʰə	ji^{H} mɑ
(22) 湖	ˉⁿ̥tsʰwə	ji fɣ
(23) 池	ˉʈʂʰɯ ʱdzẽj	ji by
(24) 道	ˊlɔ̃	ⁿɖo wu
(25) 土	ˉsʰa	ny^{H} h̃y
(26) 畑	ˊʂẽj	xɑ mi
(27) 石	ˉʱdwə	lo^{H} di^{H}
(28) 砂	ˊɕi ma	ɕi ma^{H}
(29) 水	ˉʈʂʰɯ	ji dʑe
(30) 森	ˊnɑʔ	se^{H} di
(31) 草原	ˉʰtswa	ɕə^{H} di
(32) 金	ˉʰseː	ʂʅ̃
(33) 銀	ˉʱŋʉː	pʰɣ^{L}
(34) 鉄	ˋʰʈʂɑʔ	fwi^{L} tɑ^{L}
(35) 地方	ˉsʰa ʈʂʰa	lo^{L}
(36) 体	ˊləː bwə	go dy
(37) 頭	ˋᵑgwə	wu^{H} dy
(38) 髪	ˉʰtɕa	wu^{H} tsʰy
(39) まつ毛	ˉʱɲiː ʰpɯ	me^{H} tsʰə^{H}
(40) 目	ˋʱɲiʔ	me^{H} sʅ̃
(41) 鼻	ˉn̥a	na^{H} bi^{H}
(42) 耳	ˉʱna pa	na^{H} po
(43) 顔	ˉʱdo	tʰe^{H} me
(44) 口	ˉkʰa	kʰa bi^{L}
(45) あごひげ	ˊʔa tsoː	mɑ^{R} tsə
(46) 首	ˉʰke pɑʔ	kə^{H} tsə^{H}
(47) 肩	ˉʰpɔ̃ ᵐba	lɛ̃^{H} pʰɣ
(48) 背中	ˉʱgɔ̃	ka ti

語義	カムチベット語	リス語
(49) 胸	ˊɕɔː ta	wu^{H} mə
(50) 乳房	ˆnɵʔ nɵʔ	ʔa^{H} bo^{H}
(51) 腹	$^{-h}$twɑː	h̃i^{H} mɑ
(52) 足	ˊkə bɑ	tɕ^{h}i k^{h}ɛ
(53) 手	ˊlɑ kwa	le p^{h}e^{R}
(54) 親指	ˊn̥t^{h}ʉ piː	le^{H} pɑ mo
(55) チベット人	ˊpɵʔ	kɑ^{H} zɣ̩
(56) 漢族	$^{-ɦ}$dʑa	xɯ p^{h}ɑ^{L}
(57) 子供	ˊtaː ɕe	ji^{H} zɑ tʃ^{h}ə
(58) 老人	ˊn̥ə ^{ɦ}gɛ̃	ʔɑ^{H} pɑ^{H} mo^{L}
(59) 老婦人	ˊ^{ɦ}gɛː ŋo	ʔɑ^{H} jɑ mo
(60) 1	ˋ^{h}ʈʂiʔ	t^{h}i^{L}
(61) 2	¯nə	ni
(62) 3	$^{-h}$sɔ̃	sɑ̰^{H}
(63) 4	ˊ^{ɦ}ʐə	lḭ
(64) 5	$^{-ɦ}$ŋa	ŋwɑ^{L}
(65) 6	ˋʈɔʔ	tɕ^{h}ṵ^{H}
(66) 7	$^{-ɦ}$dɛː	ʂɿ^{L}
(67) 8	ˋ^{ɦ}dʑeʔ	h̃i^{H}
(68) 9	$^{-ɦ}$gɯ	kṵ
(69) 10	$^{-h}$ʈʂɯ	ts^{h}ə^{L}
(70) 11	ˋ^{h}ʈʂoː ^{ɦ}ɖʐiʔ	ts^{h}ə^{L} t^{h}i^{L}
(71) 12	$^{-h}$ʈʂoː nə	ts^{h}e^{L} ni^{L}
(72) 13	$^{-h}$ʈʂoː ^{h}sɔ̃	ts^{h}ə^{L} sɑ̰
(73) 14	$^{-h}$ʈʂʉː ^{ɦ}ʐə	ts^{h}ə^{L} lḭ
(74) 15	$^{-h}$ʈʂeː ^{ɦ}ŋa	ts^{h}ə^{L} ŋwɑ^{L}
(75) 16	ˋ^{h}ʈʂə ^{ɦ}ɖɔʔ	ts^{h}ə^{L} tɕ^{h}ṵ^{H}
(76) 17	$^{-h}$ʈʂu ^{ɦ}dɛː	ts^{h}ə^{L} ʂɿ^{L}
(77) 18	$^{-h}$ʈʂoː ^{ɦ}dʑeʔ	ts^{h}ə^{L} h̃i^{H}
(78) 19	$^{-h}$ʈʂeː ^{ɦ}gɯ	ts^{h}ə^{L} ku^{L}
(79) 20	ˊn̥i ʂ^{h}ɯ	ni^{R} tsə
(80) 21	ˊn̥i ʂ^{h}ɯ ˋ^{h}tsaː ^{ɦ}ɖʐiʔ	ni^{R} tsə t^{h}i^{L}
(81) 22	ˊn̥i ʂ^{h}ɯ $^{-h}$tsaː nə	ni^{R} tsə ni
(82) 23	ˊn̥i ʂ^{h}ɯ $^{-h}$tsaː ^{h}sɔ̃	ni^{R} tsə sɑ̰^{H}
(83) 24	ˊn̥i ʂ^{h}ɯ $^{-h}$tsaː ^{ɦ}ʐə	ni^{R} tsə lḭ^{L}
(84) 25	ˊn̥i ʂ^{h}ɯ $^{-h}$tsaː ^{ɦ}ŋa	ni^{R} tsə ŋwɑ^{L}

語義	カムチベット語	リス語
(85) 28	ˊɲi ʂʰɯ ˋʰtsaː ʱdʑeʔ	niᴿ tsə ɦ̃iᴴ
(86) 30	ˉsʰõ ʈʂɯ	sɑ tsʰə
(87) 32	ˉsʰõ ʈʂɯ ˉʰtsaː nə	sɑ tsʰə ni
(88) 38	ˉsʰõ ʈʂɯ ˋʰtsaː ʱdʑeʔ	sɑ tsʰə ɦ̃iᴴ
(89) 40	ˊʱzʐə ʈʂɯ	li̯ tsʰə
(90) 43	ˊʱzʐə ʈʂɯ ˉʰtsaː ʰsõ	li̯ tsʰə sɑ̯ᴴ
(91) 50	ˉʱŋa ʰʈʂɯ	ŋwɑᴸ tsʰə
(92) 54	ˉʱŋa ʰʈʂɯ ˉʰtsaː ʱzʐə	ŋwɑᴸ tsʰə li̯
(93) 60	ˊʈɔː ʈʂɯ	tɕʰuᴴ tsʰə
(94) 65	ˊʈɔː ʈʂɯ ˉʰtsaː ʱŋa	tɕʰuᴴ tsʰə ŋwɑᴸ
(95) 70	ˉʱdɛː ʈʂɯ	ʂɿᴸ tsʰəᴸ
(96) 76	ˉʱdɛː ʈʂɯ ˋʰtsaː ʱɖɔʔ	ʂɿᴸ tsʰəᴸ tɕʰu̯ᴴ
(97) 80	ˉʱdʑeː ʈʂɯ	ɦ̃iᴴ tsʰə
(98) 87	ˉʱdʑeː ʈʂɯ ˉʰtsaː ʱdɛː	ɦ̃iᴴ tsʰə ʂɿᴸ
(99) 90	ˉʱgɯ ʈʂɯ	ku̯ tsʰə
(100) 98	ˉʱgɯ ʈʂɯ ˋʰtsaː ʱdʑeʔ	ku̯ tsʰə ɦ̃iᴴ
(101) 99	ˉʱgɯ ʈʂɯ ˉʰtsaː ʱgɯ	ku̯ tsʰə ku̯
(102) 100	ˉʱdʑa	tʰiᴸ ɦ̃ɑ̯ᴸ
(103) 1000	ˉʰtuː ʈʂʰɑʔ	tʰi tu
(104) 10000	ˉʈʰə ʈʂʰɑʔ	tʰi mɯ̯
(105) 私	ˊŋa	ŋɑᴿ
(106) あなた	ˋtɕʰɨʔ	nuᴿ
(107) 彼/彼女	ˉkʰwə	jiᴴ
(108) 我々	ˊʔa ʱgwə	ʔɑ ji
(109) あなたたち	ˉtɕʰɨʔ na	nɑᴸ
(110) 彼ら	ˊkʰo na	jwɑᴴ
(111) 大きい	ˊʈʂʰə bwə	ʔɑ pyᴴ
(112) 小さい	ˊʈʂʰõ ʈʂʰõ	ʔɑᴴ jweᴴ
(113) 多い	ˊkɔː tɕa	nɑᴿ nɑ
(114) 少ない	ˊɲõ ɲõ	ʔɑᴴ teᴴ
(115) 赤い	ˉʱmɛ ʱmɛː	ɲiᴿ tɕʰuᴿ
(116) 白い	ˉʰkɛ ʰkɛː	pʰɣᴿ tʃɑ
(117) 黄色い	ˉʰeː ʰeː	ʂɿᴿ kʰy
(118) 緑の	ˉŋ̊õ ʰẽ	ɲiᴿ tɕʰi
(119) 熱い	ˊtsʰɑː	tsʰɑᴿ
(120) 寒い	ˋ˚tɕʰɑʔ	dʑe̯

語義	カムチベット語	リス語
(121) 酸っぱい	$^{-h}$tɕʉː pa	tʃɯ^{R} tʃɯ^{R}
(122) 甘い	$^{-ɦ}$ŋeː s^{h}ẽ	tʃ^{h}ɯ t^{h}e
(123) 苦い	ˋk^{h}ə ɕ^{h}a	k^{h}ɑ^{L} k^{h}ɑ^{L}
(124) からい	ˆkɛː ɕ^{h}a	bẽ^{H}
(125) 干支	ˊlo ɕẽ	ji^{H} k^{h}ɣ̩
(126) ね	ˆɕwɑː lo ba	xe^{R} k^{h}ɣ̩ sɯ
(127) うし	ˋ^{ɦ}lõ lo ba	ȵi k^{h}ɣ̩ sɯ
(128) とら	ˋ^{h}tɑʔ lo ba	lɑ^{L} k^{h}ɣ̩ sɯ
(129) う	ˆjʉː lo ba	t^{h}o^{H} lɑ k^{h}o
(130) たつ	ˆ^{n}dʑɔʔ lo ba	lɣ̩^{L} k^{h}ɣ̩ sɯ
(131) み	ˋ^{ɦ}jʉː lo ba	fɣ̩^{H} k^{h}ɣ̩ sɯ
(132) うま	ˋ^{h}ta lo ba	ʔa^{H} mu k^{h}ɣ̩ sɯ
(133) ひつじ	ˆlɔʔ lo ba	jo^{R} k^{h}ɣ̩ sɯ
(134) さる	ˋ^{h}ɕʉː lo ba	my^{H} k^{h}ɣ̩ sɯ
(135) とり	ˆɕa lo ba	ʔɑ^{H} ɣe^{L} k^{h}ɣ̩ sɯ
(136) いぬ	ˋts^{h}ə lo ba	k^{h}ɯ k^{h}ɣ̩ sɯ
(137) い	ˋp^{h}ɑʔ lo ba	ʔa^{H} le k^{h}ɣ̩ sɯ

3　語彙資料から見るカムチベット語布亞培方言の方言学的位置づけ

本節では、先に掲げた語彙資料に基づいて、カムチベット語布亞培方言の方言学的位置づけを試みる。雲南省で話されるカムチベット語については、資料、方言学的研究ともに豊富である（鈴木 2015b, 2016, 2017, 2018ab, 2019ab, Suzuki 2018 など）ため、布亞培方言を方言学的に考察する作業は可能であると判断する[2]。

以下、音形式と語形式に分けて議論する。なお、各例には２節で掲げた通し番号を付してある。

3.1　音形式について

チベット系諸言語について、その音形式を特徴づけるのは、チベット文語形式（蔵文）との対応関係である。100 語程度という限られた語彙数ではあるが、まず以下に布亞培方言の音形式と方言学的研究において意義ある蔵文との対応関係をまとめる。

[2] 一方、リス語の方言資料については、方言学的研究を行うのに非常に限られた語彙資料しか手元にないため、今後の課題としたい。ただし、筆者の資料によれば、「ぶた」が/ʔa^{H} le/となる（137「い」の初頭２音節を参照）のは維西県塔城鎮のリス語に認められるのみで、他の地域の形式とは異なる。また、(16), (24) の例に見られるように、リス語布亞培方言には前鼻音が認められるが、これはその他のリス語方言には見られない特徴である。

蔵文 Ky/Py/Kr/Pr/C/SH 対応形式[3]

この特徴は、それぞれの蔵文形式の音対応とともに、その全体的な音対応を見る必要がある（鈴木 2017, 2018a）。まず、個別の事例を見ていく。

蔵文 Ky 対応形式は、次のように前部硬口蓋破擦音になる。

(106)「あなた」ˋtɕʰʉʔ (*khyod*)
(120)「寒い」ˋn̥tɕʰɑʔ (*'khyag*)
(121)「酸っぱい」⁻ʰtɕʉː pa (*skyur pa*)

蔵文 Py 対応形式は、次のように前部硬口蓋摩擦音になる。

(28)「砂」´ɕi ma (*bye ma*)
(126)「ね」ˆɕwɑː lo pa (*byi ba lo pa*)
(135)「とり」ˆɕa lo pa (*bya lo pa*)

蔵文 Kr 対応形式は、ただ 1 例のみが認められ、(38)「髪」⁻ʰtɕa (*skra*) のように前部硬口蓋破擦音になる。

蔵文 Pr 対応形式は、いくつかの形式が認められ、前部硬口蓋摩擦音、硬口蓋接近音または前鼻音を伴う前部硬口蓋破擦音になる。

(6)「雷」ˋⁿdʑɔʔ ʱluʔ (*'brug glog*)
(49)「胸」´ɕɔː ta (*brang ?*)
(131)「み」ˋʱjʉː lo ba (*sbrul lo pa*)
(134)「さる」ˋʰɕʉː lo ba (*sprel lo pa*)

ただし、(5)「雲」⁻ʰʈĩ (*sprin*) のように、そり舌閉鎖音になるものもある。

蔵文 C 対応形式は、次のようにそり舌破擦音になる。

(29)「水」⁻ʈʂʰɯ (*chu*)
(34)「鉄」ˋʰʈʂɑʔ (*lcags*)
(60)「 1 」ˋʰʈʂiʔ (*gcig*)

蔵文 SH 対応形式は、次のようにそり舌摩擦音になる。

(26)「畑」´ʂẽj (*zhing*)
(63)「 4 」´ʱʐə (*bzhi*)
(79)「20」´ɳi ʂʰɯ (*nyi shu*)

これらの音対応をまとめて一覧とすると、以下のようになる。

[3] これらの蔵文略式表示は、鈴木 (2018a) にならい、次の意味を表す。蔵文 Ky：蔵文 k, kh, g を基字とし y を足字とする形式を含むすべての組み合わせ；蔵文 Py：蔵文 p, ph, b を基字とし y を足字とする形式を含むすべての組み合わせ；蔵文 Kr：蔵文 k, kh, g を基字とし r を足字とする形式を含むすべての組み合わせ；蔵文 Pr：蔵文 p, ph, b を基字とし r を足字とする形式を含むすべての組み合わせ；蔵文 C：蔵文 c, ch, j を基字に含むすべての組み合わせ；蔵文 SH：蔵文 zh, sh を基字に含むすべての組み合わせ。

蔵文形式	代表的な対応音	蔵文形式	代表的な対応音
C	そり舌破擦音	sh/zh	そり舌摩擦音
Ky Kr	前部硬口蓋破擦音	Py Pr	前部硬口蓋摩擦音
		ただし’br	前部硬口蓋破擦音
		ただし sbr	硬口蓋接近音

以上の特徴を鈴木 (2017)、Suzuki (2018) で議論されている雲南のカムチベット語の特徴と比較すれば、布亞培方言は Sems-kyi-nyila 方言群 rGyalthang 下位方言群および雲嶺山脈東部下位方言群のうち、音体系のもっとも単純な「第３類」（鈴木 2017）に属する特徴を備え、より正確に言えば、鈴木 (2019a) の扱う Lungyul 方言に極めて近い音対応を見せていると言える。

蔵文 l/y 対応形式

まず、布亞培方言の蔵文 l 対応形式は、蔵文 l を基字または足字とする場合、以下のように/l/となる。

(24)「道」ˊlɔ̃ (*lam*)

(125)「干支」ˊlo ɕẽ (*lo ?*)

(127)「うし」ˋ^{ɦ}lɔ̃ lo ba (*glang lo pa*)

(7)「風」⁻^{ɦ}lɔ̃ mɛː (*rlung dmar*)

ただし、(3)「月」(*zla ba*) はˊ^{n}da wa となる。

次に、布亞培方言の蔵文 y（基字）対応形式は、(129)「う」ˆjʉː lo ba (*yos lo pa*) のように/j/となる。

以上の特徴を鈴木 (2015b)、Suzuki (2018) で議論されている雲南のカムチベット語の特徴と比較すれば、布亞培方言は Sems-kyi-nyila 方言群の言語特徴と共通することが言える。

蔵文母音字＋末子音字対応形式

前節の語彙リストに見られる語彙の中で、語末位置における基本的な対応関係は以下のように示すことができる。語中に来る場合、以下の表に示す音対応とは異なる場合がある。表の形式について、蔵文再添後字 s は口語形式に明確な対応関係を得られないため、記載を省略する。また、空白の箇所は対応形式が不明であることを意味する。

V\C	# / ’	b	d	g	m	n	ng	r	l	s
a	a		eʔ	ɑʔ	ɔ̃	ɛ̃	ɔ̃	ɛː		
i	ə			iʔ		ĩ	ẽj			ə
u	ɯ			ɔʔ	ɔ̃	ɛː	ɔ̃		ʉː	
e	e							eː	ʉː	
o	wə		ʉʔ / ɵʔ	uʔ			o			ʉː

以上の中で、地域差が大きい音対応について見ると、蔵文末子音字 r がある場合の対応形式があげられる（鈴木 2019b）。布亞培方言の分布地域の近隣で、Sems-kyi-nyila 方言群に属する方言の中には、末子音字 r を/r/で発音したり子音性母音/ɹ̩, ɻ̩/と対応する方言群があるが、布亞培

方言はそうではない類型に属する。

特に注目すべきは、蔵文形式で鼻音末子音字がある例で、布亞培方言で非鼻母音（かつ長母音）に対応する例がある点である。たとえば、次のようである。

(43)「顔」$^{-ɦ}$do (*gdong*)
(66)「７」$^{-ɦ}$dɛː (*bdun*)
(49)「胸」ˊɕɔː ta (*brang ?*)
(95)「70」$^{-ɦ}$dɛː ʈʂɯ (*bdun cu*)
(103)「1000」$^{-h}$tuː ʈʂ^{h}ɑʔ (*stong phrag*)

このような音対応の特徴をもつのは、現在のところ鈴木 (2019a) の扱う Lungyul 方言しか見当たらない。この特徴を、鼻母音をもたないリス語[4]との言語接触によると考えることが可能かどうか検討する必要もある。なお、音声学的側面を考えると、調査協力者の話す漢語において、鼻音末子音がある例を発音するとき、鼻音要素が脱落する傾向は認められない。

音節の縮約

布亞培方言では、文語形式の第２音節が pa, ba などの接尾辞となる一部の例で、音節の縮約が起きる。たとえば、以下のようである。

(9)「雪」ˊk^{h}ɑː (*kha ba*)
(10)「雹」ˊs^{h}ɑː (*ser ba*)
(51)「腹」$^{-h}$twɑː (*lte ba*)
(126)「ね」ˊɕwɑː lo pa (*byi ba lo pa*)

この現象は雲南のカムチベット語で比較的広く認められる現象であるが、通常は以上以外に文語形式の第２音節が ma になる場合もまた縮約を起こす。しかしながら、布亞培方言ではこの事例は当てはまらない。たとえば、(2)「太陽」ˊɲi ma (*nyi ma*) や (11)「霜」ˊpa mwə (*ba mo*) のようである。

3.2　語形式について

チベット系諸言語は、互いに蔵文に認められる多数の語彙形式を共有することで知られる[5]。そのため、語形式の特徴をもって方言学上の位置を議論するには、地理言語学的方法論を参照することが望ましい。雲南のカムチベット語については、Suzuki (2018) がスワデシュ 100 語の言語地図と分析を提供している。ほかにも雲南のカムチベット語の地理言語学的特徴を議論したものもある。これらに含まれる語彙と前節に提供した布亞培方言の語彙の中に重なるものも少なくない。そこで、布亞培方言を特徴づけられる 4 語について取り上げる。

---

[4] 布亞培のリス語では、音声学的に鼻母音を耳にすることがある。しかし、それはすべて/h̃/を初頭子音とする場合である。ただし、木玉璋、孫宏開 (2011) の記述では、鼻母音が認められる。[h̃] の音声実現に関する詳細は鈴木 (2015a) を参照。

[5] 金鵬　主編 (1983:144) は、チベット系諸言語が 70 パーセント以上の基本語彙を共有し、特に単音節語根が共通することを述べている。

(7)「風」

この語は Suzuki (2017b) で議論されている。雲南のカムチベット語については、大きく音節数によって２種類の形態に分かれ、次のように計５種類が区別される。

類型	形式	類型	形式
A1a	蔵文 *rlung* 対応形式	A2a	蔵文 *rlung dmar* 対応形式
A1b	初頭子音が/l̥/のもの	A2b	蔵文 *rlung ma* 対応形式
		A2c	蔵文 *rlung dmar* に類似する形式

布亞培方言の形式は/˩ᶠˡlɔ̃ mɛː/であるから、A2a 類に分類される。Suzuki (2017b) の言語地図によると、霞若郷の状況は極めて興味深いことになっており、同郷南部には A2a 類が、中部・北部には A1a 類が分布している。布亞培村は南部に位置し、語形式もまた A2a 類であることから、語形式の地理的分布の連続が認められるということになる。

(61)「２」

この語は Suzuki (2018:39-40) で議論されている。雲南のカムチベット語については、その初頭子音によって３つの形態が認められ、それぞれ A: /ɲ/; B: /n/; C /m/となる。布亞培方言の形式は/˩nə/であるから、B 類に分類される。蔵文形式は *gnyis* であるため、A 類が標準的な音対応と見て差し支えない。この点で B 類の分布を考察することは、地理言語学的に意義あるものといえる。

Suzuki (2018:40) の言語地図によると、霞若郷周辺からその東部一帯にかけて B 類が分布しており、語形式の地理的分布の連続が認められるということになる。

(108)「我々」

この語は Suzuki (2018:26-27) で議論されている。雲南のカムチベット語については、形態的に大きく３種に分かれ、計 14 種が区別される。この数は Suzuki (2018) が扱う 100 語の中で最も多い。３種と言うのは次のとおりである。A: 蔵文 *'u* 対応形式を含むもの；B: 蔵文 *nga* 対応形式を含むもの；C: 蔵文 *rang* 対応形式を含むもの。

布亞培方言の形式は/ˊʔa ᶠgwə/となる。この音形は A 類に分類することができ、Suzuki (2018:26-27) の列挙した形式の中に近似するものがある一方、まったく同じ類型にある形式は記録されていない。Suzuki (2018:27) の言語地図を見ると、布亞培方言に隣接する地域で話される形式は AKT 類（/ˊʔa ko tsʰɛ̃/などの３音節形式）であり、ちょうどこの形式の初頭２音節が布亞培方言の形式に相当すると言えるだろう。また、布亞培方言の第２音節が有声軟口蓋閉鎖音を含む点に注目すると、同様の音形式になる方言は香格里拉市の中央部に多く見られる。

(113)「多い」

この語は Suzuki (2018:37) で議論されている。雲南のカムチベット語については、形態的に大きく次の６種に分かれる。A: 蔵文 *mang po* 対応形式；B: 蔵文 *'ga' re* 対応形式；C: 蔵文 *rgyas*

pa 対応形式；D: /ko tɕa/類；E: /ɲũ mo/類；F: その他。布亞培方言の形式は/ˊkɔː tɕa/であるから、D 類に分類される。

Suzuki (2018:37) の言語地図によると、霞若郷中部・南部には A 類が分布し、北部には D 類が分布している。布亞培村は南部に位置するため、語形式の地理的分布は厳密には連続しているとは言えない。D 類は主に徳欽県中部の瀾滄江沿いに分布する方言に認められる形式である。霞若郷北部は飛び地のような分布をなしているが、この背景は説明できる段階にはない。このような形式を布亞培方言が用いているのは注目に値すると言える。

3.3　小結

以上の特徴を総合して考えると、布亞培方言は Sems-kyi-nyila 方言雲嶺山脈東部方言群の諸方言がもつ特徴をそなえていると判断することができる。これは布亞培方言が隣接する地域の諸方言と連続した特徴をそなえていると考えてよいことを意味する。

4　まとめ

本稿では、布亞培村のカムチベット語とリス語の語彙について、村落の基本状況をまとめ、語彙リスト（137 語）を提供した。布亞培村のカムチベット語は、その音特徴および語彙的特徴に基づいて考えると、Sems-kyi-nyila 方言雲嶺山脈東部方言群に属する方言と考えて問題ない。このことは、同方言の分布が地理的連続の下にあることを意味する。

本稿は布亞培村の言語に関する基礎的な報告である。これから資料を収集して、全容の記述に取り組む必要がある。

参考文献

鈴木博之 (2011)「カムチベット語小中甸・吉念批 [Yangthang/Gyennyemphel] 方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第 6 号 137-173
電子版：http://hdl.handle.net/10108/69377

—— (2012)《維西傈僳語阿傈話 “緊元音” 的語音描写》第六届国際彝緬語學術研討會發表論文（成都）

—— (2015a)「h̃とñ——鼻腔共鳴を伴う声門摩擦音に関する覚え書き——」大西正幸・千田俊太郎・伊藤雄馬編『地球研言語記述論集』 7 , 141-149
電子版：http://id.nii.ac.jp/1422/00000875/

—— (2015b)《東方藏區諸語言研究》成都：四川民族出版社

—— (2016)〈香格里拉藏語亞浪話的鼻音系統〉《東方語言學》第 16 輯 114-122

—— (2017)「音韻現象の ABA 分布をめぐる解釈の方法とその実際—チベット文化圏南東端のカムチベット語を例に」『言語記述論集』 9 , 43-64
電子版：http://id.nii.ac.jp/1422/00000911/

—— (2018a)「香格里拉市北部のカムチベット語諸方言の方言特徴とその形成」『アジア・アフ

リカ言語文化研究』第 95 号 5-63
電子版：http://hdl.handle.net/10108/92458
—— (2018b)「カムチベット語 rGyalthang 下位方言群における歯-歯茎音の前部硬口蓋化現象とその周辺」『言語記述論集』10, 1-11
電子版：http://id.nii.ac.jp/1422/00001999/
—— (2019a)「カムチベット語洛玉 [Lungyul] 方言の方言特徴」『ニダバ』第 48 号 23-30
—— (2019b)〈利用語言地圖闡明音變的擴散及界限：以香格里拉藏語的 “r 韻尾” 語音演變為例〉鈴木博之、遠藤光暁編《亞洲地理語言學論文集》東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（印刷中）
Suzuki, Hiroyuki (2016) In defense of prepalatal non-fricative sounds and symbols: Towards the Tibetan dialectology. *Researches in Asian Languages* 10, 99-125.
電子版：http://id.nii.ac.jp/1085/00002195/
—— (2017a) The vitality of Khams Tibetan varieties in Weixi County. *Asian Highlands Perspectives* 44, 256-284.
電子版：http://himalaya.socanth.cam.ac.uk/collections/journals/ahp/pdf/AHP_44.pdf
—— (2017b) Geolinguistic analysis of ‘wind’ in Tibetic languages in the eastern Tibetosphere. *Studies in Asian Geolinguistics IV —Wind—*, 27-32.
電子版：https://publication.aa-ken.jp/sag4_wind_2017.pdf
—— (2018) *100 linguistic maps of the Swadesh word list of Tibetic languages from Yunnan*. Fuchu: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.
電子版：https://publication.aa-ken.jp/sag_mono3_tibet_yunnan_2018.pdf
金鵬　主編 (1983)《藏語簡誌》北京：民族出版社
木玉璋、孫宏開 (2011)《傈僳語方言研究》北京：民族出版社
呉光范 (2009)《迪慶・香格里拉旅遊風物誌—沿著地名的線索》昆明：雲南人民出版社

[付記]

本稿を執筆するにあたり、友人の余燕さんより布亞培村の写真を提供していただいた。ここに記して感謝の意を表する。本研究に際しては、平成 29-30 年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究 (A)「チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究」（研究代表者：鈴木博之、課題番号 17H04774）の援助を受けている。

Khams Tibetan vernacular spoken by Lisu in the Tibetosphere
—Language situation in Buyapei Hamlet, Xiaruo Township, Deqin County—

Hiroyuki SUZUKI

abstract

There are inhabitants of various non-Tibetan ethnic minorities in the Tibetosphere, especially in its eastern part. In this article, I discuss a Tibetic variety spoken by Lisu living in Buyapei Hamlet, Xiaruo Township, Deqin County, Diqing Prefecture, Yunnan Province, China, including a brief word list of local Khams Tibetan and Lisu (137 entries), preceded by an introduction to some background information of Lisu people and their language situation in Buyapei Hamlet.

I further attempt to discuss the dialect subgrouping of the Buyapei [sPangyagphel] dialect of Khams Tibetan with a limited amount of data by comparing it with materials of other surrounding dialects. The result of two analyses of the sound correspondence with Written Tibetan and the word form shows that the Buyapei dialect is closely related to vernaculars in the vicinity, which can consequently be considered as a dialect belonging to the East Yunling Mountain subgroup of the Sems-kyi-nyila group.

受理日 2019 年 4 月 14 日

鈴木　博之・四郎翁姆　(2019)『言語記述論集』11：17-38

カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言における口承文芸の記録と言語分析*

鈴木 博之　　四郎翁姆
オスロ大学　　オスロ大学

キーワード：カムチベット語、Minyag Rabgang 方言群、文芸理論、昔話、証拠性

1　はじめに

未記述言語の記述言語学的研究に際して、民話などの口承文芸を記録し分析することは、不可欠な作業である。記述言語学的研究においては、音形式の記述と分析、語釈、行間訳の提供が一般的に要請されるが、口承文芸の構造や文学的特徴については、言語研究者の仕事として解釈や分析を行うことが必要とされているようには見えない。筆者はこれまでカムチベット語塔公 [Lhagang] 方言による口承文芸の記述と分析を行い、その作業を通じて、昔話の語りというスタイルの中に自然発話とは若干異なる特徴を見出した。その一部は Suzuki & Sonam Wangmo (2017bc, 2018ab) で発表したが、この分析の基礎には印欧語における語りや物語の分析がある。語りの分析に関する問題は、言語記述に直接的にかかわるものと、文体・語りの技術にかかわるものに分けられるが、両者は密接に関連している。つまり、口承文芸の構造やそれにかかわる言語学的特徴は、当該言語そのものの構造を明らかにするのに示唆的である。このため、文学の構造分析に関する知識が詳細な言語特徴を明らかにする上で役立つことは、想像に難くない。

それでは、口承文芸の構造に通言語的な特徴が存在すると言えるだろうか。このような疑問に対し、小澤 (1998:12-15) は「昔話には共通する語法がある」とまとめている。これは、著者が Lüthi (1947) によるヨーロッパの昔話の分析を踏まえ、日本の昔話を検討した結果、両者に類似性を認めたことによる。この見方がいずれの言語文化圏の昔話においても適用可能かどうかは検証を待つ問題であるが、Lüthi (1947, 1975) や小澤 (1998) の述べる特徴を記述対象となる諸言語について検証を進める作業は、単に言語学的分析の正確性を高めるだけでなく、民話の普遍性と個別特徴を分離して理解できるようになることが期待される。たとえば、倉部 (2018:118-119) はジンポー語の民話と日本の民話の類似性を指摘しているが、文学の構造分析の角度から見ると、さらに 1 歩進んだ指摘ができる可能性がある。

本稿では、筆者がこれまで記述してきた Lhagang 方言の物語を、Lüthi (1947) と小澤 (1998) の観点に基づいて見直し、Lhagang 方言の物語が共通する「語法」をもつことを確認し、また、語りに用いられる特別な文法特徴について、複数の物語を対照しつつ明らかにする。

---

* 本稿の一部は中国少數民族文學與文獻國際學術論壇（四川師範大学、2018 年）および言語記述研究会第 92 回会合（京都大学、2018 年）において口頭発表したものを組み合わせて発展させたものである。

2　Lüthi (1947) に基づく Lhagang 方言の昔話の分析

本節では、まず事例研究として Suzuki & Sonam Wangmo (2017b) で発表した昔話『王様のぶた』について、全文和訳を掲げ、物語の流れを把握したうえで、Lüthi (1947) の指摘する物語の普遍的な構造的特徴について分析する。そののち、Lhagang 方言の他の物語から、先の分析を補完する。

2.1　『王様のぶた』：全文和訳

Suzuki & Sonam Wangmo (2017b) で言語学的訳注を施した原文に従って和訳したものを掲げる。原本から意味段落に区切ってあるため、本稿でもそれに従う。

＊　　＊　　＊

[1] むかしむかし、あるところに王様の一家がおりました。彼らはとても豊かな家庭でした。ある 1 匹のぶたが、王様の屋敷の牛糞をためておくところ[1]にいました。そのぶたは、それはもう大きなぶたでした。あるとき、王様の牛たちがすべてやってきて牧場に向かおうとしたとき、王家の人が放牧に行こうとしたときのことです。あるゾモ[2]がいました。名前をトンラダといいました。それから、1 人の老僧が牛糞をためておくところで座ったり眠ったりしていました。

[2] その人、その老僧が、王様のお屋敷の門をじっと見ていたその時、あるゾモの首に濃い青色のトルコ石がかかっているのに気がつきました。そのゾモはトリマといいました。そのときです、トルコ石が下に落ち、道に落ちました。するとすぐにもう 1 頭のゾモが来て、その上に糞をしました。老僧はそれを見るや否や、そこへ駆け寄り、指で糞に印をつけました。トルコ石がある場所に印を残したわけです。

[3] それから、老僧は牛糞をためておくところで座ったり眠ったりしていました。すると、ある日のこと、老僧は一晩中眠れませんでした。というのも、あのぶたがずっとブヒーブヒー鳴いて、牛糞をためておくところの土を絶えず掘り起こしていたからです。ぶたが土を掘り起こすことに老僧はそれはそれは腹を立てました。しかし、ぶたは王家のものです。どうであれ、ぶたは牛糞をためておくところで座ったり眠ったりしているのです。どうしようもありません。

[4] すると、そこに王様の侍女が駆け下りてきました。侍女はひとかたまりのゾモの糞を拾い上げました。その中には、あのゾモが落としたトルコ石が入っている糞もありました。そして、それらを壁に貼りつけました[3]。侍女がゾモの糞を壁に貼りつけたちょうどその時、老僧はとても幸運なことに、すぐに壁際へ駆け寄り、また印をつけました。そして、侍女がゾモの糞を貼りつけ終えました。それから、牛糞をためておくところで、老僧は座ったり眠ったりしました。

[5] それから、王様の息子、つまり王子が病気になってしまいました。王子の病気はとても重

---

[1] ごみ捨て場のような場所をさす表現。
[2] 雄ヤクと牝牛の子（雌）。
[3] 牛糞は壁に貼りつけて乾燥させ、燃料とする。

く、死にかけていました。そこで、王家の人々は多くの儀式を行いました。神託師を呼んで神託をしてもらい、占い師を呼んで占いをしてもらいましたが、王子の病気は治りませんでした。

[6] すると、ある夜、王子の父親が言いました。「牛糞をためておくところに老僧がいるが、あの人は何か知っているかもしれん。ちょっと行って尋ねてきてくれ。」すると、王家のある人が老僧のところに行って尋ねました。「おい、なんか知っているか？王子がじきに死にそうなんだ。」老僧が言うには、「『ぶたの頭をひっくり返す儀式』のほかは、何も知りません」と。そこで、このように言いました。「どうやって『ぶたの頭をひっくり返す儀式』を行うのだ？」すると老僧は、「まず大きなぶたの頭を切り落とすのです。そうした後、そのぶたの頭で王子を治すのです」と言いました。王家の人が何度尋ねても、老僧は『ぶたの頭をひっくり返す儀式』以外何も知らないと言い続けました。そこで、王家の別の人が言いました。「トルコ石を身につけたゾモのトリマもなくしてしまった。王子もじきに死にそうだ。老僧も何もできないとは。」そして、もしも老僧ですら何もできないと言うのなら、それはもうかわいそうなことです。なぜなら、王家の人はすでにぶたの頭を切り落としてしまったのです。王子のためにぶたを殺したのです。これらすべてが老僧の過ちによることになってしまうのです。

[7] すると、老僧は思いました。トルコ石を身につけたゾモのトリマはいなくなってしまった、明日も何もできない、さらに王子を治すこともできない、とこのように考えました。そこで老僧は灰色の草を一握り引っこ抜き、それから厠へ行きました。下の辺りにある厠へ行くと、王様の侍女がこのように話すのをこっそりと聞きました。「王子が病気になったのは王様の侍女のせいだ。」それから、それは老僧が草を引っこ抜いた王家の丘のせいでもありました。また、褐色の野ヤクもいて、それの行いによって物事がうまくいかなくなったのです。さらに、老僧はこっそりと聞き続けていて、老僧が下の方の厠で聞いたことには、「今本当に悪いことになってしまった。私たちは明日にはもう終わり。『ぶたの頭をひっくり返す儀式』で絶対私たちのことが分かってしまう。あのぶたが殺されてしまったんだから。」侍女は「じゃあどうする？」と言うと、丘は「あ、このことは『ぶたの頭をひっくり返す儀式』で絶対に分かってしまうに違いない。あの老僧はこうやって駆け寄ってきて、おれの髪の毛を、あの草を全部引っこ抜いて去っていきやがった」と言いました。それから、褐色の野ヤクも「『ぶたの頭をひっくり返す儀式』をやるときに、老僧はおれに向かって『悪魔の褐色の野ヤク』と口走り、ひと蹴りしていきやがった。おれのことを言っているに違いない」と言いました。すると、３人のうちの１人が「じゃあどうするんだ？」と言いました。それに答えて、１人が「丘の上で悪魔の褐色の野ヤクに 180 斤の丸太を負わせて、それから侍女を焼き殺せ」と言い、続けて「そうすれば王子の病気も治るし、トルコ石も『ぶたの頭をひっくり返す儀式』で見つかるだろうし、すべてがうまくいく」と言いました。

[8] すると、老僧はとてもうれしくなって、下の方から駆け上がってきて、あの老人、つまり老僧はこのように座ったり眠ったりしました。そして次の日、国王の侍従が言いました。「我々はどうすればいいのでしょう？」「そうですね、ではこのようにしましょう。悪魔の褐色の野ヤクに 180 斤の丸太を負わせて、それからヤギ１頭と同じくらいの大きさの鳥の巣を作って、そ

こに王様の侍女を放りこみ、焼き殺すのです。」老僧は続けて言いました。「すると王子の病気は治るでしょう。それからこうです。私はゾモのトリマのトルコ石を探し当てることを約束しましょう。そうなれば王様の半分の領地をもらいたい。」王様の一家はみな喜びました。「我々は明日、悪魔の褐色の野ヤクに 180 斤の丸太を負わせ、丘の上でかがり火をたき、その上で侍女を焼き殺そう。そうすれば、王子はすぐに回復するのだ。」それから、老僧はぶたの頭を持って、こうやって 1 つ 1 つの牛糞を指しながら、知らないふりをして「これかな？これかな？これかな？」と言いました。でも、トルコ石のある場所はすでに老僧が印をつけているでしょう？こうして老僧は「これだ！」と言って、トルコ石を見事に掘り出したのです。

[9] こうして、王様は老僧に王様の領地の半分を与えました。王様は老僧のために領地の半分を失いました。こうして老僧はとても喜びました。老僧が言うには、王様は自分に領地の半分を与え、さらに自分の像を仏壇に供えてくれたのです。こんなふうに、とても運のいい人と言うのは、このような人を指すのです。

2.2　Lüthi (1947) の昔話の構造理論

ここでは、先に掲げた『王様のぶた』について、Lüthi (1947) の述べる昔話の構造理論が当てはまるかを見ていく。

議論に先立ち、Lüthi (1947 [2005:77-80]) [4] は口承叙事文学をいくつかの種類に分け、そのうち、昔話に属するものについて主要な議論を展開しているということに注意喚起しておきたい。すなわち、Lhagang 方言の文脈において、『王様のぶた』が昔話であるとみなすことができて初めて、議論が成立する。Lüthi (1947 [2005:78]) では、「昔話 (Volksmärchen)」と対照的な口承文芸として、「伝説 (Sage)」と「聖伝 (Legende)」を挙げ [5]、昔話とどうのように異なるのかを述べている。結論として、以下に述べるような点から、Lhagang 方言の『王様のぶた』は、Lüthi のいう「伝説」でも「聖伝」でもなく、「昔話」と考えて妥当である [6]。

Lüthi (1947 [2005:8-75]) は、「昔話」を時に「伝説」と比較しながら、次の 5 つの性質によって特徴づけている。

1. 一次元性 (Eindimensionalität)
2. 平面性 (Flächenhaftigkeit)
3. 抽象的スタイル (Abstrakter Stil)
4. 孤立 (Isolation) と全結合性 (Allverbundenheit)
5. 昇華 (Sublimation) と世俗性 (Welthaltigkeit)

---

[4] 本書には邦訳がある（小澤 2017）。ただし、以下で鍵となる用語に言及する場合、原版のドイツ語を吟味して筆者の責任で訳したものを掲げる。

[5] チベット文化圏における聖伝が何に相当するのかは考察の必要があるが、ひとまずここでは本生譚（ジャータカ）の類を想定し、本稿では深く立ち入らない。また、これら以外に「神話」というジャンルも区別される。チベットの神話としては、Bringsværd og Braarvig (red.) (2000:287-306) に創世神話の部分翻訳がある。

[6] 昔話と伝説の違いについては、**3.2** で概説する。

これらの特徴は、ヨーロッパの昔話だけにとどまらず、日本の昔話にも適用されることを、小澤 (1998) が明らかにしており、言語や地域を問わず昔話には共通の構造があるという見通しを述べている。それではチベット文化圏の場合、より厳密には Lhagang 方言の場合はどうであろうか。結論から言えば、以上の５点はすべて『王様のぶた』において確認される特徴である。１点ずつ解説していきたい。なお、文中にある [ ] で囲まれた数字は、**2.1** で示した全訳の段落番号である。

「一次元性」とは、昔話における登場者は「こちら」の世界（人間の世界）と「あちら」の世界（幽霊や鬼などの世界）の間の隔たりがないというように理解できる。『王様のぶた』では、超人間的な登場者はいないものの、「口をきくゾモ」や「口をきく丘」が登場する [7]。老僧は厠で彼らの話を盗み聞きするが、彼らが人間の言葉を話すことに対し、驚くことはない。もしこれが伝説であれば、人間以外の登場者が口をきいたら一大事である。このようなことが起これば、驚嘆の対象となり、語り継がれていくものである。Lhagang 方言の物語の中で「伝説」に属するものに、鈴木ほか (2015) で記述した物語『菩薩の愛する地・塔公』があるが、その中で仏像が口をきいたことに対して、人々はみな特別畏敬の念を抱いている。

「平面性」とは、昔話に登場する者や事物に深みがない、すなわち実体の伴わない図形であるというように理解できる。『王様のぶた』に出てくるぶたは「非常に大きい」ということが述べられている [1] が、それ以外には何の記述もない。どんな色[7] で何匹で暮らしているのか[8] も分からない。老僧は物語の前半では座ったり寝たりしている以外に、生活上の行動についての描写がない [1, 2, 3, 4]。事物については、トルコ石が出てくる [2, 4, 6, 7, 8] が、なぜゾモの首にこのような高価な装飾品[9] がつけられているのか説明がない。現象について見てみると、ぶたの首を切り落とす場面がある [6] が、詳しい描写に欠け、その過程についての一切の言及がない。

「抽象的スタイル」とは、昔話の登場者から物語の進行まで、すべてを簡潔に、物語の進行に重要なもののみが言及されるというように理解できる。『王様のぶた』の物語の進行もまったくその通りで、必要でない話題は一切認められない。「ぶたが非常に大きい」という描写 [1] は、その鳴き声で老僧をいらだたせる [3] のに必要不可欠な条件であるから、余計な形容ではなく、物語を進めるうえでの一部として機能している。王様の屋敷についても、裕福だとは述べている [1] が、実際どれぐらい大きく、何人が暮らしているのかといった情報はない。ぶたの首を切り落とす場面 [6] においても、流血したはずではあるが描写がない。これらはみな、物語には不必要な要素であるからといえる。

「孤立と全結合性」とは、以上に述べた要素が示すように、登場者はそれ自体が孤立したものとして見える形で特徴づけられ、この特徴がある一方で、見えないところでそれぞれがつなが

[7] チベット文化圏を視野に入れると、ぶたは黒いと考えるのが通常である。Suzuki & Sonam Wangmo (2017a) には塔公村にいるぶたの写真が掲載されており、確かに黒いことが分かる。

[8] 『王様のぶた』に類似する昔話は、チベットの各地に存在する。その中で、複数の類似の昔話、たとえばチベット自治区ギャンツェ地方の語り（O'Connor 1906:158-165）や雲南省徳欽地方の語り（林繼富主編 2016:358-359）などにおいて、ぶたは複数匹登場する。

[9] チベット文化圏において、トルコ石は高価な装飾品（宝石）として認識される。

り、１つの物語として調和していく特徴があるというように理解できる。『王様のぶた』の「王様」「老僧」「トルコ石」などはそれぞれ孤立した存在であるが、それらが組み合わさって物語を形成していく。また、物語は繰り返しをよく伴う。『ぶたの頭をひっくり返す儀式』についての説明は２度 [6]、侍女をいかに処刑するかについては３度 [7, 8] 現れている[10]。また、Lüthi (1947 [2005:45]) も指摘しているが、孤立化の傾向は悪人に与える刑罰を悪人本人に言わせる点にあると述べ、それは『王様のぶた』においても、侍女をいかに処刑するかについて初めて述べる箇所 [7] で類似の構図が認められる。

「昇華と世俗性」とは、昔話に現れるモティーフが個性を失い、重みのない透明な図形として描かれる一方、世俗的な素材も吸収するものであり、Lüthi (1947 [2005:75]) は「昇華したモティーフはもはや現実そのものではないが、現実を代表する」と結んでいる。『王様のぶた』には老僧が出てくるが、チベット文化圏の現実世界に僧侶は存在し、かつ社会的地位の高い人物とみなされているが、物語においては牛糞をためるところで生活している [1]。それに対して、聞き手は無礼であるとは感じない。確かに、現実世界に素材を求めることができるが、それはすでに昔話におけるモティーフとして昇華し、現実世界とは異なって理解されると考えてよい。逆に、現実世界との異なりを前提として認めるからこそ、「王様」が存在できることにもなる。「王様」に対応する Lhagang 方言の形式は、チベット文語形式の *rgyal po* に対応し、それ自体 Lhagang 方言の文脈では「王様」ではなく「土司[11]」のほうが的確な訳語であるが、このような現実を必ずしも昔話に投射する必要はないのである。

2.3　Lhagang 方言の他の物語の事例から

2.2 に見たように、Lüthi (1947) の昔話の構造理論は Lhagang 方言の昔話にもうまい具合に当てはまるものである。Lhagang 方言の昔話について、さらに一般化して考えるために、ほかの昔話についても先に述べた点を中心に考えていきたい。ここで言及される昔話には、『雲雀になった王子の妻』(Suzuki & Sonam Wangmo 2017c)、『３羽の鳥』『雲雀とシャコ』(Suzuki & Sonam Wangmo 2018b)、『白いゾモ』『うさぎと虎』『羊と狼』(Suzuki & Sonam Wangmo forthcoming) がある。

「一次元性」については、すべての昔話において認められる。すなわち、登場者は人間であってもなくても人間の言語を話すし、幽霊の類が出てきても登場者が驚くことはない。「平面性」もまた同様であり、登場者の描写は簡潔で必要なこと以外は言及されない。「抽象的スタイル」について見ると、典型的な動物会話型の昔話である『うさぎと虎』『羊と狼』は会話が物語の軸となっているため、説明的な事柄も含むが、それ以外の物語は、物語を進めるのに必要な事柄だけでうまく筋だてができている。

「孤立と全結合性」については、『王様のぶた』よりも典型的なスタイルを『雲雀とシャコ』や

[10] しかし、まったく同じように述べていない点では、繰り返しの典型例ではない。

[11] 明代以降、漢族による周辺異民族の管理体制について、各地域における非漢民族の領主、管理者を指す。

『白いゾモ』に認めることができる。物語の中で、モティーフがほとんど言い方を変えることなく「３度」繰り返されるのである。Lüthi (1947 [2005:38-59]) で言及される多くのヨーロッパの昔話にも、「３」が現れる。これについて、Lüthi (1947 [2005:33]) は「抽象的スタイル」の項で、昔話の定式について「３」が支配的であるとも述べている。『雲雀とシャコ』では、３つのエピソードが、それぞれ内容を変えながらも語り口は同じ形式を保ったまま連続して現れる。『白いゾモ』の場合、３姉妹がいて、それぞれ同じ質問を発するさまが語られる。物語の展開は、これら３つのエピソードが終わった後、独立して行われる。このことは、それぞれのエピソードが孤立していて、かつ全体として結びつき、昔話の定式の定式に収まっていることを示している。

「昇華と世俗性」は『虎とうさぎ』や『羊と狼』に明確な形で見て取れる段がある。『虎とうさぎ』では、うさぎが虎に目玉がおいしいとうそをつき、自分で自分の目玉をくりぬくよう仕向ける場面があるが、これらの出来事は単なるエピソードになっており、痛みを伴ったり聞き手に痛みが伝わるように語られはしない。『羊と狼』においては、主人公である羊の親子が狼から身を守るために、偽の皇帝の勅書を読み上げるくだりが描かれており、この背景には平民が皇帝の勅語を恐れるという世俗的特質が存在する。

以上に述べたように、Lhagang 方言のさまざまな昔話についても、Lüthi (1947) の構造理論はよくあてはまると言える。物語において、Lüthi (1947) の指摘する特徴のいずれが明瞭に現れるのかという点について、異なりが認められる。

3　語りにおける Lhagang 方言の言語特徴：非感知完了を例に

筆者は、Suzuki & Sonam Wangmo (2017b) の『王様のぶた』の分析において、鈴木、四郎翁姆 (2016) の文法スケッチを踏まえて、語りに現れる特定の文法現象があることを指摘した。これらは他の物語においても類似して現れるため、「語りの文法」なるものが存在すると考えて問題ないであろう。問題は、記述言語学的にこれをどのように取り扱えるかである。チベット系諸言語の中には、語りにおける特別な形式が存在するものがあり、たとえば、Koshal (1979:205-207) におけるラダック語の ‘narrative forms’ がある。ただし、この例は語りにのみ用いられる形式であり、他のカテゴリーの形式が語りのときに異なる意味をもつというのではない。

本節では、「語りの文法」が自然発話やアンケートでは出てこない原因について、昔話の文学的特徴と構造を踏まえつつ、「非感知完了」の用法をその事例として取り上げて検討してみたい。また、先行研究で検討しなかった「語り (narrative mode)」は「昔話」に限定される特徴であるかどうか、という問題についても検討する。ここで注意しておきたいのは、語りの専用の形態統語論的体系があるということではなく、特定の語りにのみ適用される語用論上の解釈があるという点を想定していることである。

3.1　非感知完了とは

チベット系諸言語は、形式に異なりが認められるとしても、一般的に証拠性を形態統語論的に標示する体系を備えている（Tournadre & LaPolla 2014, Tournadre 2017, Suzuki et al. 2018）。

Lhagang 方言の動詞接尾辞は、TAM 標示と証拠性標示を同時に示す体系をとり、鈴木、四郎翁姆 (2018:37) は語彙的動詞の接尾辞を表 1 のようにまとめている。この分析は Oisel (2017) を参考にしているため、伝聞を表に組み込んでいない。詳細は **3.6** を参照。

表 1 ：Lhagang 方言の動詞接辞の証拠性標示（平叙文肯定形）

TA\ 証拠性	向自己	判断	感知	推量	推定
非完了	V-lə jiː V-liː	V-lə reʔ		V-s^ha reʔ	
未来	V-^{ɦ}go	V-^{ɦ}go reʔ	V-^{ɦ}go ˆ^{h}sɑ̃-ɕə ´jiː-tu		V-^{ɦ}go-s^ha reʔ
継続	V-joʔ	V-joʔ reʔ	V-jiː-tu	V-joʔ-s^ha reʔ	
進行	V-ɕə joʔ	V-ɕə joʔ reʔ	V-ɕə jiː-tu	V-ɕə joʔ-s^ha reʔ	
習慣		V-reʔ			
アオリスト	V-zə jiː	V-zə reʔ		V-zə ´jiː-s^ha reʔ	V-joʔ-s^ha reʔ
完了		V-k^heː	V-t^heː		

このうち、注目する対象は最下段の「完了」の「判断」に位置する/-k^heː/という形式で、特に問題になるのは、これとアオリストの用法との対照である。本稿で「非感知完了」と呼んでいるのは、完了の形式が感知ともう 1 つしかないためである。証拠性の体系を重んじるならば、このカテゴリーは「判断完了」と呼ぶべきである。

完了とアオリストについては、Suzuki & Sonam Wangmo (2018a) で後者の用法を重点的に記述した。その際に完了も引き合いに出して解説を試みたが、あくまでもアオリストとの対比において見るにとどまった。鈴木、四郎翁姆 (2018:34-35) では、調査票を用いた聞き取りに基づき、完了の用法を次のように記述した。

- 発話内容の動作を感知したか否か

(1) a ¯k^ho-ϕ ¯za ma-ϕ ˆlɛː-t^heː
3-ABS ごはん-ABS 作る-PFT.SEN
彼はごはんを作りました。（作った現場を目撃して）

b ¯k^ho-ϕ ¯za ma-ϕ ˆlɛː-k^heː
3-ABS ごはん-ABS 作る-PFT.NSEN
彼はごはんを作りました。（作った現場は目撃していない）

- 発話者自身の行為について、意図的でない行為を述べる場合

(2) a ¯ʔa maː ˆŋa-gə ¯ɕɑ̃ ljɔ-ϕ ˋt^hɑ̃ tɕeʔ ˋ^{ɦ}luʔ-t^heː
INTJ 1-ERG 調味料-ABS すべて 入れる-PFT.SEN
あっ、私は調味料を（間違って）すべて入れてしまいました。

b ¯ʔa maː ˆŋa-gə ¯ɕɑ̃ ljɔ-ϕ ˋt^hɑ̃ tɕeʔ ˆma-^{ɦ}luʔ-t^heː
INTJ 1-ERG 調味料-ABS すべて NEG-入れる-PFT.SEN
あっ、私は調味料を（間違って）すべて入れていませんでした。

(3)　a　ˊŋa tsʰo-ϕ　˗ᶠᶤgo-ϕ　ˋᶠᶤdʑɛʔ-kʰeː
1.PL-ABS　門-ABS　閉める-PFT.NSEN
私たちは門を（開けておくべきだったのに）閉めてしまっていました。

b　ˊŋa tsʰo-ϕ　˗ᶠᶤgo-ϕ　ˊma-ᶠᶤdʑɛʔ-kʰeː
1.PL-ABS　門-ABS　NEG-閉める-PFT.NSEN
私たちは門を（閉めるべきだったのに）閉めていませんでした。

以上が日常の会話において最も典型的に現れる完了接辞の用法である。

ところが、筆者は昔話の語りにおいて非感知完了に異なる機能があることを報告し、また、通常 TA を標示しない判断動詞と存在動詞についても、語りにおいては非感知完了接辞が付加されることも特別であることを述べた（Suzuki & Sonam Wangmo 2017b）。これは語りの中でも昔話でよく用いられるものであり、『王様のぶた』をはじめ、『雲雀になった王子の妻』および『白いゾモ』『うさぎと虎』『羊と狼』において、非感知完了の/-kʰeː/は物語の第 1 文に出てくる。それぞれ次のようである。

(4)　『王様のぶた』『雲雀になった王子の妻』
ˊn̩i ma ˋᶠᶤnaː ᶠᶤna-la　ˊᶠᶤdʑaː po　˜tɕʰɔ̃ tsʰɔ̃　ˊʰtɕiʔ-ϕ　ˆjoʔ-kʰeː
むかしむかし-LOC　王　家族　1 -ABS　EXV-PFT.NSEN
むかしむかし、王様の一家がいました。

(5)　『羊と狼』
ˊn̩i ma ˋᶠᶤnaː ᶠᶤna-la　˜luʔ　ˊma wɯ　˗ᶠᶤn̩iː-ϕ　ˆjoʔ-kʰeː
むかしむかし-LOC　羊　母子　２-ABS　EXV-PFT.NSEN
むかしむかし、お母さん羊と子羊の２匹がいました。

(6)　『白いゾモ』
ˊn̩i ma ˗ᶠᶤnaː ᶠᶤna-la　˜pʰa ri　˜kʰɔ̃ ᵐba　ˊtə la　˗ʰtɕa tsoː tsoʔ-ϕ
むかしむかし-LOC　対岸　家　こんな　縦長の-ABS
ˆjoʔ-kʰeː
EXV-PFT.NSEN
むかしむかし、対岸にこんな縦長の家がありました。

(7)　『うさぎと虎』
ˊn̩i ma ˗ᶠᶤnaː ᶠᶤna-la　ˊrə qoː　˗ʰtɕiʔ-ϕ　ˆjoʔ-zə jiː-kʰeː
むかしむかし-LOC　うさぎ　1 -ABS　EXV-AOR-PFT.NSEN
むかしむかし、うさぎが 1 匹いたのです。

以上の例文はすべて昔話の第 1 句であり、非感知完了接辞はすべて存在動詞/ˊjoʔ/に後続している。(7) ではアオリストと完了が並列される例であるが、このアオリストは存在したということを強調したいときに現れると記述できる。形態上問題なのは、/ˊjoʔ/という動詞語幹、そしてアオリスト/-zə jiː/ともに、形態上は「向自己」の証拠性をもつように見える点である（表 1 参照）。この形態的特徴は、しかしながら、語釈に示したように、向自己 (E) の標示を行っておら

ず、筆者の記述において向自己の意味はないと解釈している[12]。

さて、昔話の第 1 句は常に非感知完了接辞がつくかというと、実際はそうではない。

(8)　『３羽の鳥』

´ɕa ʰkaː	`ʰtɕiʔ-ϕ	´ᵑdʑoː mo	`ʰtɕiʔ-ϕ	´teː	¯qə tɕə rɯ
灰色のがちょう	1 -ABS	雲雀	1 -ABS	それから	[固有名詞]
´zeː-ʱdʑɯ	`ʰtɕiʔ-ϕ	ˆjoʔ reʔ-zə reʔ			
言う-NML	1 -ABS	EXV-HS			

灰色のがちょうが 1 羽、雲雀が 1 羽、それからクチュルという鳥が 1 羽いたそうな。

(9)　『雲雀とシャコ』

´ɲi ma ¯ʱnaː ʱna-la	´ᵑdʑoː mo	`ʰtɕiʔ-ϕ	ˆjoʔ reʔ
むかしむかし-LOC	雲雀	1 -ABS	EXV

むかしむかし、雲雀が 1 羽いました。

(8) では伝聞の証拠性が標示され、(9) にいたっては日常会話と同じように、判断の証拠性が標示されている。これらの形式は、証拠性を標示しなければならない文法体系をもつチベット系諸言語において、もっともよく用いられる語りの形態であり、Lhagang 方言でもそうである。

3.2　昔話と伝説の違い

口承文芸を考えるとき、内容によってさまざまなジャンルに分かれる。この中で、昔話と伝説は決定的に異なる体系をもつ。要点としては、昔話は「架空の物語であることを前提に話す」のに対し、伝説は「過去に本当に起きたことであるから信じてほしいように話す」と言える（小澤 2017:297 参照）。伝説の類については、Lhagang 方言のもので参考になるのは『菩薩の愛した地・塔公』（鈴木ほか 2015）で、『裸麦の種子の由来』（鈴木、四郎翁姆 2017）についても、語りの上では伝説に近い。これらに用いられている証拠性の標示は、以下のようである。

(10)　『菩薩の愛する地・塔公』

´ɲi ma ¯ʱna ʱna-la	´ʱdʑa ʱza ´kõ dʑo-ϕ	´poʔ-la	´ja la	´ʱde ʈõ
むかしむかし-LOC	PSN-ABS	チベット-LOC	上へ	迎える
`ʰkɑʔ-la	¯tʰõ ´ʱdʑa po-gə	`kʰo-la	´tɕo wo-tɕiʔ-ϕ	
とき-LOC	PSN-ABS	3-DAT	PSN-NDEF-ABS	
`ʱʑĩ-zə reʔ				
与える-AOR				

むかしむかし、文成公主がチベットへ迎えられるとき、唐の太宗が彼女にジョウォをあげました。

[12] 他のチベット系諸言語では、「推量」と「推定」の証拠性の形式において向自己の形式を含むものがあるが、それら自体に向自己の意味があるかは別である。この点について、アムドチベット語の事例を Tsering Samdrup & Suzuki (2018) が扱っている。

(11)　『裸麦の種子の由来』

ˊnʐi ma ˉʱna ʱna-la　　ˊʱdʑaː po ˊpɯ ʑə-tɕiʔ-ϕ　　ˆjoʔ-reʔ

むかしむかし-LOC　王子-NDEF-ABS　　EXV

むかしむかし、王子がいました。

『菩薩の愛する地・塔公』の語りは、伝説の部分とそれに基づいた解説の部分の２種からなる。前者の部分について、ほぼすべての文に伝聞の証拠性接辞/-zə reʔ/が現れており、語る内容が実際に起こった出来事であることを聞き伝えたものである、ということを意図して語られていると解釈するのは、おそらく正当であろう。(10) で挙げたのがアオリストの判断の証拠性形式であるのは、それが歴史的事実であり、語り手が事実であると判断して、意図的に判断の証拠性を選択していると言える。『裸麦の種子の由来』については、鈴木、四郎翁姆 (2017) でも言及したが、伝聞の証拠性接辞を用いず、また非感知完了も現れないという構造になっている。

Lhagang 方言では、昔話の類に特に非感知完了が出現する。伝説においては、先に述べたように、伝聞の証拠性が標示されることが多い。伝聞の証拠性は、語られる内容が実際に起きたことを直接示すことはないが、他人もまた語っている、ということを示す点で、発話の信ぴょう性を上げる効果があると言える。「聞いたことであるから信じてほしい」というように語ろうとしていると考えて問題ないであろう。これは、伝聞の証拠性が聞き伝えという情報源を明示するという客観的機能に対する、日常会話の記述においては自身の考えに基づかない、すなわち発話内容への判断に責任をもたないと理解されるのとは対照的である。それゆえ、信ぴょう性を上げたいとする伝聞標識の用法も「語りの文法」と考えてよいであろう。

ここで、小澤 (2017:297) の昔話と伝説に対する語り方についての考えは、特定の言語においては形態統語論上の特徴として明示される、と言えるのではないだろうか。当然のことながら、このことは、証拠性を明示する体系をもつ諸言語において、昔話と伝説がどのように語られ、どのように語り分けられるのかを広く検証してみなければ、一般的な解釈として成立するものであるかどうかは明言できない。そのためには、口語を口語として記録し、適切な枠組みで分析する必要がある。Lhagang 方言においては、「非感知完了」の意味を正確に記述し、以上の仮説が的確に説明できるか検証する必要がある。

3.3　非感知完了の語りにおける用法：背景の提示

Suzuki & Sonam Wangmo (2017b) の『王様のぶた』では、語りにおいて特に用いられる非感知完了 (nonsensory perfect) の動詞接尾辞/-kʰeː/について指摘した。発話について証拠性を標示することが極めて強く要請されるチベット系諸言語において、昔話に現れる証拠性の体系がいかなるものであるかは、非常に重要な問題である。

昔話は現実から切り離された世界で完結する。それゆえ、語り手は現実世界と接点をもたず、語りによってのみ物語の世界を表現しなければならない。昔話の本質は、余計なものがなくかつ必要最小限のもので構成される (Lüthi 1947 参照)。言い換えれば、すべての内容が筋の上にあり、脱線しない。しかしそれでも、情報的には背景と筋が区別される。昔話の導入句は、たいてい（日本語の場合）「むかしむかしあるところに」であり、それは物語に必要な背景情報を

提供する（時間設定＝「昔」という時間；場所設定＝「あるところ」という場所）が、これらは背景であって筋（プロット＝出来事）そのものではない。

Suzuki & Sonam Wangmo (2018a) は、非感知完了が背景を表しアオリストが筋を表すというスタイルがあることを述べた。ここで同じ例をあげて、非感知完了に注目しながら解釈することにする[13]。

(12)　『王様のぶた』

[1]　´teː　´tə-ϕ　˩ʰtɔː ji ˩ᵐbo loʔ　`ᵑgo-la　ˆɳeː-neː
それから　あれ-ABS　牛糞をためるところ　上-LOC　眠る-CONJ
´ⁿduʔ-zə ˆjiː-kʰeː
座る-AOR-PFT.NSEN
それから、彼（老僧）は牛糞をためるところの上で寝たり座ったりしました。

[2]　´tə　˩ᶠʲla ᶠʲgɛ-tə-ϕ　˩ʐɑʔ ʰtɕiʔ tə　˩pʰɑʔ ᶠʲgɛ-gə　˩kʰo-ϕ　`pʰu gə la
それから　老僧-DEF-ABS　一晩中　ぶた-ERG　3-ABS　全く
´ɳeː　´ma-ʰtɕuʔ-zə reʔ
眠る　NEG-CAUS-AOR
それから、その老僧なのですが、一晩中ぶたが彼を眠らせませんでした。

[3]　ˆfiã-tɑ　´fiã　˩zeː　˩ʰtɔː ji ˩ᵐbo loʔ-ϕ　ˆjaː-ʰko
INTJ-COM　INTJ　言う　牛糞をためるところ-ABS　DIR-掘る
˩ʰtɔː ji ˩ᵐbo loʔ-ϕ　ˆjaː-ʰko-zə reʔ
牛糞をためるところ-ABS　DIR-掘る-AOR
「ぶー」また「ぶー」と鳴いて、牛糞をためるところを掘り上げ、また牛糞をためるところを掘り上げました。

[4]　´teː　´tə ri ⁿdə reʔ　ˆjaː-ʰko-kʰa-te　˩ᶠʲla ᶠʲgɛ-ϕ　˩tsʰiʔ kʰa ˆza-kʰeː
それから　そのように　DIR-掘る-時-TOP　老僧-ABS　怒る-PFT.NSEN
˩tsʰiʔ kʰa ´za
怒る
それから、こんなふうでした。（ぶたが）掘り起こすちょうどそのとき、老僧は怒りに怒りました。

以上の連続する文 (12[1]-[4]) において、非感知完了は [1] と [4] に現れ、いずれも老僧の動作、状態を表している。以上に現れる非感知完了は、実際のところ、アオリスト系動詞接尾辞（/-zə, -zə jiː, -zə reʔ/）と対比され、語りにおいて重要な役割を担っている。この点は Suzuki & Sonam Wangmo (2018a) で明らかにしたことであるが、昔話の語りに用いられるアオリストはテンス・アスペクト以外の機能があるということが挙げられる。それは、物語の進行を担う動作について、アオリストが選択される傾向にあり、非感知完了が多くの場合、物語の背景を描写する際に用いられるというものである。語り手はぶたの行為に重点を置く描写を行っていて、

[13] ここでの行間訳は **2.1** で訳出したものとは若干異なり、直訳に近くしてある。

この場面を進めていくのはぶたであることを明示していることになる。

Lhagang 方言のアオリストと非感知完了の関係は、まさにフランス語書記言語の単純過去と半過去の関係に酷似する。この半過去は「描写の半過去」(朝倉 1955:180-181) と呼ばれ、「継続と同時性を表すために、中心となる行為の背景ともいうべき状況や、人物の性格・風貌・心理の描写に用いられる。単純過去が事件の継起を物語る説話の時制であるのに対し、半過去は絵画的な描写の時制である」とする (朝倉 1955:180)。むしろ筆者は Suzuki & Sonam Wangmo (2018a) において、フランス語のこの関係を参照点に、Lhagang 方言の現象を見たのである[14]。

それでは、背景部分に位置する老僧の行為は物語の筋には位置しないのかというと、そうではないことは上に述べた。昔話であるならば、その構成部分は最小限であるから、当然のことながら老僧が牛糞をためるところで生活し、ぶたの行為に腹を立てるのは、昔話そのものとして、また物語を進めるうえで不可欠な要素である。しかし、この場面において、老僧の行為は物語そのものを動かす要素ではないことに注意するべきである。以上の解釈は、昔話の構造と言語の構造の双方が絡んでいる。昔話の構造が分からない限り、アオリストと非感知完了がテンス・アスペクトそれ自体の意味するものとして解釈され、それはすなわち結果として語りの構造を正しく理解していないということを意味する。

3.4　語りにおける非感知完了の意味

非感知完了は、日常会話において特に「感知によって得た情報ではないことに基づく」という証拠性を表し、必然的に感知と対比して理解される。(2) と (3) の異なりは、(2) は自分のしてしまった行為に五感のいずれかによって感知したことが発話の意図して現れている一方、(3) は五感で感知していないことが発話の意図として現れている。「門を閉めていなかった」という事実は、発話者が直接確認したことで初めて閉め忘れていたことを知ったのではなく、それ以外の情報によって知りえたということを述べている。それでは、昔話を語るにあたって、非感知完了が特に物語の背景を語るときに現れるのはなぜだろうか。そもそも語りにおける非感知完了はいったい何を「感知していない」のか。

昔話は語りの中でその世界を構築する必要があり、その背景を設定する際に明確に非感知完了が用いられていることが (4)-(7) で確認されている。これに対応して、アオリストは物語を前進させる機能がある (10)。アオリストは、形態的に向自己 (-zə jiː)、判断 (-zə reʔ)、そして証拠性を言明しない (-zə) という 3 種の形態をもち、形態論上はテンス・アスペクト部分と証拠性部分に分析できる。共時的な記述において、このように分析することの妥当性については、なお議論の余地があるものの (Zeisler 2004 参照)、アオリストは証拠性を言明しない/-zə/という形式がある[15] という事実から、アオリストには行為が起きたことがまず第一義にあり、それを

[14] 類似の現象は、イタリア語にも認められる。イタリア語では遠過去と半過去の関係に近いと言えるが、その文学における用法は細かく言えばフランス語とは異なりがあるようであり、単純に対照できる問題ではない。小林 (2001:163-190) を参照。

[15] 特に諾否疑問文の応答に用いられるなど、/-zə/単独の形態が特定の証拠性と関連しているとは判断できない。

どう理解するかが問題となっている。感知の証拠性の形態を欠いていることから考えても、どうやって情報を得たかは問題にされていない。あくまでも行為が行われたことに焦点が当たっている。それに対し、完了は行為の行われた結果状態に焦点が当たっているのであり、その意味では出来事の背景を述べるのにふさわしい形式であると言える。しかし、昔話の中で構築される世界にあっては、その出来事を五感のいずれかによって感知することはできない。思考によって生み出されたものに対しては、感知によってアクセスするのではない。このことは、推量 (sensory inferential) と推定 (logical inferential) が形態論的に区別されることが多いチベット系諸言語の証拠性の枠組みからも想定できることである。それゆえ、感知完了の形態は使用できず、必然的に非感知完了の接辞を用いることになる。

語りにおける非感知完了は、究極的には「感知に関知しない完了」——すなわち「事態が完了し成立しているという判断」であるといえるのではないだろうか。そもそも日常世界と切り離されて語られる昔話において、感知の有無は議論できない。実際のところ、「判断完了」は日常会話の実例から見ると受け入れがたい用語になり、体系上は判断の証拠性に含めて記述できるが、実例からは「判断」とは言いがたい点もあった。それゆえ、体系上は判断完了であっても、非感知完了という用語を用いてきた。しかし、昔話の語りを考慮するにあたって、/-kʰeː/を「判断完了」と呼ぶのはふさわしいということである。

しかしながら、以上の結果を受けて、/-kʰeː/の語釈において PFT.NSEN と表記しているのを PFT に変更する必要があるかどうかは、日常会話における用法も参照しつつ、慎重に考える必要がある。

3.5　非感知完了が用いられない昔話について

先に (8, 9) で問題提起したように、昔話であっても非感知完了が用いられない事例が存在する。Suzuki & Sonam Wangmo (2018b) で扱った２編の語りのうち、『３羽の鳥』には１度も/-kʰeː/は現れず、『雲雀とシャコ』では１度のみ現れるという点について、どのように解釈できるだろうか。これら２編では、各発話の動詞句末接辞には判断もしくは伝聞の証拠性接辞が用いられ、特に「これは物語である」という証拠性標識を用いずに、普通に会話しているような語り口で物語を進めている。実際のところ、これは語り手個人個人の語り口の異なりである、と考えられないだろうか。確かに、『３羽の鳥』と『雲雀とシャコ』は、それ以外の語りとは異なる語り手によるものである。どのように物語を構築するか、という点については、個人差の存在を認める必要があるとはいえないだろうか。

もちろん、個人差が存在するというのは否定できないが、(8) で伝聞の標識が現れる点については、証拠性それ自体の意味をとることができると言える事情がある。それは、Suzuki & Sonam Wangmo (2018b) で特に注記したように、この語りは語り手が物語の内容について忘れた部分が多く、思い出しながら語っていることと関連がある。すなわち、語り手が昔話としての物語の空間を構築していくというプロセスになく、単に「このような話であったと聞いたことがある」ということを、単に伝聞であるという情報源について伝聞の証拠性標識を用いて表

した発話といえる。つまり、(8) の伝聞標識は **3.2** で述べた、伝説を語るときに現れる「語りの文法」としての使用法ではなく、日常会話における伝聞標識の使用法として解釈できる、ということである。このように考えることで、昔話の第 1 句に伝聞標識が現れるという不規則性を説明することができる[16]。

それでは、判断の証拠性を標示するのはどういった要因が考えられるだろうか。これについて考察を加えるにあたり、対置されるアオリストについて見てみたい。アオリストは昔話以外の語りではどのように用いられているだろうか。『菩薩の愛する地・塔公』では、語りのほとんどが「アオリスト＋伝聞標識」で現れ、「語られる内容が順々に起こったと聞いている」というように述べている。翻訳調ではあるが『裸麦の種子の由来』（鈴木、四郎翁姆 2017）でもアオリストがほとんどの動詞句末に現れる。これは、もとの語りがほぼすべて筋のみで構成されているからであり、背景を述べた個所がほとんどないためである。しかし、『雲雀とシャコ』の場合をみると、地の文の場合「アオリスト＋伝聞標識」がよく用いられる。この昔話は、会話が軸になっている語りであるため、背景の描写が必要とされない。「だれだれが『～』と言いました」の「言いました」の部分が背景にはならず、物語の進行そのものになる。このように、会話のやりとりで物語を進められることが非感知完了を用いない大きな理由ではないかと判断する。

以上に見たことを総合して考えると、非感知完了とアオリストの使用は、昔話を語る上で場面と筋を対比する効果があり、言語構造上やはり意味のある差異であると見るのは妥当である。一見個人差のように見えるそれらの使用方法の差異は、語りの内容の構造上要請される特徴である可能性も否定できない。それゆえ、現段階では、個人差であると明言することは難しい。参照すべき資料はまだ十分ではなく、さらに多くの語りを収集することで明言できるようになると考える。

記述言語学において参照文法をできるだけ自然発話や語りの資料に基づいて記述するという方法があるが、Lhagang 方言をはじめ、チベット系諸言語について適用する場合、証拠性およびそれに関連する箇所を記述する際には、以上に述べたような問題点が存在しうるということについて、よく考えておかなければならない。

3.6　それでもなお問題は残る

以上の解釈によって、昔話の語りにおける非感知完了の機能については明らかになった。しかしながら、形態論的に 1 つの問題が残っている。それは (7) のように、「アオリスト＋非感知完了」のような形態が現れる問題である。加えて、(4, 5, 6) のように、存在動詞に非感知完了がつくというのは、日常会話では見当たらない構造をとっている。いずれも、形態統語論上の問題である。「語りの文法」というカテゴリーを認めたとしても、構造上の問題が説明できていないのである。

[16] ここに述べたことが正確であるならば、(8) の行間訳はいささか不適切である可能性もある。「～だそうな」は昔話の定型句として訳出したのであって、ここで行った解釈のとおりに考えると、「～がいたと聞いた」「～がいたんだったっけ」などととするほうが適切であるだろう。

以上の状況に対して、昔話の語りにおける非感知完了/-kʰeː/が、ほかの TA の接辞と異なるスロットに入っている形態である、と考えれば、形態統語論上の問題は解決できることになる。TA の接辞に後続できるのは、伝聞標識である。このような接辞のスロットの差異は、多くのチベット系諸言語でも認められる。このために Oisel (2017) は、伝聞が証拠性の 1 カテゴリーであることを認めながら、それを議論から除外している。それでは、Lhagang 方言の/-kʰeː/が伝聞の証拠性標識であると考えることに、不都合はあるだろうか。

この問いに対して、記述言語学的な観点からは、次のような特徴を指摘することができる。まず、「完了＋語りの伝聞」すなわち/-tʰeː-kʰeː/も/-kʰeː-kʰeː/も未確認であり、伝聞標識/-zə reʔ/がすべての動詞および動詞接尾辞に後続できるのと異なり、分布に制限が認められる。また、伝聞標識に 2 種類を認めた場合、/-zə reʔ/は制限なく用いられ、/-kʰeː/は語り専用であり、他に機能をもたないと記述する必要がある。加えて、/-kʰeː/は語りにおいて伝聞であるが、日常会話では非感知完了であるという記述は、 1 つの形態素が担う意味区分として統一のないものになる。これらの点から、/-kʰeː/を伝聞標識と考えるのは、本節で述べた分析と比べて優れていると判断することは困難である。しかし、スロットが異なるという見方については、例を多く収集して検証する価値があるだろう。

4　記述言語学における昔話の記録と再話：まとめに代えて

本稿では、筆者がこれまで収集・分析してきたカムチベット語 Lhagang 方言の昔話を素材として、Lüthi (1947) の示した昔話の構造における普遍性が認められるかを検証し、それとともに、その分析が記述言語学にとっても有益であることを述べた。昔話は、現実世界と断絶した物語の中で完結する世界を表している。このため、言語構造の中に証拠性が体系的に組み込まれているチベット系諸言語のような言語においては、昔話における証拠性の標示は日常会話と異なることになる。記述文法においては、この点に注意を払う必要がある。

Lhagang 方言の昔話の語り口には、Lüthi (1947) の述べる特徴があると分かった一方で、その語り口自体に、Lhagang 方言の文法特徴である証拠性の標示を規則的に行うかどうかについては、語り手によって分かれる、という結果を得た。これは、昔話を語る枠組みが Lhagang 方言に固定されておらず、あくまでの話し手の語りに対する見方を反映しているものと理解できる。この点において、証拠性の標示は文法体系が要請するものではなく、話者個人の発話態度によってある程度の自由度が存在することを確認した。一方で、昔話の語り口に特定の証拠性標識の使用が認められることも事実であり、それは「語りの文法」として記述するのが適切であると考えた。

本稿の議論と並行し、口承文芸の収集に際し、物語をいかに記録するかという問いについても考えておかなければならない。Lüthi (1947) は、ヨーロッパ各地で収集された昔話を分析するにあたり、記録および記録者の評価も行っている。採録された物語の中には、昔話を昔話らしくないよう編集されているものが存在し、それは **2.2** で述べたような特徴の分析を通して見えてくるという。これは記述言語学の分析対象になったときにも考慮するべきである。それでは、

記述言語学における物語の再話はどのように行うべきであろうか。

再話は昔話を後世に伝えるために必要な作業である。狭義における言語資料、すなわち「Lhagang 方言」といった特定の言語が通用する共同体にのみ伝えることを目的とするのであれば、その土地の言語に基づくべきであり、採集できた通りの形式を再現できるように工夫すればよい。しかし、広い意味で、たとえば Lhagang 方言が属するカムチベット語 Minyag Rabgang 方言群で共有する場合、調整する必要がある。本稿では、再話の具体的方法については記述を割愛する。小澤 (1998:355-367; 2016) の記述を参照されたい。

昔話の記録と記録言語学はまた目的を異にする。録画・録音における言いよどみやフィラーは、果たして記録に必要であろうか。語りにおいて、「間（ま）」は重要な役割を担っている。しかし、物語を語り慣れていない人が話を思い出しながら語るときにおける、「えーっと」とった言葉が昔話を構成する要素であるとは言えない。もし昔話を録音・録画して ELAN などで字幕をつける形式で記録・保存する場合、言いよどみも文字起こしの対象とすべきであるという意見がある。それは、談話研究など、ほかの研究分野にも役立つからであるという[17]。しかし、それが物語の一部でないということには注意する必要がある。語りを進めるシグナルは、それとは別にある。「それで」「それから」といった要素が該当し、これらは物語の一部を占めると考えてよいものである。

聞き手とのやりとりは、しかしながら、物語を進めるうえで機能的である可能性は否定できない。聞き手による「それから（どうなるの）？」といった一言は、語り手に「昔話」としての特徴を際立たせた語りを生み出す潤滑油になることもある。一方で、『王様のぶた』の第８段落最後のあたりに、「でも、トルコ石のある場所はすでに老僧が印をつけているでしょう？」という箇所がある。これは、Lhagang 方言の言語特徴を見ると、話し手が聞き手に対して直接問いかけていることがわかる (Suzuki & Sonam Wangmo 2017a:158)。しかし、これが物語の一部ではないとまでは断言できない。説明を繰り返すというのは、語りとして自然な形であるためである。

昔話は通言語的に普遍性のある文芸であると言えるかもしれない。それゆえに、昔話それ自体を記述言語学における分析対象とするためには、口承文芸の基礎的知識を学んでおく必要性もあるだろう。

[17] Peter Austin との個人談話 (2018) に基づく。

付録：Lhagang 方言の音体系とその表記（物語の語り手の音体系に従った拡張版）

・音節構造

最大の音節構造（分節音の配列）は次のようである。

$^{C}C_{i}GVC$

このうち C_i（初頭主子音）と V（音節核の母音）が必須であり、C_iV を音節の最小構成とみなすことができる。

・子音

主子音（C_i）位置に現れる要素の一覧は以下のようである。口蓋垂音系列をもつ話者もいる。

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋 前	硬口蓋 後	軟口蓋	口蓋垂	声門
閉鎖音	無声有気	p^h	t^h	$ʈ^h$			k^h	(q^h)	
	無声無気	p	t	ʈ			k	(q)	ʔ
	有声	b	d	ɖ			g	(ɢ)	
破擦音	無声有気		ts^h		$tɕ^h$				
	無声無気		ts		tɕ				
	有声		dz		dʑ				
摩擦音	無声有気		s^h		$ɕ^h$				
	無声無気	ɸ	s	ʂ	ɕ		x		h
	有声		z		ʑ		ɣ	(ʁ)	ɦ
鼻音	有声	m	n		ȵ		ŋ		
	無声	m̥	n̥		ȵ̊		ŋ̊		
流音	有声		l	r					
	無声		l̥						
半母音	有声	w				j			

・母音

舌位置による一覧は次のようである。

i　ɨ　ɯ　u

e　ə　o

ɛ　ɔ

a　ɑ

母音には長短および鼻母音/非鼻母音が弁別的である。母音の長短と鼻母音/非鼻母音は互いに独立している

・超分節音素

語単位として、次のピッチパターンが認められる。

¯：高平　　´：上昇　　`：下降　　ˆ：上昇下降

略号一覧

1	1人称	DEF	定標識	NML	名詞化
3	3人称	DIR	方向接辞	NSEN	非感知
ABS	絶対格	ERG	能格	PFT	完了
AOR	アオリスト	EXV	存在動詞	PL	複数
CAUS	使役	HS	伝聞	PSN	人名
COM	共格	INTJ	間投詞	SEN	感知
CONJ	接続語	LOC	位格	TOP	主題
CPV	判断動詞	NEG	否定		

参考文献

朝倉季雄 (1955)『フランス文法事典』白水社

小澤俊夫 (1998)『昔話の語法』福音館書店

―― (2016)『昔ばなし大学ハンドブック』読書サポート

―― (2017)「訳者あとがき」マックス・リュティ『ヨーロッパの昔話　その形と本質』293-297 岩波書店

倉部慶太 (2018)「ミャンマーの『こぶ取り爺さん』：ジンポー語による民話テキスト」『アジア・アフリカ言語文化研究』95, 181-199. 電子版：http://hdl.handle.net/10108/92462

小林惺 (2001)『イタリア文解読法』大学書林

鈴木博之、四郎翁姆 (2016)「カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言の文法スケッチ」『言語記述論集』８, 21-90. 電子版：http://id.nii.ac.jp/1422/00000897/

―― (2017)「カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言による翻案物語『裸麦の種子の由来』――訳注と語りの特徴――」『言語記述論集』９, 23-42. 電子版：http://id.nii.ac.jp/1422/00000909/

―― (2018)「カムチベット語塔公 [Lhagang] 方言の述部に標示される証拠性」『言語記述論集』10, 13-42. 電子版：http://id.nii.ac.jp/1422/00002000/

鈴木博之、四郎翁姆、拉姆吉 (2015)「チベット語塔公 [Lhagang] 方言の物語『菩薩の愛する地・塔公』訳注—塔公方言の多層構造と物語の異同に関する考察を添えて—」大西正幸・千田俊太郎・伊藤雄馬編『地球研言語記述論集』７, 111-140.
電子版：http://id.nii.ac.jp/1422/00000874/

Bringsværd, Tor Åge og Jens Braarvig (red.) (2000) I begynnelsen: Skapelsesmyter fra hele verden. Gjøvik: De Norske Bokklubbene.

Koshal, Sanyukta (1979) *Ladakhi grammar*. Delhi: Motilal Banarsidass.

Lüthi, Max (1947 [2005]) *Das europäische Volksmärchen: Form und Wesen*, 11. Auflage. Tübingen: A. Francke Verlag.（邦訳『ヨーロッパの昔話　その形と本質』小澤俊夫 訳（第７版に基づく）、2017、岩波書店）

—— (1975) *Das Volksmärchen als Dichtung: Ästhetik und Anthropologie*. Düsseldorf: Eugen Diederichs Verlag.

O'Connor, William Frederik (1906) *Folk tales from Tibet*. London: Hurst and Blackett.（邦訳『チベットの民話』金子民雄 訳、1980、白水社）

Oisel, Guillaume (2017) Re-evaluation of the evidential system of Lhasa Tibetan and its atypical functions. *Himalayan Linguistics* 16.2, 90-128. 電子版：https://doi.org/10.5070/H916229119

Suzuki, Hiroyuki & Sonam Wangmo (2017a) Additional remarks on counting 'one' noun in Lhagang Tibetan. *Studies in Asian Geolinguistics VI —Means to Count Nouns—*, 56-59.
電子版：https://publication.aa-ken.jp/sag6_count_2017.pdf

—— (2017b) *King's pig*: A story in Lhagang Tibetan with a grammatical analysis in a narrative mode. *Himalayan Linguistics* 16.2, 129-163.
電子版：https://doi.org/10.5070/H916233598

—— (2017c) *Prince's wife become a lark* in Lhagang Tibetan of Khams. *Kyoto University Linguistic Research* 36, 71-91. 電子版：https://doi.org/10.14989/230688

—— (2018a) Aorist in Lhagang Tibetan. *Proceedings of the 51st International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics*, 877-884. 電子版：http://hdl.handle.net/2433/235307

—— (2018b) Two folktales in Lhagang Tibetan (Minyag Rabgang Khams): *Three Birds* and *Lark and Partridge*. *Asian and African Languages and Linguistics (AALL)* 13, 131-150. 電子版：https://doi.org/10.15026/92954

—— (forthcoming) Three folktales in Lhagang Tibetan of Minyag Rabgang Khams: *Sheep and Wolf*, *White mDzomo*, and *Hare and Tiger*.

Suzuki, Hiroyuki, Sonam Wangmo & Tsering Samdrup (2018) *Essential evidential framework of Tibetic languages—Data from Khams and Amdo—*. Paper presented at 46th meeting of Tibeto-Burman Linguistic Circle (Kobe)

Tournadre, Nicolas (2017) A typological sketch of evidential/epistemic categories in the Tibetic languages. In Lauren Gawne & Nathan W. Hill (eds) *Evidential systems in Tibetan languages*, 95-129. Berlin: Mouton de Gruyter.

Tournadre, Nicolas & Randy J. LaPolla (2014) Towards a new approach to evidentiality: Issues and directions for research. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 37.2, 240-263.

Tsering Samdrup & Hiroyuki Suzuki (2018) Evidential system in Mabzhi Tibetan of Amdo. *Proceedings of the 51st International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics*, 913-925. 電子版：http://hdl.handle.net/2433/235311

Zeisler, Bettina (2004) *Relative Tense and aspectual values in Tibetan languages: A comparative*

study. Berlin: Mouton de Gruyter.
林繼富主編 (2016)《藏族民間故事》民族出版社

[付記]

本研究に際しては、平成 28-30 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (A)「チベット・ビルマ語族の繋聯言語の記述とその古態析出に関する国際共同調査研究」（研究代表者：長野泰彦、課題番号 16H02722）および平成 29-30 年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究 (A)「チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究」（研究代表者：鈴木博之、課題番号 17H04774）の援助を受けている。

Documentation and analysis of folktales: Case study in Lhagang Tibetan

Hiroyuki SUZUKI　　Sonam Wangmo

abstract

This article discusses a theoretical aspect of literature analysis in Tibetan folktales collected in Lhagang Village in Kandze Prefecture (Sichuan, China) by referring to the theory proposed by Lüthi (1947) and Ozawa (1998), and claims that minimum knowledge of literature analysis of folktales is requisite even in a descriptive linguistic approach in order to provide detailed aspects of grammatical phenomena. It consists of two principal topics. The first is a literature analysis of a folktale of Lhagang Tibetan named *King's Pig* (Section 2). The second is a descriptive linguistic issue on 'nonsensory perfect' used in a narrative mode (Section 3).

The article reveals that the way of narrating folktales in Lhagang Tibetan shares commonality to the features clarified by Lüthi (1947). It discusses five features from his theory: 'unidimentionality,' 'flatness,' 'abstract style,' 'isolation and omniconnectiveness,' and 'sublimation and secularity.' All of them appears effectively in folktales of Lhagang Tibetan although we find various degrees of clarity on each feature depending on the folktales.

Concerning the use of /-k^{h}eː/ 'nonsensory perfect,' the article concludes that it functions as 'statemental perfect,' that exactly corresponds to the slot of the tabular of tense-aspect-evidentiality. When /-k^{h}eː/ appears in folktales, it functions as a description of the background information as opposed to aorist which denotes principal actions in a story. This distinction is requisite to compose a folktale from both the perspectives of tense-aspect and evidentiality.

受理日 2019 年 4 月 15 日

倉部　慶太 （2019）『言語記述論集』11：39-49

北ビルマ・カチン族の民話資料 *

倉部 慶太
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
キーワード：カチン族，ビルマ，ミャンマー，東南アジア，昔話，民間説話

1　はじめに

本稿では，筆者らが北ビルマにおける長期的なフィールドワークにより蒐集したカチン族の民間説話のうち，「マナウ祭りへ行ったカムカム鳥」(2 節)，「溺死のはじまり」(3 節)，「山姥」(4 節)，「蛇婿」(5 節)，「なぜセミにはらわたがないか」(6 節)，「サルに連れ去られた男」(7 節)，「金の生る木」(8 節) と題する 7 編の物語の和訳を提示する。

カチン族 (Kachin) はビルマ (ミャンマー) 有数の少数民族の 1 つであり，北ビルマに位置するカチン州とシャン州北部に居住する。人口は 50 万から 150 万と推測される (Smith 1994)。中国雲南省に居住する景頗族 (Jingpo) および東北インドに居住するシンポー族 (Singpho) も同一の民族である。カチン族は言語的に多様な民族であり，ジンポー語 (Jinghpaw)，ツァイワ語 (Zaiwa)，ロンウォー語 (Lhaovo)，ラチッ語 (Lacid)，ンゴーチャン語 (Ngochang)，ラワン語 (Rawang) など互いに通じない，多様な言語を話す言語集団からなる。このなかでジンポー語はカチン族の共通語としても通用している (Kurabe 2016，2017 などを参照)。

筆者は，2009 年から北ビルマにおいてジンポー語を対象としたフィールドワークをおこなってきた。調査の一環として，筆者はジンポー語によるカチンの口承資料 (大部分は民話) の大規模な蒐集をおこなった (倉部 2018 参照)。特に 2016 年からは複数の現地協力者と共同で資料の蒐集を精力的におこなった。その成果として，2019 年 3 月までに約 2,400 話 (213 時間) の口承音声を蓄積した。そのうち 1,805 話はオーストラリアの危機文化アーカイブ PARADISEC で公開済みである (Kurabe 2013) [1] 。本稿で提示する民話資料の音声およびジンポー語による書き起こしは PARADISEC で利用可能であるが，翻訳は利用可能ではない。

筆者らによるドキュメンテーションの目的の 1 つは，人々の考えや生活を色濃く反映する，口承，民族知，生活知など無形文化財の記録と保存にある。長い間世代を超えて受け継がれてきたこれら文化財は，近年の急速な社会変容により，記録されることのないまま，急速に失わ

* 筆者による現地調査は，平成 24-25 年度日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費)「ジンポー語の記述言語学的研究」(課題番号：JP12J02938)，平成 26-28 年度日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費)「北部ビルマにおけるジンポー語危機方言の調査とドキュメンテーション」(課題番号：JP14J02254)，平成 29-31 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (B)「ビルマの危機言語に関する緊急調査研究」(課題番号：JP17H04523) の助成を受けている。

[1] http://catalog.paradisec.org.au/collections/KK1

れつつある。例えば，2018 年 12 月 14 日の民話録音後のインタビューにてある男性は次のように語っている。「この昔話は私が子どものころに母から聞きました。ちょうどいまの時期 (涼期)，夜が長い時期に，畑仕事が終わったあと，イモを煮ながらいろりを囲んで聞きました。近所のあの家で昔話を語るそうだと聞きつけると，子どもたちみんなでその家に遊びに行きました。各家の野菜を持ち寄り，いろりを囲んでご飯を食べながら，昔話を聞きました。ところが，いまの若者はこのような文化を失ってしまいました。若者の楽しみはいまと昔では異なります。テレビやインターネットが昔話にとってかわってしまいました。いまの若者はギターを弾き，いまどきの歌を歌うことなどに興味を持っています。いまの若者たちだけの責任ではありません。私たち大人の責任でもあります。」

また，村落の生活様式も大きな変化にさらされている。例えば，2019 年 2 月 8 日の対面調査にてある男性は次のように述べている。「5 月頃マリ川[2] が大雨で濁ると，小魚たちはマリ川の支流に上ってくる。上ってきた魚たちをカイツブリ[3] が捕えて食べる。その近くの茂みに隠れていた女たちが竹でつくった楽器でカイツブリを驚かす。驚いたカイツブリはクチバシに挟んだ魚を吐き出し，人々はそれを拾って回収する。これは 4，5 人でおこなう。カイツブリは 200 から 300 ほど。捕まえた魚は魚醤などに利用する。年に 3 回ほどおこなう。かつてルンシャーヤンなどの村落でおこなった。いまは採金で川が汚れ，魚は来なくなった。いまの人は誰もこの漁法を用いなくなり，それを知っている人も少なくなってしまった。」

口承，民族知，生活知などの消失は，カチンのみならずほかの周辺の少数民族においても起きていると推測される。これら無形の文化財は充分に記録されていないことが多いが，いま記録しなければ二度と取り戻すことができなくなるのではないだろうか。

2　マナウ祭りに行ったカムカム鳥

2.1　データ

本民話は 2015 年 4 月 4 日にカチン州ミッチーナー市のシャタプル地区において筆者がおこなった対面調査により得られたものである。話者はカチン州マチャンボー郡マロット村出身の男性 (1956 年生) である。本資料の音声およびジンポー語による書き起こしは PARADISEC で公開している。アーカイブにおける本民話の ID は KK1-1861 である (DOI: 10.4225/72/598c88b046e15)。音声資料の再生時間は 2 分 27 秒である。録音ではリニア PCM レコーダー (ZOOM H4n) にラペルマイク (AT9904) を接続し，音声 (44.1kHz/16bit) を取り込んだ。

[2] イラワジ川の上流。
[3] カイツブリ目カイツブリ科カイツブリ属に分類される鳥類。

2.2　本文

昔，鳥たちがマナウ祭り[4] に行くためにお互いに化粧をしていたとき，カムカム鳥[5] を誘うと，カムカム鳥はいいました。「私の羽は美しくありません。化粧もできません。だから，私は祭りには行きません。」「ねえ，行きましょうよ」と他の鳥たちが誘うと，カムカム鳥は「では，私にあなたたちの羽を貸してくださいよ」と頼みました。「ええ，いいですよ。」そうやって，鳥たちは各々の体から 1 本ずつ羽を抜き，カムカム鳥に挿してやりました。そうして，カムカム鳥は大変美しい鳥になりました。

マナウ祭に着くとカムカム鳥はいいました。「私はとても美しい。私が鳥のなかで一番美しい鳥だ。」そういってカムカム鳥は彼に羽毛を貸してやった鳥たちのことも忘れて威張り散らしました。ほかの鳥たちと話さえしたがりませんでした。それに怒った鳥たちはカムカム鳥から羽を引き抜いてしまいました。すると，カムカム鳥は以前のようにくすんだ色の鳥になってしまいました。そして，カムカム鳥は恥ずかしさのあまり逃げていきました。こうして，カムカム鳥は夜にしか姿を現さない鳥になってしまいました。いまでも夜になると，カムカム鳥のカットカンカンカンという鳴き声だけが森の中で聞こえてくるのです。

3　溺死のはじまり

3.1　データ

本民話は 2016 年 12 月 22 日にカチン州ミッチーナー市のドゥーカトン地区において筆者がおこなった対面調査により得られたものである。話者はカチン州スンプラブム郡ウム・ウマ村出身の男性 (1942 年生) である。本資料の音声およびジンポー語による書き起こしは PARADISEC で公開している。アーカイブにおける本民話の ID は KK1-0169 である (DOI: 10.4225/72/598891446e931)。音声資料の再生時間は 7 分 34 秒である。録音ではリニア PCM レコーダー (ZOOM H4n) にショットガンコンデンサーマイク (RØDE NTG2) を接続し，音声 (44.1kHz/16bit) を取り込んだ。

3.2　本文

いま私が語るのは，溺死ということのはじまりについてです。昔，ある青年が川岸に沿って歩いていると，虫に食われている木を見つけました。彼は刀を使ってその枯れかけた木から虫を追い払ってやりました。虫がいなくなると，その木は再び大きく育つようになりました。

ある日，青年は池に魚を捕まえに出かけました。池の中に網を投げ入れ引きあげようとすると，何かが網に引っかかりました。いくら強く引いても網はあがりません。仕方なく青年は以

[4] カチン最大の祭り。マダイと呼ばれる天の精霊を祀り，豊作や繁栄を祈願する。祭りの広場には精霊が依り憑くマナウ柱と呼ばれる渦巻や菱形の描かれた複数の柱が立てられ，人々は行列をなして柱のまわりを練り歩きながら，精霊に捧げる舞いを踊る。

[5] 滅多に姿を見せないが長い尾を持ち色が黒いと信じられている夜鳥。それを見たものに不運が訪れるという。

前助けた木に網を結びつけて，網をそのままにして家に帰ってしまいました。

実は網にかかったのは大きなヘビのような龍でした。網から抜け出せない龍を見た龍の娘が池から出てきて，木にたずねました。「あなたは昔，虫に食われて死にかけていましたが，どうやって治ったのですか？」木は答えました。「ある青年が私を助けてくれたのです。あなたも青年に助けを求めてはどうですか？」

龍の娘は人に化け，青年のところにやって来ました。「お兄さん，あなたは病気を治すことができる人と聞いてやってきました。いま私の父が池で網にかかって死にかけています。助けてください。」青年は「ああ，私が捕まえたのは龍だったのだ」と悟り，「いいですよ。助けてあげましょう」といいました。

青年が池に戻って網を少し引っ張ると，龍は少し動くことができるようになりました。青年は 7 日かけて少しずつ網を引き，いま龍が抜け出せそうになったとき，龍の娘にたずねました。「あなたの父を助けることができれば，私に何の褒美をくれますか？」龍の娘は答えました。「私があなたのところにお嫁に行きます。」青年が最後にもう一度，網を引っ張ると，龍の父は網から抜け出すことができました。そうして青年と娘は結婚しました。

ある日，龍の娘は青年にいいました。「池の魚やエビたちは私の兄弟です。だから捕まえないでください。」青年はいいました。「分かりました。これからは池の生き物を捕まえて食べたりしません。」

青年の家の近所に 9 人のいじめっ子たちが住んでいました。彼らはよく池に行って魚を大量に捕まえていました。ある日，青年が魚を捕らなくなったのをみたいじめっ子たちは，こっそり青年の籠にドジョウを 1 匹入れました。魚を入れられたことに気がつかなかった青年は，籠を持ってそのまま家に帰ってしまいました。

家に帰ると龍の娘はいいました。「いまあなたの籠から私の兄弟の匂いがします。」「私は何も捕まえていませんよ。私は池の生き物は食べません。」しかし，娘が籠をのぞいてみるとドジョウが入っていました。「あれほどいったのに，あなたは私の言葉を聞かなかったのですね。」龍の娘は失望し，龍の姿にもどって親の住む池に帰ってしまいました。

娘を愛していた青年は，それからというもの，毎日のように池に通いました。そして，娘が池に飛び込んだところに座って，泣いてばかりいました。龍の父は娘に青年のもとへ帰るよう促しました。しかし，裏切られたと思った彼女は，青年のもとへは戻りませんでした。

ある日，龍の娘は自分の長い髪を編んでござを作りました。そして，ござを青年がいつも泣いている場所に置いておきました。その日，青年が来てござの上に座ると，龍の娘は一気にそれを引っ張り，池の中へ青年を引きずり込んでしまいました。そうして，青年は溺れ死んでしまいました。それ以来，溺死ということがはじまったのです。

4　山姥

4.1　データ

本民話は 2017 年 2 月 15 日にカチン州ミッチーナー市のレーゴン地区において筆者の協力者がおこなった対面調査により得られたものである。話者はカチン州ワインモー郡カグ

ラン村出身の女性 (1975 年生) である。本資料の音声およびジンポー語による書き起こしは PARADISEC で公開している。アーカイブにおける本民話の ID は KK1-1094 である (DOI: 10.4225/72/598b32ab3e408)。音声資料の再生時間は 4 分 8 秒である。録音ではリニア PCM レコーダー (ZOOM H4n Pro) にショットガンコンデンサーマイク (RØDE NTG2) を接続し，音声 (44.1kHz/16bit) を取り込んだ。

4.2　本文

昔，焼き畑で生計を立てている村があったそうです。その年は畑の草がひどく生い茂った年でありました。ある日，2 人の女が畑の草むしりに出かけました。私の畑，彼女の畑，というふうに，2 人は分かれて別々に自分の畑の草むしりをしました。2 人の畑は離れていてお互いがお互いを見ることができませんでした。

日が暮れてくるとこちら側の畑の女が大声で呼びました。「お姉さん！日も暮れてしまったので，今晩は畑の小屋で一夜を明かしましょう！」すると遠くの方から「いいですよ！」という声が聞こえたそうです。彼女はそれを友人だと思い，「お姉さん！こちらの畑へ来てください！おかずを持ってこちらへ来てください！私もご飯を炊いておきますよ！」と叫んだそうです。すると「いいですよ！」とまた声がしました。

日が暮れると彼女の畑へ山姥[6] がやってきました。女の声を聞いたのは友人ではなく山姥だったのです。「おかずをたくさん持ってきましたよ。」そういって山姥が差し出したのは大量のいも虫でした。それを見た人間の女はたいそう怯えました。「あなたはおかずを料理してください。私はご飯を炊きおわりました。」人間の女はいいました。やって来た女は「はい，分かりました」といって，鍋でいも虫を煮はじめました。煮おわると「夕飯を食べましょう」といって 2 人は夕食を食べはじめました。しかし，人間の女は「これは人間の食べるものではない」と，食べるふりをしながら，おかずをすべて竹敷きの床下に入れて隠しました。それを見た山姥は「お姉さん，こんなにおいしいものをもったいない」といって，床下のおかずを拾って食べてしまいました。

食べおわると山姥はいいました。「さあ，いまおやすみの時間になりました。あなたたち人間はどうやって寝ますか？」それを聞いた人間の女は「これは山姥だったのだ」と気が付きました。女は答えました。「我々人間は寝るときにこのように口を大きく開いて寝ます。」山姥は「それでは私も口を大きく開けて寝よう」といいました。そうして，山姥は口を大きく開けたまますっかり眠ってしまいました。それを見た人間の女は彼女の腰巻についている鈴をちぎって，焚火であぶり出しました。「山姥が寝ているすきに鈴を真っ赤にあぶって口の中に放り込んでやろう。」女は真っ赤にあぶった鈴を響かせながら，大きく開いた山姥の口の中へ一気に投げ込みました。

ところで，昔は命を持たないものたちも言葉を発したそうです。竹や丸太まで言葉を発したそうです。人間の女は小屋から逃げ出すときにいいました。「小屋さん！私はもう帰りますよ！

[6] レップと呼ばれ，奥山に棲むと信じられている伝説上の妖怪。本稿では「山姥」と訳す。

山姥が起きて私が小屋を出たかどうかたずねても決して出たと答えてはなりません！」女は逃げる先々で通り過ぎるすべてのものに同じようにお願いしました。「丸太さん！山姥に人間が来たかと聞かれても決して来たと答えてはなりません！」「砂さん！来たかと聞かれても決して来たと答えてはなりません！」「小石さん！来たかと聞かれても決して来たと答えてはなりません！」「野鶏さん！」「木の葉っぱさん！」「稲さん！」「小川さん！山姥に人間がここを渡ったかと聞かれても決して渡ったと答えてはなりません！」このように彼女は通り過ぎるものすべてにお願いをしながら逃げました。丸太を飛び越えるときもそのようにお願いをして飛び越えました。「来てない！来てない！」と答えるようにすべてのものたちにお願いをしました。

小屋を出て追ってきた山姥も通り過ぎるすべてのものにたずねました。「いまここへ人間の女が来なかったか？」「来てない！」「来てない！」「来てない！」……　ところが，山姥は女を追ってきたそうです。「来てない！」と答えても頭の固い山姥は追ってきました。小川を渡るときも小川にたずねました。「人間の女がここを渡らなかったか？」「渡っていないよ！」しかし，山姥はあきらめずに追いかけてきました。そして村へ入ってきて，通り過ぎるすべてのもの，見るものすべて，あるものすべてに人間が来なかったかたずね歩きました。「来ていない！」「来ていない！」「来てない！」「来てない！」……

人間の女はついに自宅の敷地にたどり着きました。女はそこでもお願いをしました。「果実の木さん！山姥に人間が来たかと聞かれても決して来たと答えてはなりません！」「鶏さん！豚さん！人間が来たかと聞かれても決して来たと答えてはなりません！」「草さん！人間が来たかと聞かれても決して来たと答えてはなりません！」「もみ殻さん！人間が来たかと聞かれても決して来たと答えてはなりません！」「玄米さん！人間が来たかと聞かれても決して来たと答えてはなりません！」「臼さん！人間が家に入ったかと聞かれても決して入ったと答えてはなりません！」「はしごさん！人間があなたをのぼったか聞かれても決してのぼったと答えてはなりません！[7]」「はしごの上の床さん！人間があなたを踏んだか聞かれても決して踏んだと答えてはなりません！」そうして，女は部屋に入り，家族のものたちが寝ている布団の中に潜り込み，最初から一緒に寝ていたふりをしました。

ところが，彼女は若鶏にだけは伝えるのを忘れてしまっていたそうです。だから，若鶏は大声で鳴き出しました。「来たよ！来たよ！入ったよ！入ったよ！」それを聞いた山姥は女の家の中へ入ってきました。そして，人々が寝ているのを見つけました。山姥はいいました。「いま新しく布団に入った者は足が冷えているだろう。長い間布団で寝ていた者は足が温まっているだろう。」山姥は一人ひとりの足をなでながら温かさを確かめて歩きました。そうして，真中で寝ている人の足に触れたとき「お前か！」そう叫んで山姥は女を布団から引きずり出し，食べてしまいました。山姥のお話はここでおしまいです。

[7] カチンの伝統的家屋は高床式であり，はしごをのぼって部屋に入る。

5　蛇婿

5.1　データ

本民話は 2016 年 12 月 21 日にカチン州ミッチーナー市のドゥーカトン地区において筆者がおこなった対面調査により得られたものである[8]。話者はカチン州スンプラブム郡ウム・ウマ村出身の男性 (1942 年生) である。本資料の音声およびジンポー語による書き起こしは PARADISEC で公開している。アーカイブにおける本民話の ID は KK1-0148 である (DOI: 10.4225/72/5988910b9ba41)。音声資料の再生時間は 5 分 53 秒である。録音ではリニア PCM レコーダー (ZOOM H4n) にショットガンコンデンサーマイク (RØDE NTG2) を接続し，音声 (44.1kHz/16bit) を取り込んだ。

5.2　本文

昔，ある母と娘がバナナの葉を集めに山へ出かけました[9]。そのとき，彼らは大きな 1 匹のヘビに出くわしました。ヘビは娘を大変気に入ったので，夜になると村へ行き，彼らの家の前にやってきました。そこでヘビは脱皮をして，人の青年に化けました。ヘビの青年は家に入り，娘と夜を過ごしました。こうして，ヘビは毎晩のように娘に会いにくるようになりました。

朝になって山へ帰るたびに，ヘビは鱗を一枚落としていきました。そのヘビの鱗は金片に変わりました。この金片をたくさん手に入れた母娘は，大変裕福になりました。娘は母にいいました。「お母さん，このヘビは夜に青年の姿になるけれど，朝になるとまたヘビの姿に戻って，いつも山へ帰ってしまいますよ。」母はいいました。「娘よ，今夜，ヘビが寝ているすきに彼の脱いだ皮を燃やしてしまいなさい。」翌日，娘は本当にヘビが寝ているすきに，こっそり彼の皮を燃やしてしまいました。朝になって青年は皮がないためにヘビの姿に戻れなくなってしまいました。それ以来，娘と青年は蛇皮からできた金を使って幸せに暮らしました。

それを妬んだ隣人の女はたずねました。「お姉さん，あなたと私は昔はともに貧しかったではないですか。あなたは一体どうやって裕福になったのですか？」母は自分と娘が森へ出かけてヘビを見つけたこと，ヘビが夜ごとに人に化けてやってくるようになったことなど，最後まですべて正直に話しました。その話を聞いた隣人は思いました。「私もそのヘビを捕まえて裕福になってやろう。」翌日，隣人の女は娘を連れて山へでかけました。そして木にニシキヘビが巻き付いているのを見つけ，それを籠に入れて家へ持ち帰りました。

家に帰ると，隣人の女は娘とニシキヘビを 1 つの部屋に入れ，一緒に寝かせました。すると，ニシキヘビは足先からゆっくりと娘を呑みはじめました。「お母さん！」娘はいいました。「ヘビが私の足を舐めて呑みはじめました！いま，かかとまで呑みました！」女はいいました。「お前を愛しているから足を舐めたのですよ。」すると，ヘビはまた娘を呑みはじめました。「お母さん！いま，ヘビが膝まで呑みました！」「お前を愛しているから冗談をしているのです。」「お

[8] 同様の民話がバングラデシュ・チッタゴン丘陵に居住するチャック人にも伝わっている (藤原敬介氏, p.c., 2019)。

[9] バナナの葉は皿やご飯の包みとして用いられる。

母さん！いま，腰まで呑みました！」「お前を愛しているからです。」「胸まで呑みました！」しかし，女は金片のことばかり考えていたので，我慢するようにとだけ娘にいいました。「いま，首まで呑みましたよ！」といってから娘の声は途絶えました。「これで翌朝には娘も金片を手に入れることができるだろう。」そう思った女はたいそう喜びました。

朝になって女が部屋に入ると，娘も金片も見当たりませんでした。ただヘビが大きな腹を引きずりながら山へ帰っていくのが見えただけでした。こうして，隣人の女は金片を手に入れることができなかったばかりか，娘までも失うことになってしまったのでした。

6　なぜセミにはらわたがないか

6.1　データ

本民話は 2017 年 1 月 27 日にカチン州ミッチーナー郡ラダコン村において筆者がおこなった対面調査により得られたものである[10]。話者はカチン州ミッチーナー郡タンプレ村出身の男性 (1977 年生) である。本資料の音声およびジンポー語による書き起こしは PARADISEC で公開している。アーカイブにおける本民話の ID は KK1-0222 である (DOI: 10.4225/72/598891fa1de91)。音声資料の再生時間は 2 分 19 秒である。録音ではリニア PCM レコーダー (ZOOM H4n Pro) にショットガンコンデンサーマイク (RØDE NTG2) を接続し，音声 (44.1kHz/16bit) を取り込んだ。

6.2　本文

昔，セミには人と同じようにはらわたがあったそうです。ある日，1 匹のリスがたいそう大きな木の実を採って丸ごと食べていました。そのとき，突然，セミが大声で鳴き出したそうです。その声に驚いたサルが飛び跳ねました。すると，それを見て驚いたリスは，高い木の上から木の実を落としてしまいました。木の下ではゾウたちが食事をしていました。落ちた木の実はゾウの腰に当たりました。それに驚いたゾウは走って逃げ出しました。そのとき，ゾウは足でカエルを踏みつけて，カエルからはらわたが飛び出してしまったそうです。

カエルはゾウにいいました。「いま，私のはらわたが出てしまいました。あなたが治してください。」ゾウはいいました。「それは私のせいではありません。踏みつけたのは確かに私です。でも，あの木の上のリスが私の腰の上に木の実を投げ落としたので，私は驚いてあなたを踏んでしまったのです。」そこでリスになぜ木の実を落としたかとたずねるとリスはいいました。「私はサルが飛び跳ねたので，それに驚いて木の実を落としたのです。サルさん，あなたはなぜいきなり飛び跳ねたのですか？」サルはいいました。「私はセミたちがいきなり鳴きはじめたので，驚いて飛び跳ねたのです。それを見たリスが驚いて木の実を落としてしまったのです。」動物たちはセミにいいました。「いま，カエルのはらわたがすべて飛び出してしまいました。心臓がすべて潰れてしまいました。いま，カエルにははらわたがありません。だから，いま，あなたはカエルにはらわたを返さねばなりません。」

[10] 類話は雲南にも伝わっている (斧原孝守氏, p.c., 2019)。

そうして，動物たちはセミのはらわたを引きずり出し，それをカエルに入れて，治してやりました。だから，いま，ほかの動物たちはみな，はらわたを持っていますが，セミだけははらわたを持ちません。それは，彼らのはらわたをカエルに入れたためなのです。

7　サルに連れ去られた男

7.1　データ

本民話は 2017 年 1 月 30 日にカチン州ミッチーナー市のジャンマイコン地区において筆者の協力者がおこなった対面調査により得られたものである[11]。話者はシャン州ムセ郡ナムタウ村出身の女性 (1964 年生) である。本資料の音声およびジンポー語による書き起こしは PARADISEC で公開している。アーカイブにおける本民話の ID は KK1-0279 である (DOI: 10.4225/72/598892f081341)。音声資料の再生時間は 4 分 7 秒である。録音ではリニア PCM レコーダー (ZOOM H4n) にラペルマイク (AT9904) を接続し，音声 (44.1kHz/16bit) を取り込んだ。

7.2　本文

昔，ある山の村に畑を耕し生計を立てている貧しい家族がいました。彼らの畑にはしばしばサルがやって来て，作物を食い荒らしました。ある日，家族の男がサルを捕えるため，酒かすを用意しました[12]。男は酒かすの入った桶を畑に置いて，物陰からこっそり様子を伺っていました。ところが，男は居眠りをしてしまいました。そこへサルたちがやって来て，酒かすを食べはじめました。サルたちはそこで眠っている男を見つけました。彼らはそれを死体だと思ったので，男を連れ去り，山へ運びました。

目を覚ました男がこっそり目を開けて見ると，深い森の中を運ばれているのを見ました。「どこに向かうのだろう？」興味を持った男は，何もいわず，死んだふりをしてそのまま連れ去られていきました。最後にたどりついたのはサルが宝物を隠す大きな石穴でした。そこで男は突然，大きな声で叫びました。サルたちは「人が生き返った！」と驚いて，一目散に逃げ去りました。そうして，男はサルたちが集めた金銀財宝を手に入れ，家に持ち帰りました。このようにして，男の家族はたいそう裕福になりました。

それを妬んだ村人が男に事情を尋ねました。「あなた方は以前，たいそう貧しかったのに，どうやってこうも裕福になったのですか？」事情を知った村人の男は，自分も同じようにやってみようといって，畑で死んだふりをしていました。そこへまたサルたちがやって来て，男を運びはじめました。連れ去られる最中，男がこっそり目を開くとたいへん深い山の樹上を渡っているのが見えました。驚いた男は思わず「ゆっくり運んでくれ」といいました。その声に驚いたサルたちは一斉に逃げ去り，男は木から転落して死んでしまったそうです。

---

[11] 本民話は日本の昔話「猿地蔵」と類似している。類話は中国にも伝わっている (斧原孝守氏, p.c., 2019)。

[12] 山地では酒や酒かすでセルを酔わせることで捕えるという。

8　金の生る木

8.1　データ

本民話は 2017 年 1 月 29 日にカチン州ミッチーナー市のシャタプル地区において筆者の協力者がおこなった対面調査により得られたものである。話者はカチン州バモー郡ノッキュー村出身の女性 (1996 年生) である。本資料の音声およびジンポー語による書き起こしは PARADISEC で公開している。アーカイブにおける本民話の ID は KK1-0262 である (DOI: 10.4225/72/598892a715f37)。音声資料の再生時間は 3 分 53 秒である。録音ではリニア PCM レコーダー (ZOOM H4n Pro) にショットガンコンデンサーマイク (RØDE NTG2) を接続し，音声 (44.1kHz/16bit) を取り込んだ。

8.2　本文

昔，ある村に未亡人と 2 人の息子が住んでいました。彼らは焼き畑で生計を立てていました。ある日，母が大きな病をして死の床についたとき，息子を呼びました。彼女は 3 つの種を取り出し，長男に託し，こう伝えました。「あなたは兄ですから，まだ幼い弟の世話をしなさい。私がいなくなったあと，この種を植えなさい。木が育つと実をつけるでしょう。そうしたら，実を 1 日に 1 つだけお取りなさい。一度にたくさん取ってはなりません。1 日に 1 つだけ取って，あなたたち兄弟はお互いに仲良く暮らしなさい。」そう遺言を残してから間もなく，母は亡くなりました。母の言葉を守り，兄は弟を愛し，弟は兄を愛し，こうして兄弟は仲良く暮らしておりました。

成長した兄はある女と結婚しました。また，木も大きく育ち，やがて実をつけました。実をつけると，その木は金の実をつけるようになりました。大変価値のある実をつけました。これを見た兄の嫁は思いました。「やがて夫の弟が成長すると結婚するだろう。そうすると，弟の嫁にも実を与えなければならないだろう。また，彼らが子を持つと，その子にも実を与えなければならない。金の実を私たちだけで独占することができなくなってしまう。」こうして嫁は夫の弟を追い出したいと思うようになりました。そして夫にいいました。「いまのうちにこの金の実をすべて取りましょう。そして，2 人だけでもっと大きな村に移り住みましょう。」夫は答えました。「なりません。私は幼い頃から弟と 2 人で暮らして来ました。弟も私を愛していて，私たちは離ればなれになることはできません。私たち兄弟は小さい頃から両親がいませんでした。私は弟にとって親のかわりなのです。」嫁はいいました。「あなたは私を愛していますか？それとも弟をもっと愛していますか？」「もちろんあなたのことも愛しています。こんな話はやめようではありませんか。」

やがて弟は成長し，結婚する歳に達しました。一緒に住むことを嫌った嫁は，夫に弟と離れて暮らすよう何度もいいました。あまりにもいうので夫もついに考えを改めました。「弟も成長したし，嫁のいうことも聞かねばならない。」彼が告げると，嫁は「この木の実をすべて取りましょう」といいました。夫はいいました。「母が 1 日に 1 つだけ実を取るようにいいました。」「あなたの母がなぜそういったかは知ったことではありません。」「でも，母はそのようにいい残

しました。」「私たち 2 人は大きな村に移住し，今後ここに住むわけではありません。だから，たくさん取っていきましょう。どうせまた生えてくるでしょう。だから，たくさん取っても問題ありません。」夫も了解し，実を 1 つ取りました。2 つ目を取ったとき，突然，その実は大蛇となり，兄弟 2 人を呑み込んでしまいました。

参考文献

Kurabe, Keita. 2013. Recordings of Jinghpaw folktales (KK1), Digital collection managed by PARADISEC. [Open Access] DOI: 10.4225/72/59888e8ab2122

Kurabe, Keita. 2016. A grammar of Jinghpaw. Ph.D. dissertation, Kyoto University. pp.668.

Kurabe, Keita. 2017. Jinghpaw. In Graham Thurgood and Randy J. LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan Languages*. Second edition. 993–1010. London and New York: Routledge.

倉部慶太. 2018.「ミャンマー北部で失われつつある口承文芸をあつめる」『FIELD PLUS』20: 16–17.

Smith, Martin. 1994. *Ethnic Groups in Burma: Development, Democracy and Human Rights*. London: Anti-Slavery International.

受理日 2019 年 4 月 15 日

藤原 敬介（2019）『言語記述論集』11：51-102

チャクマ語音韻論*

藤原敬介
京都大学

主要語句：アクセント、声調、声調発生、有気音

1　はじめに

1.1　チャクマ語とは

チャクマ語（Chakma: ISO 639-3 ccp）はバングラデシュ人民共和国・チッタゴン丘陵（Chittagong Hill Tracts）を中心として、近隣のインド共和国・トリプラ州（Tripura）、ミゾラム州（Mizoram）、アッサム州（Assam）およびアルナーチャル・プラデシュ州（Arunachal Pradesh）、さらにビルマ・アラカン州（Arakan）の一部などでチャクマ人によってはなされている言語である。話者人口は各種資料によってばらつきがあるものの、全体で 50 万人はいるのではないかとおもわれる[注1]。

チャクマ人は形質人類学的にはモンゴロイド（Mongoloid）に属する。他方、言語学的にはインド・アーリア系である。チャクマ語は Grierson［1903］ではチッタゴン（Chittagong）方言、ノアカリ（Noakhali）方言とともにバングラ語（ベンガル語）東南部方言に下位分類されている。

チャクマ語については「バングラ語チッタゴン方言とほぼ同じ」という説[注2]がある。他方、「ほとんど独立した言語」という説[注3]もある。

---

* 本稿は 2001 年 1 月に京都大学大学院文学研究科に提出した修士論文「チャクマ語のアクセントに関する考察」に一部加筆修正したほかは、ほぼそのまま掲載したものである。修士論文の一部は、2001 年 6 月に日本言語学会第 122 回大会で発表した［藤原 2001］。筆者は博士課程からはチャック語（Cak: ISO 639-3 ckh）を中心にチベット・ビルマ語派ルイ語群の研究に従事するようになったため、チャクマ語の研究からはとおざかっている。本稿執筆にあたり、最近の文献についても目をとおすようにはしたけれども、基本となる資料は修士論文執筆のために収集したものだけである。本稿執筆の動機については附記「チャクマ語研究の思い出」でややくわしくのべる。

注1　参考までに各種資料での話者人口をしめす。

- Bangladesh Bureau of Statistics［1999］：バングラデシュ国内におけるチャクマ族人口は 25 万 2986 人。
- Vijayanunni［1997］：インド国内におけるチャクマ語話者数は 18 万 2953 人。
- P. B. Chakma［1993］：バングラデシュで 60 万人、インドで 27 万人。
- Grimes［1999］：バングラデシュで 26 万 577 人、インドで 30 万人。
- N. Chakma［出版年不明］：バングラデシュで 45 万人、インドで 17 万 5000 人、ビルマで 5 万人。
- Lewis et al.［2018］：バングラデシュで 15 万人、インドやビルマもふくめて全体で 32 万 6 千人。

注2　‘The Chakma dialect of Bengali, spoken by the Buddhist Chakma tribe living in Chittagong Hills District, is Chittagong Bengali, with some features which connect it with West Bengali and Assamese.’［Chatterji 1974[2]: 174］

注3　‘In the central portion of the Chittagong Hill Tracts, in the Chākmā Chief’s Circle, situated in the country round the Karnaphuli River, a broken dialect of Bengali, peculiar to the locality, and of a very curious character, is spoken. It is called Chākmā, and is based on South-Eastern Bengali, but has

筆者のこれまでの観察によると、チャクマ語には「弁別的アクセントの発生」や「閉鎖音の摩擦音化」といったバングラ語チッタゴン方言（Chittagonian: ISO 639-3 ctg）の特徴がみられる一方、「子音連続の重子音化」というプラークリット語の特徴、「反舌音の不在」というアッサム語の特徴、さらに「母音間の無声（無気）閉鎖音の有声音化」というビルマ語などの特徴が音声面でみられる。本稿では詳述しないけれども、標準口語バングラ語（Standard Colloquial Bengali）にもバングラ語チッタゴン方言にもみられない形態法上の特徴もある。以上よりチャクマ語はバングラ語とは独立した言語であると筆者はかんがえる[注4]。

チャクマ語の中にどれだけの方言差があるかは不明である[注5]。本報告でのチャクマ語は、筆者にチャクマ語をおしえてくれたミトゥン・チャクマさんの出身地であるチッタゴン丘陵のカグラチョリ（Khagrachhari）地方のチャクマ語を反映している。以下、本報告でいうところのチャクマ語は、特にことらわらないかぎりは、チャクマ語カグラチョリ方言のことである[注6]。

1.2 先行研究

チャクマ人はバングラデシュ最大の少数民族である。チャクマ人にかんする文献はバングラ語でかかれたものを中心に多数ある。だが、チャクマ語そのものについて研究したものはすくない。

Phayre［1841: 712–713］にビルマ・アラカン州のチャクマ人であるダイネ人の語彙が 40 語ほどあがっているものをのぞけば、管見のかぎりチャクマ語そのものについて記述したものは Grierson［1903: 321–350］を嚆矢とする。その後チッタゴン丘陵での人類学的研究の成果の一部として Löffler［1963, 1964］や Bernot［1972］がでた。しかし、チャクマ語そのものについ

---

undergone so much transformation that it is almost worthy of the dignity of being classed as a separate language.’［Grierson 1903: 321］

注4 チャクマ語には、ビルマ文字によく似た、チャクマ文字と呼ばれる固有の文字がある。このこともチャクマ人とチャクマ語の独立意識をささえる文化的根拠となっている。チャクマ文字の使用はすたれており、延末［1999］にはチャクマ文字が消滅の危機にあるという報告がある。だが、L. Bh. Chakma［1994: Foreword］によると、インド・ミゾラム州のチャクマ自治区では 1994 年から学校教育でチャクマ語が導入され、チャクマ文字の教育もおこなわれている。

筆者の見聞によれば、バングラデシュではチッタゴン丘陵おけるチャクマ人の中心地であるランガマティ（Rangamati）にチャクマ語教育機関ができ、ダカ大学の有志がチャクマ人の言語と文化にかんする小冊子を自費出版するなど、チャクマ文字の復活とチャクマ語学習の機運がたかまっている。チャクマ文字についての近年の動向については藤原［2002］も参照。

注5 Grimes［1999］には六つの方言があるとされている。だが、具体的な方言名は記述されていない。Maniruzzaman［1984: 75］も六つの方言群をあげている。それらは、言語的にもチベット・ビルマ系であるチャック人（Cak）、チャクマ人の氏族ともみなされることがあるトンチュンガ人（Tanchanghya）、ビルマ・アラカン州のチャクマ人と言われるダイネ人（Dainak）などである。すなわち民族あるいは呼称による分類である。

注6 バングラデシュのチャクマ人はチャクマ語とバングラ語との完全な二言語使用者である。母語がチャクマ語であっても、学校教育はバングラ語でなされるために、標準口語バングラ語をよくしっている。バングラ語チッタゴン方言に代表されるバングラ語東南部方言が市場では使用されており、チャクマ人は一般にバングラ語チッタゴン方言にも堪能である。標準口語バングラ語やバングラ語チッタゴン方言がチャクマ語にあたえる影響は、語彙の面において特につよいとおもわれる。

ての記述はわずかである。八木［1964a, 1964b, 1964c］はチャクマ語についておおくの資料を提供するものの、おなじ単語にことなる表記が散見されるほか、チャクマ語のアクセントについての記述がほとんどないなど、音韻論的解釈が十分とはいえない。

チャクマ人についての文献のうち Ishaq［1971: 203–214］、Talukdar［1988: 105–120, 1994: 46–60］、Majumdar［1997: 209–289］にはチャクマ語についての紹介がある。だが、Grierson［1903: 321–350］をこえるものではない。

Ganguly & Talukdar［1996］は言語学的記述をめざした。しかし、その内容には疑問がおおい[注7]。

Maniruzzaman［1984］はバングラ語を専門とする言語学者によるほぼ唯一のチャクマ語音声の記述である。だが、IPA をもちいて記述されているわけではなく、誤植がおおいという問題がある[注8]。

Bardhan［2008, 2010, 2014］はチャクマ語の音声をあつかっている。しかし、弁別的アクセントについて記述がないことをはじめ、本稿の記述とは相違が散見される。

チャクマ語の語彙集はいくつかでている。もっともくわしいものは P. B. Chakma［1993］の辞書である[注9]。

その他、教育目的に地元のチャクマ人によってかかれた教科書や、チャクマ文字をまなぶための文字練習帳などがいくつかでている。Maniruzzaman［1991b］にそのうちの主要なものについて紹介されている。

1.3　本稿の構成

本稿ではチャクマ語の信用できる記述研究がすくないという現状をかんがみ、チャクマ語の音声的特徴について共時的に記述する。アクセントについては歴史比較言語学的観点からも記述することをめざす。

第 2 節では現段階でかんがえられるチャクマ語の音素を報告し、チャクマ語の主要な連声についてのべる。第 3 節では共時的にみられるアクセント型を記述する。第 4 節では第 3 節でみたアクセント型が通時的にはどのように説明できるかを考察し、チャクマ語のアクセント規則を提案する。第 5 節では第 4 節でえられたアクセント規則が共時的にはどのように適用されるかをみる。第 6 節では本稿をまとめ、さらなる問題点についてのべる。

なお、本稿末尾に**記号・略号一覧**と**表記上の注意**をつけた。

注7 ‘All the consonants in Hindi are present in Chakma language.’［Ganguly & Talukdar 1996: 1649］という事実に反する記述や、「後置詞」を「前置詞」と記述するといった、ヒンディー語や英語にひきずられたような記述が散見される。

注8 Maniruzzaman 教授はその後チャクマ語に関する論文をバングラ語ですくなくとも二つ発表した。Maniruzzaman［1990: 筆者未見］と Maniruzzaman［1994］である。ただし Maniruzzaman［2000: 直談］によると後者は前者を改訂したものであり、資料は両者とも Maniruzzaman［1984］とおなじとのことである。

注9 この辞書はインド・ミゾラム州からでているので、カグラチョリ方言とは若干異なるところもあるものとおもわれる。

2　音韻論概説

本節ではチャクマ語の主要な音声的特徴を記述する。

2.1　音素概観

2.1.1　母音

チャクマ語の母音音素は次のとおりである。

	前	中	後
狭	/i/		/u/
半狭	/e/		/o/
半広	/ɛ/		/ɔ/
広		/a/	

2.1.2　子音

チャクマ語の子音音素は次のとおりである。主要な異音を (...)、音素とはみとめないけれどもバングラ語からの借用語として音声的には観察されるものを [...] でしめす。なお、音素と異音の関係については第 2.3 節で後述する。

	唇	歯茎	後部歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	/p/ /b/	/t/ /d/			/k/ /g/	
鼻音	/m/	/n/			/ṅ/	
摩擦音	(ɸ) (β)	(s) (z)	[ʃ]		(ɣ)	(h)
破擦音			/c/ /j/			
弾き音		/r/				
接近音	[w]	/l/		/y/		

2.1.3　アクセント

チャクマ語には弁別的音調がある。音調のにない手は語の音節であり、各音節のピッチの高低が意味を区別する。すなわちチャクマ語における音調とは、当該音節における特定の音調の有無 (「高」か「低」かの「どちら」か) が問題となるアクセントであり、音調の種類 (「どの」か) が問題となるトーンではない[注10]。

本稿ではこの弁別的音調を単にアクセントとよぶ。そして高いピッチをもつ音節を「アクセントがある音節」、低いピッチをもつ音節を「アクセントがない音節」というようにみなす。本稿ではしばしば「アクセントがある」、「アクセントがない」という表現をする。これは、より厳密には、「当該音節にアクセントがある」、「当該音節にアクセントがない」という意味である。

本稿ではこのアクセントを音素とみなし、ピッチが高いところを/ ´ /でしめす。

音調としてはピッチとは別にストレスもあるが、これは弁別的ではないとかんがえるので音

注10　「アクセント」と「トーン」の相違にかんするこの見方は、早田［1999］のうち特に第 1 章「音調とは何か」、第 4 章 1 節「「アクセント」早わかり」を参考にしている。

素とはみとめない。アクセントについて詳細は第 3 節でのべる。

2.2　母音音素

本節ではチャクマ語の母音音素と音声について具体的な記述をこころみる。

2.2.1　単母音

単母音の例を（1）～（7）にしめす。

(1)　/a/
[a] / すべての環境
/at/ [aˈtˀ][注11 注12]「八」
/át/ [átˀ]「腕」
/gɔla/ [gɔla]「くび」
/kɔdá/ [hɔdá]「ことば」

(2)　/i/
[i] / すべての環境
/it/ [iˈtˀ]「ブロック」
/jí/ [dʒí]「娘」
/baji/ [bazi]「生きること」
/badí/ [badí]「短い」

(3)　/u/
[u] / すべての環境
/ut/ [uˈtˀ]「くちびる」
/tút/ [tʰútˀ]「くちばし」
/aju/ [azu]「祖父」
/adú/ [adú]「膝」

(4)　/e/
[e] / すべての環境[注13]
/el/ [eˈl]「あぜ道」

注11 アクセントをもたない一音節語は母音がややながく発音される傾向にある。

注12 語末の閉鎖音は無開放閉鎖となる場合とそうでない場合がある。両者の分布に厳密な条件はなく自由変異であるといえる。ただし本稿では両方あげるのは煩雑であるから、通常の会話で頻度の高い無開放閉鎖のみを音声表記としてあげる。

注13 本稿で音素/e/とみとめるものは共時的には同化により [e] となっているものであるか、通時的には*CaCi ＞ *CaiC ＞ CeC となっているものがおおい。*CaCi ＞ *CaiC という音変化はバングラ語東部方言の特徴で、Chatterji［1970[2]］をはじめとしてバングラ語学では母音挿入（epenthesis）とよびならわされている。他方、Učida［1970: 7］では音位転換（Metathese）とされている。

/él/ [él] 「青」
/mile/ [mil^{j}e][注14] 「女」
/midé/ [mid^{j}é] 「甘い」

(5) /ɛ/[注15]
[ɛ] / すべての環境
/tɛ/ [tɛˑ] 「彼・彼女・それ」
/tɛ́ṅ/ [t^{h}ɛ̃ŋ] 「足」
/agɛ/ [aɣɛ] 「はじめ・前」
/agɛ́/ [aɣɛ́] 「存在する 3sg.pres.」

(6) /o/
[o] / すべての環境
/dol/ [doˑl] 「美しい」
/dól/[注16] [dól] 「太鼓」
/nuo/ [nuo] 「新しい」
/luó/ [luó] 「鉄」

(7) /ɔ/
[ɔ] / すべての環境
/pɔr/ [ɸɔˑɾ] 「明るい」
/pɔ́l/ [ɸɔ́l] 「実」
/bɔlɔ(r)/ [bɔlɔ(ɾ)] 「力 sg.gen.」
/dɔrɔ́/ [dɔɾɔ́] 「硬い」

2.2.2 最小対語

主要な最小対語（minimal pair）の例を（8）～（13）にあげる。

(8) a. /dak/ [daˑkˀ]「印」
b. /dik/ [diˑkˀ]「方向」
c. /duk/[注17] [duˑkˀ]「悲しみ」

注14 [e] の直前において、摩擦音をのぞく子音は硬口蓋化する傾向にある。
注15 バングラ語チッタゴン方言を記述した Učida［1970］は音素/e/のみをたて、/ɛ/を音素とはみとめていない。
注16 /dúl/という形式もある。チャクマ語では/o/と/u/がしばしば交替する傾向にある。これはバングラ語東部方言一般の特徴でもある。
注17 通時的にみると、一般的には/h/のあとでアクセントが発生している。そこで、本稿では/h/を音素とはみとめず/ ´ /を音素としてかんがえる。したがって、/duk/とのみ表記する。ただし、/h/を音素とみとめるならば/dukh/と表記することもできる。なぜならば、接辞が後続するときにはアクセント

(9) a. /cal/ [saˑl] 「屋根」
b. /cul/ [suˑl] 「髪」
c. /col/ [soˑl] 「お米」

(10) a. /mon/ [moˑn]「山」
b. /mɔn/ [mɔˑn]「心」

(11) a. /pek/ [ɸeˑkˀ]「鳥」
b. /pɛk/ [ɸɛˑkˀ]「泥」

(12) a. /cát/ [sátˀ]「七」
b. /cót/ [sótˀ]「味」
c. /cɔ́t/[注18] [sɔ́tˀ]「よい」

(13) a. /ɛlá/ [ɛlá] 「来る 2pl.pres-perf.」
b. /ɛlɛ́/ [ɛlɛ́] 「来る 2sg.pres-perf.」
c. /ɛlɔ́/ [ɛlɔ́] 「来る 3sg.pres-perf.」

2.2.3 鼻母音

鼻母音は出現が予測可能であるから音素とはみとめない。鼻子音の前後であらわれる[注19]。

(14) V → Ṽ[注20] / __C[+nasal] または C[+nasal]__

(15) に鼻母音があきらかきこえる例、(16) にあきらかにはきこえない例をあげる。

(15) a. /tɛ́ṅ/ [tʰɛ̃́ŋ] 「足」
b. /tɛṅa/ [tɛ̃ɣã] ～ [tɛ̃jã]「お金」

(16) a. /muy/ [muˑj] 「私」
b. /káná/ [háná] 「食べる inf.」

があらわれうるからである（**4.3.1**）。他の類例も同様である。

注18 同音異義語に/cɔ́t/「百」がある。ただし、「百」をあらわすには/ɛkcɔ́t/が普通である。

注19 唯一の例外は [ĩˑ]「はい（肯定）」である。この形式は Skt. *ām*（T. #1235）に関係するとみられる。すなわち、語源的には*m の影響で鼻母音が生じている可能性がある。この形式については、対応する最小対語として鼻母音をもたない [í] や [iˑ] といった形式が確認されない。そこで、本稿では鼻母音を音素とはみなさない。なお、CED ではこの語にのみ見出し語のベンガル文字に ঈঁ のように鼻母音記号がついている一方、ローマ字表記では単に *ee* となっている。

注20 実際のきこえとしては [ŋ] の前後の母音がもっとも鼻母音らしくきこえる。[m] や [n] の前後ではあまり鼻母音らしくはきこえない。そこで、本稿で音声表記をする場合、[ŋ] の前後の母音のみ鼻母音記号を付す。[m] や [n] の前後の母音には鼻母音記号を付さない。

2.2.4　長母音

長母音は音素的ではない。母音連続の一種である。通時的には母音間の*k または*g が脱落することによりあらわれる傾向にある。こうした語では音声的に [ɣ] があらわれる場合もある。音声的に [ɣ] があらわれる異形態をもつものについては、通時的に*k や*g があってもなくても、音韻表記として/g/を表記する。

(17)　a. /kugur/ [huːɾ] ～ [huɣuɾ] 「犬」 (SCB *kukur*)
　　b. /ugure/ [uːɾʲe] ～ [uɣuɾʲe] 「上」 (SCB *upore*[注21])

ただし、通時的に*k や*g があってもなくても、共時的には [ɣ] があらわれないものについては/g/を表記しない。

(18)　a. /paaná/ [ɸaːná] 「熟する inf.」 (SCB *paka*)
　　b. /deeye/ [deːje] 「赤蟻」 (語源不詳)

2.3　子音音素

この節ではチャクマ語の子音音素と音声について具体的な記述をこころみる。

2.3.1　閉鎖音

語末の無開放閉鎖音には、すべての音について自由変異として開放閉鎖音もある。ただし本稿では頻度のたかい無開放閉鎖音のみを表記し、開放閉鎖音は表記しない。

(19)　/p/
　　[ɸ] / #__
　　/pul/ [ɸu·l] 「橋」
　　/púl/ [ɸúl] 「花」
　　[pˀ] / __# または __C[−voiced]
　　/cép/ [sépˀ] 「唾」
　　/cáptá/ [sápˀtá] 「週」
　　[p] / その他の環境
　　/nippaní/ [nipˀpaní] 「(ペンなどの) 先 pl.」
　　/céppáni/ [sépˀpáni] 「唾 pl.」

(20)　/b/

注21　SCB の/p/がチャクマ語ではなぜ/g/で対応するのかは不明である。他方、SCB の軟口蓋音がチャクマ語では両唇音で対応する例もみられる。
(i) /kabóc/ [haβócʃ] 「紙」 (SCB *kagoj* < Pers.)

[β] / V__V
/kɔbal/ [hɔβal] 「額」
[bˀ] / __C[+voiced]
/ibbé/ [ibˀbʲé] 「これ」
[b] / その他の環境
/bát/ [bátˀ] 「ごはん」
/boy/ [boˑj] 「本」
/mɛgban/ [mɛgˀban] 「祭」
/lɔmba/ [lɔmba] 「長い」
/durbol/ [durbol] 「弱い」
/nobboy/ [nobˀboj] 「九十」

(21) /t/
[t^h] / #__V́
/tík/ [t^híkˀ] 「正しい」
[tˀ] / __# または __C[−voiced]
/bát/ [bátˀ] 「ごはん」
/mattɔl/ [matˀtɔl] 「酔った」
[t] / その他の環境
/gɔ́ntá/ [gɔ́ntá] 「時間」
/mattɔl/ [matˀtɔl] 「酔った」
/áttáni/ [átˀtáni] 「腕 pl.」
/ɔctrɔ/ [ɔstrɔ] 「武器」

(22) /d/
[dˀ] / __C[+voiced]
/moddé/ [modˀdʲé] 「中」
[d] / その他の環境
/madá/ [madá] 「頭」
/dak/ [daˑkˀ] 「印」
/úndi/ [úndi] 「あっち」
/indí/ [indí] 「こっち」

(23) /c/
[s][注22] / #__ または __C[−voiced] または C[−voiced]__

[注22] SCB で/s/に対応するものは SCB 同様に [ʃ] と発音されることもある。他方、SCB では [ʃ] であっ

/cul/ [suˈl] 「髪」
/cɔ́t/ [sɔ́tˀ] 「よい」
/actɔ/ [astɔ][注23] 「八」
/bakcó/ [bakˀsó] 「箱」
[tˀ] / __C[−voiced]
/baccé/ [batˀtʃé] 「待ち」
[tʃ] / その他の環境
/mac/ [maˈtʃ] 「魚」
/uccop/ [utˀtʃopˀ] 「祭」
/maccún/ [matˀtʃún] 「魚 pl.」

(24) /j/
[z] / V__V
/mɔjá/ [mɔzá] 「蚊」
/nije/ [nize] 「自分」
[dˀ] / __C[+voiced]
/cɔ́májjé/ [sɔ́mádˀdʒé] 「友」
[dʒ] / その他の環境
/jaga/ [dʒaɣa] 「場所」
/jádí/ [dʒádí] 「はやい」
/cɔ́májjé/ [sɔ́mádˀdʒé] 「友」
/gujjóṅ/ [gudˀdʒõŋ] 「する 1sg.past.」

(25) /k/
[h][注24] / #__
/kan/ [haˈn] 「耳」
/káṅ/ [hãŋ] 「食べる 1sg.pres.」
[kˀ] / __# または __C[−voiced]
/nak/ [naˈkˀ] 「鼻」
/rɔktɔ/ [rɔkˀtɔ] 「血」
[k] / その他の環境
/ikko/ [ikˀko] 「今」

てもチャクマ語では [s] と発音されるものもおおい。SCB からのあきらかな借用語である場合には/ocúk/ [oʃúkˀ]「病気」のように母音間の無声音が有声化せず、無声のまま [ʃ] であらわれる。SCB で/c/や/ch/に対応するものはかならず [s] で発音される。いずれにせよ、本稿では音素としては/c/のみをかんがえる。

注23 バングラ語からの借用語。チャクマ語化すれば/attɔ/ [atˀtɔ] と重子音化する。

注24 実際には [χ] くらいであるかもしれないけれども、本稿では [h] で統一する。

/nakkún/ [nakˀkún] 「鼻 pl.」

(26) /g/
[gˀ] / __C[+voiced]
/mɛgban/ [mɛgˀban] 「祭」
[ɣ] ～ [∅] / V__V
/kugur/ [huɣuɾ]「犬」
[g] / その他の環境
/gɔm/ [gɔˑm] 「よい」
/pɛrga/ [ɸɛɾga] 「垢」

2.3.2 鼻音

(27) /m/
[m] / すべての環境
/mac/ [maˑtʃ] 「魚」
/gɔm/ [gɔˑm] 「よい」
/émán/ [émán][注25] 「動物」

(28) /n/
[n] / すべての環境
/nac/ [naˑtʃ] 「踊り」
/kan/ [haˑn] 「耳」
/paní/ [ɸaní] 「水」
/benné/ [bennʲé] 「朝」

(29) /ṅ/[注26]
[ɣ] ～ [∅] / V__V
/tɛṅa/ [tɛ̃ɣã] ～ [tɛ̃jã] [注27]「お金」
[ŋ] / その他の環境
/káṅ/ [hã́ŋ] 「食べる 1sg.pres.」

注25 語頭に声門閉鎖音をともなって [ʔémán] ときこえることのほうがおおい。声門閉鎖音は音韻論的に母音はじまりの語がアクセントをもつ場合に語頭できかれる傾向にあるけれども、厳密な条件は不明である。

注26 語頭にはたたない。

注27 本来は ∅ となるべきであるけれども、[ɛ] のあとでわたり音として [j] がはいっている。

2.3.3 流音

(30) /r/
[ɾ] / すべての環境
/rak/ [ɾaˑkˀ] 「怒り」
/tir/ [tiˑɾ] 「矢」
/darí/ [daɾí] 「髭」
/perga/ [ɸɛɾga] 「垢」

(31) /l/
[l] / すべての環境
/lo/ [loˑ] 「血」
/cul/ [suˑl] 「髪」
/palɔk/ [ɸalɔkˀ] 「羽毛」
/kelle/ [hellʲe] 「明日」

2.3.4 最小対語

主要な最小対語の例をあげる。

(32) a. /kal/ [haˑl]「時間・季節」
b. /gal/ [gaˑl]「頬」

(33) a. /cal/ [saˑl]「屋根」
b. /jal/ [dʒaˑl]「網」

(34) a. /tin/ [tiˑn]「三」
b. /din/ [diˑn]「日」

(35) a. /po/ [ɸoˑ]「息子」
b. /bo/ [boˑ]「妻」

(36) a. /bam/ [baˑm] 「間」
b. /baṅ/ [bãˑŋ] 「左」

(37) a. /can/ [saˑn] 「見る 3pl.pres.」
b. /caṅ/ [sãˑŋ] 「見る 1sg.pres.」

(38) a. /mac/ [maˑtʃ]「魚」
b. /nac/ [naˑtʃ]「踊り」

(39) a. /lot/ [loˑtˀ] 「血 sg.loc.」
b. /rot/ [rɔˑtˀ] 「太陽光」

2.3.5 半子音

/y/は音声的には母音間のわたり音としてあらわれるもの[注28]と、音節末子音としてあらわれるものの二種類がある。

(40) a. /buyer/ [bujɚ]「風」
b. /duy/ [duˑj] 「二」

音声的に [w] があらわれるものは母音間のわたり音である。その環境は（41）のように予想可能である。したがって、音素として/w/をたてることはしない。

(41) [w] / u __ a または ɔ__ a[注29]

(42) a. /cúáná/ [súwáná] 「乾く inf.」
b. /tɔana/ [tɔwana] 「探す inf.」

2.3.6 その他の音声

この節では、先行研究に音声として記述されているけれども本稿では音素とはみなさないものについてのべる。

2.3.6.1 入破音

Maniruzzaman［1984: 82］によるとチャクマ語にはよわい入破音がみられる[注30]。Maniruzzaman にあがる例を SCB 形式とともに（43）～（46）にしめす。これらは音韻表記とおもわれるので原文にはない/.../をつける。なお入破音の表記は IPA にあらためた。

(43) a. /ɗaba/ ‘to run or persue’ (SCB *dhabon* ‘running’)
b. /daba/ ‘hookah, chess’ (SCB *daba* ‘chess’)

(44) a. /ɗei/[注31] ‘(we) flee away’ (SCB —)

注28 わたり音として/y/があらわれる環境は次のように予測可能である。
(i) [j] / u __ e または i __ a または ɛ __ a (おそらく e __ a でもはいるとおもわれる。だが、適当な語例は未確認である。)
しかし語幹でこの環境にあるものは音素とみとめる。

注29 [o] の後でもおそらく [w] がはいるとおもわれる。だが、適当な語例は未確認である。

注30 ‘A series of weaker implosive sounds are found in Chakma which may be treated as separate phonemes. These are restricted to word initial position and freely vary with stressed or tensed consonants.’［Maniruzzaman 1984: 82］

注31 原文の表記は ‘n:ei’ であるが、対応する最小対語の例からみて ‘d:ei’ とすべきと思われる。なお

b. /dei/ ‘(we) see’ (SCB *dekha*)

(45) a. /ɓat/ ‘rice’ (SCB *bhat*)
b. /bat/ ‘rheumatism’ (SCB *bat*)

(46) a. /ɠul/ ‘turbid’ (SCB *ghola*)
b. /gul/ ‘round’ (SCB *gola*)

（43）～（46）の諸例からは、SCB の有声有気閉鎖音の有気性が消失する代償として、対応する調音点の入破音となっていると推測される。

しかし、上記の例すべてについて確認したわけではないけれども、筆者がききだしたチャクマ語語彙のうち SCB 形式に有声有気閉鎖音がみられるものが入破音となっていることはなかった。むしろストレスをともなってみじかく発音される傾向があり、本稿ではこれをアクセントとみなしている。たとえば（45a）は筆者の観察では/bát/ [bátˀ] である。

2.3.6.2 声門閉鎖音

Maniruzzaman［1984］にはチャクマ語には声門閉鎖音がみられる。SCB で/h/に対応する音がチャクマ語では消失して声門閉鎖音が生じるとされている[注32]。（47）に SCB 形式とともに Maniruzzaman［1984: 85］の例をあげる。この例は音声表記とおもわれるので、原文にはない [...] をつける。なお声門閉鎖音の表記は IPA にあらためた。

(47) a. [ʔeman] → [eʔman] ‘inferior, animal’ (SCB —)
b. [et‘ʔ] → [eʔt][注33] ‘elephant’ (SCB *hati*)

筆者の観察では、特に（47a）の例では、たしかに声門閉鎖音がきこえることがある。ただし、その場合でも音声的には [ʔémán] である。（47b）の例では声門閉鎖音がきこえない。声門閉鎖音は共時的には母音はじまりの語の第一音節にアクセントがある場合に自由変異として生じるものとおもわれる。したがって、アクセントを音素とみとめるならば、声門閉鎖音を音素とみとめる必要はない。

なお八木［1964a: 87］には重子音化がおきる場合には重子音の第一要素が声門閉鎖音であるというような記述がある。また八木［1964b: 59］では音節末の/k, t, p/が声門閉鎖音であるとしている。だが、これらは筆者の観察によれば、それぞれ対応する無開放閉鎖音である。

‘C:’ はその子音が入破音であることを示していると推測される。

注32 ‘Chakma is characterised with glottal stop. Initial h of ScB has been replaced and released as glottal stop. Optionally the initial glottal stop and the following vowel are metathesized.’［Maniruzzaman 1984: 85］

注33 原文の表記は ‘ét’ である。だが、Maniruzzaman［1984］での他の語例からも推測して [eʔt] ではないかとおもわれる。

2.3.6.3　語末の歯擦音

Löffler［1964］によると、語末の歯擦音（sibilant）を “Implosive” で発音するチャクマ語話者がいる[注34]。語例がないのでこれが具体的に何のことをさしているのかは不明である。チャクマ語では語末の閉鎖音が無開放閉鎖音となる傾向があるので、そのことをさしているのかもしれない。ただし、筆者の解釈では SCB で/c, ch, s/に相当する音はチャクマ語では/c/で対応し、語末でも歯擦音ではなく破擦音である。

2.4　比較音韻論

この節では SCB と比較した場合にみられるチャクマ語の主要な音韻論的特徴を記述する。あわせ、チャクマ語にみられる主要な形態音韻論的対応を記述する。

2.4.1　有声化

無声阻害音は母音間で有声化する[注35][注36]。

(48) *C[−voiced, −cont] > [+voiced] / *V __ V

(49) a. /kɔbal/ [hɔβal] 「額」 (SCB *kɔpal*)
b. /badol/ [badol] 「パチンコ」 (SCB *bãṭul*)
c. /madá/ [madá] 「頭」 (SCB *matha*)
d. /bɔjɔ́r/ [bɔzɔ́ɾ] 「年」 (SCB *bɔchor*)
e. /pojú/ [ɸozú] 「動物」 (SCB *posu*)
f. /dɛgá/ [dɛɣá] 「会うこと」 (SCB *dækha*)

この特徴は SCB と比較した場合においても、チャクマ語内部での形態音韻論的交替においても観察される。

(50) C[−voiced, −cont] → [+voiced] / V __ V

(51) a. /dip/ [diˑpˀ] 「島」 → /dibot/ [diβotˀ] 「島 sg.loc.」
b. /ret/ [reˑtˀ] 「夜」 → /redɔt/ [redɔtˀ] 「夜 sg.loc.」
c. /gac/ [gaˑtʃ] 「木」 → /gajɔ́t/ [gazɔ́tˀ] 「木 sg.loc.」

注34 ‘Der einzige Anklang an tibetoburmanische Sprachen findet sich in der Art, wie einige Leute finale Sibilanten als Implosive aussprachen, aber selbst dabei werden stimmhafte und stimmlose Finalen unterschieden, was in keiner der benachbarten tibetoburmanischen Sprachen (die zudem finale Sibilanten nicht kennen) der Fall ist.’［Löffler 1964: 73］

注35 これはビルマ語などにもみられる音声的特徴である

注36 ただし SCB からの借用語でチャクマ語化していないものはそのかぎりではない。

(i) a. /ocúk/ [oʃúkˀ] 「病気」 (SCB *ɔsuk*)
b. /natɔk/ [natɔkˀ] 「劇」 (SCB *naṭɔk*)
なお (i-b) の例では SCB の反舌音は対応する無声閉鎖音であらわれている。

d. /nak/ [naˑkˀ] 「鼻」 → /nagɔt/ [naɣɔtˀ] 「鼻 sg.loc.」

2.4.2 無声化

有声阻害音は語末で無声化する。

(52) *C[+voiced, −cont] > [−voiced] / __ #

これは SCB と比較した場合にあらわれる特徴である。

(53) a. /nip/ [niˑpˀ] 「(ペンなどの) 先」 (SCB *nib*; Eng. *nib*)
b. /rot/ [roˑtˀ] 「太陽光」 (SCB *rod*)
c. /puc/ [ɸuˑtʃ] 「膿」 (SCB *pũj*)
d. /rak/ [ɾaˑkˀ] 「怒り」 (SCB *rag*)

2.4.3 有気音の無気音化

有気音は語末で無気音になる[注37]。その他の位置では無気音となった代償にアクセントを生じさせる。

(54) *C^h > C / __ #
*C^hV > CV́ / すべての環境

これは SCB と比較した場合にみられる特徴である。

(55) a. /bɔrɔ́p/ [bɔˈrɔ́pˀ] 「氷」 (SCB *bɔroph*; Pers. *barf*)
b. /pit/ [ɸiˑtˀ] 「背中」 (SCB *piṭh*)
c. /gac/ [gaˑtʃ] 「木」 (SCB *gach*)
d. /bak/ [baˑkˀ] 「虎」 (SCB *bagh*)

(56) a. /púl/ [ɸúl] 「花」 (SCB *phul*)
b. /bát/ [bátˀ] 「ごはん」 (SCB *bhat*)
c. /tál/ [t^hál] 「壷」 (SCB *thal*)
d. /dán/ [dán] 「稲」 (SCB *dhan*)
e. /céy/ [séj] 「灰」 (SCB *chai*)
f. /jál/ [dʒál] 「辛い」(SCB *jhal*)
g. /gám/ [gám] 「汗」 (SCB *gham*)

注37 これはバングラ語東部方言にみられる特徴である。

2.4.4 重子音化

チャクマ語においては共時的にも通時的にも重子音化がみられる。ただし共時的重子音化は順行同化、通時的重子音化は逆行同化となる傾向にある。

(57) $C_1 + C_2 \rightarrow C_1C_1$ (共時的重子音化)

(58) a. /cép/「唾」+ {Kaní}[注38]「複数接辞」 → /céppáni/「唾 pl.」
b. /át/「手」+ {Kaní}「複数接辞」 → /áttáni/「手 pl.」
c. /mac/「魚」+ {Kún}「複数接辞」 → /maccún/「魚 pl.」
d. /nak/「鼻」+ {Kún}「複数接辞」 → /nakkún/「鼻 pl.」

(59) $*C_1C_2 > C_2C_2$ (通時的重子音化): ただし C[−nasal, −syl]

(60) a. *-kt- > -tt-: /cɔ́ttɔ́/ 「丈夫な」 (SCB *sɔkto*)
b. *-sk- > -kk-: /ikkul/ 「学校」 (SCB *iskul*; Eng. *school*)
c. *-st- > -tt-: /attɛ/ 「ゆっくり」 (SCB *aste*)
d. *-rs- > -jj-[注39]: /pujjó/ 「二日前・二日後」 (SCB *porsu*)

2.4.5 子音の消失

子音、特に*k と*g は母音間でしばしば脱落する。

(61) *k, *g > ∅ / *V__V

(62) a. /kuur/ 「犬」 (SCB *kukur*)
b. /baɔl/ 「樹皮」 (SCB *bakol*)
c. /cáɔ́l/ 「山羊」 (SCB *chagol*)

原音素の{K}は閉鎖音の後では先行する閉鎖音に同化して重子音化する。だが、共鳴音の後ではあらわれない。そこで、（61）に対応する共時的規則は（63）のようにかくことができる。

(63) K → ∅ / [+voiced, +cont, +son] __

(64) a. /gám/ 「汗」+ {Kaní}「複数接辞」 → /gámáni/ 「汗 pl.」
b. /kan/ 「鼻」+ {Kaní}「複数接辞」 → /kananí/ 「鼻 pl.」
c. /tɛ́ṅ/ 「足」+ {Kaní}「複数接辞」 → /tɛ́ṅáni/「足 pl.」
d. /tir/ 「矢」+ {Kún}「複数接辞」 → /tirún/ 「矢 pl.」

注38 大文字の K は原音素（Archiphoneme）をあらわす。共時的には基底形が/kani/であるか/gani/であるかを決定できないので、抽象的に{Kani}と表記している。他の類例も同様である。

注39 この例では、対応する SCB の s が先行する r の影響で有声化したのち、重子音化が生じているのではないかとおもわれる。

e. /pul/ 「橋」+ {Kaní}「複数接辞」 → /pulaní/ 「橋 pl.」
f. /boy/ 「本」+ {Kún}「複数接辞」 → /boyún/ 「本 pl.」

母音間でなくても消失する例はある。

(65) a. /ɔraná/ 「する inf.」 (SCB *kɔra*)
b. /mu/ ∼ /muk/ 「口」 (SCB *muk*)

二子音連続のうち特に*Cr のものは単に C となる傾向にある。

(66) *Cr > C

(67) /puttek/ 「すべての」 (SCB *prottek*)

（68）のように、*gr が r となっているものもある。*g が消失する規則の適用が優先された結果であるかもしれない。

(68) /kárácóri/[注40] 「カグラチョリ (地名)」 (SCB *khagrachori*)

2.4.6 口蓋化

（69）にしめす環境で、口蓋化しうる子音は口蓋化する傾向にある。これは予測可能であるから音韻表記としてはあらわさない。

(69) a. C → C^j / i__e
b. CC → CC^j / __e[注41]

(70) a. /tide/ [tid^je] 「苦い」
b. /mile/ [mil^je] 「女」
c. /ibbé/ [$ib^{\urcorner}b^jé$] 「これ」
d. /benné/ [$benn^jé$] 「朝」
e. /belle/ [$bell^je$] 「夕方」

2.4.7 母音の同化

基底形として ɔ や ɛ が推定される場合、その母音の前後に高母音があれば音声的にはそれぞれ [o] または [e] となってあらわれる。このとき、本稿では音素表記としては/o/、/e/と記述する。

(71) ɔ → o / {i, u} __ または__ {i, u}

注40 この語のアクセントは第 4 節、第 5 節で考察するアクセント規則からは説明できない。
注41 この規則が適用されるのは重子音にかぎられるかもしれない。

(72) ɛ → e / {i, u} __ または__ {i, u}

(73) a. /pit/ [ɸiˑtˀ] 「背中」 → /pidót/ [ɸidótˀ] 「背中 sg.loc.」
b. /gɔrɔ́ṅ/ [gɔrɔ̃́ŋ] 「する 1sg.pres.」 → /gorí/ [gorí] 「する 1pl.pres.」

(74) /ɛjɔ́ṅ/ [ɛzɔ̃́ŋ] 「来る 1sg.pres.」 → /ejí/ [ezí] 「来る 1pl.pres.」

SCB では/ɔ/ [ɔ] であっても (71) の環境にあればチャクマ語では/o/ [o] となる[注42]。

(75) a. /obíc/ [oβítʃ] 「事務所」 (SCB *ɔphis*; Eng. *office*)
b. /ocúk/ [oʃúkˀ] 「病気」 (SCB *ɔsuk*)

2.4.8 反舌音の不在

インド諸語でよくみられる反舌音がチャクマ語にはない。SCB で対応する語彙に反舌音がある場合、チャクマ語では対応する閉鎖音であらわれる。これは周辺のアッサム語やチベット・ビルマ系諸語にも共通してみられる特徴である[注43]。

(76) a. /at/ [aˑtˀ] 「八」 (SCB *aṭ*)
b. /dagana/ [daɣana] 「呼ぶ inf.」 (SCB *ḍaka*)
c. /madi/ [madi] 「土」 (SCB *maṭi*)
d. /natɔk/ [natɔkˀ] 「劇」 (SCB *naṭɔk*)
e. /kuri/ [huɾi] 「二十」 (SCB *kuṛi*)

3 基本アクセント型

チャクマ語のアクセントについては八木［1964b］と Maniruzzaman［1984］でふれられている。しかしその記述は簡単なものである[注44]。

筆者の観察によれば、チャクマ語のアクセントには意味の相違に関与するピッチと、意味の相違には関与しないストレスとがある。

注42 SCB では、通時的には*a であるものは、母音の同化による影響をうけなければ/ɔ/ [ɔ] で対応する。ただし*CaCaC であるものは、母音の異化により、SCB では CɔCoC となる。しかし、チャクマ語では母音の異化はおこらない。*a は（71）の環境にないかぎりは、かならず/ɔ/ [ɔ] である。
(i) /kɔ́bɔ́r/ [ˈhɔ́βɔ́ɾ] 「知らせ」 (SCB *khɔbor*)

注43 このことはチャクマ語が語彙や文法の面ではアーリア語の影響をつよくうけている一方、音声的にはチベット・ビルマ系諸言語の影響をうけていることの証左といえるかもしれない。

注44 「アクセントは，日本語と同じ高低アクセントで，上昇型と下降型とに大別することができる。上昇型では母音は長く，下降型では短く発音される傾向がある」［八木 1964b: 59］
‘A tone or a similar feature is also marked in certain cases giving rise to a contrastine(*sic*) situation, (e.g. al ‘a hook point’ and ál ‘bullock pairs for ploughing’; sude ‘thread’ and sude(*sic*) ‘empty’ etc.) which however has not been dealt in this paper.’［Maniruzzaman 1984: 75–76］

ピッチは歴史的に有気音のあった直後の母音で高くなる傾向にある。ただし、実際のピッチの高さは語中の音節の位置によって異なる。

ストレスは一音節語ではピッチの高い音節にある。二音節以上の語では、アクセントをもたない語では第一音節にあり、アクセントをもつ語ではアクセントをになう音節にあるのが一般的である[注45]。

本節では弁別的ピッチを中心として具体的な記述を試みる。

3.1 アクセントの表記法

この節では音韻論的に高いアクセントを●、低いアクセントを○でしめす。アクセントは音節単位で付与されるとかんがえる。ストレスは音韻論的には無視してよいので表記しない。

以下、第 4 節、第 5 節で後述するアクセント規則が適用される範囲である語を単位として、特に出現頻度の高く、接辞がつかない形でも存在する一音節語、二音節語、三音節語について、ありうべきアクセントの型をみる。四音節以上の語については接辞がつかない語形がほとんど確認されず、網羅的にしめすことはできない。よって、本節では例示しない。しかし、そうした語でも、本稿で提案するアクセント規則にしたがってアクセントが付与されるものとおもわれる。

なおこの節からは特にことらわないかぎりは音素表記のみしめし、/.../はつけない。

3.2 一音節語

一音節語のアクセント型としては、（77）にしめす二種類がある。

(77) a. ●型: ピッチは高く、つよいストレスをもつ。みじかく発音される傾向にある。
b. ○型: ピッチは低く、ストレスはない。母音がややながく発音される傾向にある。

最小対語の例を（78）～（86）にしめす。

(78) a. át (●) 「手」
b. at (○)「八」

(79) a. dól (●)「太鼓」
b. dol (○)「美しい」

(80) a. dóṅ (●) 「与える 1sg.past.」
b. doṅ (○) 「与える 1sg.pres.」

(81) a. él (●) 「青」
b. el (○) 「あぜ道」

注45 チャクマ語ではアクセントが高いところから低いところになる変わり目でストレスがあるようにきこえる傾向がある。アクセントをもたない語の第一音節にストレスがあるようにきこえるのは、音韻論的には無視してよいけれども、第一音節のピッチがやや高くなっているせいであるとも解釈できる。

(82) a. gác (●) 「草」
b. gac (○) 「木」

(83) a. jál (●)「辛い」
b. jal (○)「網」

(84) a. jár (●) 「森」
b. jar (○) 「冷たい」

(85) a. mác (●) 「月」
b. mac (○) 「魚」

(86) a. púl (●)「花」
b. pul (○)「橋」

3.3 二音節語

二音節語のアクセント型としては、（87）にしめす四種類がある。

(87) a. ●●型: 全体としてピッチは高い。ただし、語末がややさがってきこえることもある。ストレスは第一音節にのみある。第二音節にはない。
b. ●○型: 第一音節にストレスがありピッチが高い。第二音節にストレスはなくピッチは低い。
c. ○●型: 第一音節にストレスはなくピッチはやや低くはじまり、第二音節でピッチが高くなり、若干ストレスがある。
d. ○○型: 第一音節のピッチがやや高く聞こえるために若干ストレスがあるようにきこえることもある。第二音節にストレスはなくピッチも低い。

各アクセント型に対して典型的な例を（88）にしめす。

(88) a. ɛ́rá (●●) 「肉」、dónúk (●●) 「弓」
b. cɔ́ɔr (●○) 「市」、cúri (●○) 「姑」
c. madá (○●) 「頭」、jiníc (○●) 「もの」
d. kɔbal (○○) 「額」、tɛńa (○○) 「お金」

最小対語には（89）～（95）のようなものがある。ただし、上記四種のすべての対をみたすものは未確認である。

(89) a. ágɛ́ (●●) となるものは確認されていない。
b. ágɛ (●○) 「大便をする 3sg.pres.」
c. agɛ́ (○●) 「存在する 3sg.pres.」

d. agɛ (○○) 「はじめ・前」

(90) a. káná (●●) 「食べる inf.」
b. kána (●○) となるものは確認されていない。
c. kaná (○●) 「肩」
d. kana (○○) 「盲」

(91) a. gúrí (●●)「時計」
b. gúri (●○) となるものは確認されていない。
c. gurí (○●) 「する 1pl.pres.」
d. guri (○○) 「小さい子」

(92) a. bádí (●●)「ワインの一種」
b. bádi (●○) となるものは確認されていない。
c. badí (○●)「狭さ・幅」
d. badi (○○)「熟していない」

(93) a. cárá (●●)「……なしに」
d. cara (○○)「種」

(94) c. tará (○●)「彼ら・彼女ら・それら」
d. tara (○○)「星」

(95) a. cúrí (●●) 「刀」
b. cúri (●○) 「姑」

3.4 三音節語

三音節語のアクセント型としては（96）にしめす八種類が論理的にはかんがえられる。ただし、接辞がつかない語形として現在確認されているのは（96a, e, g, h）のみである。他のものは接辞がついた語形としてしか確認されていない。

(96) a. ●●●型: 全体としてピッチは高い。語末がややさがってきこえることもある。ストレスは第一音節にのみ顕著にあらわれる。
b. ●●○型: 第一音節、第二音節ともにピッチは高い。第三音節で急に低くなる。第一音節にのみストレスがある。
c. ●○●型: 第一音節にストレスがありピッチは高い。第二音節でピッチが急に低くなり、ストレスはない。第三音節でピッチがやや高くなるものの、第一音節のピッチほどではない。若干ストレスがある。
d. ●○○型: 第一音節のみピッチが高くストレスがある。

e. ○●●型: 第一音節に若干ストレスがあるもののピッチは低くはじまり、第二音節でピッチがやや高くなるけれどもストレスはない。第三音節でピッチは第二音節よりもやや高く、ストレスがある。

f. ○●○型: この型となるものは一語としてはみつかっていない。○●型の語に○型の語が後続するときに、みかけ上あらわれる。

g. ○○●型: 第一音節に若干ストレスがある。そのためピッチがやや高くきこえることもある。第二音節にはストレスがなくピッチも低い。第三音節でピッチが高くなり、ストレスがある。

h. ○○○型: 第一音節のピッチがやや高い。そのために若干ストレスがあるようにきこえることがある。全体としてピッチは低い。語末がややさがってきこえることもある。

各アクセント型に対して典型的な例を（97）にしめす。

(97) a. ádúrí (●●●) 「斧」
b. céppáni (●●○) 「唾 pl.」
c. cɔ́ɔrán (●○●) 「街 sg.def.」
d. cɔ́ɔrɔt (●○○) 「街 sg.loc.」
e. madáún (○●●) 「頭 pl.」、pittímí (○●●) 「世界」
f. ladí##dɔn (○●##○) 「蹴り + 与える 3pl.pres.」
g. culaní (○○●) 「髪 pl.」、korolí (○○●)「砂」
h. aduri (○○○) 「はらわた」

（97）にしめしたアクセント型について最小対語をなすものは少数ながら、（98）～（99）のような例が確認される。

(98) a. aduri (○○○)「はらわた」
b. ádúrí (●●●)「金槌」

(99) a. úráná (●●●) 「踏む inf.」
b. uraná (○○●) 「飛ぶ inf.」
c. urana (○○○)「着る inf.」

4 通時アクセント論

この節では第 3 節で観察したアクセント型を通言語的に考察する。アクセントにかんしては音韻論的に高いものを ́ でしめす。

4.1　基本アクセント

4.1.1　アクセントの発生

4.1.1.1　一音節語のアクセント

第 3.2 節で示した最小対語を対応する SCB 形式と対照すると、（100）～（104）にしめすように、SCB において声門摩擦音または有気音が先行する母音にアクセントがきている傾向にあることがわかる。

(100)　a. át 「手」 (SCB *hat*)
　　b. at 「八」 (SCB *aṭ*)

(101)　a. dól 「太鼓」(SCB *ḍhol*)
　　b. dol 「美しい」(SCB —)

(102)　a. jál 「辛い」(SCB *jhal*)
　　b. jal 「網」(SCB *jal*)

(103)　a. jár 「森」 (SCB *jhaṛ*)
　　b. jar 「冷たい」 (SCB *jar*)

(104)　a. púl 「花」(SCB *phul*)
　　b. pul 「橋」(SCB *pul*)

(100)～(104) の諸例からは有気音とアクセントが一対一に対応している。したがって、通時的にみてチャクマ語には (105) のような規則が推定される[注46]。

(105)　*C^hV > CV́（アクセント発生規則）

4.1.1.2　二音節語のアクセント

二音節語についても、（106）にしめすように、有気音とアクセントに一定の関係がある。

(106)　a. bérá 「羊」 (SCB *bheṛa*)
　　b. cɔ́ɔr 「市」 (SCB *sɔhor*)
　　c. madá 「頭」 (SCB *maṭha*)
　　d. gora 「根」 (SCB *goṛa*)

問題は（106a）と（106b）である。もしも規則（105）がそのまま適用されるならば、（106a）は●○、（106b）は○●であらわれなくてはならない。この問題について次節以下で考察する。

[注46] （105）の規則は、（100）にあげたように、C がゼロのときにも適用される。

4.1.2　アクセントの同化

まず、●●であらわれるものについて（107）に類例をしめす。

(107)　a. cáól 「山羊」(SCB *chagol*, Skt. *chagalá-*, Pal. *chakala-*, Pkt. *chagala-*)
　　b. gúrí 「時計」(SCB *ghoṛi*, Skt. *ghaṭī-*, Pal. *ghatī-*, Pkt. *ghaḍī-*)
　　c. kélá 「遊び」(SCB *khæla*, Skt. **khēl-*, Pkt. *khelaï* 'plays')

（107）の例からは、●●であらわれるものは SCB では $C^{h}VCV(C)$ の構造をしていることがわかる。さらに Skt.、Pkt. などと比較しても、基本的には SCB と同様の対応をしめすことがわかる。

すなわち、SCB などで有気音が先行する母音のある音節はチャクマ語ではアクセントをもち、さらにそれに後続する音節もアクセントをもつ。これは一種の同化といえる。

以上より、通時的にみてチャクマ語には（108）のようなアクセント規則があることが推定される。

(108)　*V > V́ / *V́(C) __（アクセント同化規則）

4.1.3　アクセントの異化

次に●○であらわれるものについて考察する。もしもアクセントが有気音と関係しているとするならば、（106b）であげた例からは規則（105）により○●が予想される。しかし、○●が予想されるものは●○となってあらわれるのだとすると、（106c）と矛盾をきたす。

ここではまず、SCB の初頭子音/s/について考察する必要がある。チャクマ語では SCB で/s/に対応する音もまたアクセントを生じさせる。最小対語には（109）にしめすものが確認されている。

(109)　a. cúl 「（ある種の）痛み」(SCB *sul*, Skt. *śū́la-*, Pkt. *sūla-*)
　　b. cul 「髪」(SCB *cul*, Skt. *cū́ḍa-*, Pal. *cūḷa-*, Pkt. *cūḍā-, cūlā-*)

（110）にしめすように、通時的には*ṣや*s に由来するものもチャクマ語では音素/c/としてアクセントをともなっている。

(110)　a. cóló 「十六」 (SCB *solo*, Skt. *ṣṓḍaśa*, Pal. Pkt. *sōḷasa*)
　　b. cáp 「蛇」 (SCB *sap*, Skt. *sarpá-*, Pal. Pkt. *sappa-*)

以上より、通時的にみてチャクマ語には（111）のような規則があることが推定される。

(111)　*V > V́ / *S __ (ただし S は ś, ṣ, s の代表音とする)

規則（111）を（106b）であげた/cɔ́ɔr/に適用したとすると、SCB 形式からは規則（108）により●●となってあらわれることが予想される。しかし、実際には●○であらわれている。ここから、通時的にみてチャクマ語には（112）のようなアクセント規則があることが推定される。これは一種の異化である。

(112) *V́ > V / *V́(C) __（アクセント異化規則）

（112）の規則が適用されているものには（113）のようなものがある。

(113) a. cíkka 「教育」(SCB *sikkha*, Skt. *śikṣā-*, Pal. Pkt. *sikkhā-*)
b. círi 「階段」(SCB *siṛi*, Skt. **śrīḍhi-*, Pkt. *siḍḍhi-*)
c. cóor 「義父」 (SCB *sosur*, Skt. *śváśura-*, Pal. Pkt. *sasura-*)

4.1.4 まとめ

以上をまとめると、チャクマ語のアクセントは通時的観点から（114）のように説明できる。

(114) a. アクセントは有気音類[注47]に先行される母音に発生する。
*C^hV > CV́ / すべての環境
*SV > SV́ / すべての環境（アクセント発生規則）[注48]
b. アクセントのある音節に後続する音節に有気音類がない場合は、その音節もアクセントをもつ。（アクセント同化規則）
*V > V́ / *V́__
c. アクセントのある音節に後続する音節に有気音類がある場合は、その音節はアクセントをもたない。（アクセント異化規則）
*V́ > V / *V́__

ここで規則 (114b) と (114c) は「アクセント」という素性を [accent] として考えれば、（115）のようにまとめることができる。

(115) *V[α accent] > V[$-\alpha$ accent] / *V[+ accent] __（アクセント規則）

ただし、（116）にしめすように、規則の適用順序は（114a）→（115）の順である。

(116) a. bɛ́rá (SCB *bheṛa*) (*●○（アクセント発生）> ●●（アクセント同化））
b. cɔ́ɔr (SCB *sɔhor*) (*●●（アクセント発生）> ●○（アクセント異化））

注47 声門摩擦音、有気音または歯擦音（sibilant）。

注48 Vaux［1998］にしめされているように、有気閉鎖音（*C^h[−cont]）と無声摩擦音（*h, *S）は弁別素性としては [+spread glottis] が共通している。したがってこの規則は

(i) *C[+spread glottis] V > C[−spread glottis] V́

とまとめて解釈することもできる。

c. madá (SCB *maṭha*) (*○●（アクセント発生）> ○●（アクセント規則は適用されず）)
d. gora (SCB *goṛa*) (*○○（アクセントは発生せず）> ○○（アクセント規則は適用されず）)

参考までに、（115）→（114a）の順に適用したものを（117）にしめす。

(117) a. **béra (SCB *bheṛa*) (*○○（アクセント同化されず）> **●○（アクセント発生）)
b. **cóór (SCB *sɔhor*) (*○○（アクセント同化されず）> **●●（アクセント発生）)
c. madá (SCB *maṭha*) (*○○（アクセント同化されず）> ○●（アクセント発生）)
d. gora (SCB *goṛa*) (*○○（アクセント同化されず）> ○○（アクセント規則は適用されず）)

規則の適用順をかえると（117a, b）が実際のアクセントとは異なる形式であらわれる。

さらに、多音節語を観察すると、規則（115）は前の音節から順番に適用されていくことがわかる。典型例を（118）にしめす。

(118) a. ádúrí「金槌」(SCB *haruṭi*) (*●○○（アクセント発生）> *●●○（1 回目のアクセント同化）> ●●●（2 回目のアクセント同化）)
b. cúríyáni「刀 pl.」(SCB *churi*) (*●○○●[注49]（アクセント発生）> *●●○●（1 回目のアクセント同化）> *●●●●（2 回目のアクセント同化）)> ●●●○（アクセント異化）

以上より規則（115）には（119）のような制約が必要であることがわかる。

(119) アクセント規則は前の音節から順番に適用される。ただし一度アクセント規則が適用されてアクセントが変化した音節にたいして、再度アクセント規則が適用されることはない。（アクセント制約）

4.2 例外的アクセント

この節では通言語的には有気音がみられないにもかかわらずアクセントが生じる主要な語例をみる。

4.2.1 語末の歯擦音

（120）にしめすように、SCB で語末に/s/をもつものは、語源にかかわりなくアクセントをもつ傾向にある。

(120) a. manúc「人間」(SCB *manus*; Skt. *mā́nuṣa-*)
b. jiníc「もの」(SCB *jinis*; Ar. *jins*, Pers. *jens*)

[注49] なぜ複数形接辞のアクセント型が○●となるかについては第 4.3.2.2 節で議論する。

c. balóc[注50] 「枕」(SCB *balis*; Pers. *bāliš*)
d. políc 「警察」(SCB *pulis*; Eng. *police*)

しかし、（121）の例にみるように、SCB 形式の語末に/s/があっても、一音節語ではアクセントをもたないようである。

(121) a. bac 「におい」 (SCB *bas*, Skt. Pal. Pkt. *vāsa-*)
b. dɔc 「十」(SCB *dɔs*, Skt. *dáśa*, Pal. Pkt. *dasa*)
c. kɛc 「毛」 (SCB *kes*, Skt. *kéśa-*, Pal. Pkt. *kēsa-*)

一音節で SCB の語末に/s/がありチャクマ語でもアクセントをもつような場合は、音節構造が C^hVS または SVS である。すなわち SCB における語末の/s/ではなく、語頭の C^h または S の影響でアクセントが生じているとかんがえられる。（122）に例をしめす。

(122) a. gác 「草」 (SCB *ghas*, Skt. *ghāsá-*, Pal. Pkt. *ghāsa-*)
b. cíc 「口笛」 (SCB *sis*(onom.))

以上の説明からは説明できない例として（123a）がある。これには最小対語をなす（123b）がある。

(123) a. mác 「月」(SCB *mas*, Skt.*mā́sa-*, Pal. Pkt. *māsa-*)
b. mac 「魚」 (SCB *mach*, Skt. *mátsya-*, Pal. Pkt. *maccha-*)

4.2.2 語末の i

（124）にしめすように、語末の/i/にはアクセントをもつものが散見される。（124a）は/i/ [i] が通時的には*īである例、（124b）は/i/の直前の子音が通時的には反舌音である例、（124c）は外来語の例である。

(124) a. paní 「水」(SCB *pani*, Skt. *pānī́ya-*, Pal. *pānīya-*, Pkt. *pāṇĭa-*)
b. garí 「車」(SCB *gaṛi*, Skt. **gāḍḍa-*, Pkt. *gaḍḍa-*)
c. ciní 「砂糖」(SCB *cini*)

しかし、（125）にみるように、同様の条件をもつけれどもアクセントをもたない語がある。（125a）は通時的には*īがあってもアクセントがない例、（125b）は通時的に反舌音があってもアクセントがない例である。なお、通常のアクセント規則は適用される。（125c）は先行する音節にアクセントがあれば同化によりアクセントが生じる例、（125d）は先行する子音が通時的に有気音であることによりアクセントが生じる例である。

(125) a. madi 「土」(SCB *maṭi*, Skt. *mŕ̥ttikā-*, Pal. *mattikā-*, Pkt. *maṭṭī-*)

注50 この語は SCB や Pers. と比較すると母音が異なる。なぜ異なっているかは不明である。

b. kuri 「二十」 (SCB *kuṛi*)

c. gúrí 「時計」 (SCB *ghoṛi*, Skt. *ghaṭī*-, Pal. Pkt. *ghatī*-)

d. nabí 「へそ」(SCB *nabhi, nai*, Skt. *nā́bhi*-, Pal. *nābhĭ*-, Pkt. *ṇā(b)hi*-)

ここにみたようなアクセントの分布を通時的に説明することは、現在の筆者には不可能である[注51]。

4.3 接辞のアクセント

この節では前節までに提案した「アクセント発生規則」、「アクセント同化規則」、「アクセント異化規則」が基本的には接辞をこえて適用されることをみる。しかし通時的にかんがえると説明できない場合があることもしめす。

4.3.1 名詞格接辞

（126b, c）にみるように、単数・主格ではおなじアクセント型をしめしても、単数・位格で異なるアクセント型をしめすものがある。これは、通時的には語幹末閉鎖音が有気音であるかどうかがアクセント型の相違にあらわれているものである。

(126) a. át 「腕」 (SCB *hat*) → ádót 「腕 sg.loc.」[注52]

b. kan 「耳」 (SCB *kan*) → kanɔt 「耳 sg.loc.」

c. pit 「背中」(SCB *piṭh*) → pidót 「背中 sg.loc.」

注51 ただし、共時的には（124a, b, c）の例は SCB の音形の影響をうけているのではないかと筆者はかんがえている。Ferguson & Chowdhury［1960: 25］などにあるように、SCB においてストレスは弁別的ではない。しかし筆者の観察によると、たとえ弁別的ではなくとも（124a, b, c）にあげた語については SCB でも第二音節のピッチがやや高くきこえる。
このことは「音声 [i] の F0 値が他の母音よりも高くなる傾向にある」（清水克正 2000: 京都大学言語学懇話会後の懇親会での直談）ということとも関係があるのかもしれない。

注52 /át/と接辞なしではおなじアクセント型でありながら、接辞がつくと型が異なるとかんがえられるものには/cúk/「幸せ」がある。ただし、この語については単数・位格の形式をしっかりと確認していない。次にしめすアクセントのあらわれは、筆者の推測による。
(i) cúk 「幸せ」 (SCB *sukh*) → *cúgot 「幸せ sg.loc」
このようなあらわれをみせると推測されるものは、現在のところ/cúk/のみである。

4.3.2　名詞複数形接辞

複数形を形成する接辞には{Kún}[注53]と{Kaní}[注54]がある。いずれも単独であらわれることはなく、接辞として名詞に付加する[注55]。ただし、両者はこれまでに推定したアクセント規則からはかならずしも説明できないアクセントのあらわれをみせる。

4.3.2.1　{Kún}のアクセント

{Kún}がつく一音節の名詞には（127）のようなものがある。

(127) a. nak 「鼻」(SCB *nak*) → nakkún 「鼻 pl.」
b. cok 「目」(SCB *cokh*) → cokkún 「目 pl.」
c. tút 「くちばし」(SCB *ṭhõṭ*) → túttun 「くちばし pl.」

（127a）のように有気音がない語に後続する場合、アクセントは規則通りにあらわれる。（127b）のように先行する名詞の語末子音が通言語的には有気音であっても、先行する音節自体にアクセントがなければ、{Kún}がつく場合のアクセントに影響はない。（127c）のようにアクセントをもつ語に後続する場合は、アクセント異化規則によって{Kún}のアクセントはあらわれない。

しかし、（128）にしめすように、二音節の名詞になると規則では説明できないものがある。

(128) a. kugur 「犬」 (SCB *kukur*) → kugurún 「犬 pl.」
b. madá 「頭」 (SCB *matha*) → madáún 「頭 pl.」
c. cúór 「豚」 (SCB *sukor*) → cúórun 「豚 pl.」

（128a）と（128c）は規則通りである。しかし、（128b）は規則にあわない。もしも規則通りならば、アクセント異化規則により**madáun とあらわれなければならない。どうして○●●型であらわれるのかはよくわからない[注56][注57]。

注53 {Kún}は無声子音に後続する場合、K が先行する子音に同化して全体が重子音となる。有声音に後続する場合は K はあらわれない。チャクマ語内部の証拠からはここで K をたてなければならない根拠はない。しかし、後述する{Kaní}では K をたてうること、バングラ語ションディプ方言では/-gùn/がある（Humayun 1985: 100）ことなどから、K をたてることにする。

注54 {Kaní}については母音に後続する場合、たとえば ['ɛ́ráɣáni]「肉 pl.」のように [ɣ] があらわれることがある。したがって、K をたてることに問題はないとおもわれる。ただし、この形式について基底のアクセント型を○●型とする通時的根拠はない。くわしくは第 4.3.2.2 節で議論する。

注55 {Kún}と{Kaní}の分布は合理的には説明できない。有生名詞と無生名詞で複数接辞が異なるというわけでもなさそうである。

注56 開音節でおわる語に接辞{Kún}がつく場合、語幹末母音と{u}が融合して二重母音となっていると解釈すれば、○●●型は音韻論的には○●型である。しかし madá は接辞{Pó}がつけば madábó となる。いずれにせよ○●型の語に●型の接辞がつけば全体で○●●型となる。

注57 ただし第 3 節でみたように、現段階では○●○型のアクセントが一語としては確認されていない。○●○型のアクセントをさけることがアクセント異化規則よりも優先された結果、○●●型があらわれているのかもしれない。

4.3.2.2 {Kaní}のアクセント

複数接辞{Kaní}について、このアクセント型を○●型とする根拠は、共時的にみれば（129）にしめすようなアクセントの分布がみられることによる。

(129) a. cul 「髪」 (SCB *cul*) → culaní 「髪 pl.」
b. pit 「背中」 (SCB *piṭh*) → pittaní 「背中 pl.」
c. át 「手」 (SCB *hat*) → áttáni 「手 pl.」
d. kɔbal 「額」 (SCB *kɔpal*) → kɔbalaní 「額 pl.」
e. sɔ́ɔr 「街」 (SCB *sɔhor*) → sɔ́ɔraní 「街 pl.」
f. lɛgá 「文字」 (SCB *lekha*) → lɛgááni 「文字 pl.」
g. cúrí 「刀」 (SCB *churi*) → cúríyáni 「刀 pl.」

（129c, e, f）がわかりにくいので、（129c）を例に説明する。{Kaní}のアクセントが○●型であるとするならば、（129c）については（130）のようなアクセント生成過程が推定される。変化したアクセントには＿をつける。

(130) {át}(●) + {Kaní}(○●) → *átKaní (●○●) → *áttaní (●○●: 重子音化)[注58] → *áttání (●●●: アクセント同化) → áttáni (●●○: アクセント異化)

複数接辞{Kaní}だけをかんがえるならば、このアクセントを○●型とすることに問題はないようにおもわれる。だが、通時的にかんがえるならば、{Kaní}に意味と形式が一致する語形をみいだすことができないという問題がある。

意味と形式が比較的よくにているものには、SCB *khan, khani* ‘piece’ がある。この語と直接関係があるとおもわれるチャクマ語は単数定辞の{Kán}である。この接辞のつく名詞は複数接辞{Kaní}がつく名詞と完全に一致する。だから、{Kán}と{Kaní}には何らかの関係があるのではないかとおもわれる[注59]。

接辞{Kán}のアクセント型は共時的にみれば（131）の例からわかるように●型である。

(131) a. cul 「髪」 (SCB *cul*) → culán 「髪 sg.def.」
b. pit 「背中」 (SCB *piṭh*) → pittán 「背中 sg.def.」
c. át 「手」 (SCB *hat*) → áttan 「手 sg.def.」
d. kɔbal 「額」 (SCB *kɔpal*) → kɔbalán 「額 sg.def.」
e. sɔ́ɔr 「街」 (SCB *sɔhor*) → sɔ́ɔrán 「街 sg.def.」
f. lɛgá 「文字」 (SCB *lekha*) → lɛgáán 「文字 sg.def.」

注58 重子音化はどの段階でおきても結果に影響はおよぼさない。ここでは、はやい段階でおきるようにしめした。

注59 複数接辞{Kún}をとる名詞につく単数定辞は{Pó}である。このことについては、本稿では議論しない。

g. cúrí 「刀」 (SCB *churi*) → cúríyan 「刀 sg.def.」

（131f）が○●●型となるのはアクセント異化規則に反する。だが、すでに（128b）でみたように、○●型に接辞の●型が後続する場合には○●○型とはならずに○●●型となるのがチャクマ語の傾向である。

{Kán}は、通時的には Skt. *khaṇḍa-* ‘piece’ に由来する。バングラ語諸方言とその周辺言語に目をむけると、SCB では *khan, khani* として使用される。バングラ語チッタゴン方言では、Učida［1970］では *xàn*、Hai［1965: 24］では *khan* という語形がみられる。バングラ語カチャール方言では *kan, kani*（Tunga 1995: 211）という語形が、ビシュヌプリヤ・モニプリ語（Bishnupriya Manipuri: ISO 639-3 bpy）には *han, hani*（Tunga 1995: 213）という語形がみられる。アクセントと有気音の関係からみて、{Kán}はこれらの語と同族語であるとおもわれる。

チャクマ語の定辞としては{Kán}という語形しかない一方、上記の諸言語では *khani, kani, hani* といった語形もおなじように使用されることに注目したい。語末の母音/i/は、通時的には女性形の残滓であるとおもわれるけれども、チャクマ語の辞書をみると CED に *āni* ‘piece’ という語がみられる。SCB の *khani* がチャクマ語の{Kaní}なのであろうか。

ここで、この語を複数接辞{Kaní}とむすびつけるには次の二点で問題がある。

第一に、もしも SCB *khani* と関係があるならば、チャクマ語では*●○ > ●●型のアクセントが予想されること。かりに CED の表記がただしいとするならば、CED の表記には有気音がないのでアクセントとしては○○型が予想されること[注60]。いずれにせよ SCB *khani* や CED *āni* から○●型のアクセントをかんがえることは困難である[注61]。第二に、これらの語形の記述には、SCB にもその他の方言にも「定性」という記述はみられても「複数性」という記述がみられないこと。

意味と形式からかんがえると Skt. や Pkt. の a 語幹中性名詞の複数接辞{āni}がチャクマ語の{Kaní}と関係しているとおもわれるかもしれない。しかし、この語形とチャクマ語の{Kaní}を直接むすびつけるとすると、なぜ重子音化しているのかという説明がむずかしく、アクセントが○○型とならずに○●型となる理由もわからない。

ところで Chatterji［1970[2]: 725］は Skt. の複数属格接辞*-ānām* が属格としての機能はうしないつつも*-ṇa* や*-nă* という形式でバングラ語の方言にのこっており、複数形を形成する際に二次的に付加されるようになっていると記述している。その結果、バングラ語東部方言では *āin* < *āni* という複数接辞が発生しているとのことである。さらに、語末の *i* という形式は具格の古形である*-hi* からきているのだという。この説がただしいのだとすると、祖形として推定される**ānhi* という語形から○●型というアクセントを無理なくみちびくことができる。これはチャクマ語の{Kaní}とかなり一致することになる。ただしこのようにかんがえても、重子音化をおこす要素である K をどのように説明するかはなお問題としてのこる。

注60 筆者はこの語を直接ききだしたわけではない。したがって、アクセントは推測するしかない。

注61 ただし、第 4.2.2 節で述べたように、チャクマ語では母音/i/で終る二音節語は○●型となる傾向があるので、CED では *āni* と表記されていてもアクセントは○●型であるという可能性がある。

結局のところ現時点では、複数接辞{Kaní}に対して通時的観点からたしかな説明をあたえることは困難であるといわざるをえない。

4.3.3 動詞人称接辞

動詞を人称変化させた場合にあらわれるアクセントも、基本的には有気音の有無が関係している。（132）に一人称単数現在形接辞{Oṅ}がつく場合のアクセントのあらわれをしめす。

(132) a. dagɔṅ 「呼ぶ 1sg.pres.」 (SCB *ḍaka*)
b. ájɔ́ṅ 「笑う 1sg.pres.」 (SCB *hasa*)
c. lɛgɔ́ṅ 「書く 1sg.pres.」 (SCB *lekha*)

（132）はいずれも規則通りのアクセントのあらわれをみせている。

4.3.4 動詞不定形接辞

動詞不定形の接辞{na}がアクセントをもつかどうかも、基本的には有気音の有無がアクセントの有無と関係している。

二音節からなる不定形の場合、通言語的に有気音をもたない（133）の例ではアクセントは○○型であらわれる。第一音節に有気音がある（134）の例では●●型であらわれる。第一音節の末尾に有気音がある（135）の例では○●型であらわれる。

(133) a. dɛna 「与える inf.」 (SCB *deo̯a*)
b. jana 「行く inf.」 (SCB *jao̯a*)

(134) a. káná 「食べる inf.」 (SCB *khana*)
b. táná 「住む inf.」 (SCB *thana*)
c. ɔ́ná 「なる inf.」(SCB *hɔo̯a*)

(135) a. caná 「見る・欲する inf.」 (SCB *cao̯a*, Skt. **cāh-*, Pkt. *cāhaï*, P. *cāhṇā*, H. *cāhnā*)
b. kɔná 「言う inf.」 (SCB *kɔo̯a*, Skt. *kathāyati*, Pal. *kathēti*, Pkt. *kahēi*, P. *kahiṇā*, H. *kahnā*)
c. lɔná 「とる inf.」 (SCB *lɔo̯a*, Skt. *lábhatē*, H. *lahnā*)

通言語的には有気音がみられないにもかかわらずアクセントが生じる（136）のような例もあるけれども、それは少数派である。

(136) paná 「える inf.」 (SCB *pao̯a*, Skt. *prāpayati*, Pal. *pāpēti*, Pkt. *pāvaï*, P. *pauṇā*, H. *pānā*)

他方、三音節語となると、通時的に推測される規則から予想されるアクセントとは異なるあらわれがみられる。不規則なアクセントがあらわれることをしめす前段階として、不定形が三音節となる語の現在形の活用をみる。（137）に例をしめす。

(137) a. úróṅ (●●)「踏む 1sg.pres.」
b. uróṅ (○●)「飛ぶ 1sg.pres.」
c. uroṅ (○○)「着る 1sg.pres.」

（137a）は表層で●●型であるからアクセント同化規則により基底では●○型であることが予想される。同様に（137b）は○●型、（137c）は○○型がそれぞれ基底に予想される。

（137）の諸例は、不定形では（138）にしめすようなアクセントの分布をみせる。

(138) a. úráná (●●●)「踏む inf.」
b. uraná (○○●)「飛ぶ inf.」
c. urana (○○○)「着る inf.」

（138）から基底型のアクセントを推測すると、（138a）は●○○型[注62]、（138b）は○○●型、（138c）は○○○型が予想される。

問題となるのは（138b）の○○●型である。（137b）では○●型であるから、接辞{na}がつけばアクセント同化規則により○●●型となることが予想されるにもかかわらず、実際には○○●型があらわれている。なぜこうなっているのかは不明である[注63]。

4.3.5 不規則動詞

動詞の中には通時的に有気音があるかどうかだけでは説明ができない特殊なアクセントのあらわれをみせるものがある。そうした動詞として/dɛna/「与える」が確認されている。（139）に問題となる活用形をあげる。

(139) a. doṅ「与える 1sg.pres.」
b. dóṅ「与える 1sg.past.」

（139a）にはアクセントがないところから判断して、（139b）にアクセントがあるのは語頭の/d/ではなく、人称語尾の/óṅ/の部分に問題があるとわかる。

/dɛna/とほぼ同様の活用をしめす/jana/「行く」の活用について問題の箇所をしめせば（140）のようになる。

(140) a. jem「行く 1sg.pres.」
b. jiyóṅ「行く 1sg.past.」

注62 次のような過程で表層の●●●型が生じていると推測される。アクセントの変化が生じているところは＿をつけてしめす。
{●○}+{○} → *●○○ → *●<u>●</u>○ (アクセント同化規則) → ●●<u>●</u>(アクセント同化規則)

注63 基底の○●型に接辞の○型がついてアクセント同化規則により○●●型となることがさけられる理由としては、第 4.3.2.2 節でみたように、表層で○●●型があらわれる典型例は基底の○●型に●型接辞がつく場合であるということがかんがえられる。しかし、そのようにかんがえたとしても、○●＋○型が○●●型をさけた結果がなぜ○○●型となるのかは不明である。

（140b）からは 1sg.past. の語尾は{óṅ}であることが推測される。したがって（139b）の形式は語幹形成母音がなんらかの理由で脱落し、活用語尾だけがのこったものとかんがえることができる。そのようにかんがえれば、一見不規則なアクセントにも説明をあたえることは可能である。

4.4 借用語のアクセント

この節ではバングラ語以外の言語に由来する語がチャクマ語のアクセントとどうかかわっているのかを考察する。

4.4.1 ビルマ語

ビルマ語と関係しているかもしれないとおもわれる語は、現在のところ（141）にしめす一語しかない[注64]。

(141) gɔm 「よい」(SCB —, LBD *gamɑ*[注65]WBur. *koŋ:*, SBur. *kaun:*, LSI(Arakanese) *gauṅ*, Marma（Konow 1903）*ma-koṅ*[注66] ‘not-good’)

Bernot［1958］によるとビルマ語の高平調はマルマ語（Marma: ISO 639-3 rmz）でも高平調である。ここからマルマ語とちかい関係にあるビルマ語アラカン方言（Arakanese: ISO 639-3 rki）や Konow［1903］によるマルマ語も、この語にかんしては高平調であることが予想される。しかし、チャクマ語では〇型であらわれている。バングラ語チッタゴン方言では有気音がないこともあわせかんがえるならば、チャクマ語の高アクセントは有気音と関係があるのであって、ビルマ語などの高平調とは関係がないと推測される。

4.4.2 ペルシャ語

ペルシャ語の h は、（142a）のように語中ではアクセントに反映される。しかし、（142b）のように語末ではアクセントに反映されない。これはバングラ語などを経由しているためとおもわれる。

(142) a. cɔ́ɔr 「街」(SCB *sɔhor*; Hм. *śahr*; Pers. *šahr*)
b. jaga 「場所」(SCB *jaę̰ga*; Hм. *jagah*; Pers. *jāygāh*)

（143）に語源的には h をもたないけれども、チャクマ語ではアクセントをもっている例をあげる[注67]。

注64 ただし、LSI によると文語シャム語（Written Siamese）に *gon ti* ‘good man’ という語形がみえる。チャクマ語の/gɔm/は、文語シャム語の *gon* と関係しているのかもしれない。

注65 チッタゴン方言。

注66 Konow［1903: 4］の記述によると、マルマ語の複合語においては、母音または鼻音に後続する子音は有声化する。ただし *ma* ‘not’ につづくときだけは有声化しない。

注67 ただしこの例は、SCB でもおなじ位置にストレスがおかれる。

(143) bɔrɔ́p 「氷」 (SCB *bɔroph*; Pers. *barf*)

4.4.3 アラビア語

アラビア語の声門摩擦音は、それがバングラ語で/kh/として借用されている場合には、チャクマ語でもアクセントをともなってあらわれている。（144）に例をしめす。

(144) kɔ́bɔ́r 「ニュース・知らせ」(SCB *khɔbor*; Ar. *ḫabar*, Pers. *xabar*)

しかし、アラビア語には h があっても、バングラ語などでは h が語形に反映されていないならば、チャクマ語でアクセントをもつことはない。（145）に例をしめす。

(145) boy 「本」(SCB *boi*, BDC *bói*; Ar. *waḫy* ‘Absicht’)

（146）のように語源的には h をもたないけれども、チャクマ語ではアクセントをもつものもある[注68]。

(146) maná 「禁止」(SCB *mana*, BDC *manà*, Hм. *manā*; Ar. *manʿ*)

アラビア語の語末の声門閉鎖音がチャクマ語のアクセントに影響をあたえている可能性もある。

4.4.4 ポルトガル語

ポルトガル語起源の語のうち（147）にしめす語がもつアクセントは特殊である。

(147) cabí 「鍵」(SCB *cabi*; Hм. *cābī, cābhī*; Port. *chave*)

バングラ語では他言語の綴り上の v を/bh/で借用するのが普通である。たとえば「TV(テレビ)」は SCB *ṭi bhi* である。だが、（147）ついては/b/で借用している。したがって、バングラ語形式からかんがえると、チャクマ語は [i] にアクセントをもたない。だが、実際にはチャクマ語形式がアクセントをもっていることから推測して、/cabí/の/b/は歴史的には*bh であった可能性がある[注69]。この点でチャクマ語はバングラ語よりもヒンディー語と類似しているといえる[注70]。

注68 （146）には最小対語として次のものがある。
(i) mana 「許可」(SCB *mana*, BDC *manɔn* ‘zustimmen’)

注69 ただし語末が [i] であるためにアクセントが生じている可能性もある。

注70 動詞の不定詞が{na}であることもあわせ、チャクマ語はバングラ語よりもヒンディー語により類似している面が散見される。

4.4.5　英語

英語の綴り字上では h があるにもかかわらず、（148a）のようにチャクマ語のアクセントには反映していないものがある。逆に綴り字上では h がないにもかかわらず、（148b）のようにアクセントが生じているものもある。

(148)　a. kotel 「ホテル」 (Eng. *hotel*)
　　b. littí 「表」 (Eng. *list*)

（148a）については、比較的最近チャクマ語に借用された語であるために、アクセント規則の影響をうけなかったのではないかとおもわれる。（148b）については、*-st- ＞ *-tt^{h}-という変化からアクセントが生じるにいたった可能性がある一方、チャクマ語で○●型アクセントをもつ語は語末母音が [i] であることがおおいことと関係している可能性もある。

その他、（149）にしめすように、英語からの外来語には原因不明のアクセントをもつものが散見される。

(149)　a. pɛbár 「新聞」 (Eng. *paper*)
　　b. lɛbɛ́l 「札」 (Eng. *label*)
　　c. rediyó 「ラジオ」 (Eng. *radio*)

5　共時アクセント論

チャクマ語のアクセント規則は基本的には前節でしめした通時アクセント規則にまとめられる。他方、共時的にかんがえた場合には、通時的な有気音の有無にかかわらず、基底のアクセント型がさだまれば派生形のアクセントはほぼ予測可能である。

この節では前節で考察した通時アクセント規則を参考にしながら、共時的にはどのようなアクセント規則が可能であるのかを考察する。

5.1　基本アクセント規則

5.1.1　名詞にみるアクセント

（150）の例にみるように、名詞の語形変化にともなうアクセントの分布は、通時的には有気音の有無と関係していることはすでにみた。

(150)　a. cul (○) 「髪」 → culot (○○) 「髪 sg.loc.」
　　b. pit (○) 「背中」 → pidót (○●) 「背中 sg.loc.」
　　c. át (●) 「腕」 → ádót (●●) 「腕 sg.loc.」

（150）を共時的にみればどうなるだろうか。ここで高いピッチをあらわす●、低いピッチをあらわす○にくわえて、後続する音節のピッチを高くすることをしめす記号として‗「を導入すると、（150）の例にみるアクセント型は（151）のようにあらわすことができる。

(151) a. cul (○) → culot (○○)
b. pit (○˩) → pidót (○˩○ → ○●)
c. át (●) → ádót (●●)

（151）の例から（152）のようなアクセント規則を共時的にかんがえることができる。

(152) a. ○ → ● / ○˩＿ (アクセント発生規則)
b. ○ → ● / ● ＿ (アクセント同化規則)

規則（152a）は通時的には規則（105）の「アクセント発生規則」に、規則（152b）は規則（108）の「アクセント同化規則」に、それぞれ対応する。

次に単数定辞{Kan}[注71]がつく場合のアクセントを（153）で観察してみる。

(153) a. cul (○) → culán (○●)
b. pit (○˩) → pittán (○●)
c. át (●) → áttan (●○)

{Kán}のアクセントを共時的に考察すると可能性としては○型と●型がかんがえられそうである。そこで（154）～（155）で両者の可能性を検討する。

(154) {Kan}のアクセントを○型とかんがえた場合。
（153a）では○●型があらわれていることから、基底の○型は○型に先行される場合●型となるという規則が必要である。
○ → ● / ○ ＿

(155) {Kan}のアクセントを●型とかんがえた場合。
（153c）では●○型があらわれていることから、基底の●型は●型に先行される場合○型となるという規則が必要である[注72]。
● → ○ / ● ＿

（154）と（155）は論理的にはどちらも可能な変化である。だが、もしも（154）のように{Kan}のアクセントを○型とする立場をとるならば、（153c）は● + ○に「アクセント同化規則」がかかって●●型とならなければならない。したがって、これまでの前提と矛盾する。よって、（155）のように{Kan}のアクセントを●型とするほうが妥当であるとかんがえる。

そこで本稿では共時的に (156) のようなアクセント規則を考える。

(156) ● → ○ / ● ＿ （アクセント異化規則）

注71 この接辞のアクセントは実際には●型である。ただし、行論の都合上アクセント記号はつけない。

注72 厳密には「基底の●型は○˩型に先行されても●型のままである」という規則をかんがえる必要がある。ただし記号＿˩は「後続する音節のピッチを高くする」という意味であったから、はじめからピッチが高い場合には影響しないとかんがえることもできよう。

すでに通時アクセント論でみたように、チャクマ語の「アクセント同化規則」と「アクセント異化規則」は一つにまとめることができた。おなじことが共時的にもいえる。アクセントに関する素性を [accent] とし、●を☆ [+ accent]、○を☆ [− accent] とかんがえれば、規則（152b）と（156）は、（157）のようにまとめることができる。

(157) ☆ [α accent] → ☆ [$-\alpha$ accent] / ☆ [+ accent] __ （アクセント規則）

規則（157）は通時アクセント論で提案した規則（115）とほぼおなじものである。したがって規則（115）と同様に、前の音節から順番に規則が適用されるという制約が必要であることが予想される。

(158) アクセント規則は前の音節から順番に適用される。ただし一度アクセント規則が適用されてアクセントが変化した音節にたいして、再びアクセント規則が適用されることはない。(アクセント制約: （119）とおなじ)

以上が共時的にみた場合に推定されるアクセント規則の概略である。これはすでにみた通時的アクセント規則と基本的にはほとんどおなじである。

ただし、共時的にかんがえる場合には、○˹型アクセントに対しても制約をかける必要がある。○˹型に○●型接辞がつく場合、同化規則と異化規則によりアクセントは○●○型となることが予想される。だが、実際には○○●型である。

（159）に具体例をしめす。規則によりピッチが変化した音節には__をつける。

(159) {pit}(○˹) + {Kani}(○●) → *pitKani(○˹#○●) → *pittani(○<u>●</u>●) (アクセント発生規則) → **pittani(○●<u>○</u>) (アクセント異化規則): 実際の形 pittani(○○●)

（159）からは○˹型のアクセントに対しては前後のアクセント型だけではなく、音節構造を考慮しなければならないことがわかる。すなわち○˹型はかならず子音おわりであるから、子音はじまりの○型が後続する場合、重子音化がおこるためにアクセント発生がさまたげられるとかんがえられる。つまり（160）のような規則がかんがえられる。

(160) ○˹ → ○ / __C

5.1.2 動詞にみるアクセント

前節で推定したアクセントは、基本的には動詞にも適用されるものである。二音節からなる動詞不定形はアクセント型にしたがって（161）にしめす三種類に分類できる。

(161) a. ○○型: jana 「行く inf.」、dɛna 「与える inf.」
b. ○●型: kɔná 「言う inf.」、caná 「欲する・見る inf.」、paná 「える inf.」、lɔná 「とる inf.」
c. ●●型: káná 「食べる inf.」、táná 「とどまる inf.」、ɔ́ná 「なる inf.」

（161）にみるアクセントの分布は（150）でみた名詞の単数・位格形のアクセントの分布とまったくおなじである。したがって、不定形接辞{na}に対しては○型アクセントが推定され、各動詞語幹には順に○型、○˩型、●型が推定される。

（162）に一音節動詞語幹から不定形のアクセント型が派生される様子をしめす。

(162) a. ○ + ○ → ○○
b. ○˩ + ○ → *○˩○ → ○●
c. ● + ○ → *●○ → ●●

ところでこの三種の動詞を活用させてみると、（163）のようなアクセントの分布をみせる。

(163) a. 語幹の○型: jaṅ 「行く 1sg.pres.」→ jaṅɔ́r 「行く 1sg.pres-cont.」
b. 語幹の○˩型: lɔṅ 「とる 1sg.pres.」→ lɔṅɔ́r 「とる 1sg.pres-cont.」
c. 語幹の●型: ɔ́ṅ 「なる 1sg.pres.」→ ɔ́ṅɔr 「なる 1sg.pres-cont.」

現在進行形接辞/ɔ́r/は（163a）で ´ であらわれていることから、基底のアクセントは●型であることが推定される。現在進行形型のアクセントをアクセントの派生にのみ注目してしめせば（164）のようになる。

(164) a. ○ + ● → ○●
b. ○˩ + ● → *○˩● → ○●
c. ● + ● → *●● → ●○

（164a）は規則の影響をうけない。（164c）は「アクセント異化規則」にしたがう。だが、（164b）からは「○˩型は●型に先行する場合、後続する音節のピッチに影響を与えない」という（165）にしめすような規則が必要になる[注73]。

(165) ○˩ → ○ / __ ●

5.1.3 相関詞にみるアクセント

語形と意味の類似性から相互に関係があるとかんがえられる語にも、すでにのべたアクセント規則が適用されることが観察される。（166）～（167）に指示詞の例をあげる。

(166) a. idú 「ここ」
b. cídu 「そこ」
c. kudú 「どこ」

(167) a. indí 「こっち」

注73 ○˩は定義により後続する音節のピッチを高くするものであった。したがって、もともとピッチが高い音節には影響をあたえないとする説明は自然なものであるとおもわれる。

b. cíndi 「そっち」
c. kundí 「どっち」

（166a, c）のアクセント型からは{du}は●型であることが推測される。一方、（166b）はアクセントが●○型であることから、基底では●●型であったことがわかる。このことは{du} の基底を●型とする推測と合致する。（167a, c）と（167b）を比較することによっても、同様の結論をみちびくことができる。

5.1.4 まとめ

以上より共時的アクセントにかんして基本的なものをまとめると（168）のようになる。

(168) a. ○ → ● / ○˩__ (アクセント発生規則)
b. ☆ [α accent] → ☆ [$-\alpha$ accent] / ☆ [+ accent] __

規則（168a, b）にかんしては両者が同時に適用されるような語形がみつかっていないので、特に順序付けをおこなう必要はない。

ただし規則（168b）については、すでにみた（158）のようなアクセント制約を、○˩型アクセントに対しては（169）のような制約をかんがえる必要がある。

(169) a. ○˩ → ○ / __ C
b. ○˩ → ○ / __ ●

5.2 例外的アクセント

基本的アクセント規則からは説明がつかない例外的なアクセントについては、通時的アクセントの節でみた。ここでは、それらの例外的アクセントのあらわれについて、共時的観点から考察する。

5.2.1 名詞の例外的アクセント

名詞類のアクセントについては、○●型に●型接辞がつく場合、「アクセント異化規則」が適用されないことを第 4.3.2.1 節でみた。（170）に具体的にしめす。アクセントの変化したところには__をつけてしめし、「アクセント同化規則」、「アクセント異化規則」はそれぞれ単に「同化」、「異化」としるす。

(170) a. {kugur} + {Kún} (○○ + ●) → kugurún (○○●) 「犬 pl.」
b. {madá} + {Kún} (○● + ●) → madáún (○●● ≯ **○●○ (アクセント異化が適用されず)) 「頭 pl.」

c. {cúor}[注74]+ {Kún} (●○ + ●) → cúórun (*●○● > *●<u>●</u>● (同化) > ●●○ (異化))「豚 pl.」

（170c）ではアクセント異化規則が適用され、（170b）ではアクセント異化規則が適用されていない。この相違はどこにあるのだろうか。

基底でのアクセントに注目すると（170b）は○●●型であり、（170c）は●○●型である。ここで「基底の● + ●型にはアクセント異化規則ははたらかない」というような規則はあたらない。表層で●○型となる二音節語は基底では●●型であることが推定される。具体例を（171）にしめす。

(171) a. át + {Kán} (● + ●) → áttan (*●● > ●○)「手 sg.def.」
b. cɔ́ɔr (*●● > ●○) 「街」
c. cídu (*●● > ●○)[注75] 「そこ」

したがって、「基底の○● + ●型にはアクセント異化規則ははたらかない」ということになる。なお、確認されているかぎりでは、○●●型があらわれるのは○●型に●型が後続する場合のみである。

名詞複数接辞{Kaní}においてアクセントが派生する様子を（172）にしめす。派生のある段階で○●●の連続があらわれることがあっても、それは二次的なものであり、はじめから○●●の連続があらわれることはない。

(172) a. {cul} + {Kaní} (○ + ○●) → culaní (○○●) 「髪 pl.」
b. {pit} + {Kaní} (○˩ + ○●) → pittaní (○○●) 「背中 pl.」
c. {át} + {Kaní} (● + ○●) → áttáni (*●○● > *●<u>●</u>● (同化) > ●●<u>○</u> (異化)) 「手 pl.」
d. {cúri} + {Kaní} (●○ + ○●) → cúríyáni (*●○○● > *●<u>●</u>○● (同化) > *●●<u>●</u>● (同化) > ●●●<u>○</u>(異化)) 「刀 pl.」
e. {cɔ́ɔ́r} + {Kaní} (●● + ○●) → cɔ́ɔraní (*●●○● > ●<u>○</u>○● (異化)) 「街 pl.」
f. {lɛgá} + {Kaní} (○● + ○●) → lɛgááni (*○●○● > *○●<u>●</u>● (同化) > ○●●<u>○</u>(異化))「文字 pl.」
g. {kɔbal} + {Kaní} (○○ + ○●) → kɔbalaní (○○○●) 「額 pl.」

以上より派生の中途段階で見かけ上●●の連続があらわれる場合でも、本来は○をふくむものと、本来的に●●の連続であるものとがあることがわかる。そして本来的に○であったものが●と変化したものに対して本来的に●であるものが後続する場合には、「アクセント異化規

注74 {cúor}は表層では/cúór/であるから基底では●○型であると推定する。

注75 この語の基底に●●を想定しうる根拠は、意味と形にかかわりがあると思われる語に/idú/という語があり、これのアクセントが○●型であることから、{dú}の部分は●型であると推定されることによる。

則」が適用されることも確認された。本来的に●であるものが連続する場合は、それが二音節語であるならば「アクセント異化規則」が適用される。そうでなければ適用されないということがわかった。ただし、複数の接辞がつくような多音節語の調査がすすんでいないので、現段階ではこれ以上の説明はできない。今後の課題である。

5.2.2 動詞の例外的アクセント

二音節の動詞不定形については規則的なアクセントのあらわれをみることができた。他方、三音節の動詞不定形は、これまでに提案したアクセント規則では説明しきれない分布をみせる。三音節動詞不定形について主要な例を（173）にあげる。

(173) a. ○○○型: dagana 「叫ぶ inf.」、najana 「踊る inf.」、kanana 「泣く inf.」
b. ●●●型: cúnáná 「聞く inf.」、ájáná 「笑う inf.」
c. ●●○型: pɛ́lána 「落とす inf.」
d. ○○●型: dɛganá 「見せる inf.」

上記四種の型の動詞について一人称単数現在形の活用をしめすと（174）のようになる。

(174) a. dagɔṅ (○○) 「叫ぶ 1sg.pres.」
b. cúnóṅ (●●) 「聞く 1sg.pres.」
c. pɛ́lɔṅ (●○) 「落とす 1sg.pres.」
d. dɛgóṅ (○●) 「見せる 1sg.pres.」

（174）の例からは一人称単数現在形接辞{Oṅ}[注76]のアクセントは○型であると推定される。このようにかんがえると、上記四種の動詞の語幹の基底アクセントは、（175）にしめすようなものになるとおもわれる。

(175) a. {daK}[注77] (○)
b. {cún} (●)
c. {pɛ́l} (●⌜)[注78]

注76 一音節語幹の一人称単数現在形は、開音節語幹につく場合は{ṅ}、閉音節語幹につく場合は{Oṅ}である。

注77 語幹末子音を K としているのは、共時的には接辞がつけばいずれ有声音であらわれるために、基底では k とも g ともきめられないことによる。他の類例も同様である。

注78 ⌝のような「後続する音節のピッチを高くしない」という記号を導入すれば、アクセント型を●⌝のように表現することもできる。しかし、すでに導入している記号と規則で説明する方が合理的であるとおもわれる。●⌜とすれば、接辞{Oṅ}がつく場合には、（i）にしめすように二通りのアクセント派生過程を推定することができる。

(i) a. *●⌜ + *○ → *●⌜○ → *●●(定義によりアクセント発生) → ●○ (アクセント異化規則)
b. *●⌜ + *○ → *●⌜○ → ●○ (アクセント異化規則)

（i-a）の問題点は*●⌜○から一度*●●となったあとで、さらに異化によって●○となるというように、おなじ音節に規則が二度適用されるという推定である。むしろ（i-b）のように*●⌜○の直後の

c. {dɛK} (○⌜)

（175）のように各動詞の基底アクセントを推定すると、（175c, d）が問題となる。（175c, d）の基底アクセント型をもちいて不定形のアクセントを派生しようとすると（176）のようになる[注79]。

(176) c. {pɛ́l} + {ana}: *(●⌜ + *○○ → *●⌜○○ → *●<u>●</u>○ → **●<u>○</u>○
d. {dɛK} + {ana}: *○⌜ + *○○ → *○⌜○○ → *○<u>●</u>○ → **○●<u>●</u>

（176）の結果は（173）にしめした実際のアクセント型とは異なる。このような不規則なあらわれ自体は規則的なものであるけれども、現段階では一貫した説明をあたえることができない。動詞のアクセントも今後の課題である。

5.2.3 まとめ

例外的なアクセントをみせるものについては、一部のアクセント型は基底のアクセント型から推測されるアクセント型とは異なるアクセント型をしめすということが共時的観点からも確認された。しかし、それらをチャクマ語アクセント体系全体の中で位置付けることは、通時的観点からの場合と同様に、現段階では困難である。

6 おわりに

以上、本稿ではチャクマ語の主要な音声的特徴をのべ、特にアクセントについて考察した。アクセントについては、歴史的に有気音が観察される子音に後続する母音に発生することが基本であることがわかった。さらに、アクセントは基本的にはアクセントの同化と異化という（177）のような規則で説明できることをみた。

(177) *V[α accent] > V[$-\alpha$ accent] / *V[+ accent] __

他方、これだけでは説明のつかないものが名詞の複数形、動詞の活用形、とりわけ不定形のアクセント型についてみられることを確認した。

本稿では詳述できなかったけれども、複合名詞のアクセントについてもこれまでの規則では説明できないものがみられる。（178）に例をあげる。

(178) a. cúór (●●) 「豚」
b. ɛ́rá (●●) 「肉」
c. cúór ɛ́ra (●●# ●○) 「豚肉」
d. cúór ɛ́rááni (●●# ●●●○) 「豚肉 pl.nom.」

注79 段階でアクセント異化規則により、*●⌜がいわば*●⌝となったとかんがえる方がよいとおもわれる。不定形接辞は閉音節語幹につく場合には、共時的には{ana}であると推定される。この形式アクセントは/dagana/(○○○) の例から○○型であると推定するのがもっとも自然であるとおもわれる。

特に（178c）のようなアクセントがなぜそうなるのかは、本稿でのべた原則だけでは説明できない。

また、「名詞（属格）+ 名詞（主格）」の構造をした複合名詞のアクセントについては、○●#○●の構造をしている場合、実際にはほとんど○●# ○○のようにきこえるものがある。（179）に例をあげる。

(179) a. cok (○˩) 「目」
b. paní (○●) 「水」
c. cogó paní ～ cogó pani (○●# ○● ～ ○●# ○○) 「涙」

このようにチャクマ語のアクセントについては派生語、複合語を中心になお検討を要する問題があるけれども、それらについては今後の研究課題としたい。

記号・略号一覧

文法用語

A → B	A から B への共時的変化
A > B	A から B への通時的変化
*	推定形
**	誤形
#	語境界
##	アクセント境界
C	子音
V	母音
sg.	単数
pl.	複数
def.	定形
nom.	主格
gen.	属格
loc.	位格
inf.	不定形
onom.	擬声語・擬態語
past.	単純過去形
pres.	現在形
pres-cont.	現在進行形
pres-perf.	現在完了形

言語名など

Ar.	アラビア語 (Arabic)
Eng.	英語 (English)
H.	ヒンディー語 (Hindi)
IPA	国際音声字母 (International Phonetic Alphabet)
SBur.	口語ビルマ語 (Spoken Burmese)
SCB	標準口語ベンガル語 (Standard Colloquial Bengali)
Skt.	サンスクリット語 (Sanskrit)
P.	パンジャーブ語 (Punjabi)
Pal.	パーリ語 (Pali)
Pers.	ペルシャ語 (Persian)
Pkt.	プラークリット語 (Prakrit)
Port.	ポルトガル語 (Portuguese)
WBur.	ビルマ文語 (Written Burmese)

資料他

BDC	Učida［1970］
CED	P. B. Chakma［1993］
Hm.	McGregor［1993］によるヒンディー語
LBD	Shahiddulah［1965］
LSI	Grierson［1928］にあるチャクマ語。他言語の場合はその旨を明記する。
T.(数字)	Turner［1966］での見出し番号

表記上の注意

本稿における表記上の注意を以下にあげる。

1. /.../: 筆者によるチャクマ語音素表記。例: /mac/ 「魚」
2. {...}: 筆者によるチャクマ語形態音素表記[注80]。なお形態音素表記でもちいる大文字は原音素（Archiphoneme）をしめす。例: {Kán} 「単数定辞」
3. [...]: 筆者によるチャクマ語音声表記。例: [maˈcʃ] 「魚」
4. SCB: Bhattacharya［1992］にみられる IPA によるベンガル語音声表記を Ferguson & Chowdhury［1960］に準じた標準口語ベンガル語音韻表記にあらためたもの。例: SCB *mach* 「魚」
5. BDC: Učida［1970］巻末の Glossar に出ている表記。これは基本的には音韻表記であるけれども、代表的な異音は異音のまま表記している。例: BDC *mas* 「魚」

注80 音声の構造記述で条件をみたすものが複数ある場合に{...}でしめすことがある。その場合は形態音素表記というわけではない。

6. CED: P. B. Chakma［1993］の見出し語のとなりにあがっているローマ字表記。これは文字転写である。ただし、印刷上の都合で反舌音が有気音と区別がつかないなどの不都合が生じている。そうしたところは筆者の判断で適宜修正している。例: CED *māch* 「魚」
7. Skt.、Pkt.、NIA 諸語などについては特にことわらないかぎり Turner［1966］を参照し、該当箇所を T.(数字) でしめした。これは各インド系文字の転写である。例: Skt.[注81] *mátsya-*, Pkt. *maccha-*, T.#9758 「魚」
8. ペルシャ語におけるアラビア文字の転写方法は Lazard［1992］にしたがう。例: Pers. *jāygāh* 「場所」
9. アラビア語におけるアラビア文字の転写方法は Wehr［1985[5]］にしたがう。例: Ar. *manʿ* 「禁止」
10. Port. の表記は Soares［1936］にしたがう。
11. SBur. の表記は Myanmar Language Commission［1993］にしたがう。WBur. の表記は Bradley［1979］にしたがう。
12. 名詞類の語例については特に断らないかぎり単数・主格形である。複数形については主格と対格で形態上の区別がないので単に pl. と記す。pl. は定性が高いと思われるが特に def. をつけることはしない。定辞については、実際には対格であることが多いが、主格と対格で形態上の区別がないので単に def. と記す。

参考文献

延末謙一. 1999. 「危機にたつチャクマ族の文字」『アジ研ワールド・トレンド』42: 28–30.

早田輝洋. 1999. 『音調のタイポロジー』大修館書店.

藤原敬介. 2001. 「チャクマ語のアクセントに関する通時的考察」『日本言語学会第 122 回大会予稿集』、pp. 263–268.

藤原敬介. 2002. 「チャクマ文字の現在」『遡河』13: 20–24.

八木 毅. 1964a. 「チャクマ族の言語とマルマ・ムロ語彙三題」天野利武編『チッタゴン地方の丘陵人—東パキスタン総合学術調査隊報告書』大阪大学、pp. 83–122.

八木 毅. 1964b. 「東パキスタン・チャクマ族の言語」『紀要』（愛知県立女子大学、愛知県立女子短期大学）15: 51–80.

八木 毅. 1964c. 「東パキスタン、チャクマ語の語彙」『説林』（愛知県立女子大学国文学会）13: 45–85.

Bangladesh Bureau of Statistics (ed.). 1999. *Statistical Pocketbook of Bangladesh 1998*. Statistic Division, Ministry of Planning, Government of the People's Republic of Bangladesh[注82].

注81 Skt. の語形について*がついているものは、Turner［1966］にしめされた推定形である。

注82 この資料における人口統計は Bangladesh Bureau of Statistics（BBS）による *Population Census 1991* を基本とする。なお管見のかぎりでは、近年の BBS による出版物からは、少数民族の人口にかんする記載がなくなっているようである。

Bardhan, Susanta Kumar. 2008. Vowels of Chakma. *Indian Linguistics* 69: 29–41.

Bardhan, Susanta Kumar. 2010. Vowel harmony and nominal derivational suffixes of Chakma. *Indian Linguistics* 71: 33–48.

Bardhan, Susanta Kumar. 2014. *On the lexical phonology of Chakma and English*. Smashwords Edition. https://www.smashwords.com/books/view/495373（2019 年 2 月 22 日確認）

Bernot, Denise. 1958. Rapports phonétiques entre le dialecte marma et le birman. *Bulletin de la société de linguistique de Paris* 53(1): 273–294.

Bernot, Lucien. 1972. Contribution à l'étude du chakma. En *Langues et techniques, nature et société*. Tome I, Approche Linguistique, édité par Jacqueline M. C. Thomas et Lucien Bernot, 337–343. Paris: Éditions Klincksieck.

Bhattacharya, Subhas. 1992. বাংলা উচ্চারণ অভিধান (Bangla Uccharan Abhidhan, Bengali Pronouncing Dictionary). Calcutta: Sahitya Samsad.

Bradley, David. 1979. *Proto-Loloish*. Scandinavian Institute of Asian Studies monograph series no. 39. London: Curzon Press.

Chakma, Lakshmi Bhusan. 1994. *Changhma pattham paidhya*. Kamalanagar: District School Educational Board, Chakma District Council.

Chakma, Niranjan. (出版年不明). *Highlights of Chakma language and literature*. Agartala: Chakma Bhasa-O-Sahetya Akademi.

Chakma, Pulin Bayan. 1993. *Chakma Dictionary (Chakma-English)*. Kamalanagar, Mizoram: Arts & Culture Department, Chakma Autonomous District Council.

Chatterji, Suniti Kumar. 1970[2]-1972. *The Origin and Development of the Bengali Language*. 3 vols. London: George Allen & Unwin Ltd. Repr. Calcutta 1986: Rupa & Co.

Chatterji, Suniti Kumar. 1974[2]. *Kirāta-Jana-Kr̥ti, the Indo-Mongoloids: their contribution to the history and culture of India*. Repr. Calcutta 1998: The Asiatic Society.

Ferguson, Charles A. and Munier Chowdhury. 1960. The phonemes of Bengali. *Language* 36: 22–59.

Ganguly, Siddhartha and Sakya Prasad Talukdar. 1996. A linguistic description of Chakma language. In Suwilai Premsrirat et al. (eds.), *Pan-Asiatic Linguistics: Proceedings of the Fourth International Symposium on Languages and Linguistics (Bangkok)*, Vol. V, pp. 1646–1663. Nakorn Pathom, Thailand: Institute of Language and Culture for Rural Development, Mahidol University at Salaya.

Grierson, George A. 1903. *Linguistic Survey of India, vol. V, part II, Indo-Aryan Family (Eastern Group), Bengali & Assamese*. Repr. Delhi 1994: Low Price Publications.

Grierson, George A. 1928. *Linguistic Survey of India, vol. I, part II, Comparative Vocabulary*. Repr. Delhi 1994: Low Price Publications.

Grimes, Barbara F. (ed.) 1999. *Ethnologue: Languages of the World (13th Edition, Internet Version)*. SIL International. https://www.ethnologue.com/13/（2019 年 2 月 24 日確認）

Hai, Muhammad Abdul. 1965. A Study of Chittagong Dialect. In Anwar S. Dil (ed.), *Studies in Pakistani Linguistics*, pp. 17–38. Lahore: Linguistic Research Group of Pakistan.

Humayun, Rajib. 1985. *Sociolinguistic and Descriptive Study of Sandvipi: A Bangla Dialect*. Dhaka: The University Press Limited.

Ishaq, Muhammad (ed.) 1971. *Bangladesh District Gazetteers: Chittagong Hill Tracts*. Dacca: Bangladesh Government Press.

Konow, Sten. 1903. Notes on the Maghī dialect of the Chittagong Hill Tracts. *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 57: 1–12.

Lazard, Gilbert. 1992. *A Grammar of Contemporary Persian*, translated by Shirley A. Lyon. Costa Mesa: Mazda Publishers.

Löffler, Lorenz G. 1963. Chakma und Sak. *Wiener Völkerkundliche Mitteilungen, Neue Folge* 6(1-4): 37–63.

Löffler, Lorenz G. 1964. Chakma und Sak: ethnolinguistische Beiträge zur Geschichte eines Kulturvolkes. *Internationales Archiv für Ethnographie* 50(1): 72–115.

Majumdar, Pannalal. 1997. *The Chakmas of Tripura*. Agartala: Tripura State Tribal Cultural Research Institute & Museum, Government of Tripura.

Maniruzzaman. 1984. Notes on Chakma Phonology. In Mahmud Shah Qureshi (ed.), *Tribal Cultures in Bangladesh*, pp. 73–89. Rajshahi: Institute of Bangladesh Studies, Rajshahi University.

Maniruzzaman. 1990. চাকমা ভাষা চর্চা ও সমস্যা (Chakma Bhasha Charcha O Samossa): Duti Obhidhan Prasanga. *Shilpataru*, vol. iv.

Maniruzzaman. 1991a. *Studies in the Bangla Language*. Adiabad(Dhaka): Adiabad Sahitya Bhaban & Bhasha Tattva Kendra.

Maniruzzaman. 1991b. Language Planning of an Ethnic Minority Group of Bangladesh: the Chakma. In Maniruzzaman(1991a), pp. 101–115.

Maniruzzaman. 1994. উপভাষা চর্চার ভূমিকা (*Upabhasha Charchar Bhumika*). Dhaka: Bangla Academy.

McGregor, R. S. 1993. *The Oxford Hindi-English Dictionary*. Oxford: Oxford University Press.

Myanmar Language Commission (ed.) 1993. *Myanmar-English Dictionary*. Department of the Myanmar Language Commission, Ministry of Education, Union of Myanmar.

Phayre, Arthur P. 1841. Account of Arakan. *Journal of the Asiatic Society of Bengal* 10(2): 679–712.

Soares, Anthony Xavier. 1936. *Portuguese Vocables in Asiatic Languages*. Baroda: Oriental In-

stitute. (From the Portuguese original of Monsignor Sebastião Rodolfo Dalgado. Translated into English with notes, additions and comments.)

Talukdar, S. P. 1988. *The Chakmas: Life and Struggle*. New Delhi: Gian Publishing House.

Talukdar, S. P. 1994. *Chakmas: an embattled tribe*. New Delhi: Uppal Publishing House.

Tunga, S. Sudhansu. 1995. *Bengali and other related dialects of South Assam*. New Delhi: Mittal Publications.

Turner, R. L. 1966. *A Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages, vol. 1*. Repr. Delhi 1999: Motilal Banarsidass.

Učida, Norihiko. 1970. *Der Bengali-Dialekt von Chittagong*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Vaux, Bert. 1998. The Laryngeal Specifications of Fricatives. *Linguistic Inquiry* 29(3): 497–511.

Vijayanunni, M. (ed.) 1997. *Census of India, 1991—Language: India and states*. Delhi: Controller of Publications.

Wehr, Hans. 1985[5]. *Arabisches Wörterbuch für die Schriftsprache der Gegenwart: Arabisch-Deutsch.* 5. Auflage. Unter Mitwirkung von Lorenz Kropfitsch. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

附記: チャクマ語研究の思い出

筆者がバングラデシュをはじめて訪問したのは 1999 年 7 月のことである。1998 年夏に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の言語研修で南インドのカンナダ語を受講していたほか、インド旅行をしたこともあったので、修士論文ではインドの言語を調査しようとおもっていた。特に「セブンシスターズ」とよばれる東北インド七州に関心があり、そのあたりの言語を勉強するもりだった。ただし、インドにいく前に、まだいったことがなかったバングラデシュに寄り道をした。バングラデシュにもあまり調査されていない言語があると大阪外国語大学の藪司郎教授（当時）からきいていたからである。

何のつてもなく訪問したバングラデシュで、JICA を表敬訪問したとき、当時 JICA の調査員をしておられた矢嶋吉司さんに偶然であった。矢嶋さんの紹介で、ダカ大学歴史学科のロトン・ラール・チョクラボルティー教授（当時）としりあった。ロトン先生は何度も訪日しており、日本びいきということもあってか、バングラ語も何もしらない筆者のために、ジョガナタ寮というダカ大学の学生寮まで案内してくださった。ジョガナタ寮は、イスラム教徒が中心のバングラデシュにあって、ヒンドゥー教徒が中心の学生寮である。そこにはヒンドゥー教徒のほかにも、キリスト教徒や仏教徒もおり、チベット・ビルマ系少数民族の学生もいた。

そしてミトゥン・チャクマさんにであった。ミトゥンさんは、ダカ大学に当時できたばかりの言語学科一期生であった。チャクマ語は、バングラデシュでは最大の少数民族であるチャクマ人によってはなされる言語である。すくないとはいえ研究があり、八木［1964a］に代表される日本語の論文まである。したがって、調査対象とはかんがえていなかった。しかし、バングラデシュで何かをするには、まずバングラ語をしる必要があることはすぐにわかった。バングラ語と方言関係にあるチャクマ語を最初に調査することは、バングラ語を習得するうえでも都合がよいようにもおもわれた。何より、ミトゥンさんが協力的であり、言語学の学生であるという点もよかった。こうして、ミトゥンさんからチャクマ語をおしえてもらうようになった。

数回のバングラデシュ渡航をへて、何とか修士論文をかきあげた。その後は、ミトゥンさんの紹介で、ジョガナタ寮にいたオン・トワイン・ギョー・チャックさんからチャック語を、オン・チャイン・ヌン・マルマさんからマルマ語をまなぶようになった。

博士課程からは調査の中心をチャック語とマルマ語にうつしたので、チャクマ語とは疎遠になってしまった。やがて、オン・トワイン・ギョーさんやオン・チャイン・ヌンさんから、ミトゥンさんがチャクマ人の活動家となり、指導者として活躍しているという話をきくようになった。

そして 2018 年 5 月、オン・トワイン・ギョーさんとオン・チャイン・ヌンさんからコックス・バザールでチャック語とマルマ語をおしえてもらっているとき、2018 年 1 月 4 日に、ミトゥンさんが殺害されたことをしらされた。敵対する組織にねらわれて、命をおとしたということだった。このニュースは、バングラデシュの新聞等でも報じられたものであると後にしった。

筆者がバングラデシュの少数民族言語をまなびはじめたころ、京都大学の宮岡伯人教授（当時）による「環太平洋の『消滅に瀕した言語』に関する緊急調査研究」というプロジェクトが

あった。研究室の先輩の中には、流暢な話者が 100 人もいないような言語を研究している人もいた。だが、自分がいきているうちに最後の話者がいなくなってしまうかもしれないような言語を調査対象にする気分にはならなかった。だからバングラデシュでチャック語やマルマ語を調査するようになったという面はあった。最近は、ビルマでカドゥー語やガナン語を調査するようにもなり、方言によっては最後の一人の話者からおしえてもらうようなこともでてきた。おしえていただいたあとに、話者がおなくなりになることさえあった。しかし、自分よりもわかい話者が、しかも最初におしえてくれた話者が、わかくして非業の死をとげるとまでは想像していなかった。

本論文は、本来はミトゥンさんとの共著ともいうべきものである。母語話者であるミトゥンさん本人がチャクマ語を分析していたら、もっとよい論文になっていたにちがいない。だが、今はそれもかなわない。筆者にとってははじめての言語調査であり、音声のききとりそのものをはじめ、分析にもおおくの不備があるにちがいない。今まで発表してこなかった理由もそこにある。他方、調査経験をかさねていくうちに、まちがいはついてまわるものであるから、まちがっていてもよいので、資料はできるだけ公開しておいたほうがよいとおもうようにもなった。資料を放置していると記憶がなくなっていくし、筆者自身が、いつどこで不測の事態におちいるかもわからないからである。

「どうしてチャクマ語を研究するのですか」とミトゥンさんに質問されたことがある。「今、ここで、私ができることを、しているだけです」とこたえたようにおもう。ミトゥンさんが民族運動に身を投じたのは、チャクマ人のためにできることが、ミトゥンさんにとっての「今・ここ・私」であったからだろう。本論文は、ミトゥンさんに対して今ここで筆者ができる手向けでもある。

受理日 2019 年 4 月 16 日

藤原 敬介 （2019）『言語記述論集』11：103-140

第 51 回国際漢蔵語学会開催報告*

藤原敬介
京都大学
主要語句：国際学会、大会運営

1 はじめに

本稿では、2018 年 9 月 25 日から 2018 年 9 月 28 日まで京都大学で開催された第 51 回国際漢蔵語学会（以下「本大会」として言及する）について報告する。

国際漢蔵語学会について報告したものには橋本［1970, 1973, 1975, 1979］、Matisoff［1973］、Hashimoto［1975］、岩田［1989］、藪［1993, 1995, 1996, 1998］、長野［1993, 1994］、藪・中嶋［1994］、林［2004］、Pelkey［2005］、Karlsson［2007］、Bradley［2008］、Konnerth［2013］、Genetti & Donlay［2016］などがある[注1]。だが、大会の舞台裏まで報告したものはすくない[注2]。

本大会のやりかたは通常の学会とはさまざまな点でことなる。だが、失敗もふくめた経験を共有することで、国際学会開催をこころざす人の参考になることを意図している。

本稿の構成は次のとおりである。**2** で大会開催の経緯についてのべる。**3** で大会開催準備についてのべる。**4** で大会開催期間中についてのべる。**5** で大会開催後についてのべる。**6** で本稿をまとめる。附録として本大会のプログラムを再掲した。

2 大会開催の経緯

2.1 国際漢蔵語学会とは

国際漢蔵語学会（International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics: ICSTLL）とは 1968 年以来、50 年にわたり、シナ・チベット諸語研究者の有志によって開催されてきている国際学会である[注3]。国際学会とはいえ、会長はおらず、常設の事務局も存在しない。あく

---

* 本稿は 2018 年 10 月 13 日の第 90 回言語記述研究会（京都大学文学部）における筆者による「第 51 回国際漢蔵語学会開催報告」をもとに文章化したものである。

注1 このほか、中国から出版されている各種雑誌でも国際漢蔵語学会の報告が掲載されている。`https://www.cnki.net/` で検索すると、多数の報告がでてくる。

注2 言語学関係の国際研究集会の舞台裏まで報告しているものとしては梶［1999, 2001, 2003, 2005］がある。大津由紀雄研究室編［2010］は国際会議の開催方法を丁寧に解説した本として有用である。中野［発表年不明］による「国際会議・国内学会の運営ノウハウ集」にはこまかいアドバイスがいろいろとあり、参考になる。

注3 この学会は、最初の三回は Conference on Sino-Tibetan Reconstruction（COSTRE）とよばれていた。第 4 回大会から “The Fourth International Conference on Sino-Tibetan Language and Linguistic Studies” というように “International” を冠するようになり、第 5 回でも踏襲された［Matisoff 1973: 155–156］。そして第 6 回大会から “International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics” となったようである（Sprigg［1980: 110］では “International Conference on Sino-Tibetan Language and Linguistics”、Matisoff［1996: 110–111］では “International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics” と表記されている。“Language” なのか “Languages” なのかという相違がある）。他方、馮編訳［1979a,b,c］によれば、第 7 回大会から “International Conference on Sino-

までも有志のボランティアによって運営されてきている学会である[注4]。

国際漢蔵語学会は、当初はシナ・チベット諸語の系統関係が議論の中心であった。しかしながら、言語学にかかわる分野であれば、音声学・音韻論、形態論、統語論、意味論、歴史言語学、社会言語学などさまざまな分野からの発表がおこなわれるようになってきている。特に近年は、中国やインド、東南アジア諸国での臨地調査が容易になってきたことをうけて、当該地域の未記述言語や消滅危機言語にかんする研究発表もさかんである。また、シナ・チベット諸語の枠組みをこえて、近隣のオーストロアジア諸語やオースロネシア諸語、タイ諸語等にかんする研究発表もみられるようになってきている。本学会での研究発表は *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* に代表される学術雑誌等で論文化され、世界の言語学界においても存在感を発揮している。

2.2 大会開催の経緯

筆者がはじめて国際漢蔵語学会に参加したのは、2003 年にオーストラリアのメルボルンでラ・トローブ大学の David Bradley 教授が主催者となって開催された第 36 回大会である。その後、7 回の大会に参加してきた[注5]。日本からの研究者が近年は毎回 10 人前後は参加していることから、日本での大会開催をもとめる声はおおきかった。だが、私見では、学会開催にともなう負担を忌避する傾向がしかるべき立場にある研究者にみられ、なかなか開催されてこなかった。

他方、日本では、チベット=ビルマ諸語に関連する研究者が 20 人をこえ、2003 年以来チベット=ビルマ言語学研究会[注6]が年 3 回開催されるようになっていた。この研究会で研鑽をつんだ若手研究者が日本の大学で専任教員としてつとめるようになり、1993 年に長野泰彦教授らが中

Tibetan Languages and Linguistics” と称するようになったとある。

なお、第 6 回大会の報告である橋本［1975: 14–15］は、このあたりの事情を次のように茶化している。「(「国際」云々という名称は，西欧から参加された二三の常連の存在によって救われている；昨年は危く有名無実と化するところであった)。誰でも会を開くからには，盛会でしたと祝われたいのが人情というものである。しかし盛会にするためには当り前の事乍ら費用が掛かる（大西洋の向う側から来て下さる方々には旅費位は出さなければなるまい；研究発表をして下さる方々の旅館の勘定書位は持たないと主催者のコケンにかかわる)。そこであちらの財団に頼みこみ，こちらの機関に談じこむ。そのためには華々しい名称が欲しい。かくして 「国際」どころか，漢蔵諸語の研究とその「言語学的研究」とを分けるという，誰に尋ねても判った様な解らない様な離れ技もやらざるを得ないという破目に陥った次第である」。

注4 「この学会には、大変不思議なことに、学会本部とか学会事務局というものが存在しない。会長もいないし、理事もいない。創立当時の中核的メンバーが現役で活躍しており、また、彼らの弟子達が極めて積極的にボランティアで学会を支えている。これらの人々の相互連絡によっていろいろのことが決定される。こんな専門的で小規模の学会が二五年も続いているのは良い意味でのアメリカ的ボランティア精神と、形式としての組織が研究者の自由を拘束しない体質に起因しているのかもしれない」［長野 1993: 64］

注5 具体的には、第 37 回（2004 年・スウェーデン・ルンド大学)、第 39 回（2006 年・アメリカ・シアトル・ワシントン大学)、第 40 回（2007 年・中国・ハルビン・黒龍江大学)、第 41 回（2008 年・イギリス・ロンドン大学)、第 45 回（2012 年・シンガポール・南洋理工大学)、第 49 回（2016 年・中国・広州・暨南大学)、第 50 回（2017 年・中国・北京・香山飯店）である。

注6 研究会の Web ページは `https://sites.google.com/view/tbkenhp/`（最終確認 2019 年 2 月 4 日）である。過去の例会記録も公開されている。

心となって国立民族学博物館で開催された第 26 回大会以来、25 年ぶり 2 回目の国際漢蔵語学会開催を可能とする機運が日本でもようやくたかまっていた。

このような状況の中、2016 年 10 月になって筆者が京都大学白眉センターに 5 年任期で採用されることになった。白眉センターは研究に専念する環境にあるので研究に専念すべきではある。一方で、それほど手間のかかることをしなくとも国際学会開催は可能であると筆者は以前からかんがえていた。そこで、第 1 回大会以来実質的に大会運営事務局長的な役割をはたしているカリフォルニア大学バークレー校の James A. Matisoff 教授[注7]が 2016 年 11 月に観光目的で来日された機会に、2018 年に第 51 回大会を京都で開催したいと打診し、開催が決定した[注8]。そして 2017 年 11 月に北京で開催された第 50 回国際漢蔵語学会の最終日に、2018 年は京都大学で開催されるということが正式に発表された[注9]。

日本で本大会を開催するにあたり、三つの目標があった。

1. 50 年にわたり継続してきた大会の開催をうけおうことで、斯界に相応の貢献をすること。
2. 日本におけるシナ・チベット言語学研究の成果を国際的に周知すること。
3. 将来ふたたび本学会を開催するような若手研究者を育成すること。

いくつかの困難はあったけれども、上記の目標は完全に達成された。そういう意味では、学会開催は成功であった。

注7 「事実上は、カリフォルニア大学の J・A・マティソフ（昭和六三年度国立民族学博物館客員教授）が連絡のキーステーションになっており、また、彼のところで Linguistics of the Tibeto-Burman Area という雑誌を編集していて、その Editorial Board がこの学会の中核的メンバーと一致しているため、外からは彼が会長のように見えるが、彼はあくまでも一会員である」［長野 1993: 64］

注8 当時、京都大学人文科学研究所の池田巧教授が大型科研への申請を計画していた。採択されれば京都で国際漢蔵語学会を開催する予定であるという情報をえていた。そこで、池田教授に主催をおねがいし、筆者が事務局を担当するという提案をした。しかし、科研は採択されるかどうかわからないので、科研に依存せずに開催するというなら、筆者が主催してやればよいという助言をえた。結果的に池田教授の科研は 2017 年度には不採択であったけれども、2018 年度には採択された。筆者も本大会も池田教授の科研とは直接的には関係がない。ただし、大会参加者のなかには池田科研の関係者も複数あり、池田科研から旅費がでていた参加者もいたようである。そういう観点からは、本大会は池田科研からも間接的に援助していただいたといえる。なお、池田教授主催による国際漢蔵語学会は 2022 年ごろにふたたび京都で開催予定であるときく。

注9 翌年にどこで誰が大会を主催するかということは、例年は大会懇親会の席で発表される（“The venue of the next one is often decided on the spot at the annual Conference banquet!”［Matisoff 1994: xiv］）。第 50 回大会でもそうなのではないかと予想していた。だが、第 50 回大会ではそうならなかった。大会初日に受付にいってみたところ、二日後の最終日の閉会式において参加者全員の前で 2018 年の第 51 回大会について話をするように、事前に何の相談もなく突然通告された（中国での大会では、相手の都合をきくことなく、一方的にものごとがきめられる傾向にある）。第 50 回では大会懇親会が開催されないということが理由のようだった（ただし、大会主催者から特別に招待された研究者だけが参加できる VIP 専用の食事会が開催されたそうである）。なお、第 51 回大会の説明に使用したスライドは第 51 回大会用のページから大会用の Dropbox へのリンクという形式で公開している（https://www.dropbox.com/s/7by3csjn3wdtj28/icstll51_plan.pdf?dl=0 最終確認 2018 年 11 月 20 日）。

3 大会開催準備

3.1 大会実行委員会

第 51 回国際漢蔵語学会を開催するにあたり、形式的にではあるけれども、大会実行委員会を組織した。筆者が大会実行委員長をつとめ、林範彦氏（神戸市外国語大学）と倉部慶太氏（東京外国語大学）に大会実行委員を依頼した。

林氏はチベット・ビルマ言語学界隈だけでなく、中国語学界隈にも顔がきき、国際的にも著名な研究者であるだけでなく、国内外の学会開催経験も豊富である[注10]。倉部氏はシンガポールやオーストラリアでの長期の研究経験もあり、国際的に活躍している新進気鋭の研究者である。二人とも国内外で多数の研究者と共同研究を展開しており、関係者からの信頼もあつい。この二人に大会実行委員として協力してもらえれば、参加者も安心できるとかんがえた。二人には、案内状草稿の確認、Web ページの確認、発表要旨の審査、トラブル対策等について相談にのっていただいた[注11]。

3.2 主催と共催

本大会の主催は第 51 回国際漢蔵語学会実行委員会である。大会を運営するだけならば、これだけで十分である[注12]。

注10 2003 年以来、チベット=ビルマ言語学研究会の世話人として研究会を実質的にきりもりしているほか、2011 年の第 17 回ヒマラヤ諸語会議、2013 年の日本言語学会、2019 年の国際中国語言学学会など、林氏が運営にたずさわった学会は多数ある。

注11 林氏と倉部氏に大会実行委員を依頼したのは、先述のとおり、参加者に安心してもらうためであった。しかし実際には、林氏と倉部氏がひかえていてくれたおかげで一番安心していたのは筆者自身である。たとえ筆者に不手際があったとしても、二人がどうにか処理してくれるという安心感があったおかげで、大会をのりきることができた。

注12 かつては、国際学会・国際会議といえば、所属機関の研究者はもとより、事務職員の方々まで総出で準備をすることが常であったらしい。たとえば次のような記述がある。

「また、予算の立案段階から集会終了後の後片付けに至るまで、運営委員会を実践面で支えてくれた国立民族学博物館の管理部や情報管理施設に対して同様の謝意を捧げたい。わけても、研究協力課諸兄の奮闘がなかったら、ここまでオーガナイズされた集会にはならなかったと思う」［長野 1994: 89–90］

「開催に関しては（中略）事務の方々が一丸となって支えてくださった。（中略）また COE 非常勤研究員の久住真由さんは計画の立案時から報告書の作成まで，ずっと傍にいてくださった。さらに，AA 研の大学院博士後期課程の学生やアルバイトの学生たちの働きも大きな支えであった」［梶 1999: 11］

「最後になったが（中略）多くの事務官が積極的に仕事を分担してくださったことも忘れずに書いておきたい。しかしながら，誠心誠意，全力を傾けてくださった COE 非常勤研究員の栄谷温子さんには頭が下がる思いである。（中略）他の COE 非常勤研究員の方々，さらにリサーチアシスタントの大学院生（中略）同僚諸氏には多くの手をわずらわせることになったが，快く分担を引き受けてくださった」［梶 2001: 8］

だが、2003 年ごろからは、状況がかわってきた様子もうかがわれる。

「これからは国際シンポジウムをはじめいろいろなイベントを開催する時は，主催する人間がかなり強く気持ちを持って主体性を発揮しなければならない時代になったと言うべきかもしれない」［梶 2003: 12］

しかし、筆者が所属する京都大学白眉センターとの共催という形式でなければ京都大学学術リポジトリに大会予稿集を登録できないとわかった。そこで、白眉センターに依頼し、共催ということにしていただいた。白眉センターからは、大会期間中にノートパソコンをおかりすることもできた。

このほか、後述する助成金で大会開催を支援してくれた各団体名は「後援」という形式で Web ページやポスターに明記した。

3.3 予算

国際学会開催について、一番問題となるのはお金である。国際漢蔵語学会開催のためにいくらかかるかについては、第 25 回大会では 1 万ドル[注13]、第 26 回大会では 1000 万円［長野: 直談］であったそうである。このほか、京都大学教育研究振興財団で公開されている報告書によると、2012 年にキャンパスプラザ京都で開催された第 9 回言語進化の国際会議では約 1250 万円（海外参加者 200 名・国内参加者 150 名）、2015 年に京都大学で開催された第 8 回世界アフリカ言語学会議では約 540 万円（海外参加者 127 名・国内参加者 35 名）といった数字があがっている。

もとより筆者にそれほどの予算はない。当初の予定では、参加費収入が 30 万円ほどであり、その範囲で開催することをかんがえていた。

3.3.1 収入

3.3.1.1 登録料

本大会では発表者による大会登録料（registration fee）のみでの運営を計画した[注14]。

国際学会でよくみられる「儀式」（開会式、閉会式、開催校挨拶、集合写真の撮影など）や「サービス」（無料インターネット接続サービス、休憩時間の軽食や飲み物の提供、大会プログラムやランチマップ、要旨集などの印刷、ホテルの予約代行、多数のアルバイトによるきめこまかな対応など）は排し、低予算で簡素な大会を計画していた。登録料は 3000 円とした[注15]。ただし、一定の登録期間後に発表を希望する参加者に対しては、10000 円の登録料をはらうことで参加可能とすることにした[注16]。

注13 「この学会のために主催者が集めた寄付金は約一万ドルで、その四分の三はヨーロッパと米国東部からのゲスト・スピーカー達への旅費・滞在費補助に充てられ、残りがコピー代と Banquet/Official Meeting 以外の簡単なパーティーの飲物代である」［長野 1993: 69］

注14 ここで「参加費」ではなく「登録料」としている理由は、後述するように、実際に参加しなくとも共著者として名前をだす人がいることを意識してのことである。

注15 二日間開催される日本言語学会の大会参加費は、会員は 2000 円である。そこで、三日間の本会議を予定している本大会での大会登録料は 3000 円とした。ただし、日本言語学会では、年会費をおさめていない非会員のばあい、参加費は 3000 円である。国際漢蔵語学会では、年会費は存在しない。日本言語学会の非会員参加費に準じて、一律 5000 円程度の登録料としてもよかったかもしれない。

注16 登録期間の相違によって大会参加費を増減することは、国際学会ではよくみられることである。ただし本大会では、期日までに原稿を提出するかどうかによって参加費を変化させた点が、一般的な学会とはことなっていた。

登録料は発表者からのみ徴収することに当初からきめていた。参加することが確実にわかっている発表者からのみ徴収することにすれば、事前に PayPal ですべての支払いが終了する。当日の受付では、お金に気をとられる必要がなくなり、無用の混雑をさけることができる。

当日に聴講するだけの参加者からも徴収すれば収入が増加することはわかっていた。しかし、本大会では受付を簡素化する方針であるから、参加費徴収によって手間をふやすことはさけたかった。京都大学周辺の学生や関係者に、自由に聴講してもらいたいということも、登録料を発表者に限定した理由であった。

発表者のみから参加費を徴収するとして、共著者からも徴収するのか、一人で複数の発表をする発表者に対してはどうするのか、という問題もあった。本大会では、国際学会としては格安の参加費であることを考慮して、共著者からも参加費を徴収し、複数発表者に対しては発表の数だけ参加費をはらっていただくことにきめた。一人でいくつも発表することを制限し、できるだけたくさんの人に発表していただきたいとかんがえていた。

ところが、この決定については、原稿提出締切まで十日ほど前になって、苦情がよせられることになった[注17]。共著者からも登録料を徴収するということは、第一回案内のときからくりかえし周知してきただけでなく、大会 Web ページでも明記してあることである[注18]。苦情に対してこちらの原則を主張しつづけることで大会運営に支障をきたすことはさけたいとかんがえ、共著者から登録料を徴収するという方針は撤回した[注19]。

3.3.1.2 懇親会費

登録料収入のほかに、懇親会費の徴収は当初から予定していた。事前に Google Form でアンケートをとり、懇親会費がいくらならば参加するかを確認した。5000 円程度ならば参加するという人が一番おおかったので、5000 円での開催を目標とした。懇親会費についても、事前に

注17 「共著者からも登録料を徴収するような学会はきいたことがない」とか「商売目当てのろくでもない学会だ。非常に不愉快だ。こんな学会には参加せず、ボイコットをよびかける」などという意見があった。

苦情メールを直接おくってきたのは、大会に登録していた 80 人ほどのうち 2 人である。本大会には、学会の性格からして、臨地調査をしている参加者がおおい。臨地調査には予期せぬさまざな困難がともなう。そのような困難に対する経験や耐性のある参加者がおおいおかげで、ほとんど苦情がよせられなかったのではないかと筆者はかんがえている。

注18 案内状や学会 Web ページにかいたところで、よまない参加者が一定数あることは予想していた。しかし、よまないことを棚あげして、苦情のみをいってくる参加者がいるとは予想していなかった。

注19 現在の日本言語学会における大会参加費徴収方法からすれば、共著者であっても、大会に実際に参加するかぎりは参加費をはらう必要がある。したがって、事実上は共著者からも参加費を徴収しているようなものである。また、筆者が経験した学会のなかには、たとえば日本エスペラント大会のように、実際に会場に足をはこぶことなく「不在参加」するという名目で「不在参加費」をしはらうような制度がある学会も存在する。したがって、参加しない発表者から登録料という名目でお金を徴収するとしても、問題にはならないとかんがえていた。

筆者の立場は説明してはみたけれども、苦情をよせてきた 2 人が理解したかどうかは不明である。ただし、最終的に発表をとりさげるにはいたらなかったので、共著者からの登録料徴収撤回にはそれなりの成果はあったようにおもわれる。

なお、苦情をよせてきた 2 人が実際に会場にくることはなかった。

PayPal で送金していただくことにした[注20]。

最終的には、後述する各種助成金をいただくことができたので、懇親会開催にも余裕をもってとりくむことができた。

3.3.1.3 助成金

すでにのべたとおり、本大会は少額の大会登録料のみで運営することを方針としていた。各種助成金がなくとも運営できる方法をかんがえていた[注21]。

他方、助成金を獲得することによって、基調講演者の旅費・滞在費、学生やポスドク参加者への支援等が可能になることから、助成金に申請すること自体は当初から計画していた[注22]。

本大会では鹿島学術振興財団、京都大学教育研究振興財団、京都文化交流コンベンションビューローの三団体に申請した。申請するからには採択されることをめざした。団体によって審査基準に相違はあるけれども、（1）開催の実現可能性がたかそうであること、（2）これまでに日本で開催されていない大会であること、（3）若手研究者に配慮していること、といった三点が重視されているようであった。

申請にあたり、（1）については、発表予定者の名前だけでなく発表題目まで明記した。（2）については、日本での開催は 25 年ぶりであり、その間チベット・ビルマ語研究がさかんになっているということを強調した。（3）については、若手研究者に対する京都宿泊補助をうたった。

申請した三団体すべてから助成金をいただくことができたのは望外の結果だった。鹿島学術振興財団の助成金（50 万円）には 2018 年 1 月末に申請し、3 月末に採択通知をいただくことができた。京都大学教育研究振興財団の助成金（100 万円）には 2018 年 4 月なかばに申請し、6 月なかばに採択通知をいただくことができた。京都文化交流コンベンションビューローには『小規模 MICE 開催支援助成金』（最大 20 万円）と『京都らしい MICE 開催支援補助制度』（最大 30 万円）というものとに申請した[注23][注24]。

注20 ただし、懇親会当日に参加を希望した参加者も複数おり、会場で参加費を徴収した。そのような人がいることも予想して、人数には余裕をもって予約していた。

注21 助成金の問題点は、開催数ヶ月前まで採否がわからないので、予算をたてにくいということである。科研費等であれば、そのような問題はない。しかし、国際学会開催のために科研費をつかいたくはなかった。

注22 科研費に代表される研究費を利用して学会を開催するということがしばしばおこなわれている。しかし、海外での臨地調査や文献資料の購入など研究そのもののために使用できるはずの研究費を、学会開催にかかわる諸経費に対して使用するということは、筆者はしたくなかった。そのため、国際学会に限定した助成金の存在は貴重であり、採択の可否がわからないという問題はあるけれども、各種助成金への申請は当初から計画していた。

注23 「MICE（マイス）とは、Meeting（ミーティング、会社の会議等）、Incentive（Travel）（インセンティブ（トラベル）・報奨旅行等）、Convention（コンベンション・国際会議等）、Exhibition/Event（イベント/エキジビション・博覧会等）を総称した用語のこと」である（九鬼令和「MICE の振興について」による）。京都文化交流コンベンションビューローでは、ほかにも開催規模に応じて複数の助成金制度がある。詳細は京都文化交流コンベンションビューローの Web ページを参照。

注24 京都文化交流コンベンションビューローの助成金については、申請手続き等が煩雑であると感じられたことから、当初は申請する予定がなかった。だが、2018 年 4 月 2 三日に京都大学で開催された京都文化交流コンベンションビューローによる「学術集会 誘致・開催のための助成プログラム説

京都文化交流コンベンションビューローからの助成金は、大会終了後に大会報告をおこない、その後査定された上で支給されるという点に注意が必要である。つまり、大会終了後にならないと使用できないという不自由さがある。さらに、『小規模 MICE 開催支援助成金』については、採択決定時に通知された補助予定金額が、大会の成否によっては減額される可能性がある。本大会のばあいは、参加人数を慎重にみきわめた上で、2018 年 7 月下旬に申請し、8 月下旬に採択が決定した。大会終了後に報告し、査定をうけた上で、採択通知に記載されていた金額を満額受領できたのはさいわいであった[注25]。

なお、助成金申請にあたっては、申請団体の公印が必要となるばあいがある。本大会では、京都文化交流コンベンションビューローへの申請で必要となった。本大会のばあい、常設の事務局があるわけではないので、筆者が個人的に大会名義の印鑑を作成した。大会用の印鑑は、助成金申請だけでなく、後述する招待状の作成に際しても必要になる。したがって、大会開催を決定したら、はやい段階で印鑑を作成するのがよい。

3.3.2 支出

当初予定していた支出は、大会期間中のアルバイト代と雑費だけであった。しかし、各種助成金がいただけるようになったことで、さまざまな変更があった。

最終的には、おおよそ以下にしめすような項目が支出の対象となった。

1. 基調講演者の旅費と宿泊費
2. 学生およびポスドク等に対する宿泊費補助
3. 会場費
4. 託児サービス
5. ポスター等デザイン費
6. アルバイト代
7. 懇親会関連費
8. 大会記念品
9. 雑費

3.3.2.1 基調講演者の旅費と宿泊費

本大会では予算の制約から、原則としては旅費も謝金もなしでひきうけてくださる人に基調講演を依頼した。Matisoff 教授と台湾・中央研究院の孫天心教授はこの条件でひきうけてくだ

明会」に参加し、方針を変更した。特に京都大学学術研究支援室の神谷俊郎氏による助成金活用の事例紹介のなかで、「京都らしい MICE」助成金で芸舞妓さんを懇親会に招待可能であるとしることができたのが決定的だった。

注25 『小規模 MICE 開催支援助成金』として 12 万 5 千円、『京都らしい MICE 開催支援補助制度』では約 24 万円の支援をいただくことができた。

さった[注26]。Matisoff 教授はアメリカ、孫教授は台湾であるから、もう一人はヨーロッパから誰かに依頼することにした。できれば漢語の専門家または女性研究者に依頼したかったけれども、適当な知人がいなかったので、ロンドン大学の Justin Watkins 教授に依頼した[注27]。Watkins 教授は、旅費がある程度補助されるならばという条件で、ひきうけてくださった。

当初は旅費も謝金もなしという条件でおひきうけいただいた Matisoff 教授と孫教授であったけれども、のちに助成金をいただくことができたので、このお二人の旅費等を完全にお支払いできたのはありがたかった[注28]。Watkins 教授については、東京外国語大学の頭脳循環プログラムにより来日が可能となり、京都での学会参加中の滞在費もふくめて全額負担していただけることになった[注29]。

結果的に基調講演者全員に旅費等の支給が可能となったことは幸運であった[注30]。

3.3.2.2 学生およびポスドク等に対する宿泊費補助

助成金申請が採択されたことにより、学生やポスドク、南アジアからの参加者に対して大会期間中の宿泊費補助をおこなうことができた。具体的には、京都大学芝蘭会館や京都大学清風会館の部屋を予約し、こちらから宿泊費をしはらうことにした。大学等から金銭的援助をうけていないことを条件として宿泊助成金希望者を募集したところ、国内外から 13 人の希望者があり、全員に補助することができた[注31]。

宿泊補助希望者には中国籍の学生がおおかった。彼らの中には鈴木博之氏（オスロ大学・国立民族学博物館）の共同研究者がいたこと、鈴木氏自身も京都大学清風会館に宿泊予定であっ

注26 Matisoff 教授は第一回大会からほぼすべての大会に参加している国際漢蔵語学会の事実上の主催者である。Matisoff 教授はおそらく半数以上の大会で基調講演をおこなっている。Matisoff 教授の講演をたのしみにしている参加者もおおい。Matisoff 教授は学生時代に国際基督教大学（ICU）に留学していたこともあり、日本語に堪能であることも、依頼しやすい理由であった。孫天心教授と筆者にはエスペラントが趣味という共通点がある。孫教授との事務連絡は、大半をエスペラントですますことができた。

注27 Watkins 教授は、2008 年にロンドンで開催され筆者も参加した第 41 回国際漢蔵語学会の主催者である。また、2017 年 5 月にビルマ・ヤンゴンで開催されたビルマ語集中講座の講師でもあり、受講していた筆者にとっては先生にもあたる。そのような縁から、Watkins 教授に依頼することにした。

なお、Watkins 教授は学生時代に英語教師として大阪に一年滞在した経験があり、日本語もすこしご存知であった。日本は実に 25 年ぶりの訪問ということであった。

注28 Matisoff 教授の旅費については、国立民族学博物館の長野泰彦教授から科研費による招聘も可能であるとの申し出もあった。Matisoff 教授は長野教授の指導教授であるという事情もあった。だが、本大会では鹿島学術振興財団からの助成が 2018 年 3 月に決定していたので、長野教授の科研費を使用することはなかった。

注29 東京外国語大学の頭脳循環プログラム担当の塩原朝子准教授と岡野賢二准教授に感謝する。

注30 全体の予算のうち基調講演者にかかわる部分が助成金のおよそ半分をしめた。定職があり、金銭的にも余裕がある（はずの）研究者に助成金をつかうよりは、そうではない研究者にこそ助成金をつかうべきであったとも、今にしておもう。もしもふたたび国際学会を開催する機会があれば、基調講演者にかける金銭的余裕があるなら、南アジアや東南アジアの研究者を招待するような方向で検討したい。

注31 希望者の中には学生でもポスドクでもないにもかかわらず「お金がないから」という理由で申請してきた教員等もいた。そのような参加者は本来は補助の対象外ではあるけれども、黙認した。

たことなどから、鈴木氏に応対や連絡を依頼した[注32]。

3.3.2.3 会場費

会場については、京都大学の教員であれば誰でも利用可能な講義室を一年前から予約していた。京都大学の教員が主催するということで、教室使用料は無料であるときいていた。ところが、2018 年 3 月末に鹿島学術振興財団の助成金交付が決定したさいに会計掛に相談にいったところ、学会開催は学会の仕事であるという理由により、会計処理をひきうけていただけなかった。必然的に、京都大学の教員が主催するということではなく、あくまでも学会が主催するものである、ということになってしまった[注33]。

その結果、当初は予定していなかった教室使用料が発生することとなった。だが、調査の結果、京都大学の講義室のおおくは、教室使用料さえはらえば、誰でもかりることができる（らしい）ということがわかった。教室使用料は床面積によって京都大学で一律にきまっているということもわかった。料金は、たとえばキャンパスプラザ京都で教室をかりることと比較して、むしろ安価であるということもわかった。

当初予約していた講義室は京都大学吉田本部構内にあり、文学部に研究室がある筆者にとって便利ではあった。しかし、二階にエレベーターでいくことができず、車椅子用のトイレもない建物であり、バリアフリーの観点からは失格であった。

結局、吉田南キャンパスの吉田南総合館北棟にある比較的あたらしい講義室をかりて開催することに決定した。すべておなじ階にある講義室で大会を開催し、エレベーターも車椅子用のトイレもあることが決め手となった。車椅子の参加者はいなかったけれども、高齢者やベビーカーを使用する参加者がいたこともかんがえると、バリアフリー対策ができている施設を使用してよかった。吉田南総合館北棟にはベルラウンジとよばれるフリースペースもあり、大会参加者が休憩したり歓談することも無料で可能であることもさいわいした。

吉田南総合館の難点は、建物内での飲食が原則禁止という点であった[注34]。すなわち、休憩時間に飲み物や軽食を会場でとることはできなかった。この点に不満がある参加者もいたようではある。しかし、軽食を提供する手間と費用をはぶくだけでなく、ごみを始末する必要もほぼなくなったので、飲食禁止の会場であることはむしろ好都合だった。

注32 具体的には、深夜に到着する参加者に対する鍵のうけわたしなどを依頼した。

注33 京都大学白眉センターに相談したところ、白眉センターが管轄する教室であれば、無償でかしていただけるということであった。しかし、本大会を開催するには、白眉センターの教室は手狭であったので、おかりすることはなかった。教室を無償で利用できるかどうかは、所属機関の裁量に依存する面もあるようである。もしも筆者が、たとえば文学部の専任教員であったとしたら、文学部の教室を無償でかりることもできたかもしれない。

なお、学会は学会が主催する活動であって、筆者の京都大学教員としての活動ではないと会計掛からはいわれた。そこで念のため、大会期間中は有給休暇を取得して運営にあたった。

注34 原則禁止であるはずにもかかわらず、ベルラウンジには自動販売機があり、外から食べ物をもちこみ飲食している一般学生も散見された。

3.3.2.4 託児サービス

本大会は低予算であるから託児サービスはかんがえていなかった[注35]。

しかし、のちに託児サービスを希望する参加者がでてきた。さいわいにして助成金が採択されていたので、京都にあるアルファコーポレーションに依頼することにきめた。最終的には 2 名の幼児に対する託児サービス料と託児用の教室使用料を合計して、三日間で 20 万円以上かかった[注36]。低予算の学会にとってはおおきな出費であるけれども、若手研究者支援という観点からは有意義な出費であった。

3.3.2.5 ポスター等のデザイン

助成金申請が採択されたことにより、ポスターとランチマップをプロに依頼して作成していただくことができた。

大会用のポスターは京都大学白眉センターの行事でときどきポスター作成をしているアダチ・デザイン研究室 https://www.adachi-design-lab.com/（最終確認 2018 年 11 月 17 日）に依頼した。ポスターは関係者に送付し、研究室の前などに掲示して宣伝していただくように依頼したほか、大会当日には会場の入口に掲示しておいた。

会場周辺のランチマップについては京都大学言語学研究室の卒業生であり、イラストが上手なワンプラディット・アパサラさんに作成を依頼した。本大会だけでなく、京都大学周辺で将来おこなわれるであろう学会でも必要に応じて利用していただけるようなものを作成するようにこころがけた。ただし、本大会では紙資源の節約という観点からランチマップの印刷をしなかったので、これを実際に利用した参加者ほとんどいなかったようである。

3.3.2.6 アルバイト

大会期間中のうち、本会議が開催された三日間については、京都大学言語学研究室の大学院生であるワットクンプ・テロさんにアルバイトを依頼した。具体的には受付と託児サービス業者の人への通訳をおねがいした。このほか、参加者からの急な依頼[注37]にも協力していただいた。

3.3.2.7 歓迎会

複数の助成金がいただけたことにより予算に余裕ができたので、大会初日の映画上映会のあとで、簡単な歓迎会をおこなうことにした。京都大学本部構内のカフェ・カンフォーラの一部をかりきって、軽食と飲み物を提供した[注38]。

注35 託児サービスはいくらかかるか、日本言語学会で担当経験がある内藤真帆氏（愛媛県立医療大学）におたずねしたところ、二日で 10 万円はかかるということであった。登録料だけでまかなえる範囲をこえているので、託児サービスについては案内状でも Web ページでもふれずにすましていた。

注36 日本言語学会で託児サービスにもうしこむと一人につき一日 500 円をはらうことになっている。だが、本大会では、無料で託児サービスを提供することにした。

注37 日本のコンセントに対応する変換プラグ購入を希望した参加者について、大学生協まで案内してもらうなど。

注38 10 月になって、おなじ会場で、おなじような規模で、京都大学白眉センターによる第 9 期白眉研究者歓迎会がおこなわれた。本大会での歓迎会とはくらべものにならないほどしっかりした料理が提

3.3.2.8 懇親会関連

京都文化交流コンベンションビューローからの「京都らしい MICE」助成金がいただけたことにより、懇親会に祇園から芸舞妓さんを招待するとともに、京都の地酒による鏡割りをおこなうことが可能になった。また、旧知の篠笛奏者である森田玲・香織夫妻に依頼して、会場で演奏していただくことにした。

会場は、京都大学時計台の国際交流ホールの一室をかりきった。会場については、懇親会そのものが 2 時間だとしても、準備と片づけのための時間も必要である。本大会では、前後に 1 時間の余裕をみて、4 時間かりることにした。

料理は時計台のレストラン「ラ・トゥール」に立食形式のものを依頼した[注39]。

3.3.2.9 大会記念品

京都文化交流コンベンションビューローからの助成金がいただけたことにより、京都伝統産業ふれあい館に大会用のカバンを注文することができた[注40]。大会のあとでも日常的につかいやすいように、デザインは簡素なものとした。学会名は「ICSTLL51」というちいさなタグがあるだけのものにとどめた。

予算に余裕ができたので、京都大学ならではのおみやげとして、「時計台クリアファイル」と「素数ものさし」を提供することにした。

また、基調講演者には「西夏文字 T シャツ」をおみやげとしてさしあげるとともに、基調講演時には着用してもらうように依頼した[注41]。

3.3.2.10 雑費

雑費のうち主なものは次のとおりであった。

1. 大会用印鑑作成費
2. 海外への招待状郵送費（EMS 費）
3. ポスター印刷費

供されていた。本大会では一人 1500 円ほどの予算であったのに対して、白眉センターの歓迎会は一人 3000 円ほどということであった。一人 3000 円あれば、そこそこのものをだしてもらえるということがわかった。

注39 中野［発表年不明］によれば、懇親会の料理はあまりがちであるから、参加者全員分の料理をだしてもらうのではなく、八割程度でよいのではないか、ということであった。本大会のばあい、基調講演者などの招待参加者とその家族については懇親会費を請求しなかった。そのかわり、一般参加者の人数分だけの料理を用意してもらった。結果的に、料理はすこしたりなくなるくらいであった。しかし、篠笛や芸舞妓、鏡割りがあったおかげで、参加者の満足度は非常にたかいものであったようである。

注40 当初はカバンを注文するつもりはなかった。しかし、みやこメッセにある京都伝統産業ふれあい館にいって現物を確認してみたところ、機能性にすぐれ、デザインもうつくしいものであったので、注文することにした。

注41 Watkins 教授には「サイズがあわない」という理由で着用していただけなかったけれども、Matisoff 教授と孫教授は着用して講演してくださった。

4. ポスター発表用レンタルパネル費
5. PayPal 手数料
6. 事務用品費

3.3.2.11 税金対策

支出にかんして気がかりだったのは、税金である。学会運営は非営利事業であるから、大会登録料や懇親会費に課税されることはない。他方、基調講演者に対する旅費やアルバイトに対する謝金は課税の対象となる。

当初は税金もふくめて筆者が自分で処理する方針であった。そこで、左京税務署を訪問し、外国人に対する租税条約上の納税方法やアルバイト謝金にかんする納税方法について説明をうけた。説明をうけたところ、納税自体はそれほど煩雑なものとはおもわれなかった[注42]。しかし、さいわいにして複数の助成金をいただくことができたので、外国人に対する旅費やアルバイトに対する謝金など、税金関係のてつづきはすべて業者に依頼することにした[注43]。それほど煩雑ではないとはいえ、ほぼすべての準備を筆者ひとりがおこなっており、こまかな不手際もあったことをおもうと、比較的おおきなお金の処理の一部を業者に代行してもらえたのは本当にたすかった。

3.3.3 会計

収入と支出の管理のため、フリーの会計ソフトを利用した。最近はクラウド型のものがおおいようである。だが、本大会では高機能は必要ない。Dropbox で共有でき、操作が簡単である「記帳風月」というソフトを利用した。このソフトは開発もサポートもすでに終了しているのが難点といえるけれども、本大会の会計処理では問題とはならなかった。

3.4 Web ページ作成

大会 Web ページについては、Google Sites を利用した。理由は、チベット=ビルマ言語学研究会や言語記述研究会の Web ページ作成を通じて、筆者がすでに利用方法を熟知していたことに

注42 説明をうけてから数日後、税務署から書類がとどいた。第 51 回国際漢蔵語学会大会実行委員会という名目の団体に対する登録番号であった。この番号が、納税のさいには必要となる。11 月には納税に必要な書類もとどいた。必要な情報を記入して提出することは、それほど面倒なことではなかった。

注43 本大会のばあい、業者に対して実費の一割を手数料としてしはらうことで、すべての業務を代行していただけた。予算に余裕があるばいには、学会業務を代行してもらえる業者に依頼することで、会計処理の手間を大幅にへらすことができる。また、財団法人からの助成金を利用してこのような業者に業務を依頼するばあいには、大学等の会計掛をとおすよりもさまざまな面で融通がきくのもよい。本大会のばあい、基調講演者の Matisoff 教授は学会の前後に一週間ずつ日本国内の観光を予定しておられた。もしも科研費等で招聘していたとしたら、そのような旅程は到底みとめられなかったはずである。

くわえ、無料で利用できるからである[注44]。また、参加者の登録には Google Form を利用した。無課金で複数の項目について情報をあつめることができるからである[注45]。Google のサービスを利用すると中国から閲覧できないという批判があることは承知していた。しかしながら、プロクシーサーバーや香港 SIM カードを利用することなどによって、中国からでも閲覧できないわけではない[注46]。結果的に、中国本土からの参加者は 5 人であった。これは、中国本土以外で国際漢蔵語学会が開催されるばあいの数字としては、むしろおおいほうである[注47]。

Google Sites ではアップロードできるファイルの容量に制限があるので、大会用に Dropbox のアカウントも取得し、案内状や予稿集などのファイルは Dropbox へのリンクをはることで対応した。Dropbox も中国からは利用できない。しかし、大会参加者は京都の宿などでダウンロードできるのでおおきな問題にはならないとかんがえた。

3.5 EasyChair の利用

本大会では学会運営補助サービスである EasyChair を利用した。EasyChair は、無料機能であっても、発表要旨の受付や査読、登録者へのメール一斉送信機能などを利用することができる。有料機能では学会プログラムの作成等も可能となる。ただし有料機能を利用するためには高額の使用料が必要である。使用料は発表申込数によって変動するために、事前に申込者数をそれなりに予測する必要もある。本大会への申込人数は 50 人から 200 人程度と予想してはいたけれども、確証があるわけではなかったので、本大会では無料機能のみを利用することにした[注48]。

EasyChair を利用するには、学会が実際におこなわれるものであることをしめす必要がある。そのためには、事前に簡単なものでよいので Web ページを作成するほか、おおよその大会開催日時を確定しておく必要がある。

3.6 日程の調整

本大会では、予算の制約から、京都大学で教室をかりることを計画していた。学期中は教室をかりることはできないので、開催は必然的に 8 月または 9 月となる。また、学会開催のために

注44 無料で作成可能な Web ページサービスとしては Wix などもある。ただし筆者は利用したことがなかったので、本大会でも利用しなかった。なお、第 29 回東南アジア言語学会の Web ページは Wix で作成されたけれども、倉部慶太氏によると、Wix は環境によっては使用できないこともあるそうである。

注45 Google Form と類似したサービスとしては Jot Form もある。ただし Jot Form のばあい、無料で利用できる機能に制約があるので、利用しなかった。

注46 中国人参加者には査証の問題もある。Google をのりこえて手続きができるような人であれば、査証手続きも問題なくできるであろうという期待もあり、あえて Google を利用したという面もある。

なお、4 月に孫天心教授の提案で、中国社会科学院の黄成龍教授のブログで学会について情報を適宜公開していただいてはどうかという話がでた。そこで筆者から黄教授に依頼したけれども、返事はなかった。

注47 ちなみに中国本土で開催されるばあい、中国人参加者だけで 200 人をこえることが通例である。

注48 実際には 90 人程度のもうしこみであった。

土日祝日があてられる風潮はよくないと筆者はかんがえているので、平日の開催ときめていた。

筆者としてはできるだけはやく大会関係の雑務から解放されたいので、当初は 8 月の開催を希望していた。しかし 8 月は酷暑が予想されるので反対の声もおおかった。そこで 9 月最終週の平日に開催することで妥協した。

2018 年は 6 月に地震、7 月に豪雨、8 月は酷暑、そして 9 月は台風というように、自然災害にふりまわされた。特に 9 月の台風の被害はおおきく、関西空港が一時閉鎖においこまれた。さいわいにして、関西空港は予想よりもはやく復旧したために、学会開催への影響は最小限ですんだ。大会期間の前後にふたたび台風がきたけれども、大会期間中は台風におそわれなかったのは、不幸中のさいわいであった[注49]。

結果論ではあるけれども、会場費をはらって開催するならば、京都大学時計台の会議室であるとか、大学の外でホテルや会議場をかりてもよかった[注50]。酷暑や台風の心配がない季節に開催することをかんがえるべきであった。

3.7 PayPal 口座開設

本大会では、登録料は PayPal を通じて徴収すると最初からきめていた。他人に請求書をおくったり、他人からの送金をうけとるには PayPal のビジネスアカウントを取得する必要がある。筆者はすでにビジネスアカウントを取得していたので、新規に口座を開設する必要はなかった[注51]。口座名義については、学会名義に変更することも簡単にできた[注52]。

PayPal では、大会 Web ページに PayPal のバナーをリンクして、参加者各自に自分でログインして送金してもらうことが一般的であるとおもわれる。しかし、本大会では Web ページに PayPal のリンクをはらず、筆者が参加者に直接請求書をメールするという方法をとった。このようにした理由は、予稿集用の原稿を提出した参加者だけから登録料を徴収したかったからである。逆にいえば、予稿集の原稿をだしていない段階で登録料だけをうけとることはさけたかった[注53]。逐一メールするのは煩雑にみえるかもしれない。しかし、実際にはそれほどの手間ではなかった。むしろ、各自で操作してもらうことによって生じうる問題[注54]を回避するこ

注49 ただし、のちにきいたところでは、帰国のフライトが台風の影響でキャンセルされ、関西空港に宿泊せざるをえなかった参加者もいたそうである。

注50 もっとも、これらのホテルや会議場で開催するとなると、会場費が高額になる。予算がある学会であればともかく、本大会のような低予算の学会ではむずかしかった。また、ホテルや会議場で開催するとなると、大学の教室ほどには融通がきかなくなるほか、会場との各種やりとりが煩雑になることも予想される。

注51 PayPal のビジネスアカウントを取得するには本人確認書類を用意して申請すればよい。筆者のばあいは住基カードを使用した。

注52 本大会開催のための準備期間から大会終了までのあいだ、筆者の PayPal 口座の名義は “ICSTLL51” と変更していた。そのため、この期間に PayPal を通じて他の国際学会の参加費を送金したとき、名義上は ICSTLL51 からの送金と誤解されることがあった。

注53 ただし実際には、延長締切での登録料である 1 万円については、原稿提出よりもさきに送金してもらった。その結果、1 万円の登録料は送金したけれども原稿はださない発表者が 3 名いた。

注54 PayPal のつかいかたがわからない、所定の登録料をはらわない、原稿をださずに登録料だけはら

とのほうが重要であるとかんがえた。

3.8 銀行口座開設

非営利かつ小規模の大会運営では、銀行口座開設は必須ではない。左京税務署に確認したところ、たとえ個人口座を使用したとしても、大会のお金とその他のお金との区別が明確であるならば問題ないということであった。

本大会では、すでに PayPal のビジネスアカウントを所有していたので、銀行口座開設の予定は当初はなかった。最初に決定した鹿島学術振興財団からの助成金うけとりでも、筆者の個人口座で問題ないということであった。

しかし、のちに採択が決定した京都大学教育研究振興財団からの助成金うけとりでは、学会名義の銀行口座が必要になった。そこで、京都大学構内に ATM があり、筆者の個人口座もある三井住友銀行京都支店で学会名義の口座を開設することにした[注55]。

なお、学会名義というばあい、たとえば「第 51 回国際漢蔵語学会」という名義である必要はない。むしろ、個人名義でしか口座を開設することができないほうが一般的である。本大会では「第 51 回国際漢蔵語学会実行委員長藤原敬介」という名義で口座を開設した。このようにすることにより、口座開設に必要な押印は、個人印ですますことができた。

3.9 案内状作成

国際学会開催にあたっては、学会の開催日時や発表要旨の締切日、発表要旨の提出方法、大会登録料、懇親会などについて説明した案内状を作成する必要がある。

本大会では、2018 年 2 月に第 1 回案内、発表要旨の提出締切があった 2018 年 4 月に第 2 回案内、予稿集原稿の提出締切があった 2018 年 7 月に第 3 回案内、大会開催直前に第 4 回案内をメーリングリストや大会参加者リストにメールで送信した。

本大会の運営は、これまでの大会とはことなる部分がおおいため、できるだけ丁寧に説明す

う、発表しないにもかかわらず登録料をはらう、懇親会費との混同など、いくつかの問題が予想された。

注55 後に神谷俊郎氏からうかがった話によると、大会用の口座開設にあたっては、経験がある銀行に依頼するほうがよい。筆者は上述の理由により三井住友銀行京都支店に依頼はしたけれども、同支店は四条烏丸にあり、百万遍にある京都大学からはとおい。おそらくそのために、事務手続き上の不備が複数回発生し、余計な手間を数回かけさせられることになった。大会用の口座開設ということについて、経験がほとんどなかったようである。銀行口座を開設するならば、大学のちかくにあり、経験がありそうなところで開設するべきである。

筆者の経験では、口座開設までに三回銀行を訪問した。初回の訪問では口座開設のための説明をきいた。二回目は必要書類を記入し、関係書類を提出した。三回目に通帳とカードをうけとった。このうち初回と二回目については、事前に必要な書類を完全に用意することができるならば、一度ですますことも可能であるとおもわれる。具体的には、学会が実在するものであることをしめす客観的な書類と口座開設者の印鑑があればよい。学会の実在性をしめす書類としては、本大会のばあいは、第一回案内状の日本語訳（鹿島学術振興財団への助成金申請にあたり、作成していた）、発表予定者と発表題目の一覧表、学会 Web ページのコピー、そして鹿島学術振興財団からの助成金採択決定通知書を提示した。

ることをこころがけた。特に、発表者全員から登録料を徴収すること、そして予稿集作成のために原稿提出をもとめること、である。

しかし、結果論としては、丁寧に説明した（つもりの）ところで、そういう説明をよむ人はすくなかった。案内状を丁寧にかいたところでよまれないということであれば、むしろ案内状はできるだけ簡素にかいたほうがよかった。大会開催日時、発表要旨の提出期限、大会登録料くらいの情報があるだけでよいのではないだろうか[注56]。案内状はできるだけ簡素にして、補足情報は Web ページで随時案内するというくらいでよいようにおもわれる[注57]。

3.10 招待状作成

日本にくるために査証が必要となる参加者に対しては、日本大使館や日本領事館に提出する書類のひとつとして、招待状を作成する必要がある。

本大会では、中国とインドからの参加者のために、招待状を作成した。ただし、事務作業をできるだけ簡素化するために、査証が必要な参加者ができるだけすくなくなるような方策を講じた。すなわち、予稿集用の原稿の事前提出と、大会登録料の PayPal による事前支払いをもとめた。原稿を事前に提出し、PayPal で支払いをしてくれるような参加者ならば、査証てつづきも的確におこなってくれるだろうという期待があった[注58]。

参加者の中には、査証目的ではなく、所属機関への出張手続きや旅費申請のために招待状を必要とする人もあった。

大会開催以前には、このような書類を作成することが、事務的に一番面倒であるとかんがえていた。だが実際にやってみると、書類作成自体はそれほど面倒なことではなかった。むしろ問題は、参加者の中には査証申請てつづきのことを理解していなかったり、てつづきを開始するのがおそかったりする人がいるという点であった。特に中国からの参加者については、海外渡航経験が豊富で手続きを熟知している参加者と、まったく何もしらない参加者とのちがいがおおきかった。本大会では、経験豊富な参加者がほかの参加者のために中国語で手続きを説明してくれたので、煩雑な説明をする必要がなくなり、ありがたかった[注59]。

注56 案内状をできるだけ丁寧にかくことにきめた背景には、2016 年と 2017 年に中国で連続して開催された国際漢蔵語学会に対する個人的な不満もあった。この両大会では、Web ページがなかなか作成されない、作成されてもしばしば接続できない、接続できても必要な情報が掲載されていない、案内状がきても参加費がいくらになるかの情報すらない、プログラムが直前（ひどい時は当日）になるまで発表されない、などといったさまざまな問題があった。そのような運営はすべきではないという経験から、丁寧に説明しすぎたきらいはある。

注57 2019 年に開催が予定されている第 29 回東南アジア言語学会、第 52 回国際漢蔵語学会、第 25 回ヒマラヤ諸語会議、第 24 回国際歴史言語学会など各種国際学会においては、すくなくとも第一回案内送信時点においては、会費がいくらになるかを明示しているものはなかった。大会主催者としては、参加人数や各種助成金の獲得状況が確認できるまでは、情報をだしたくないということであろう。そして、そのことに対して参加者は不便を感じていたとしても、そのような情報がないという理由で応募をとりやめるほどのことにはなっていないとおもわれる。

注58 聴講のみの参加者から登録料を徴収しないことにした背景には、登録料を徴収するならば招待状をださなければならなくなる可能性があり、それはさけたかったという面もあった。

注59 なお、こちらから必要な書類をおくったとしても、それがとどいたかどうかを連絡しない人や、査

筆者の分野では、日本で国際学会を開催するとなると、中国からの参加者に対して特別な対策が必要になる。中国事情にくわしく、中国語をしっているような人から助力してもらえる体制があったほうがよい。本大会では、林範彦氏と鈴木博之氏にたすけられた。

3.11 メール対応

本大会では、大会専用のメールアドレスとして icstll51@gmail.com を用意した。パスワードは大会運営委員全員にしらせておいた。筆者が急病でたおれたり、何らかの事情で大会運営にたずさわれなくなる可能性を想定していたからである。ただし、結果的にはすべてのメール対応は筆者が一人でおこなった。

Web ページでは「なかなか返事がこないとしても、一週間は根気よくまってください」という注意がきをしておいた。多忙のなか大量のメールがきても、一週間あれば返信可能であると想定していた。実際には、それほどおおくのメールがくることはなかったこともあり、ほとんどすべてのメールに対して、24 時間以内に返信することができた。

大会開催以前には、メールでの対応も煩雑であることが予想された。しかし実際には、脚注 17 で前述した苦情に対する対応以外には、それほど面倒なことはなかった[注60]。

メール対応での反省点としては、大会関係の一斉メールを送信しすぎた、という点をあげることができる。大会関係の必要な情報は案内状に丁寧にかいた（つもりの）ほか、Web ページも頻繁に更新して告知していた。それでも、EasyChair での登録方法からはじまり、発表要旨の提出方法、参加費の支払い方法、予稿集のあつかい等について、さまざまな誤解があった。何か誤解している人が一人でもいるたびに、潜在的な誤解者はさらにいる可能性があるとかんがえて、逐一補足説明のメールを一斉送信していた。これはかなり不評であったようである。

筆者としては丁寧に説明したいということではあったけれども、なにごとも簡素にすますほうがよい。何か誤解している人がいたとしても、必要に応じて個別にメールするにとどめ、全体に一斉メールをおくることはやめるべきであった。

3.12 プログラム作成

3.12.1 基調講演

国際漢蔵語学会では、例年三人ほどの基調講演者がいる。大会は近年は通常三日間であり、毎日一人一時間ほどの基調講演があることが普通である[注61]。基調講演は、通例にしたがい、本会議期間中に毎日ひとつおこなっていただくことにした。二日目の懇親会では会場を移動する

証を申請しても発給されたかどうかを連絡しない人が中国人を中心におおかった。

注60 「メールに英語で対応するのは大変でしょう」という声をしばしばきいた。だが筆者のばあい、拙速を旨とする対応に徹した。すなわち、文法的なただしさであるとか、ただしい綴字であるとか、ふさわしい単語の選択であるとか、簡潔な表現であるとかいったことよりも、すぐに返事をすることを第一にかんがえた。また、日本語で返事をしても理解される参加者に対しては、たとえ英語で連絡があったとしても、日本語で返信することによって手間をはぶいた。

注61 ただし中国で開催されるばあいには、一人 15 分程度で一日に 5 人くらいの基調講演がおこなわれることもめずらしくない。

ので、その誘導が簡単になるように、一日の最後の枠に基調講演を配置することにした。このようにすることにより、同時間帯に一部屋かりるだけですみ、会場費を節約することもできた。

基調講演については、京都大学オープンコースウェア（KUOCW）として公開することを計画した。これは、京都大学高等教育研究開発推進センターに申請すれば、無料で撮影・編集・公開をしてもらえるというものである[注62]。三人の基調講演者は、講演が KUOCW として公開されることを快諾してくださった[注63]。

3.12.2 口頭発表

口頭発表の申し込みについては、まず要旨の提出をもとめた。要旨には、「例文と参考文献をのぞいて」500 語という制約をもうけた。これは、「例文と参考文献は語数にかぞえない」という意図であった。しかし実際には、こちらの意図が通じず、「例文と参考文献はのせてはいけない」と理解した人がそれなりにいたようである。

要旨は EasyChair から PDF ファイルで提出してもらうことにした。EasyChair では、MS-Word などで作成した文書をコピペしてはりつけて提出することが一般的である（ような気がする）。PDF は、要旨とは別に、ハンドアウトを提出するために使用される傾向にある。本大会では、EasyChair の設定を変更し、PDF ファイルのみが提出できるようにした[注64]。

だが、PDF のみの要旨提出は大失敗であった。もしも EasyChair にテキストファイルではりつけてもらうだけであれば、要旨集を簡単に作成することができた。しかし、PDF で提出してもらったために、簡体字と繁体字の処理だけでなく、さまざまな音声記号の処理にも手間がかかった。Unicode に対応している XeLaTeX を使用すれば簡単にできるとおもっていたけれども、XeLaTeX のあつかいになれていないこともあって、おもうようには編集できなかった。結局、作業があまりにも煩雑であるので、5 割程度は完成していた要旨集ではあったけれども、作成は途中で断念することした[注65]。ただし、予稿集のほうは比較的簡単に作成することができたので、要旨集の代用にはなったとおもわれる。

また、予稿集用の原稿提出は大会実行委員会に直接メールするように告知していたにもかか

注62 京都大学大学院人間・環境学研究科の藤田耕司教授が主催した第 9 回言語進化の国際会議の報告書が京都大学教育研究振興財団に掲載されており、そこで講演を KUOCW として提供できるということをしった。

注63 三人の基調講演のうち、2019 年 3 月現在、Matisoff 教授と孫教授のものについては `https://ocw.kyoto-u.ac.jp/ja/international-conference/79/video` からのリンクで視聴することができる。Watkins 教授のものについても、準備ができしだい、公開される予定である。撮影から編集までご尽力くださった京都大学高等教育研究開発推進センターの藤岡千也特定助教と京都大学文学部地理学専修の高橋徹大氏に感謝もうしあげる。

注64 筆者は LaTeX を常用している。LaTeX で作成した要旨をわざわざテキストファイルにして EasyChair にはりつける作業には以前から辟易していた。LaTeX での標準的な音声記号入力パッケージである TIPA を使用して作成した PDF からテキストファイルにすると、音声記号ではなくアスキーコードになってしまうため、あらためて音声記号に置換する必要があるからである。こうした個人的な経験から、PDF のみの提出をうけつけることにした。

注65 MS-Word に対する嫌悪と、LaTeX に対する執着がもたらした失敗である。多数の参加者がいる学会では、世間に妥協したほうが作業が楽になるという面があることを学習した。

わらず、EasyChair になれている参加者の中には、EasyChair に予稿集原稿の PDF を提出する人がいた。EasyChair では、要旨はコピペ、予稿集原稿は PDF で提出という方法が一般的である（らしい）からである。だが、このようにすると、本大会においては、最初に提出した要旨が上書き消去されてしまうため、不都合であった。

EasyChair を使用するさいには、一般的な使用方法にしたがったほうが、結局のところ手間がかからないということがよくわかった。

さて本大会のばあい、最終的に 86 件の発表申し込みがあった。採否の審査は筆者がほぼ一人でおこなった。審査基準は簡単なものとした。すなわち、目的と方法と結論と具体例が提示されてさえいれば、内容の妥当性は考慮しなかった。本大会では予稿集原稿の提出ももとめているので、内容の当否については読者に判断してもらうこととし、すこしでもおおくの発表をうけいれることを優先した。上記の基準にてらして不採択候補となったものについては、ほかの大会実行委員にも意見をもとめ採否を決定し、最終的に 79 件が採択となった。ただし、その後 11 件がキャンセルされたので、実際の発表は 68 件であった。

なお、口頭発表は、日本語または英語でしてもよいということにきめた[注66]。日本で開催するからには、日本語での発表は可能にすべきであるとかんがえたからである。しかし、実際に日

[注66] 国際漢蔵語学会での発表は、中国以外で開催されるときには、ほとんど常に英語のみである。中国で開催されるときには、中国語による発表が多数ある。なお、Matisoff［2017: 3］によると、チベット語による発表も過去にはあった。漢蔵語学会というからには、チベット語で発表する権利も当然あるべきではあるだろう。

国際会議における公用語の問題については大津由紀雄研究室編［2010: 4–5］に次のような記述がある。「多様な言語を母語とする人たちが集う国際会議であれば、公用語が必要となります。（中略）会議の公用語が英語でなくてはならない必然性はありません。（中略）英語という選択肢は大きな問題があります。それは、英語を母語とする人たちとそうでない人たちと［ママ］間に不公平が生じるからです。その意味では、その言語を母語とする人がいない言語を会議の公用語とするのが理想です。エスペラントのような人工言語ならぴったりです。しかし、エスペラントの普及率を考えると、これまた現実的ではありません」。

なお、国際漢蔵語学会におけるフランス語の消長について、橋本［1977: 33］は次のように記録している。「これは学問以外のことだが，国際語としてのフランス語の凋落ぶりを，これほど切実に感じさせた学会は，これまでになかった。ヨーロッパでひらかれ，仏語圏からの参会者もすくなくなかったのに，フランス語でおしとおしたのはオードリクール教授だけで，あとはフランス語ではじめて，途中から英語にスイッチするありさまで，シャバンヌ，ペリオ，マスペロの昔のことを多少なりとも又聞きしているわれわれは, ことに感無量であった」。オードリクール教授はフランス語での発表に徹していたようであり、藪［1993: 34］には次のような報告がある。「オードリクール（André-George Haudracourt）教授による，シナ語・ミャオ=ヤオ諸語・カダイ諸語について，最小限の言語事実の生起によってもたらされる最大限の言語変化の解釈に関する招待講演があった（講演はフランス語で行われ英語の通訳がついた）」。また、藪［1995: 44］はパリで開催された大会の中で次のように報告している。「会議の使用言語は，フランスというお国柄から，かなりの部分がフランス語で占められるのかと推測していたが，豈に図らずや，筆者の出席した作業部会・全体会議の分科会ではたった 2 つの例を除いてすべて英語であった（ちなみに, 2 つの例外はチベット語と北京語による発表で，巧みな英語による通訳がついた; なお，配布資料にはわずかながらフランス語のものがあった）」。筆者がしるかぎりでは、最近の国際漢蔵語学会でフランス語による発表がおこなわれたことはない。

本語で発表した人は留学生一名だけであった[注67]。

3.12.3 ポスター発表

本大会での工夫は、口頭発表のほかにポスター発表も可能としたことである。国際漢蔵語学会の歴史の中でポスター発表がおこなわれたことはおそらくない。

ポスター発表も可能としたのは、口頭発表希望者が多数にわたるばあいにはポスター発表にまわってもらうことで、口頭発表の場所と時間を確保したかったからである。中国からの参加者や、日本に留学している中国人大学院生からの発表申し込みが多数あると予想していた。

しかし、実際の申込みは 8 件のみであり、すべて採択となった。ただし、のちに 4 件がキャンセルされたほか、のこり 4 件のうち 1 件については、最後まで連絡がなく、大会登録料もしはらわれなかったので、最終プログラムからは削除した。最終的には 3 件のポスター発表になった。

ポスターをもちはこぶのは荷物になるので、希望者には無料で印刷するとつたえた。3 件のうち 2 件は印刷希望があったので、こちらで印刷した。

3.12.4 ワークショップ

国際漢蔵語学会では例年、本会議の前日にさまざまなテーマのワークショップがひらかれている。本大会でも、ワークショップ開催希望者をつのった。一件のもうしこみがあった。しかし、内容的に不適切であると大会運営委員で判断し、不採択とした。その結果、ワークショップは開催されなかった。これは、筆者がしるかぎりの国際漢蔵語学会では例外的なことである。

ワークショップは開催されなかったけれども、国際漢蔵語学会ではおそらくはじめてのこころみとして、映画を上映することにした。フランスを代表するビルマ学者である Denise Bernot 教授の研究人生をまとめた記録映画である *Denise Bernot : Langues, Savoirs, Savoir-faire de Birmanie* を、製作者の一人である Alice Vittrant 教授の好意により、上映することができた[注68]。この映画はフランス語によるものであるけれども、英語の字幕つきのものを上映した[注69]。

注67 2018 年の第 50 回国際漢蔵語学会の基調講演のうち、孫天心教授によるものと、Randy J. LaPolla 教授によるものとは、スライドは英語であったけれども、口頭発表言語は中国語であった。このような前例があったことも、日本語での発表をみとめる理由となった。

ところで、筆者も参加した 2019 年 1 月にカンボジアのシェムリアップで開催された第 1 回国際アジア言語人類学会でも、スライド等に英語を使用するのであれば、実際の口頭発表言語は自由であるという方針があった。しかし、筆者の見聞の範囲では、英語以外の言語で口頭発表していたことはなかった。あらゆる言語での発表を許容するというのはひとつの理想ではあるけれども、実際にそのように実行する人はいなかったということである。

注68 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の星泉教授が中心になって制作された「チベット牧畜民の一日」（カシャムジャ監督）を 2017 年 5 月 7 日に十三の第七藝術劇場で鑑賞する機会があり、当日会場にきておられた星教授に本大会での上映可能性について打診した。しかしながら、さまざまな事情から上映はかなわなかった。

注69 この映画はインターネット上で Vittrant & Mersan［2016］として公開されている。ただし、そちらはフランス語版のみのようである。また、日本語訳と訳注は川上・藤原［2018］で公開されている。

3.12.5 プログラム発表

本大会では、大会二ヶ月前にはプログラムを公開することを目標としていた。

2018 年 4 月の発表要旨締切後すぐに、発表者と発表題目一覧をまず公開した。2018 年 7 月の予稿集原稿提出締切後には、仮プログラムも公開した。仮プログラムでは、提出された原稿にもリンクをはって、ダウンロードできるようにした。

1 万円の参加費をはらうことに同意した参加者については 2018 年 9 月に原稿の締切を設定したために、最終的にプログラムが確定したのは大会一週間前となってしまった。ただし、7 月に公開した仮プログラムとほとんど変更がなかったので、参加者にとって不利益はなかったとおもわれる。

プログラム作成にあたっては、事前に Google Form で登録してもらうときに、発表希望日時も記入してもらうようにした。司会を依頼してもよいかどうかについても、Google Form で記入してもらった。

本会議の口頭発表は発表者の希望日時を最優先とし、関連する言語または地域ごとにセッションをまとめて、プログラムを作成した。司会者は、各セッションの言語について造詣がふかい人に依頼するように配慮した。中国人がおおいセッションでは、中国語をしっている日本人に司会を依頼するようにした。

プログラム作成では、近年の日本言語学会にならい、発表と発表の間に 5 分の移動時間をいれるようにした。この 5 分があったおかげで、プログラムは順調におこなわれることになった。管見のかぎりでは、国際漢蔵語学会では初のこころみである[注70]。今後の国際漢蔵語学会でも、今回のこころみが継続されることを期待している。

3.13 予稿集作成

国際漢蔵語学会は、初期においては、参加者全員が原稿を事前に配布し、それをもとにひとつの会場で討論がおこなわれていた[注71]。しかし、学会がおおきくなるにつれ、複数の会場で同時

注70 筆者の経験の範囲では、国際漢蔵語学会にかぎらず、国際学会においてプログラムの間に 5 分程度の移動・休憩時間をいれているところはほとんどない。

注71 “As with the first meeting, an effort was made to circulate the papers in advance of the conference. In principle each participant was merely to give a brief summary of his paper (which his colleagues had presumably had time to read in advance), after which the paper would be thrown open for general discussion”［Matisoff 1973: 153］、「研究発表者は事前にその論文の全文を委員会に提出する事が義務ずけられており，委員会はそれらの論文を全部複写して，参加者の全員にあらかじめ郵送して置く」［橋本 1970: 61］とか「一般発表に関しては一貫して守られてきた伝統がある。それは、学会発表ではディスカッションを最重要視するという点である。このため、発表者にはあらかじめ参加者名簿が郵送され、各人の責任で自分の発表要旨やハンドアウトを参加者全員に配布しておかなければならない。これを怠ると当日発表できない」［長野 1993: 64］という報告がある一方で、「この学会のいいところは（中略）事前にペーパーの全文を参会者に配布しておいて，大会はその討論から始める（ことになっている）ところにある。今回の大会は（中略）最終的には 22 篇のペーパーになったが，このうちで全文が事前に筆者の手元に届いたのは，たったの 7 篇丈であった」［橋本 1975: 25］という記録もある。

に発表がおこなわれるようになった。配布資料を用意する参加者もすくなくなっていった。現在では、配布資料なしで、パワーポイントやキーノートによるスライドでの発表が主流となっている[注72]。筆者の経験では、スライドのみの発表では、例文を確認する余裕がなく、発表をよく理解することができない。また、非母語話者にとっては、てもとに資料がないまま英語の発表をききつづけるのは苦痛でもある。

そこで本大会では、事前に予稿集を作成することにした[注73]。ただし、予稿集といっても、ページ数や体裁に制限はもうけなかった。スライドを PDF ファイルにしたものやハンドアウト程度のものでもうけつけることにした[注74]。基調講演をふくめて全部で 71 あった発表のうち 63 の発表について事前に原稿が提出された[注75]。提出された原稿はひとつの PDF ファイルにまとめて予稿集とし、大会 Web ページで公開した。予稿集は最終的には 1085 ページになった。

本大会では紙媒体はいっさい印刷しない方針であり、必要に応じて予稿集のファイルを事前にダウンロードするように告知してはいた。だが、会場で予稿集を参照しながら聴講している参加者はほとんどいなかった[注76]。それでも、予稿集を公開しておけば、会場にこられない研究者も参照することができるので、予稿集作成自体は決して無駄なことではないだろう。なお、本大会終了後、京都大学学術情報リポジトリでも予稿集は公開されるようになり、各論文に対して Permalink も付与されるようになった[注77]。

注72 “Nowadays our conferences have grown enormously, to the point where several hundred participants are often involved. There are naturally many simultaneous sessions, so that it is impossible to get complete sets of the papers. And in fact technological advances like PowerPoint have largely replaced printed handouts, so that many presentations leave nothing tangible behind. There is no question of reading anybody’s paper in advance, unless it has been sent out electronically.” ［Matisoff 2017: 2］

注73 過去の国際漢蔵語学会では、何度か予稿集が出版されている。ただし、予稿集とはいっても、大会のあとに出版される Proceedings であり、大会期間中に参照できるものではない。

注74 雑誌によっては予稿集に掲載された原稿の投稿をみとめないものがある。したがって、予稿集への原稿提出をもとめるべきではない、という意見もあった。だが、予稿集に掲載された原稿の投稿をみとめる雑誌も、多数存在する。だから、予稿集への原稿提出をもとめることが、参加希望者の不利益になるとはかんがえなかった。

注75 期日までに提出されなかった原稿は、3 件の基調講演のうち 2 件と、翌年の主催者による発表ということで特別に配慮した 4 件の発表、そして 1 万円の参加費をはらうことで締切を延長した 15 件の発表のうちの 3 件である。特別あつかいをはじめると、さまざまな例外が生じるという例である。

注76 実際のところ、ほぼすべての論文が事前に印刷配布されていた初期の大会においても、かならずしも全部の論文がよまれていたわけではなかった。橋本［1973: 15］には次のような記述がある。「研究発表者は必ず全文をプリントして，大会までに参会予定者に配布してあらかじめ読んで来て戴き，会議はいきなりその討論から始めるということにしていたのである。これはしかし一部の人の心得違いから，もうイサカ市の会議（第 3 回）あたりからズルズル破られてしまった。その後の或る会議では，当日 100 頁近い論文を配布し（とてもそんなものを 2 分間や 3 分間で読めたものではない），しかも研究発表はその梗概を実に 56 分も喋りに喋り（中略）56 分間も喋られるのにもまいるが，52 篇の論文も大変である。二三週間のうちにそれを全部読み，しかも討論のための準備をするなどというのは神技に近い。（中略）結局参会者の各自が，自分の守備範囲に近いものを選んでザットと眼を通して置く—という他の学会の大会の場合と少しも異ならぬことになって仕舞った」。

注77 予稿集は https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/235256（最終確認 2018 年 11 月 27 日）からすべてダウンロード可能である。

4 大会期間

4.1 本会議前日（2018-09-25）

本会議前日にはポスター発表と映画上映、そして歓迎会がおこなわれた。

ポスター発表は吉田南総合館北棟一階のベルラウンジでおこなわれた。ポスター会場では同時に受付も設置し、参加者に名札と記念品（大会用カバン、京大時計台クリアファイル、素数ものさし）を配布した。名札はミシン目が二つはいって三つ折りできるものを用意した。名札のほかに、大会登録料と懇親会参加費の領収書もかねるものとした[注78]。

受付は混雑が予想されたので、日本からの参加者については受付にこないように事前に依頼した。日本からの参加者については全員の顔と名前がわかっているので、時間があるときに個別に対応することにきめていた。また、受付は中国人とその他の外国人にわけ、中国語を解する林氏や鈴木氏、また林氏の学生である陳鴻氏に中国人参加者への対応を依頼した。

ベルラウンジの一角には、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の名誉教授である新谷忠彦先生の著作を展示し、希望者に配布した。新谷教授の著作にはおおくの参加者が関心をもったようで、20 種類、のべ 200 冊以上展示したうち、大会期間を通じて 100 冊以上がもちかえられたようである。

ポスター発表は 3 件あり、そのうち 1 件は発表者本人が不在で、後日口頭発表する予定の人が代理で発表していた。ポスター発表は、予定の時間をすぎても見学者があらわれるほど盛況であった。

ポスター発表のあとは吉田南総合館北棟三階に会場をうつし、*Denise Bernot : Langues, Savoirs, Savoir-faire de Birmanie* の上映会がおこなわれた。映画は大変好評であった。

映画上映のあとは、京都大学本部構内のカフェレストラン・カンフォーラで歓迎会がおこなわれた。歓迎会には参加者を無料で招待した。40 人ほどの参加者があった。

4.2 本会議初日（2018-09-26）

本会議初日からは、すべての発表が吉田南総合館北棟三階の教室でおこなわれた。本会議初日は三会場で合計 29 件の口頭発表があり、最後にロンドン大学 SOAS の Justin Watkins 教授による基調講演があった。

会場の外の廊下では、前日にひきつづき、新谷教授の著作を展示した。新谷教授の著作は、最終日まで展示することになった。

また、本日から三日間にわたり演習室を一室かりきって、託児室とした。

このほか、あるインド人参加者から「大会参加証明書」がほしいといわれたので、急遽作成した。

注78 近年、各種学会でこの種の名札がよく使用されている。本大会では京都大学生協コンベンション・サービスセンターに作成を依頼した。75 人分用意し、吊り下げ名札入れもふくめて 2 万円ほどかかった。

4.3 本会議二日目（2018-09-27）

本会議二日目は二会場で合計 20 件の口頭発表があり、最後にカリフォルニア大学バークレー校の James A. Matisoff 教授による基調講演があった。

基調講演のあとは、京都大学時計台二階の国際交流ホールで懇親会がおこなわれた。懇親会では、はじめに森田玲・香織夫妻による篠笛演奏があり、その後で基調講演者三名による鏡開きがおこなわれた。

食事は時計台のレストラン「ラ・トゥール」による立食形式のブュッフェとした。ベジタリアンに配慮してベジタリアンメニューも用意した。

食事中に森田夫妻による篠笛の演奏と、祇園からの芸舞妓さんによる歌と踊りが披露された。

懇親会の途中で、大会の常連であり Daai Chin 語の研究者である Helga So-Hartman さんの訃報が Justin Watkins 教授と David A. Peterson 教授から報告され、参加者が黙祷をささげた。

その後、2019 年の第 52 回大会の主催者であるシドニー大学の Mark Post 講師と Gwendolyn Hyslop 講師から、次回大会について説明があった。2019 年は国際先住民言語年であり、それを記念することもかねて、6 月に国際漢蔵語学会を開催したあと、連続してヒマラヤ諸語会議（Himalayan Languages Symposium）も開催するということであった。さらに、ひきつづいてキャンベラのオーストラリア国立大学で国際歴史言語学会も開催され、チベット・ビルマ語関係のパネルもひらかれるという案内もあった。

インド工科大学コクラジャール校の Bihun Brahma 講師からは、2020 年 1 月ごろにアッサム州・コクラジャールで開催が予定されている第 11 回国際東北インド言語学会の案内もおこなわれた。

このほか、Poll Everywhere をもちいたアンケート形式による余興をおこなった。

懇親会には 70 人ほどの参加者があり、篠笛と芸舞妓を中心に大変に評判がよかった。

4.4 本会議三日目（2018-09-28）

最終日である本会議三日目は二会場で合計 19 件の口頭発表があり、最後に台湾・中央研究院の孫天心教授による基調講演があった。

本会議前日をふくめて四日間のあいだ、予定された発表はすべて順調におこなわれた。当日に突然キャンセルされることもなく、発表の順番が突然変更されることもなかった。これは、筆者が経験してきた国際学会のなかでは、はじめてのことである[注79]。トラブルというほどのトラブルもなく[注80]、盛況のうちに大会が終了した。

[注79] 日本言語学会をはじめとした日本国内の学会では、発表のキャンセルや順番の変更が突然おこなわれるようなことはありえない。国内学会では可能であることが、国際学会になるとなぜできなくなるのだろうか。おそらく、聴衆よりも発表者の都合を優先する結果、土壇場になってさまざまな変更がおこなわれているものとおもわれる。また、筆者が参加してきたような国際学会（国際漢蔵語学会、ヒマラヤ諸語会議、東南アジア言語学会、東北インド言語学会、国際ビルマ研究集会、国際ベンガル学会）は、比較的おおらかなところであるということはいえるかもしれない。

[注80] 発表者が持参したパソコンの画面がスクリーンにうつらないというトラブルは何度かあった。とは

大会には、部分的な参加者もふくめて、日本、中国、台湾、香港、マカオ、シンガポール、オーストラリア、インド、イスラエル、ノルウェー、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカという、14 の国や地域から約 100 名の参加があった。

5　大会後

大会後には論文集を編集する計画があった。しかし、チベット・ビルマ語学関連の論文を XeLaTeX による投稿のみでうけつけることにしたせいもあってか、投稿希望者がほとんどいなかった。そこで、大会実行委員会として論文集を編集することは断念した。

大会後の重要な作業としては、助成金助成団体に対する報告書作成があった。報告書のなかで会計報告もおこなった。

このほか、大会の経験を第 90 回言語記述研究会で報告した。

6　おわりに

以上、第 51 回国際漢蔵語学会について、大会開催の準備段階を中心に報告した。些末な記述がおおかったかもしれない。だが「国際シンポジウムを開催するということは瑣末なことの集大成に他ならない」［梶 2005: 1］ということが、よくわかっていただけたのではないかとおもう。

国際漢蔵語学会は自由な学会である。主催者の裁量で大会を運営することができる[注81]。また、日本におけるチベット・ビルマ語研究の世界は風とおしがよいこともあり、関係する他の研究者から「ああせよこうせよ」と指示されることも一切なかった[注82]。ただし、この種の国際学会としては異例の運営方針（予稿集原稿の事前提出、紙媒体の廃止など）をとったことで、かえって手間やトラブルの原因になった面もあったことは否定できない。不合理あるいは不親切におもえても、一般的な大会運営にしたがっていれば、さらに手間をはぶくことはできただろう。

大会を通じて印象的だった点はふたつある。ひとつは、参加者の中でも最年長の Matisoff 教授が本会議前日から最終日にいたるまで、朝一番の発表から最後の基調講演まですべての発表を誰よりも熱心に聴講し、メモをとり、積極的に質問もしていたということである。その姿に刺激をうけた若手研究者はおおかったにちがいない。もうひとつは、中国や台湾からの中華系若手研究者が多数参加していたことである。欧米やオーストラリアを中心に留学生あるいはポスドクとして滞在しているこれらの中華系若手研究者は、発表内容も充実していた。十年二十年先には、彼らがこの分野を牽引していくであろうことを予感させた。

いえ、発表と発表の間の 5 分間の休憩のあいだにすべて解決していた。近年の日本言語学会のプログラムにならい、発表の間に 5 分の休憩をいれたのは非常によかった。

注81　「学会の体裁は全く主催者の自由裁量に属する」［長野 1993: 64］。だが、国際学会のなかには、大会事務局本部から逐一指示があり、開催校の裁量が制限されているものもあるときく。

注82　分野によっては、学閥や師弟関係あるいは科研費等の共同研究者といったしがらみがあり、各方面に忖度したり、重鎮の顔色をうかがわなければならなかったりするところもあるらしい。

附録・第 51 回国際漢蔵語学会プログラム

以下に掲載するのは最終的な大会プログラムである。

- 発表はすべて吉田南総合館北棟東側三階でおこなわれた。
- #: 引用に際して著者の許可が必要なもの。
- *: 参加費がしはらわれ、原稿も提出された発表。原稿へのリンクは、大会専用の Dropbox にはってある。
- **: 参加費はしはらわれたけれども、原稿は提出されなかった発表。

2018-09-25

Poster session: Belle Lounge (1st floor, West side)

14:00–15:30

*Acoustic and articulatory study of the three-way laryngeal contrast in coronal stops of Balti
. . . . . Hussain, Qandeel, Jeff Mielke and Frankie Pennington

*Tone group reconstruction in iGeneration Taiwanese
. . . . . Hsiao, Yuchau

*Linguistic variations of different age groups in the Mangdep dialects
. . . . . Nishida, Fuminobu

Movie screening at Room A (3rd floor, East side)

15:45–16:20

Denise Bernot : Langues, Savoirs, Savoir-faire de Birmanie

Welcome Drink Service 17:00–19:00

2018-09-26

Session 1 9:00–10:40 in 3 rooms (3rd floor, East side)

Room A: Rgyalrong and Naxi

Chair Satoko Shirai

9:00–9:30

*Rethinking the orientational prefixes in Rgyalrongic languages: The case of Siyuewu Khroskyabs
. . . . . Lai, Yunfan, Wu Mei-Shin and Johann-Mattis List

9:35–10:05

*Associated motion in the Brag-dbar dialect of Situ Rgyalrong

. . . . . Zhang, Shuya

10:10–10:40

*Floating Tone of Pianding Dialect of Naxi

. . . . . He, Likun and Liu Yan

Room B: Loloish Morpho-Syntax

Chair Kazue Iwasa

9:00–9:30

*'Give' serial verb constructions in Zauzou : beyond benefactive and malefactive

. . . . . Miyagishi, Tetsuya

9:35–10:05

*Measuring the scalar property of predicates: the intensifier *xã*13 in Zauzou

. . . . . Li, Yu

10:10–10:40

*Grammaticalization of the take-verb *si*^{21} in Nuosu in Sichuan, China

. . . . . Ding, Hongdi

Room C: Tai-Kadai

Chair Atsuhiko Kato

9:00–9:30

No presentation

9:35–10:05

*Word Formation and Morphological Processes in Lakkja

. . . . . Fan, Wenjia

10:10–10:40

**Some Sino-Tai Words in *Chuci*: Semantic Retention or Substratum Effects? [Abstract]

. . . . . Luo, Yongxian

Break 10:40–11:00

Session 2 11:00–12:40 in 3 rooms (3rd floor, East side)

Room A: Himalayish

Chair Alexander Coupe

11:00–11:30

*Transitivity markers in West Himalayish

. . . . . Widmer, Manuel

11:35–12:05

*Motion Expressions in Kathmandu Newar: Distinctive coding of deixis and path
. . . . . Matsuse, Ikuko

12:10–12:40

*Non-finite forms of Kinnauri verbs: stems and infinitives
. . . . . Takahashi, Yoshiharu

Room B: Qiangic

Chair Fuminobu Nishida

11:00–11:30

*Multifunctionality of the Demonstrative Enclitic in nDrapa
. . . . . Huang, Yang

11:35–12:05

*A geolinguistic analysis of directional prefixes in Qiangic languages
. . . . . Shirai, Satoko

12:10–12:40

#*Verb for ‘to butcher, to kill’ from ‘flesh’ — an attempt in Burmo-Qiangic dialectology
. . . . . Gong, Xun

Room C: Written Languages

Chair Nathan Hill

11:00–11:30

#*Once again, on the “dual” suffix of Tangut
. . . . . Arakawa, Shintaro

11:35–12:05

*A new study of the Kubyaukgyi (Myazedi) inscription
. . . . . Miyake, Marc

12:10–12:40

*Sino-Vietnamese Readings in the 15th Century — Evidence from the Chữ Nôm materials
. . . . . Shimizu, Masaaki

Lunch Break 12:40–14:00

Session 3 14:00–16:15 in 3 rooms (3rd floor, East side)

Room A: TB Historical Linguistics

Chair David Bradley

14:00–14:30

*The linguistic prehistory of the western Himalayas

. . . . . Widmer, Manuel

14:35–15:05

*What can Tamangic medial *l* tell us about Bodish verbal morphology?

. . . . . Zhuang, Lingzi

15:10–15:40

*The ancestry of Sino-Tibetan populations and languages

. . . . . Wu, Mei-Shin, Yunfan Lai and Johann-Mattis List

15:45–16:15

*Towards a computer-assisted reconstruction of Proto-Burmish

. . . . . Hill, Nathan and Johann-Mattis List

Room B: Miscellaneous Topics

Chair Yongxian Luo

14:00–14:30

*An interim field report of Suma and Mlabri: Two endangered languages of Laos

. . . . . Kato, Takashi

14:35–15:05

#*Cantonese Equative Constructions in Typological Perspective

. . . . . Lai, Yik-Po

15:10–15:40

*The Competition between Contour and Register Correspondence in Music-to-Language Perception: Evidence from Mandarin Child Songs

. . . . . Ling, Wang-Chen

15:45–16:15

*Relative Clauses in Lan Hmyo

. . . . . Taguchi, Yoshihisa

Room C: Syntax of Chinese Dialects

Chair Norihiko Hayashi

14:00–14:30

#*On the semantic extension of the existential/possessive negator *mau*^{33}*tæ*^{21} 有得 in Rucheng (Sinitic)

. . . . . He, Lisha and Shanshan Lü

14:35–15:05

*Verbal aspects and verbal classifier structures in Hui Chinese

. . . . . Liu, Boyang

15:10–15:40

*On the syncretism of *tau*^{55} 到 'arrive' and its pathway of grammaticalization in the Pingjiang dialect (Sinitic)

. . . . . Peng, Daxingwang

15:45–16:15

*The temporal reference of aspectually unmarked bare accomplishment ba-sentences in Taiwanese Mandarin

. . . . . Chang, Ying-Ju

Break 16:15–16:30

Plenary Talk by Prof. Justin Watkins at Room A (3rd floor, East side)

Chair Kenji Okano

16:30–17:30

The fate of Sino-Tibetan languages in Myanmar in the digital age [Tentative]

. . . . . Watkins, Justin

2018-09-27

Session 1 9:00–10:40 in 2 rooms (3rd floor, East side)

Room A: Topics in Loloish and Others

Chair Hideo Sawada

9:00–9:30

*Favorlang songs transcribed in Southern-Hokkien: Decipherment

. . . . . Ochiai, Izumi

9:35–10:05

*The syntax of relative clauses in Lalo Yi

. . . . . Liu, Hongyong and Bu Weimei

10:10–10:40

*Phonetic Features and Genetic Position of Cosao

. . . . . Bai, Bibo and Xu Xianming

Room B: Tibetic

Chair Marius Zemp

9:00–9:30

*Preliminary report on Tichyurong Tibetan (Dolpa, Nepal)

.....Honda, Isao

9:35–10:05

*Aorist in Lhagang Tibetan

.....Suzuki, Hiroyuki and Sonam Wangmo

10:10–10:40

*Evidential system in Mabzhi Tibetan of Amdo

.....Tsering Samdrup and Hiroyuki Suzuki

Break 10:40–11:00

Session 2 11:00–12:40 in 2 rooms (3rd floor, East side)

Room A: Kuki-Chin

Chair Linda Konnerth

11:00–11:30

*The structure of verb complexes in Asho Chin

.....Otsuka, Kosei

11:35–12:05

*Two Comparative Forms in Vaiphei

.....Murakami, Takenori

12:10–12:40

*Kuki-Chin utterance-final particles

.....Peterson, David

Room B: Phonology of Chinese Dialects

Chair Yoshihisa Taguchi

11:00–11:30

*Southern Pinghua: phonology and phonological diversity

.....Cao, Xiaolan

11:35–12:05

#*The emergence of /Viŋ/ rhymes in Northern Min Chinese

.....Shen, Ruiqing

12:10–12:40

*On the initial assimilation in the Xianyou dialect of Chinese

.....Chen, Hong

Lunch Break 12:40–14:00

Session 3 14:00–16:15 in 2 rooms (3rd floor, East side)

Room A: Various Topics on TB

Chair Manuel Widmer

14:00–14:30

*Historical relationship among three non-Tibetic languages in Chamdo, TAR

. . . . . Suzuki, Hiroyuki and Tashi Nyima

14:35–15:05

*On the origins of Tibetan

. . . . . Zemp, Marius

15:10–15:40

**On the distribution, reconstruction and varied fates of topographical deixis in Tibeto-Burman [Abstract]

. . . . . Post, Mark

15:45–16:15

**Shared Inheritance or Innovation: Quadra-syllabic Idiomatic Expressions in Cantonese and Bai [Abstract]

. . . . . Tsou, Benjamin

Room B: Bodo-Garo

Chair Gwendolyn Hyslop

14:00–14:30

*Morphophonemic processes of words borrowed from Indo-Aryan languages to Bodo

. . . . . Brahma, Bihung

14:35–15:05

*Removing Indo-Aryan bias from the phonological description of Bodo

. . . . . Basumatary, Prafulla and Jonathan Evans

15:10–15:40

#*Verbal suffixes /-o/ and /-k^ha/ in Kokborok

. . . . . Ghagra, Anukampa and Jonathan Evans

15:45–16:15

#*Numeral Classifier and Word Order in Dimasa and Bodo-Garo

. . . . . Langthasa, Dhrubajit and Jonathan Evans

Break 16:15–16:30

Plenary Talk by Prof. James A. Matisoff at Room A (3rd floor, East side)

Chair Yasuhiko Nagano

16:30–17:30

Morphosemantics of the Proto-Tibeto-Burman ***a-** prefix: glottal and nasal complications (with an Appendix offering analogies with the English preformative **a-**) [Handout] [Appendix]

. . . . . Matisoff, James A.

Conference Dinner 18:00-20:00

2018-09-28

Session 1 9:00–10:40 in 2 rooms (3rd floor, East side)

Room A: TB Languages in Northeast India

Chair Mark Post

9:00–9:30

**Nominalization and Relativization in Kurtöp [Abstract]

. . . . . Hyslop, Gwendolyn

9:35–10:05

**The relationship between nominalization, focus and egophoricity in Milang [Abstract]

. . . . . Modi, Yankee

10:10–10:40

#*On the functions of quotative constructions in Tibeto-Burman: A case study of Monsang

. . . . . Konnerth, Linda

Room B: Topics in Loloish II

Chair Justin Watkins

9:00–9:30

*A Phonological Sketch of Akha Chicho — A Lolo-Burmese language of Luang Namtha, Laos —

. . . . . Hayashi, Norihiko

9:35–10:05

#*Attempt to identify the origin of Ms. CHI. YI. 26 [Ms. CHI. 80] of Bibliothèque Interuniversitaire des Langues Orientales, Paris

. . . . . Iwasa, Kazue

10:10–10:40

*The Equative Construction in Lalo Yi

. . . . . Bu Weimei

Break 10:40–11:00

Session 2 11:00–12:40 in 2 rooms (3rd floor, East side)

Room A: TB Languages in Northern Burma

Chair Pavel Ozerov

11:00–11:30

*The small closed adjective class in Jinghpaw

. . . . . Kurabe, Keita

11:35–12:05

**Comparing a few grammatical aspects of Northern Burmish languages [Abstract]

. . . . . Sawada, Hideo

12:10–12:40

*Reported Speech in Lisu and Burmic

. . . . . Bradley, David

Room B: Chinese Historical Phonology

Chair Masaaki Shimizu

11:00–11:30

*The *ʕayn* theory of Grade II in Middle Chinese

. . . . . Gong, Xun

11:35–12:05

*The Prosodic Influence on the Old Chinese Tonogenesis

. . . . . Wang, Hongzhi

12:10–12:40

No presentation

Lunch Break 12:40–14:00

Session 3 14:00–16:15 in 2 rooms (3rd floor, East side)

Room A: TB Morpho-Syntax

Chair David Peterson

14:00–14:30

*The Anticausative in Pwo Karen

. . . . . Kato, Atsuhiko

14:35–15:05

*Tracing the sources of “focus” particles
in two TB/T-H languages

. . . . . Ozerov, Pavel

15:10–15:40

#*South Asian perspectives on the relative-correlative construction

. . . . . Coupe, Alexander

15:45–16:15

**Not quite “Middle”: Subject autonomy marking in Tibeto-Burman [Abstract]

. . . . . Post, Mark and Yankee Modi

Room B: TB Languages in Southwest China

Chair Norihiko Hayashi and Fuminobu Nishida

14:00–14:30

*Vitality Assessment of a Sino-Tibetan Language Based on the State of Art Field Report in Pumi Community of Yunnan, China

. . . . . An, Jing

14:35–15:05

*Study on classifiers in Darmdo Minyag

. . . . . Dawa Drolma

15:10–15:40

*A preliminary study of aspect markers in Meiba Bai: the case of perfective and resultative

. . . . . Li, Xuan

15:45–16:15

*A brief introduction to Zlarong, a newly recognized language in Mdzo sgang, TAR

. . . . . Zhao, Haoliang

Break 16:15–16:30

Plenary Talk by Prof. Jackson T. -S. Sun at Room A (3rd floor, East side)

Chair Jonathan Evans

16:30–17:30

Identifying Tibetic Subgroups: A Case in Khrochu (Sichuan) [Abstract]

. . . . . Sun, Jackson T. -S.

参考資料

岩田礼. 1989. 「第 21 回国際漢蔵語言語学会」『通信』65: 28–30.

大津由紀雄研究室編. 2010. 『国際会議の開き方』ひつじ書房.

梶茂樹. 1999. 「国際シンポジウム「音調に関する通言語的研究—声調の発生，類型，および関連テーマ」」『通信』96: 3–12.

梶茂樹. 2001. 「国際シンポジウム「音調の通言語的研究—声調の発生，日本語アクセント論，および関連研究」」『通信』101: 1–9.

梶茂樹. 2003. 「国際シンポジウム「音調の通言語的研究—その歴史的発展，音声的基盤，および記述的研究」」『通信』107: 11–17.

梶茂樹. 2005. 「国際シンポジウム「音調の通言語的研究」報告」『通信』113: 1–9.

川上夏林・藤原敬介. 2018. 「【翻訳】「ドゥニーズ・ベルノー：ビルマの諸言語と知識」」『言語記述論集』10: 251–270.

中野浩嗣. 発表年不明. 「国際会議・国内学会の運営ノウハウ集」http://know-how.is-candar.org/（最終確認 2018 年 11 月 17 日）.

長野泰彦. 1993. 「国際シナ・チベット言語学会」『民博通信』60: 63–70.

長野泰彦. 1994. 「シンポジウム『シナ ・チベット系諸民族の言語文化：東アジア諸言語のダイナミズムを求めて』：第二六回国際シナ ・チベット言語学会」『民博通信』63: 87–97.

橋本萬太郎. 1970. 「第二回シナ・チベット諸語再構学術会議」『言語研究』57: 60–64.

橋本萬太郎. 1973. 「国際漢蔵諸語学漢蔵言語学第 6 回会議」『通信』20: 14–16.

橋本萬太郎. 1975. 「国際シナ・チベット言語学会第 7 回大会参会記」『通信』24: 25–29.

橋本萬太郎. 1977. 「第 9 回国際漢蔵緬泰言語学会大会参会記」『通信』229: 31–33.

林範彦. 2004. 「第 36 回国際シナ=チベット言語学会議」『通信』110: 27–29.

藪司郎. 1993. 「第 25 回国際シナ=チベット言語学会議」『通信』77: 33–35.

藪司郎. 1995. 「第 27 回国際シナ=チベット言語学会議」『通信』84: 42–44.

藪司郎. 1996. 「第 28 回国際シナ=チベット言語学会議」『通信』86: 36–40.

藪司郎. 1998. 「第 30 回国際シナ=チベット言語学会議」『通信』92: 33–36.

藪司郎・中嶋幹起. 1994. 「第 26 回国際シナ=チベット言語学会議」『通信』80: 21–28.

馮蒸編訳. 1979a. 「第 1-11 届国際漢蔵語学会議簡介（上）（1968–1978）」『語言学動態』1979 年第 4 期: 39–43, 49.

馮蒸編訳. 1979b. 「第 1-11 届国際漢蔵語学会議簡介（中）（1968–1978）」『語言学動態』1979 年第 5 期: 40–43.

馮蒸編訳. 1979c. 「第 1-11 届国際漢蔵語学会議簡介（下）（1968–1978）」『語言学動態』1979 年第 6 期: 41–46.

Bradley, David. 2008. Report on ICSTLL41. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 31(2): 183–184.

Genetti, Carol and Chris Donlay. 2016. Report on the 48th international conference on Sino-Tibetan languages and linguistics (ICSTLL48): University of California, Santa Barbara 20-23 August 2015. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 39(1): 174–176.

Hashimoto, Mantaro J. 1975. The seventh COSTRE. *Journal of Chinese Linguistics* 3(1): 79–87.

Karlsson, Jens. 2007. Report on the 40th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics (ICSTLL), held at Heilongjiang University, Harbin, PRC September 26-29, 2007. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 30(2): 235–240.

Konnerth, Linda. 2013. Conference Report: ICSTLL46. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 36(2): 139–141.

Matisoff, James. A. 1973. The annual Sino-Tibetan Conferences: the first five years, 1968–72. *Journal of Chinese Linguistics* 1(1): 152–162.

Matisoff, James A. 1994. Introduction to the second edition. In Randy J. LaPolla and John B. Lowe eds., *Bibliography of the International Conferences on Sino-Tibetan Languages and Linguistics I-XXV*, pp. xiii–xv. Berkeley: Sino-Tibetan Etymological Dictionary and Thesaurus Project, Center for Southeast Asia Studies, University of California.

Matisoff, James A. 1996. Remembering Mary Haas's work on Thai. In Leanne Hinton ed., *The Hokan, Penutian, and J.P. Harrington Conferences and The Mary R. Haas Memorial*, pp. 105–113. Survey of California and Other Indian Languages, Report No. 10. Berkeley: University of California.

Matisoff, James A. 2017. General History and Future Prospects for our ICSTLL's. 『第 50 届国際漢蔵語言暨語言学会議：提要及論文彙編』pp. 2–3.

Pelkey, Jamin R. 2005. Report on the 38th ICSTLL: Xiamen University, October 28-31, 2005. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 28(2): 203–206.

Sprigg, Richard Keith. 1980. 'Vocalic alternation' in the Balti, the Lhasa, and the Sherpa verb, as a guide to alternation in Written Tibetan, and to Proto-Tibetan Reconstruction. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 43: 110–122.

Vittrant, Alice et Alexandra de Mersan. 2016. Denise Bernot: langues, savoirs, savoir-faires de Birmanie. `https://www.canal-u.tv/video/cnrs_ups2259/denise_bernot_langues_savoirs_savoir_faire_de_birmanie.21679`（最終確認 2018 年 11 月 21 日）

（附記）草稿段階で林範彦氏と倉部慶太氏から有益なご意見をいただいた。

受理日 2019 年 4 月 16 日

大谷 青渚（2019）『言語記述論集』11：141-162

北パイワン語の接頭辞 ki- について

大谷青渚
京都大学大学院
キーワード：パイワン語、オーストロネシア語族、接頭辞

1. はじめに

本稿では、北パイワン語の接頭辞 ki- について考察する。先行研究（小川・浅井 1935, Ferrell 1982, Chang 2006, Huang 2012）で共通していた ki- の機能は以下の (1) に見る 2 つであった。

(1) 先行研究で共通している ki- の機能
a. 名詞語根について「獲得」の意味をあらわす
ki- + vasa 「芋」 → ki-vasa 「芋ほり」 (小川・浅井 1935: 133)
ki- + paisu ‘money’ → ki-paisu ‘get or seek money’ (Ferrell 1982: 119)
b. 動詞語根について「再帰」の意味をあらわす
ki- + kəʎəm ‘to hit’ → ki-kəʎəm ‘to hit oneself’ (Chang 2006: 221)
ki- + paiz ‘to fan’ → ki-paiz ‘to fan oneself’ (Huang 2012: 189)

このように、ki- は語根について様々な意味を派生する機能を持つ。本稿では、筆者のデータにある ki- の機能を整理してまとめた結果、これらの機能のほかに「遊び」の意味を持つ語の派生や「依頼」の意味を持つ語を派生する機能を持つことを指摘する。

本稿は 2 節でパイワン語の話されている地域や音素目録、接頭辞一般についての説明など本論文にかかわる基礎的事実を述べる。3 節では ki- の機能についての共時的、通時的な先行研究を紹介する。4 節では筆者のデータを提示しながら、筆者の提案する新たな ki- の機能について論じる。5 節は本稿のまとめである。

2. パイワン語の基礎的事実

パイワン語はオーストロネシア語族に属する言語で、台湾南部の屏東県、台東県で話されている台湾原住民の言語である。パイワン語は地域によってそれぞれ北パ

イワン (N)、南パイワン (S)、中パイワン (C)、東パイワン (E) と呼ばれる (Ferrell 1982: 4)。これらの地域の方言差は語彙面で少々、音声面で顕著ではあるが、相互理解が不可能なほどではない (小川・浅井 1935: 131)。

本稿で扱うデータは三地門郷口社村出身の調査協力者から得たものである。

パイワン族の人口は原住民族委員会のホームページ[1]によると 86,000 人ほどいるが、40 代以下の人々はほぼパイワン語を話すことができないため、話者数はそれよりも少ないと思われる。

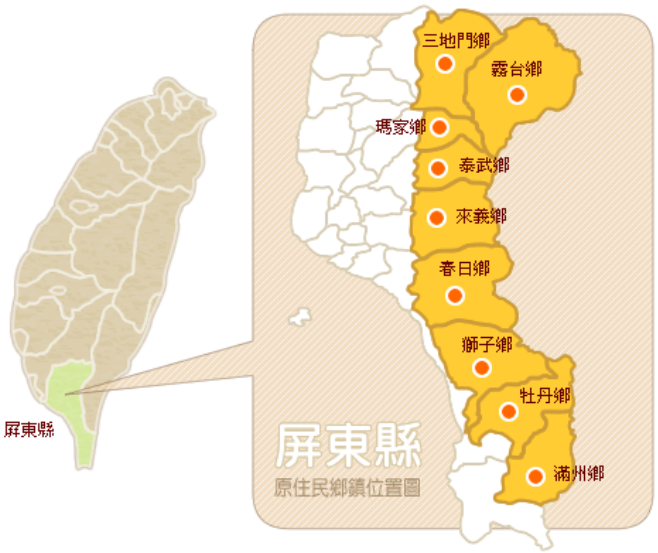


図 1: 屏東県のパイワン族の分布

本稿で提示するパイワン語のデータは、断りがない限り筆者が調査で得たデータである。それ以外のものに関しては適宜引用元を示す。その際、先行研究ごとにパイワン語の話されている地域が異なるため (2) のように北、南、中、東のどの地域のパイワン語であるかを示す。

(2) それぞれの先行研究で対象としているパイワン語
1. 小川・浅井 (1935) 南パイワン語 (S)
2. Ferrell (1982) 中パイワン語 (C)
3. Chang (2006) 北パイワン語 (N)
4. Huang (2012) 中パイワン語 (C)

本文中では (N: Chang 2006: 74) のように表記し、これは「北パイワン語を扱う Chang (2006) からの引用」ということをあらわす。

2.1 音素目録

パイワン語は 4 つの母音と 21 の子音を持つ。

[1]原住民族委員会ホームページ https://www.apc.gov.tw/portal/index.html. (2019 年 4 月 12 日閲覧)
図 1 の屏東県の地図もホームページより。

表 1: パイワン語の母音音素

	Front	Central	Back
High	i		u
Mid		ə	
Low		a	

表 2: パイワン語の子音音素

	Labial	Alveolar	Palatal	Retroflex	Velar	Glottal
Stop	p b	t d		ɖ	k g	ʔ
Nasal	m	n			ŋ	
Fricative	v	s z				(h)
Affricate		ts				
Lateral		l	ʎ			
Trill		r				
Approximant	w		j			

子音に関して、声門摩擦音 /h/ は日本語からの借用語にしか現れない (Chang 2006: 21)。また、歯茎閉鎖音の /t//d/ の自由変異として [tʲ][dʲ] がある。この [tʲ][dʲ] はほかの方言、もしくは北パイワンの中でも地域によっては一つの音素として認める場合もある。また、個人差も大きくかかわり、筆者のデータの大半を提供してくれた調査協力者はあまり [tʲ][dʲ] を用いなかった。

2.2 ヴォイス体系

パイワン語には「フィリピンタイプ」と呼ばれる体系とよく似たヴォイス体系がある (Li 2008: 528)。その直説法の体系を下の表に示す。ヴォイスは 4 つあり、それぞれ actor voice (AV), goal voice (GV), locative voice (LV), instrumental voice (IV) と呼ばれる。AV は動作主を主格にとり、GV は被動作主、LV は場所、源、部分的な影響を受けた物体など (Chang 2006: 74)、IV は道具などを主格にとる。

表 3: パイワン語の直説法におけるヴォイス体系

AV	GV	LV	IV
<əm>, mi-, m-, <ən>, φ	-in/-ən	-an	si-

[AV]

(3) d<*əm*>ava~davats timadu i=kuin
RED<AV>~walk 3SG.NOM LOC=park
‘彼は公園を散歩している’

(4) maka timadu a *m*-aʃap tua vuluwaʔ
can 3SG.NOM LIN AV-take OBL bow
‘彼は弓をとることができる’

(5) nu ʔ<əm>udjal nutiaw, ini=ka uri *mi*-pəʃəpəʃ a hikuki
IRR rain<AV> tomorrow NEG1=NEG2 will AV-fly NOM airplane
‘もし明日雨が降れば、飛行機は飛ばないだろう’

(6) tjəngəlaj-*φ*=akən ta ŋiaw
like-AV=1SG.NOM OBL cat
‘私は猫が好きだ’

表 3 に見たように AV は異形態を多く持つ。(3) の例にある接中辞 <əm> が最も基本の AV 形である。(4) のように語根が母音始まりの場合には m- を用いる。(5) の mi- は特定の語根とのみ共起する。(6) のように AV が φ であらわれる場合もある。

[GV]

(7) dikup-in timadu na kisatsu
arrest-GV 3SG.NOM GEN police
‘彼は警察に逮捕された’

(8) anəma su=səngsəng-ən?
what 2SG.GEN=work-GV
‘あなたは何をしているの？’

GV は –in/-ən の二つの形態を持つが、これらは自由変異である。また、(7) では動作主である「警察」ではなく被動作主の「彼」が NOM の標識を受けている。

[LV]

(9) ku=vətsik-an aitsu a ʔadupu ta ku=ŋadan.
1SG.GEN=write-LV this NOM paper OBL 1SG.GEN=name
‘I wrote this paper with my name.’ (C: Huang 2012: 123)

(10) ʔ<in>aʃap-an ti Zəpul ta za pajsu ni Lavakaw
take<PFV>-LV PS.SG.NOM PN OBL that money PS.SG.GEN PN
‘Lavakaw took money from Zepul.’ (N: Chang 2006: 74)

(11) k<in>an-an ni Zəpul a za ʔavaj
eat<PFV>-LV PS.SG.GEN PN NOM that rice.cake
‘Zepul ate of the rice cake.' (There are some left.) (N: Chang 2006: 74)

(9) は、自分の名前を書く「場所」である「紙」が NOM の標識を用いてあらわされ、(10) はお金をとられる「源」である ‘Zəpul’、(11) は「部分的な影響」を受けた「餅」が NOM であらわされている。

[IV]

(12) s<in>i-təkəl ni Zəpul aitsu a kupu ta za zalum
IV<PFV>-drink PS.SG.GEN PN this NOM cup OBL that water
‘Zepul drank that water with this cup.’ (N: Chang 2006: 72)

(13) si-patsun ta tilivi a migani
IV-see OBL television NOM glasses
‘（私は）眼鏡を使ってテレビを見る’

(12) は飲むために使う「コップ」が、(13) は見るために使う「眼鏡」が NOM であらわされている。

2.3 接頭辞について

パイワン語の接頭辞は AV 形において「接頭辞 -φ」と「接頭辞 ＋<əm>」という形が存在する。それぞれの例を (14) に示す。本稿で扱う ki- は「接頭辞 -φ」にあたる。例で示す接頭辞の意味は本論とあまり関わりがないので、本稿では詳しく触れない。また、ここで挙げた接頭辞はあくまでも一部であり、パイワン語に存在するすべての接頭辞の例を挙げているわけではない。

(14) 接頭辞の AV 系

[接頭辞-φ]

1. ki-

na	ki-laŋda=kən	ta	liŋaw	na	ʔajaʔajam	s<əm>ena~senaj
??	KI-hear=1SG.NOM	OBL	sound	GEN	bird	RED<AV>~sing

‘私は鳥のさえずりを聞いた’

2. pa-

pa-kan=akən	ta	icu	a	atsan
CAUS-eat=1SG.NOM	OBL	this	LIN	pig

‘私は（家畜の）豚に餌をやる’

3. pu-

ti	ʎavaus	pu-hana~hana	tutsu
PS.SG.NOM	PN	put-RED-flower	now

‘ラバウスは今花を飾っている’

例 1, 2, 3 を見ると、接頭辞 ki-, pa-, pu- はいずれも動作主を NOM にとり、これらが AV 形であることが分かる。しかし、表 3 でみたような接中辞 <əm>, <ən> や接頭辞 m-, mi- などとは共起せず、すべて AV = φ の形であらわれている。

[接頭辞 + <əm>]

4. k<əm>asi-

k<əm>asi-inu=sun?

come.from-where=2SG.NOM

‘Where did you come from?’ (C: Huang 2012: 149)

5. s<əm>u-

na=s<əm>u-kava	ti	Kalalu
PFV=remove-clothe	PS.SG.NOM	PN

‘Kalalu took off the clothes.’ (N: Chang 2006: 199)

例 4, 5 はそれぞれ接中辞 <əm> と共起した形で接頭辞が用いられる。

3. 先行研究

この節では ki- の通時的・共時的な先行研究を紹介する。

3.1 共時的な ki- の機能

3.1.1 パイワン語内部の共時的な ki- の機能

3.1.1 節では、小川・浅井 (1935)、Ferrell (1982)、Chang (2006)、Huang (2012) の主張する ki- の機能をまとめる。

3.1.1.1 小川・浅井 (S: 1935)

パイワン語の ki- についての機能を最初に記述したのは小川・浅井 (1935) である。彼らは ki- の機能について以下の 2 点を挙げている。

(15)小川・浅井 (1935: 133) の主張する ki- の機能
1. ʔi-[2]「取る」
ʔi-vasa (<vasa ‘芋’)「芋ほり」、ʔi-padai (<padai ‘米’)「稲刈り」など
2. ʔi-「自分」
ʔi-paiz (<paiz ‘扇ぐ’)「自分を扇ぐ」、ʔi-siqas「自殺」

小川・浅井 (1935) は語根の性質についての言及はなかったが、例に見るように ʔi- が「取る」の意味をとるとき語根は名詞であり、「自分」の意味をとるときの語根は動詞である。

3.1.1.2 Ferrell (C: 1982)

Ferrell は小川・浅井 (1935) よりも細かな分析をおこなっており、その機能は 5 つ記述されている。

(16) Ferrell (1982: 119-120) の主張する ki の機能
1. get, obtain (thing)
→ki-paisu ‘to get or seek money’ < paisu ‘money’
2. to do willingly/ for self
→ki-patsaj ‘to commit suicide’ < patsaj ‘die’
3. indefinite future
→ki=kən a vaik ‘I’ll leave’ < =kən ‘I’, vaik ‘go’
4. approximately, probably
→ki-ɖusa-idai ‘about two hundred’ < ɖusa ‘two’, taidai ‘hundred’
5. how it is; how is it?
→ki-tja-kuda-in? ‘what shall we do?’ < tja ‘we’, kuda ‘do what’, -in ‘GV’

このうち 3 に挙げられている ki は接頭辞ではない。4, 5 に挙げられている意味は Ferrell 独自の主張であり、筆者のデータにもこのような ki- の機能は存在しな

[2] 南パイワンの /ʔ/ は北パイワンでは /k/ である。

い。1, 2 は小川・浅井 (1935) と共通する意味である。Ferrell も語根の性質についての言及はないが、’get, obtain’ の意味のとき語根は名詞であり、’for self’ の意味のときの語根は動詞である。

3.1.1.3 Chang (N: 2006)

Chang は 4 つの ki- の機能を主張している。また、Chang は語根の性質についても言及している。

(17) Chang (2006: 126-127, 221) の主張する ki- の機能

1. ki- + 名詞語根で ‘get, obtain’ を示す
   ki-paisu (< paisu ‘money’) ‘earn money’、ki-kasiw (< kasiw ‘wood’) ‘chop or get wood’
2. ki- + 動詞語根で ‘to do something by oneself, of one's own will, intentionally’ を示す
   ki-vali (< vali ‘blow (wind)’) ‘get cool by exposing oneself to the wind’
3. ki- + 動詞語根で ‘do something in the manner indicated by the verbal stem’ を示す
   ki-tsakaw (< tsakaw ‘steal’) ‘do something stealthily’
4. ki- + 動詞語根で ‘REFLEXIVE’ 示す
   ki-kəʎəm ti Zəpul
   KI-hit PS.SG.NOM PN
   ‘Zepul hit herself.’

1, 4 は今までの先行研究でも言われていた共通の機能である。Chang の 3 番目の例のように ‘intention’ を表わす例は Ferrell (1982) でも ‘to do willingly’ として記述されていた。

3.1.1.4 Huang (C: 2012)

Huang は ki- について 3 つの機能を認めている。

(18) Huang (2012: 186-189) の主張する ki- の機能

Ki-$_1$

a) 具体的・抽象的な物体をあらわす語幹について、’to get…’ の意味を表わす
   →ki-ljacəng (< ljacəng ‘vegetable’) ‘to get/buy vegetables’

b) 動作を表わす語幹について‘to get a gerundive state/action expressed by the base’ を表わす
   →ki-saʔətju (< saʔətju ‘be painful’) ‘to doubt, be jealous of s.o./s.t.’

Ki-$_2$: ‘REFLEXIVE’
   →ki-ʔudjilj (< ʔudjidjilj ‘red’) ‘to dye oneself red’

(b) の ki- の機能について Huang も ‘intention’ があることを認めている。また、先の 3 つの先行研究で見たように Huang も ‘get’ や ‘REFLEXIVE’ の機能を認めている。

3.1.1.5 小括

これまでに見た 4 つの先行研究すべてで共通していた「獲得」「再帰」の意味はパイワン語の ki- の意味の核であると考えることができる。しかし、いずれの先行研究でも筆者の主張する「遊び」「依頼」の意味を持つとは述べられていなかった。

3.1.2 他の Formosan で見られる ki- の機能

3.1.2.1 Puyuma

プユマ語の先行研究は土田 (1980)と Teng (2008) を参照する。

土田 (1980: 261) はプユマ語の ki- の意味として「取る、集める」を挙げている。その他にも本稿で「再帰」や「遊び」と分類している ki- を用いている例も見られる。

(19)土田 (1980)

[獲得] ki-vu/Raa/Rasi ‘さつまいも掘りをする’ (p.261)
[獲得] ki-sa-seruH ‘たけのこ掘りをする’ (p.261)
[遊び] ki-va/a/ngavang ‘ままごとする’ (p.250)
[遊び] m-aR-ki-vu/a/li-vuli ‘かくれんぼする’ (p.251)
[遊び] ki-m-aR-ayhi ‘じゃれて遊ぶ（動物と）’ (p.251)
[再帰] ki-a-veRay ‘もらう’ (p.251) cf. va-veRay ‘与える、やる、あげる’ (p.251)
[再帰] ki-a-vuras ‘借りる’ (p.252) cf. pa-a-vuras ‘貸す’ (p.252)

Teng (2008) は「獲得」のほかに「受身」や「行為の向きを変える」などの意味を認めている。

(20) Teng (2008: 182-186)

1. 名詞語幹について ‘to get or to obtain something’ をあらわす
   ki-’aputr (< ’aputr ‘flower’) ‘to pick flowers’、ki-tranguru’ (< tranguru’ ‘head’) ‘to behead’
2. 動詞語幹について ‘passive meaning’ をあらわす
   ki-baluk (< baluk ‘wake’) ‘be woken up’、ki-tarama (< tarama’bully’) ‘be bullied’
3. giving/receiving を意味する動詞についた場合は行為の向きを変える
   ki-beray (< beray ‘give’) ‘get; beg’、ki-tulrudr (< tulrudr ‘pass something to’) ‘catch’

3.1.2.2 Kavalan

Li & Tsuchida (2006: 278) には “qi- + N ‘to pluck; to pick up; to harvest’ cf. ki- + N in other Formosan languages” と記載されている。

(21) Li & Tsuchida (2006: 278)

qi-tamun ‘to pick vegetables’ < tamun ‘vegetable’
qi-btu ‘to pick up a stone’ < btu ‘stone’
qi-zanum ‘to take water’ < zanum ‘water’

3.1.2.3 Thao

サオ語についての記述は Blust (2003) の辞書を参照する。サオ語において「獲得」の意味を表わす接頭辞は maki- と kin- の二種類ある。

(22) Blust (2003: 115): maki-

maki-: a verb prefix attested with three bases
maki-ara ‘harvest rice by hand’ < ara ‘fetch, take’
maki-lhmir ‘to weed, pull weeds’ < lhmir ‘grass, weeds’
maki-tuqa-tuqash ‘be old (people)’ < tuqash ‘old (people)’

Blust も既に述べているように、maki- の出現箇所は極めて限定的である。しかしいずれも語根の物体を自分のもとに ‘get/obtain/gather’ するという意味になる。それぞれ「（米を）得る→収穫する」「雑草を得る→除草する」「年を得る→年をとる」となる。

maki- の出現が限定的な一方で ‘pick, gather’ の意味を持つ接頭辞 kin- は比較的生産的に見える。

(23) Blust (2003: 104) kin-

kin-: a verb prefix meaning ‘to pick or gather X’
kin-fatu ‘gather stones’ < fatu ‘stone’
kin-lhuzush ‘pick plums’ < lhuzush ‘plum’
kin-rusaw ‘catch fish; collect fish’ < rusaw ‘fish’

3.1.2.4 Bunun

ブヌン語は Nojima (2009) を参照する。ブヌン語では、makis-/pakis- という形態を用いる。

(24) Nojima (2009)

1. makis-saiv ‘ask for, request, beg’
2. makis-suhis ‘request for returning’
3. makis-dangaz ‘help to request’
4. makis-baas ‘request back’
5. makis-’unu ‘request next(??)’
6. makis-pusan/pakis-pusan-an ‘request two times’
7. makis-’amin/pakis-‘amin-an ‘request all’
8. makis-laliva ‘request mistakenly’
9. makis-sasu/pakis-sasu-an ‘request immediately’

これらの例はすべて ki- ではなく makis-/pakis- という形式であること、また意味も「獲得」「再帰」などではなく ‘request’ であることから、本稿で扱う ki- とは一見関連の無い例のように見える。しかし、3.2.2.3 節で見たサオ語の例では maki- というブヌン語の makis- に類似した形式が「獲得」の意味を持っていた。また、Nojima (2009) はプユマ語の ki-beray (<beray ‘to give’) ‘to beg, ask for’ とブヌン語の makis-saiv ‘to beg’ の意味的・形態的類似を指摘している。フィリピン諸語の maki-/paki- との類似もその指摘の土台にある。

3.1.2.5 小括

周辺言語でも ki- は多くの場合「獲得」の意味を持つことが分かった。また、形態音韻的にはカヴァラン語では qi-、サオ語やブヌン語では maki- もしくは makis- という形になっていることが確認された。「獲得」以外の意味では土田 (1980) の例でみた「遊び」や、Nojima (2009) の例でみた「依頼」などの意味も持ち得ることが分かった。

次節は、通時的な先行研究を基に maki-, makis- と ki- の関連性を指摘する。

3.2 通時的な ki- の機能

3.2.1 Nojima (2009)

ブヌン語に見られる接頭辞 makis-/pakis- ‘to request, ask for’ と、いくつかのフィリピンの言語を基に、PAn で *makis-/pakis- を再建している。Blust (2009, 2013) や Liao (2011) の再建とは異なり、Formosan の言語を比較対象に含めているため、後の二つとは再建形が異なり、再建形に s を認めている。この再建形に関して、Nojima (2009) では (a) PAn では *makis-/pakis- と *maki-/paki- という二つの異形態（どのような環境下で交替するかは不明）があった可能性、(b) PAn の *makis-/pakis- の語末子音 /s/ がフィリピンの言語では脱落した可能性があることを指摘している。

また、3.1.2.1 節で見たようにプユマ語の ki-beray (<beray ‘to give’) ‘to beg, ask for’ とブヌン語の makis-saiv ‘to beg’ の ki-, makis- における意味的・形態的類似を指摘し、プユマ語の ki- と同形式のパイワン語やルカイ語の ki-、またカヴァラン語の qi- との関連も示唆している。しかし、共通の祖語にさかのぼるかどうかの決定的な証拠は未だないと述べ、これらの接頭辞間の関連を慎重に検討している。

3.2.2 Blust (2009, 2013)

Blust (2009: 364, 2013: 377) は再建形として *maki-/*paki- ‘petitive (本稿では「依頼」)’ を再建した。しかし、Blust は Proto-Austronesian (PAn) もしくは Proto-Malayo Polynesian (PMP) など、どの時代の再建形であるかは明言していない。この反映形 (reflex) はフィリピン南部の言語や北ボルネオ、スラウェシ島で話されているフィリピンタイプの言語で確認されている (Blust 2013: 377)。

これらの意味が反映 (reflex) されている言語に Formosan は含まれないため、PAn での再建と主張するのは難しいだろう。

3.2.3 Zeitoun & Teng (2009)

Zeitoun & Teng (2009: 497) は他の再建形とは形式・意味ともに異なる *ki- ‘get, obtain’ を PAn での再建形としてたてている。Zeitoun & Teng は Formosan で広く見られる [ki- + 名詞語根] が「獲得」の意味を持つという事実を基に再建を行っているので、この再建形が得られたものと考える。フィリピン諸語は彼女らの考察対象には含まれていなかった。

3.2.4 Liao (2011)

Liao は PMP で *maki- / *paki- ‘social/comitative’ を再建した。理由としては、異なる下位分類に属する言語間にもこの意味は広がっていることや、動詞形だけでなく、名詞形にもこの意味があらわれていることを挙げている (pp. 223-224)。また、‘comitative, permissive’ からの意味変化についても記述してある。Stage 1 は ‘comitative, permissive’ の意味しか持たず、多くのフィリピンの言語がこのステージにある。Stage 2 では ‘comitative, permissive’ の意味も保ったまま、‘requestive’ and/or ‘polite imperative/polite request’ の意味が追加される。Stage 3 では ‘causative’ の意味が追加される。この場合 stage 2 で持っていた ‘requestive’ の意味は保持しているが、もともとの意味である ‘comitative’ の意味は失われている。Liao の調査で Stage 4 の言語は発見されなかったが、図に見るように ‘requestive’ の意味も失われ、’causative’ の意味だけが残ることが予測できると述べられている (pp. 225-226)。

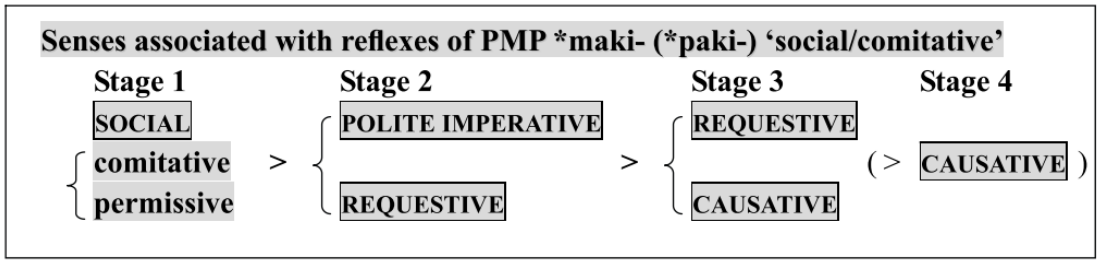


図 1: Liao (2011: 225) "PMP *maki- (*paki-) 'social/comitative': path of semantic change" より

3.2.5　小括

先行研究では「依頼」をあらわす接頭辞として *maki-/paki- もしくは *makis-/pakis- という形が建てられており、パイワン語の ki- はそれに由来するかもしれないことがわかった。これらの祖形とパイワン語の ki- との関係は音変化等の現象も考慮に入れながら慎重に検討していく必要があるが、4 節では筆者のデータを基に、パイワン語の ki- も「依頼」の意味を持つものがあることを示す。

4.　筆者のデータにある ki- の分析

筆者は ki- を「獲得」「再帰」「遊び」「依頼」で分類した。既に何度か述べているように、この中で「獲得」「再帰」はパイワン語の ki- の核となる意味であると考えられる。「遊び」「依頼」の意味はパイワン語の先行研究では指摘がなかったが、周辺言語や通時的な先行研究を見ると、そのような意味を持つ可能性もあり、実際以下に示す筆者のデータにそのような意味を持つ ki- があることを指摘する。

以下の例文で、該当箇所の [ki- + 語根] は斜字にしてある。語根の意味に関しては Ferrell (1982) の辞書を参照した。中には語根の意味の記載がないものもあったが、複数の派生形から意味の抽出が可能なものについてはその意味を記す。

4.1　ki-「獲得」

(25) ku=*ki-laŋda*　　a　　kai　　nimadu
　1SG.GEN=KI-hear　NOM　word　3SG.GEN
　'私は彼の話を聞く'
　語根 *laŋda* 'to hear' (C: Ferrell 1982: 38)
　[獲得 + 聞こえる = 聞く]

(26) na *ki-laŋda*=sun　　ta　　nima　　liŋaw?
　?? KI-hear=2SG.NOM　OBL　whose　sound
　'あなたは誰の声を聞いたの？'

語根 *laŋda* ‘to hear’ (C: Ferrell 1982: 38)
[獲得 + 聞こえる = 聞く]

(27) *ki-pa-kim*
KI-CAUS-search
‘追究する’
語根 kim ‘to search for’ (C: Ferrell 1982: 120)
cf. pa- ‘CAUSATIVE’
[獲得 + CAUS + 探し求める = 追究する]

(28) *ki-ta-kalava* ti Aruwai i=tisyaba
KI-??-await PS.SG.NOM PN LOC=station
‘アルアイは駅で待っている’
語根 kalava ‘await’ (C: Ferrell 1982: 112)
[獲得 + 待つ = 待つ]

(29) *ki-samula* a ki-tulu tua icu a katsalisijan a kai
KI-urgently LIN KI-teach OBL this LIN aboriginie LIN word
‘原住民の言葉の勉強を頑張る’
語根 samula (C: Ferrell 1982: 255)
[獲得 + 至急 ＝頑張る]
→cf. (36) ki-tulu

4.1 節でまず注目すべきは (25) の例文である。2.3 節で述べたように、ki- は接頭辞の中でも [語根 +φ] で AV 形をつくるグループに属していた。(25) の ki- も、他の接辞がついていないため AV 形であると考えられるが、格標識が通常の場合と異なる。AV 節の場合動作主が NOM であらわされるが、(25) は動作主である「私」は GEN であらわされている。また、被動作主の「彼の話」が NOM であらわされているため、(25) は典型的な Non-agent voice (NAV) 節といえる。しかしこのような特殊な例文はこの一例しかなく、議論のためのデータが足りないため、本稿ではこの例文の特殊性を指摘するにとどめる。

(29) の例では語根 samula の見出しに意味の記載はないが、派生形 ki-samula ‘to do something with zeal, urgently’ や pa-samula ‘to work urgently’ を基に、語根 samula は ‘urgently’ の意味を持つことが推測できる。

4.2　ki-「再帰」

(30) na　ma-kasi-zua　timadu　tanuakən　*ki-sədjam*
??　MA-to.be.from-that(?)　3SG.NOM　1SG.OBL　KI-something.borrowed
ta　ita　ausua
OBL　one　umbrella
‘彼は私から傘を借りた’
語根　sədjam ‘something borrowed’ (C: Ferrell 1982: 260)
→cf. pa-sədjam ‘貸す’
[再帰 + 借りる = 借りる]

(31) ki-pavalit=sun　ta　kava
KI-change=2SG.NOM　OBL　clothe
‘あなたは服を着替える’
語根　pavalit ‘change’
→cf. ma-pavalit ‘変わる’
[再帰 + 変わる/変える = 変える]

(32) vaik=akən　a　ma-biuin　a　*ki-pu-tsəməl*
go.AV=1SG.NOM　LIN　go.to-hospital　LIN　KI-have-medicine
‘私は病気を治すために病院に行く’
語根　*pu-tsəməl* ‘to treat with medicine; doctor’ (C: Ferrell 1982: 313)
cf. *pu-* ‘to have or produce; acquire’ (C: Ferrell 1982: 202)
[再帰 + 薬で治療する = 病気を治す]

(33) *ki-patsun*　taimadu　ti　Saunijaw
KI-CAUS?-??　3SG.OBL　PS.SG.NOM　PN
‘サウニヤウは彼に見られる’
語根　patsun ‘see’
[再帰 + CAUS? + 見る = 見られる]

(34) ayatua　ma-tsula=kən　saka　uri　*ki-vətu*=akən
because　STAT-hungry=1SG.NOM　and　will　KI-full=1SG.NOM
‘私はおなかがすいているので、食べる必要がある’
語根　vətu ‘full’
→cf. ma-vətu「満腹である」, v<ən>ətu「（嫌になるほど）食べさせる」
[再帰 + full = lit. 私は私をお腹いっぱいにする]

(35) paramu=aŋa *ki-tsəpəliw*=sun ma-dipun
soon=COS KI-return=2SG.NOM go.to-Japan
‘もうすぐあなたは日本に帰る’
語根 tsəpəliw (C: Ferrell 1982: 314)
[再帰 + 戻る = 帰る]

(36) ki-samula a *ki-tulu* tua icu a katsalisijan a kai
KI-urgently LIN KI-teach OBL this LIN aborigine LIN word
‘原住民の言葉の勉強を頑張る’
→cf. (29) ki-samula

(30)(31) の例で特に顕著であるが、パイワン語の ki- は「再帰」というよりも、「動詞語基が「動作主から離れていく方向」をあらわしている場合、その動詞語基について「動作主に向かう方向」をあらわす拡張語幹を派生する」と記述したほうが事実に即している。例えば (31) では語根 ‘valit’ に接頭辞 ma- が付いた場合は ma-valit 「変わる」という意味になり、ki- が付いた場合は ki-valit「変える」というふうに、ki- がつくことで動作の方向を変えている。

(35) に関して、語根 tsəpəliw は辞書の見出しに意味の表記がないが、派生形を調べることで、おおよその意味の抽出は可能である。Ferrell (C: Ferrell 1982: 314) は tsəpəliw の項に *ki-tsepeliw* ‘to (go and) return’ や *ts/m/epeliw* ‘to move something then replace in original position’ などの派生形を提示していた。これらの例から語根 tsəpəliw の意味は ‘return’ であることが推測できる。

(36) の語根 tulu も見出しに意味の記載はないが、派生形 t<əm>ulu「教える」や pa-tulu「教える」などから tulu の意味は「教える」だと推測できる。また、この例も「教える（動作主から離れていく方向）」に ki- を用いることで「勉強する（動作主に向かう方向）」という風に変えている。

4.3 ki-「遊び」

(37) ʔ<əm>udja~ʔudjaʎ i=sasaw saka *ki-vaŋavaŋ*=akən i=tjumaʔ
RED<AV>~rain LOC-outside and KI-play=1SG.NOM LOC=home
‘外は雨が降っているので、家の中で遊んだ’
語根 vaŋavaŋ ‘to play, amuse oneself’ (C: Ferrell 1982: 337)
[遊び + 楽しませる = 遊ぶ]

(38) aitsu a mali *si-ki-vaŋavaŋ* ni kaka
this LIN ball IV-KI-play 3SG.GEN sister

‘妹がこのボールで遊んでいる’
Lit: このボールは妹が遊ぶためのものだ
語根 vaŋavaŋ ‘to play, amuse oneself’ (C: Ferrell 1982: 337)
[遊び + 楽しませる = 遊ぶ]

(39) *ki-kəlu-in* ti Saunijaw ma-kasi-nikai
KI-fall-GV PS.SG.NOM PN MA-come.from-second.floor
‘サウニヤウが二階から飛び降りる’
語根 kəlu ‘to fall (as fruit)’ (C: Ferrell 1982: 116)
[遊び + 落ちる = 飛び降りる]

(40) ki-tukutuku=akən a vaik a *ki-vala*
KI-bicycle=1SG.NOM LIN go.AV LIN KI-be.able.to.do
‘私は自転車に乗って旅行に行く’
語根 vala ‘be able to do’ (C: Ferrell 1982: 334)
[遊び + 可能 = 旅行する]
→cf. (41) ki-tukutuku

(41) *ki-tukutuku*=akən a vaik a ki-vala
KI-bicycle=1SG.NOM LIN go.AV LIN KI-be.able.to.do
‘私は自転車に乗って旅行に行く’
語根 tjuku-tjuku ‘a wheel; automobile; bicycle’ (C: Ferrell 1982: 301)
[遊び + 自転車 = 自転車に乗る]
→cf. (40) ki-vala

(42) *ki-ruʔu~ruʔu* azua vatu i=ta tsəmətsəməl
KI-RED~roll that dog LOC=OBL grass
‘犬が草の上を転がる’
語根 ruʔu (C: Ferrell 1982: 249)
[遊び + 転がる = 転がる]

(39) は「ハングライダー、パラグライダー、バンジージャンプなどに関しても ki-kəlu を用いる」との調査協力者の発言から、遊びの意味合いが強いことが分かる。

(40)(41) は同じ例文だが、(40) は ki-vala に (41) は ki-tukutuku に焦点をあてている。同じ乗り物でも車や飛行機に乗るときは接頭辞 tjə- を用い、自転車に乗るときのみ ki- を用いる。

(42) の語根 ruʔu は辞書の見出しに意味の表記がなかったが、筆者のデータにある ma-ruʔu「転がる」や r<əm>uʔu「転がす」等の派生語から語根 ruʔu の意味は「転がる」であると推測できる。

4.4 ki-「依頼」

(43) *ki-satjəz-an*=akən taimadu
KI-return.something-LV=1SG.NOM 3SG.OBL
‘彼女は私に自分を送るよう頼んだ’
語根 satjəz ‘return something’ (C: Ferrell 1982: 258)
[依頼 + 何かを戻す = 送るよう頼む]

(44) *ki-təkəl-i*=akən
KI-drink-IMP.LV=1SG.NOM
‘私にお酒を注いでください’
語根 təkəl ‘to drink’ (C: Ferrell 1982: 281)
[依頼 + təkəl + IMP = お酒を注いでください]

(45) *ki-ʔadaw*
KI-sun
‘to pray for a sunny day’ (C: Huang 2012: 186 (507d))
語根 ʔadaw ‘sun’ (C: Ferrell 1982: 207)
[依頼 + ʔadaw = 晴れを請う]

(46) *ki-livak*
KI-love
‘世話をする’
語根 livak (C: Ferrell 1982: 145)
[依頼 + 愛する = 世話をする]

(45) の例を Huang (2012) は ‘get’ の意で訳していたが、ki- に「依頼」の意味を認めた場合、この例は「獲得」よりも「依頼」の ki- と考えたほうが、より Huang (2012) の訳に沿う。

(46) の語根 livak は見出しに意味の記載はないが、Ferrell (1982: 145) にある派生形 ki-livak ‘to tresuare, be protective of, (W[3]) love’, pa-ki-livak ‘to take good care of’, mare-

[3] Ferrell (1982: x) で中パイワン語以外の例を使う場合次の表記を用いると述べられている。W: 西パイワン, OD: 中パイワン、西パイワン以外の方言, Q: 南パイワン, T: Tjuabar

ki-liva-livak ‘(W) loving one another’ などから livak の意味は ‘love’ であると推測できる。

また (43)(44) の筆者のデータに見るように、パイワン語でも ki- を「依頼」の意味を持つと認めると、これらの例において自然な説明が可能になる。

4.5 更なる調査を必要とする ki-

この節では、語根の意味の抽出が不可能だったもの、また語根の意味が分かっていても派生の過程が解釈不可能なものの例をまとめている。

(47) *ki-ʔauŋ*=akən tanusun?
KI-weep=1SG.NOM 2SG.OBL
‘何かお手伝いすることがありますか?’
語根 ʔauŋ ‘to weep’ (C: Ferrell 1982: 218)
→ cf. ki-ʔauŋ ‘make request’ (C: Ferrell 1982: 218)

ʔauŋ という語根の意味は分かっているにもかかわらず ‘weep’ から「獲得」「再帰」「遊び」「依頼」のどの意味の ki- を用いても ‘make request’ の意味を派生することは難しいように思える。ki-ʔauŋ 自体が慣用句的な用法をもつことも考えられ、追加調査が必要な語の一つである。

(48) puli *ki-unaŋ*=akən lakua uri pu-saʎsaʎadj-an=akən
want KI-??=1SG.NOM but will PU-help-AN=1SG.NOM
ta ku=kina
OBL 1SG.GEN=mother
‘私は遊びに行きたいけど母の手伝いをしなければならない’
語根 unaŋ (C: Ferrell 1982: 328)

unaŋ に関しては、語根の見出しに意味の記載がない。また、他の派生形の例示が Ferrell (1982: 328) にも筆者のデータにも存在しないため、意味の抽出も困難である。ki-unaŋ 自体の意味は「遊びに行く」になるため、この ki- は「遊び」の意味を持つ可能性が高いが、unaŋ に他の派生形が存在するのかなど追加調査が必要である。

(49) *ki-vadaʔ*=akən
KI-??=1SG.NOM

方言。「西パイワン」という表現は Ferrell しか用いておらず、どの地域を指しているのかは正確には不明である。

‘（私は）（あなたに）質問があります’
語根 vadaʔ (C: Ferrell 1982: 331)

vadaʔ も語根の見出しに意味の記載がなく、他の派生形もデータにないため、意味の抽出が困難な例の一つである。また、直前の ki-unaŋ とは異なり、ki-vadaʔ 自体を「獲得」「再帰」「遊び」「依頼」のいずれかに分類することも難しい。

(50) k*i*-*liŋav*-*u*![4]
KI-??-IMP
‘試してみて！’
語根 lingaw (Ferrell 1982: 163)

語根 lingaw は Ferrell (1982: 163) の辞書に同音異義語として 3 種類挙げられている。

liŋaw$_1$ ‘to have need to urinate or defecate’
→liŋav-akən ‘I wish to relieve myself’
liŋaw$_2$ ‘echo’
→l<əm>iŋaw ‘to make much noise’
liŋaw$_3$
→liŋa-liŋaw ‘(W) soul, body’
pu-liŋa-liŋaw ‘(W) to know profoundly’
ki-liŋaw ‘(W) to test, examine, taste’
pu-liŋaw ‘priestess, shaman’

3 番目の liŋaw は見出しに意味の記載がないが、ki-liŋaw の例はここに含まれる。派生の例はたくさんあるものの、派生語間に共通の部分が乏しく、語根の意味を抽出することは難しい。また ki-liŋaw 自体の意味も「獲得」「再帰」「遊ぶ」「依頼」のいずれかに分類することは不可能である。

5. まとめ

まず、2.3 節で接頭辞 ki- の特徴として「接頭辞 -φ」で AV 形をつくることを述べた。続いて 3 節で見た様々な先行研究から、共時的なパイワン語の ki- はまず「獲得」「再帰」の意味を持つことが分かった。本稿ではこれに加えて、「遊び」「依頼」の意味を派生する機能が ki- にあることを示した。この二つは先行研究にはな

[4] /w/ は語頭・語中で [v] になり語末で [w] になる

いものである。また筆者のデータから明らかになった「依頼」の意味をもつ ki- の発見はパイワン語の ki- も祖形 *maki-/paki- もしくは *makis-/pakis- にさかのぼる可能性を示した。

略号一覧

1: 1st person	2: 2nd person	3rd person
AV: actor voice	CAUS: causative	COMP: complementizer
COS: change of state	GEN: genitive	GV: goal voice
IMP: imperative	IRR: irrealis	IV: instrumental voice
LIN: linker	LOC: locative	LV: locative voice
NEG1: negator1	NEG2:negator2	NOM: nominative
OBL: oblique	PEV: perfective	PN: person name
PS: person	RED: reduplication	REF: reflexive
REQ: request	SG: singular	
-: morpheme break	=: clitic break	<>: infix

参考文献

Blust, R. (2003). *Thao Dictionary*. Taipei: Institute of Linguistics, Academia Sinica.

Blust, R. (2009). *The Austronesian Languages*. Pacific Linguistics 602. Canberra: The Australian National University.

Blust, R. (2013). *The Austronesian Languages* (Revised ed). Canberra: Asia-Pacific Linguistics, Research school of Pacific and Asian Studies, The Australian National University.

Chang, A. H. (2006). *A reference grammar of Paiwan*. Australian National University.

Ferrell, R. (1982). *Paiwan Dictionary*. Canberra: Pacific Linguistics.

Huang, W. (2012). *A study of verbal morphology in Puljetji Paiwan*. National Tsing Hua University.

Li, P. J. (2008). The great diversity of Formosan languages. *Language and Linguistics*, *9*(3), 523–546.

Li, P. J., & Tsuchida, S. (2006). *Kavalan Dictionary*. Taipei: Institute of Linguistics, Academia Sinica.

Liao, H. C. (2011). On the development of comitative verbs in Philippine languages. *Language and Linguistics*, *12*(1), 205–237.

Nojima, M. (2009). Bunun prefix makis-/pakis- " to request , ask for ": an evidence for PAN *makiS-/pakiS-. In *11th International Conference on Austronesian*

Linguistics (pp. 1–5). Aussois, France.

Teng, S. F. (2008). *A reference grammar of Puyuma, an Austronesian language of Taiwan*. Canberra: Pacific Linguistics Research School of Pacific and Asian Studies The Australian National University.

Zeitoun, E., & Teng, S. F. (2009) From ki-N “get N” in Fromsan languages to ki-V “get V-ed” (passive) in Rukai, Paiwan and Puyuma. In E. Bethwyn (Ed.), *Discovering history through language: papers in honour of Malcolm Ross* (pp. 479–500). Canberra: Pasific Linguistics.

小川尚義・浅井恵倫 (1935)『原語による臺灣高砂族傳説集』東京: 刀江書院.

原住民族委員会 (n.d.)『55個原鄕列表』(2019 年 4 月 12 日閲覧) https://www.apc.gov.tw/portal/index.html

土田滋 (1980)「プユマ語（タマラカオ方言）語彙ー付・語法概説およびテキストー」『黒潮の民族・文化・言語』 pp. 183–307. 角川書店.

受理日 2019 年 4 月 16 日

ワットゥクンプ テロ（2019）『言語記述論集』11：163-179

ハイスラ語における再帰・相互表現について

ワットゥクンプ　テロ

(Tero Vattukumpu)

京都大学大学院文学研究科・terova@gmail.com

キーワード：ハイスラ語、再帰、相互、再帰代名詞、複数形

1 はじめに

本稿では、ハイスラ語 (Haisla) のフィールド調査で集めたデータの中に出ている再帰 (reflexive) 表現と相互 (reciprocal) 表現とそれらについての今までの考察・現段階の分析の過程について論じる。後述のように、ハイスラ語では、再帰性・相互性を表すために様々な手段が用いられるが、筆者のフィールド調査によって、先行研究では記述されていない再帰・相互表現が存在することが分かった。本稿では、こうした再帰・相互表現を提示したうえで、これらを体系的に記述するうえで、どのような問題があるかを指摘する。

本稿の具体的な内容は以下の通りである。まず、第 1 章の残りの部分でハイスラ語の概要を説明する。第 2 章では、本稿のテーマの背景と本稿で扱うデータ及び再帰性と相互性の定義について述べる。第 3 章では、先行研究で記述されている（ハイスラ語の）再帰・相互表現についてまとめる。第 4 章では、新たな筆者が発見した再帰・相互表現を紹介する。第 5 章では、再帰・相互表現を記述するうえでの問題点をまとめる。第 6 章では、結論として今後の課題について述べる。

1.1　ハイスラ語について

ハイスラ語は、カナダのブリティッシュ・コロンビア州でハイスラ族という先住民に話されている危機言語であり、ワカシュ語族の北ワカシュ語派に属している。2018 年 8 月の時点で、ハイスラ語の話者数は、87 人であった[1]。話者は全員ハイスラ語と英語のバイリンガルで、ほとんどブリティッシュ・コロンビア州の中央部に所在しているキタマート村 (Kitamaat Village) に在住している（地図 1）。

ハイスラ語は、基本語順が述語―主語―目的語であり、音韻論的・形態論的な体系が複雑で、複統合的な言語であると記述されたことがある (Bach 1995: 13)。

本稿の内容にとって知っておくべき特徴としては更に、次の文法現象も紹介する：

[1] この情報は、2018 年 8 月に Haisla Nation Council のコミュニティ文化コーディネーターの Teresa Windsor 様から得ている。

地図 1：**キタマート村の所在地**

1) 主語と直接目的語は、節の中で名詞句によって表されなければ、述語には主語と直接目的語の人称を表す人称接語が付く。2) ハイスラ語の述語は、助動詞と本動詞からなる複述語及び本動詞のみの単述語という 2 種類がある。3) 複述語の場合に、主語人称接語は助動詞に付き、直接目的語人称接語は本動詞に付く。単述語の場合に、主語人称接語と直接目的語人称接語の両方が本動詞に付く。4) 複数形を形成する手段として、部分重複 (partial reduplication) は生産性が高い (Vink 1978: 1, Bach 1990a: 2)。5) ハイスラ語の一人称複数は、除外的一人称複数と包括的一人称複数があり、人称接語の単複の区別があるのは、一人称だけである。6) 単述語の場合に、主語が複数ならば、述語は複数形になり、複述語の場合に、主語が複数ならば、助動詞は複数形になり、直接目的語が複数ならば、本動詞が複数形になる。ただし、主語又は直接目的語が一人称複数の場合に、複数形は任意的である。7) 人称代名詞は人称接語と共起することがなく、人称代名詞を使った表現はあまり一般的ではない。ハイスラ語の音韻体系や人称接語及び本稿で採用されている表記法については、最後に付属参照資料を添付している。

2　本稿のテーマの背景とデータについて

ハイスラ語の記述文法を作成する目的でハイスラ語のデータを集めるため、2017 年から 2018 年にかけて 2 回の調査で、ハイスラ語の述語の屈折パラダイムとして人称接語の全ての組み合わせを集めようとしてきた。その作業のついでに、二次的なデータとして再帰・相互表現についても調査してきたが、集まった再帰・相互表現のデータはまだそこまで多くない。現段階では、集められた再帰・相互表現のデータをひとまず整理しており、今後の分析や調査の方向性を考えているところである。

本稿で示すデータは全部、2017 年から 2018 年にかけての 2 回の調査で集めたものである。調査期間は以下の通りである：

表 1：**調査期間**

2017 年の調査	**2018 年の調査**
9 月 1 日　～ 10 月 31 日	6 月 27 日 ～ 8 月 31 日

これまでのデータは、2 人のコンサルタントから得たものであり、本稿ではコンサルタント A とコンサルタント B と呼ぶことにする。コンサルタントの基本情報は以下に示す：

表 2：コンサルタントの基本情報

コンサルタント	性別	生年	出身地	調査協力年
A	女	1950 年	キタマート村	2017･2018 年
B	男	1946 年	キタマート村	2018 年

両方のコンサルタントはハイスラ語を第一言語 (の 1 つとして) 習得した方である。筆者が集めた再帰・相互表現の全てのデータは、聞き出し (elicitation) によって集まった。主な訊き方は、1 つの意味に対して筆者が考えた表現の許容性についてコンサルタントに質問することであった。

2.1　再帰性・相互性の定義と本稿のデータ

本稿のデータは、再帰性(reflexivity)・相互性(reciprocity)という概念の明確な定義に基づいて体系的に集められたデータではなく、本稿で紹介した考察は初期段階の整理のようなもので、まだそこまで理論的にはまだ分析していない。筆者がこれまでに集めた再帰・相互表現のデータと再帰性･相互性の定義の関係ついて何が言えるのかをしっかりと把握する目的で、筆者が採用したいと考える再帰・相互の定義について紹介し、どの種類のデータが集まっているかについて述べる。

最も基本的な定義のようであると考えられる再帰性・相互性の定義の 1 つは König & Gast (2008: 7) が挙げている以下の述語論理 (predicate logic) に基づいた形式的な定義である：

【再帰性の定義】

A binary predicate R is reflexive on a set A iff:

$\forall x \in A[R(x,x)]$　　(König & Gast 2008: 7)

【相互性の定義】

A binary predicate R is reciprocal on a set A iff:

$\forall x,y \in A[x \neq y \rightarrow R(x,y)]$ and $|A| \geq 2$ (“strong reciprocity”)　　(König & Gast 2008: 7)

König & Gast (2008: 7) が挙げている相互性の定義は ”strong reciprocity” という相互性の種類に当たる。ところが、相互性にはいくつかの種類がある。例えば、Dalrymple, Kanazawa, Mchombo & Peters (1994: 65-69) は、様々な相互性の種類をまとめている。詳細は深入りしないが、これらの種類の意味の違いはハイスラ語の相互表現において何らかの形で反映されているかどうかは不明である。また、本稿で扱うデータにおいても、相互性の種類の違いが反映されているかどうかは分からない。なぜならば、コンサルタントは、どのような場面 (相互性のどの種類) を想像しながら、これまでに調査で集まった相互表現の例を発言したかは分からないからである。

また、相互性という概念の種類分け以外に、Nedjalkov (2007) は、相互表現の多機能性・多義性について指摘している。Nadjalkov (2007) は相互表現の多機能性・多義性の例として、結合価を減らす機能（中間態 (middle voice)・非他動詞化）(Nedjalkov 2007: 13) 及び、再帰性・相互性と随伴性 (sociativity)・相互性と反復性 (iterativity)・相互性の多義性などを挙げている (Nedjalkov 2007: 17)[2]。本稿で紹介するデータは、ハイスラ語において (先行研究で再帰代名詞として扱われてきた形態素を用いた場合に) 再帰性・相互性の多義性が生じることがあることを示唆しているものの、その他の多義性の可能性については現段階では何も言えない。なぜならば、本稿におけるデータは多義性の可能性を配慮した上で採取されたわけではないからである。

再帰性の概念に関して言えば、König & Gast (2008: 7-8) は、再帰代名詞にはよく強意詞 (intensifier) としての機能もあり、代名詞以外の再帰標識にはよく中間態を表す機能があると指摘している。このような多機能性・多義性はハイスラ語の再帰表現に見られるかどうかも本稿のデータでは確定できない。

3　先行研究におけるハイスラ語再帰・相互表現の記述について

これまでのところ、ハイスラ語の再帰・相互表現の体系的な記述はされていないが、文法概略や辞書を見る限りでは、以下のような表現（再帰・相互接尾辞と再帰代名詞）が再帰・相互表現として機能していると考えられる。

Bach (2001b: 168) の辞書では、'self' という意味で *saxʷ̄λa* と *bekʷái* という再帰代名詞に見える見出し語が挙げられている。Bach (1990b: 197, 223) も同じ *saxʷ̄λa* と *bekʷái* を挙げているが、*bekʷái* には 'self' 以外に 'body' という意味も与えている。また、Raley (n.d.) の辞書にも、'himself' という意味で、*sa-houtla* と *bukwag-assie* という見出し語がある。Lincoln & Rath (1986a, 1986b) の辞書には、Bach (2001b: 168) の *saxʷ̄λa* と Raley (n.d.) の *sa-houtla* に相当するものは見当たらないが、'one's body' という意味で、Bach (2001b: 168) と同じ *bekʷái* が見つかる (Lincoln & Rath 1986a: 54)。さらに、Bach (2001b: 168) によれば、*sísaxʷ̄λa* という複数形の再帰代名詞もある。Bach (1990b: 119, 124) は、'self' という意味で *-saq̄ʷ*[3] という接尾辞の存在を指摘しているが、具体例は挙げていない[4]。

相互表現に関しては、Vink (1977: 130) と Bach (1990b: 118,123) は、'each other' という意味の *-ap̓* という接尾辞を挙げている。また、Lincoln & Rath (1986a, 1986b) の辞書では、Bach

---

[2] Nedjalkov (2007: 17) によれば、この 3 つは、相互表現において最もよくある多義性のパターンである。

[3] ハイスラ語には、基底形の有気軟口蓋破裂音と有気口蓋垂破裂音が子音の前と語末の位置で同器官的な摩擦音として発音されるという音韻交替の現象があるので、*-saq̄ʷ* の実際の発音が /saχʷ/ (⟨saxʷ̄⟩) のはずである。Bach (2001b: 168) が挙げている *saxʷ̄λa* と関係があるだろうと考えらえるが、現時点でこのことに関してはこれ以上のことが言えない。

[4] Lincoln & Rath (1986a, 1986b) の辞書でも、確実に *-saqʷ* を含んでいると考えられる見出し語が見当たらない。

(1990b: 117, 121; 2001a: 56) が ‘together’ という意味で挙げている *-(ḡ)u* という接尾辞が付いている見出し語がよく、‘to X each other’ と訳されている[5]。

4　データの中の再帰・相互表現

筆者の調査では、再帰代名詞の単数形 *saxʷ̄λa* と複数形 *sísaxʷ̄λa*、あるいはこれらの異形態と思しき *saxʷ̄ƛ̓* と *sísaxʷ̄ƛ̓* の使用を確認することはできた。しかしながら、相互接尾辞 *-ap̓* はほとんどみられず、再帰接尾辞 *-saq̄ʷ* を用いた例は一例もみられなかった。また、同じ人称を表す形態素を 2 つ用いることにより、再帰表現が形成され、再帰代名詞の複数形を用いることにより、相互表現が形成されるパターンも確認された。

【人称繰り返しパターン (person repetition pattern)】

同じ人称を表す形態素が 2 つ出てくることによって ***再帰表現*** となるパターンである。以下の 3 種類があった：

1.【単述語・人称接語パターン (simple predicate – person clitic pattern)】:

述語に同一人称の主語人称接語と直接目的語人称接語が現れる。

2.【複述語・人称接語パターン (complex predicate – person clitic pattern)】:

複述語の 1 つの要素には主語人称接語が現れ、もう 1 つの要素には同一人称の直接目的語人称接語が現れる。

3.【人称代名詞・人称接語パターン (personal pronoun – person clitic pattern)】:

主語として人称代名詞が現れ、述語に同一人称の直接目的語人称接語が現れる。

【再帰代名詞パターン (reflexive pronoun pattern)】

述語には主語人称接語のみが付いた上で、直接目的語の位置に再帰代名詞の *saxʷ̄ƛ̓* と *sísaxʷ̄ƛ̓* のどちらかが現れ、***再帰又は相互表現*** となる。

この 2 つのパターンの中、「再帰代名詞パターン」による相互表現的な用法と「人称繰り返しパターン」は管見の限りでは先行研究でまだ記述されていない。全パターンの全ての例を次節で詳しく見ていく。

4.1 人称繰り返しパターンによる再帰表現

人称繰り返しのパターンの例は全部コンサルタント A から得られた例である。先ずは、人称繰り返しパターンの単述語・人称接語パターンの例を見ていく。最初に、主語が単数の 3 つの例を以下に示す。

---

[5] 例えば、Lincoln & Rath (1986b: 305) は、*q̓aq̓aḡu* という見出し語を挙げ、‘to meet face to face / to be in tune with each other’ という意味を与えている。この語で *-(ḡ)u* ‘together’ は、重複によって *-q̓a* ‘straight, in the middle, correct / to find, to discover, to learn / to be situated’ という語根から形成された *q̓aq̓a-* という語幹に付いている (Lincoln & Rath 1986b: 305, 480)。

(1) ’elx̄asá=nugʷ=enƛa
kill=1SG.EXCL.SBJ=1SG.EXCL.OBJ
‘I killed myself.’ (lit. ‘I killed me.’)

(2) ’elx̄asá=su=’uƛa[6]
kill=2.SBJ=2.OBJ
‘You killed yourself.’ (lit. ‘You (SG) killed you (SG).’)

(3) ’elx̄á=su=’uƛ(a)
beat.up=2.SBJ=2.OBJ
‘You beat yourself up.’ (lit. ‘You (SG) beat you (SG) up.’)

(1) ～ (3) の例で分かるように、’殺す’という意味の語幹 (stem) である *’elx̄asá-* は、*’elx̄á-* (‘打ちのめす’) と *-sa* という接尾辞からなっていると考えられる。そうであるとしても、-sa は何の接尾辞かは不明である[7]。単述語・人称接語パターンの残りの主語が複数の 2 例は多少問題な例なのであるが、以下に示す。

(4) ’i-’elx̄asá=nugʷ=entƛanuxʷ
PRED.PL-kill=1SG.EXCL.SBJ=1PL.EXCL.OBJ
‘We (EXCL) killed ourselves.’ [sic]
(lit. ‘I killed us (EXCL).’)

(5) ’i-’elx̄asá=nugʷ=entƛanis
PRED.PL-kill=1SG.EXCL.SBJ=1PL.INCL.OBJ
‘We (INCL) killed ourselves.’ [sic]
(lit. ‘I killed us (INCL).’)

(4) と (5) の例はそれぞれ、除外的一人称と包括的一人称の再帰表現を意味しているとコンサルタント A が指摘した。これらの例に関しては、注目すべき点が 2 つある：1) 主語と直接目的語の人称接語は同一人称ではない。2) 述語の語幹 (stem)として出ているのは部分重複によってできた複数形 (*’i’elx̄asá-*)である。ハイスラ語の動詞に語幹に部分重複がおきる。部分重複によってできた形式は、単述語の主語あるいは複述語の主語か目的語が複数の場合に

---

[6] 理由は今の所不明であるが、(2) と (3) の例文では、主語接語と目的語接語の間に声門閉鎖音が出現している。それに伴って後ろの /u/ が二重母音化している ([ou̯])。（母音音素の異音については附属資料が参照になる。）

[7] 筆者の推測では、語彙的アスペクト (lexical aspect, aktionsart) を変える接尾辞で、語根が表す動作を限界的 (telic) にするのである可能性がある。

現れる。このことを踏まえて、本稿では部分重複によって形成された動詞語幹を複数形と呼ぶ。筆者がこれまでに集めた全てのデータからすれば、述語に主語人称接語が付いている場合に述語の複数形は必ず主語の複数性を表すので、本来なら一人称単数の主語人称接語と述語の複数形が共起することはあり得ないはずである。(4)の例に関しては確認が取れていないが、コンサルタント A は、(5)に関して、単数形の *'elx̄asá-* を使うと「私達(INCL)が自分達を」という再帰的な意味にはならないと指摘した。また、単数形の 'elx̄asá=nugʷ=entƛanuxʷ と 'elx̄asá=nugʷ=entƛanis という例が別にあり、それぞれ「私が私達(EXCL)を殺した」・「私が私達(INCL)を殺した」という意味となる。(4)・(5)の例の主語は、一人称複数であると解釈されるにもかかわらず、動詞語幹が一人称単数の主語人称接語でマークされている。また、部分重複によって形成される単述語の複数形は主語が複数の場合に現れるが、この 2 つの例では、人称接語と語幹の間に数の矛盾が生じている。

次に複述語・人称接語パターンの例を以下に示す。

(6) q̇ʷiláka=su 'elx̄as=úƛ
AUX.do.on.one's.own=2.SBJ kill=2.OBJ
'You killed yourself'
(lit. 'You (SG) killed you (SG) on your own.')

(7) q̇ʷiláka=su 'i'-elx̄as=úƛa
AUX.do.on.one's.own=2.SBJ PRED.PL-kill=2.OBJ
'You killed yourselves.'
(lit. 'You (PL) killed you (PL) on your own.')

(8) q̇ʷiláka=n 'elx̄as=énƛ
AUX.do.on.one's.own=1.SG.EXCL.SBJ kill=1.SG.EXCL.OBJ
'I killed myself.' (lit. 'I killed me on my own.')

(9) q̇ʷiláka=su 'elx̄=úƛ
AUX.do.on.one's.own=2.SBJ beat.up=2.OBJ
'You beat yourself up.' (lit. 'You (SG) beat you (SG) up on your own.')

上の (6) ～ (9) の例では、述語が *q̇ʷiláka* ('自分一人で・～達自身でする') という助動詞とその後の本動詞からなっていると考えらえる。筆者のデータの中には、他に *q̇ʷiláka* の例がないが、Bach (2001b: 49) は、*q̇ʷiláka* に 'do on your own'という意味を与えている。*q̇ʷiláka* は、助動詞としての用法があるという記述は先行研究で見ていないが、ハイスラ語における典型的な助動詞と同様に振る舞っているので、助動詞 (AUX) だと分析している。

次に人称代名詞・人称接語パターンの例を見る。

(10) yeẍsú ’elẍas=úƛa
PN.2 kill=2.OBJ
‘You killed yourself.’
(lit. ‘You (SG) killed you (SG).’)

(11) yí-yeẍsu (’i-)’elẍas=úƛa
PRED.PL-PN.2 (PRED.PL-)kill=2.OBJ
‘You killed yourselves.’
(lit. ‘You (PL) killed you (PL).’)

ハイスラ語の基本語順で述語が文頭に来るのが一般的であるものの、これまでに集めたデータの中で人称代名詞が主語を表すものとして出てきた例文では、人称代名詞がなぜか文頭の位置に来ている。この現象はまだ説明できていないので、深入りはしない。また、コンサルタント A は、(10) の例に関して、述語の語幹として複数形を使った場合 (yeẍsú ’i’elẍasúƛa)、再帰的な意味になれないと指摘したが、相互的な意味で使えるかどうかは不明である。

人称繰り返しパターンによる再帰表現の文法性についてはコンサルタント B からほとんど確認得られていないが、(1) の例 (’elẍasá=nugʷ=enƛa ‘私は自殺した’) については、非文法的であると言われた。

次節では、再帰代名詞パターンの例を見ていく。

4.2 再帰代名詞パターンによる再帰・相互表現

再帰代名詞パターンによる再帰・相互表現の例は全て、コンサルタント B から得られたものである。単述語の例も複述語の例もある。最初には、単述語の例を見て、その後複述語の例を見ていく。先ずは、主語が単数である単述語の例を示す。

(12) gu’áƛa=n saẍʷƛ
help=1.SG.EXCL.SBJ PN.REFL
‘I am helping myself.’

(13) gu’áƛ=u saẍʷƛ
help=3.MED.SBJ PN.REFL
‘(S)he (MED) is helping him/herself.’

(14) gu’áƛ=i saẍʷƛ
help=3.DIS.SBJ PN.REFL
‘(S)he (DIS) is helping him/herself.’

(15) dáka-ƛ-e=n sax̄ʷƛ
touch-FUT-EP=1.SG.EXCL.SBJ PN.REFL
'I will touch myself.'

主語が単数の場合に、再帰代名詞は単数形 (*sax̄ʷƛ*) のままでしか出現せず、文全体が再帰表現にしかならない。次に、主語が複数の例を見ていく。先ずは、一番に体系的にデータが取れている三人称の例 (16 と 17) を以下に示す。

(16) a. gí-gu'aƛ=u sax̄ʷƛ / gu'áƛ=u sí-sax̄ʷƛ
PRED.PL-help=3.MED.SBJ PN.REFL / help=3.MED.SBJ PRED.PL-PN.REFL
'They (MED) are helping themselves.'

b. gí-gu'aƛ=i sax̄ʷƛ / gu'áƛ=i sí-sax̄ʷƛ
PRED.PL-help=3.DIS.SBJ PN.REFL / help=3.DIS.SBJ PRED.PL-PN.REFL
'They (DIS) are helping themselves.'

c. gí-gu'aƛa-ƛ=gi sax̄ʷƛ / gu'áƛa-ƛ=gi sí-sax̄ʷƛ
PRED.PL-help-FUT=3.ABST.SBJ PN.REFL / help-FUT=3.ABST.SBJ PRED.PL-PN.REFL
'They (ABST) will help themselves.'

(17) a. gí-gu'aƛ=u sí-sax̄ʷƛ / gu'áƛ=u sí-sax̄ʷƛ
PRED.PL-help=3.MED.SBJ PRED.PL-PN.REFL / help=3.MED.SBJ PRED.PL-PN.REFL
'They (MED) are helping each other.'

b. gí-gu'aƛ=i sí-sax̄ʷƛ / gu'áƛ=i sí-sax̄ʷƛ
PRED.PL-help=3.DIS.SBJ PRED.PL-PN.REFL / help=3.DIS.SBJ PRED.PL-PN.REFL
'They (DIS) are helping each other'

c. gí-gu'aƛa-ƛ=gi sí-sax̄ʷƛ / gu'áƛa-ƛ=gi sí-sax̄ʷƛ
PRED.PL-help-FUT=3.ABST.SBJ PRED.PL-PN.REFL / help-FUT=3.ABST.SBJ PRED.PL-PN.REFL
'They (ABST) will help each other.'

(16) と (17) の例では、上の三人称複数の例を見るだけでは、主語が複数の場合の再帰代名詞パターンを以下の規則でまとめられそうである：

表 3：三人称複数のデータに基づいた再帰代名詞パターンのまとめ

I)	再帰代名詞パターンで再帰表現を表すためには、述語と再帰代名詞の片方だけで複数形を使う。
II)	再帰代名詞パターンで相互表現を表すためには、再帰代名詞の複数形である *sísaxʷƛ* を使う必要がある。
III)	*sísaxʷƛ* で相互表現を形成すれば、述語の方では複数形があってもなくても良い。
IV)	結果として、述語の方で複数形がなく、再帰代名詞が複数形である場合に、再帰表現と相互表現の両方の可能性があるため、曖昧性が生じる。

次に、一人称複数と二人称複数の場合にも表 3 のようにまとめられるかどうかを見ていこう。先ずは、二人称複数の例を示す。

(18) a. gí-gu’áƛa=su sí-saxʷƛ
PRED.PL-help=2.SBJ PRED.PL-PN.REFL
‘You are helping yourselves.’

b. gu’áƛa=su sí-saxʷƛ
help=2.SBJ PRED.PL-PN.REFL
‘You are helping each other.’

(18a) の例を見て分かるように、二人称複数は、再帰表現で述語と再帰代名詞の両方の複数形を許すので、少なくとも再帰表現において三人称と異なる。それに対して、(18b) のデータは表 3 のまとめと矛盾していない。二人称複数のデータは三人称のデータほど体系的に集められなかったので、(18a) は相互表現として使えるかどうか、(18b) は再帰表現として使えるかどうか、再帰代名詞を使った (18a)・(18b) 以外の二人称複数の再帰・相互表現があるかどうかは不明である。

本稿の最後に付属参照資料として添付した人称接語の表で分かるように、ハイスラ語において二人称と三人称は、人称接語において接語自体には単複の区別がないので、複数性は (普段述語の) 複数形を使うことにより表される。これに対して、一人称複数と一人称単数の人称接語は異なるので、一人称複数の場合に複数形の使用は任意的である。この事実は、再帰代名詞パターンの再帰・相互表現に反映されているかどうかを見てみるために、一人称複数の例を最後に紹介する。先ずは、除外的一人称複数の例を以下に示す。

(19) a. gu’áƛa=nuxʷ saxʷƛ
help=1PL.EXCL.SBJ PN.REFL
‘We (EXCL) are helping ourselves.’

b. gu’áƛanuxʷ sí-saxʷƛ
help=1PL.EXCL.SBJ PRED.PL-PN.REFL
‘We (EXCL) are helping each other.’

(19a) は、再帰表現なのに複数形が 1 つもないので、表 3 のまとめと矛盾しているが、一人称複数の場合に複数形が任意的であることで説明できそうである。また、(19b) は表 3 のま

とめと矛盾していない。ただ、(19a) は相互表現として使えるかどうか、(19b) は再帰表現として使えるかどうかは不明である。また、再帰代名詞を使った (19a)・(19b) 以外の一人称複数の再帰・相互表現があるかどうかも確認できていない。除外的一人称複数については、さらに次の再帰表現の例がある。

(20) (dí-)dáka-ƛ-e=nuxʷ (sí-)saxʷƛ
(PRED.PL-)touch-FUT-EP=1PL.EXCL.SBJ (PRED.PL-)PN.REFL
'We (EXCL) will touch ourselves.'

(20) の例では、単数形と複数形の全ての組み合わせが可能であり、どの組み合わせでも再帰表現となる。表 3 のまとめと矛盾している点は、述語と再帰代名詞の両方で複数形が現れ得ることと、両方で単数形が現れ得ることではあるが、後者はまた一人称複数の場合に複数形を必要がないことで説明できそうである。

次に、包括的一人称複数の例を以下に示す。

(21) gu'áƛa=nis sí-saxʷƛ
help=1PL.INCL.SBJ PRED.PL-PN.REFL
'We (INCL) are helping ourselves.' / 'We (INCL) are helping each other.'

(21) の例は表 3 のまとめと矛盾していないが、単数形と複数形の他の組み合わせではどうなるかは確認できていない。

最後に、助動詞が使われている複述語の再帰代名詞パターンの例を示す。先ず、主語が単数の例を示す。

(22) k̓u=n gu'áƛ(a) saxʷƛ
AUX.NEG=1SG.EXCL.SBJ help PN.REFL
'I am not helping myself.'

(23) k̓ú=cu gu'áƛ(a) saxʷƛ
AUX.NEG=2.SBJ help PN.REFL
'You are not helping yourself.'

主語が複数のデータの中には、否定助動詞と勧奨法 (cohortative) 助動詞の例がある。先ずは、否定助動詞の例を示す。

(24) a. k̓ú=cu gí-gu’aƛ sáx̄ʷƛ b. k̓ú=cu gu’áƛ sí-sax̄ʷƛ
AUX.NEG=2.SBJ PRED.PL-help PN.REFL AUX.NEG=2.SBJ help PRED.PL-PN.REFL
‘You are not helping yourselves.’ 同左 / ‘You are not helping each other.’

(25) a. k̓ú=nuxʷ gí-gu’aƛ sax̄ʷƛ / k̓ú=nuxʷ gu’áƛ sí-sax̄ʷƛ
AUX.NEG=1PL.EXCL.SBJ PRED.PL-help PN.REFL / AUX.NEG=1PL.EXCL.SBJ help PRED.PL-PN.REFL
‘We (EXCL) are not helping ourselves.’

b. k̓ú=nuxʷ gu’áƛ sax̄ʷƛ / k̓ú=nuxʷ gu’áƛ sí-sax̄ʷƛ
AUX.NEG=1PL.EXCL.SBJ help PN.REFL / AUX.NEG=1PL.EXCL.SBJ help PRED.PL-PN.REFL
‘We (EXCL) are not helping each other.’

否定助動詞のデータで表 3 のまとめと矛盾しているのは、(25b) の例である。これまでのデータの再帰代名詞パターンの相互表現の全ての例では、再帰代名詞の複数形が出ていたが、(25b) のデータは、単数形の再帰代名詞の相互表現も可能であることを示唆している。さらに、コンサルタントは (25) のデータに関して、再帰代名詞と本動詞の *gu’áƛ* の両方を複数形 (*gígu’aƛ*) にすれば、相互表現にならないと指摘し、これも表 3 のまとめと矛盾している。また、再帰代名詞と本動詞と両方が複数形にすると再帰表現として使えるかどうかは不明である。

最後に、勧奨法助動詞を示す。

(26) wíse=nis dí-dak sí-sax̄ʷƛ
AUX.COH-1PL.INCL.SBJ PRED.PL-touch PRED.PL-PN.REFL
‘Let’s touch each other.’

(26) の勧奨助動詞の例は、表 3 のまとめと矛盾してはいないが、他の組み合わせができるかどうか、勧奨助動詞と再帰代名詞が共起した再帰表現があるかどうかは不明である。

4.3 パターンのまとめ

本節では、上に見たデータから言えることをまとめる。先ずは、**人称繰り返しパターン**について言えそうなことは以下の通りである：

1) 先行研究で記述されている再帰代名詞の他に、人称繰り返しパターン (X_1 が X_1 を) によっても再帰表現を表すことができる。
2) 単述語・人称接語パターンと複述語・人称接語パターンと代名詞・人称接語パターンの 3 つのパターンがある。

再帰代名詞パターンについては、一旦三人称複数のデータに基づいて考えた表 3 のまとめは結局一人称と二人称の場合に適用されないことが分かった。前節で見てきた一人称複数と二人称複数のデータも含めると、それぞれの人称の複数において述語と再帰人称代名詞の単複のどの組み合わせで再帰と相互が表せるかを以下の表 4 のようにまとめられる。

表 4：全人称複数のデータに基づいた再帰代名詞パターンのまとめ

除外的一人称複数		包括的一人称複数		二人称複数		三人称複数	
再帰	相互	再帰	相互	再帰	相互	再帰	相互
SG + SG SG + PL PL + SG PL + PL	SG + SG SG + PL	SG + PL	PL + PL	SG + PL PL + SG PL + PL	SG + PL	SG + PL PL + SG	SG + PL PL + PL

表 4 で見て取れるように、述語と再帰代名詞の複数形の組み合わせに関しては一般化を図るのがとても困難である。全体的に再帰代名詞パターンについては、次のことがまとめられそうである：

1) 主語が単数の場合に、再帰代名詞の単数形 (*sáx̄ʷƛ̓*) が使われ、先行研究における記述から予想できるように、再帰表現となる。
2) 再帰代名詞の単数形 (*sáx̄ʷƛ̓*) は、相互表現でも使える。
3) 再帰代名詞の複数形 (*sísax̄ʷƛ̓*) は再帰表現と相互表現の両方を表すために使える。
4) 再帰代名詞は相互表現を表す場合に複数形 (*sísax̄ʷƛ̓*) を使う強い傾向がある。

5 まとめ

前章の説明で分かるように、本稿で扱っているデータの再帰・相互表現の記述に関する主な問題点は本質的に、主語が複数である場合の再帰代名詞パターンによる再帰・相互表現における単数形と複数形の組み合わせに関する問題であるとまとめられそうである。従って、再帰代名詞パターンによる再帰・相互表現を体系的に記述するのが中々難しいことが最も大きな問題であるが、筆者が現時点で疑問点だと思う全ての点を具体的に以下にまとめる：

【人称繰り返しパターンによる再帰表現の記述の問題点・疑問点】

1) 人称繰り返しパターンによる相互表現はないのか？
2) (4)・(5) の例文のような一人称複数の再帰表現は本当に言い間違えではないのか？
3) 人称繰り返しパターンによる再帰表現はなぜコンサルタント B に言えないのか？

【再帰代名詞パターンによる再帰・相互表現の記述の問題点・疑問点】

4) データが足りない。（全ての人称・数・組み合わせの例がほしい）
5) 再帰代名詞で相互表現を表したい場合に、複数形を使わないといけない強い傾向はどこまで強いのか？今のデータで反例が 1 つ (25b) しかないのは偶然なのか？
6) なぜ三人称複数の再帰・相互表現だけが一般化できそうなのか？
7) そもそも一般化ができるのであろうか？

さらに、以下の問題点・指摘が挙げられる：

8) データが足りない。全ての人称・数の例が集まっているのではないので、現段階の分析の信頼性が十分高くないと推定できる。また、再帰代名詞パターンのデータにおける述語と再帰代名詞の単数形と複数形の全ての組み合わせが集まっているのではない (従って、再帰表現と相互表現のどちらか或いは両方になり得るかどうかが分からない組み合わせがある)。
9) 1 つのパターンで再帰表現と相互表現の両方となりうる場合に、どちらになるのかが動詞による可能性があるので、より沢山の動詞の例及び再帰性・相互性の調査になるべく適している動詞の例があれば、より良い分析ができると期待できる。
10) 2.1 節でも述べたように、相互性の種類や再帰・相互表現の多機能性・多義性などを配慮して体系的に再帰・相互表現のデータを集めてきたわけではないので、これらについて分析することができない。
11) Nedjalkov (2007: 16-17) などによれば、相互性を表す自由形態素はめったに多義的ではないのに対して、相互性を表す接辞はよく多義的である。このような傾向があることは、ハイスラ語における再帰代名詞として記述されてきたものの、相互性も表せる *saxʷʎ* が一次的には相互性を表す形態素ではなく、再帰代名詞であることを示唆していると言えよう。

6 今後の課題

今後の課題としては、本稿で紹介した再帰・相互表現の問題点の解決を試みるために、再帰・相互表現の多機能性と多義性を配慮した上で、再帰・相互表現のデータを増やし、ハイスラ語の再帰・相互表現について再考察したい。

また、筆者の調査で例がまだほとんど出ていない相互接尾辞の *-ap̓* と再帰接尾辞の *-saqʷ* の例もできるだけ集め、他の再帰・相互表現とどのような体系をなすかを調べていきたい。

略号一覧

-	形態素境界	INCL	包括的
=	接語境界	lit.	文字通り
1	一人称	MED	中称
2	二人称	NEG	否定
3	三人称	OBJ	目的語
ABST	欠称 (Absental)	PL	複数
AUX	助動詞	PN	代名詞
COH	勧奨法	PRED	部分重複
DIS	遠称	rec.	相互性
EP	挿入音	REFL	再帰
EXCL	除外的	SBJ	主語
FUT	未来	SG	単数

参考文献・資料

Bach, Emmon (1990a) Stem Extensions in Haisla. *International Conference on Salish and Neighboring Languages* 25.1-16.

――――― (1990b) *A Haisla book*. Unpublished draft.

――――― (1995) A note on quantification and blankets in Haisla. In: Emmon Bach, Eloise Jelinek, Angelika Kratzer and Barbara H. Partee (eds.) *Quantification in Natural Languages* 13-20. Dodrecht: Kluwer.

――――― (2001a) Building words in Haisla. *University of Massachusetts Occasional Publications* 20: 51-73.

――――― (2001b) *English – Haisla Dictionary*. Unpublished draft.

Dalrymple, Mary; Kanazawa, Makoto; Mchombo, Sam and Peters, Stanley (1994) What Do Reciprocals Mean? In: Mandy Harvey and Lynn Santelmann (eds.) *Proceedings of the Fourth Semantics and Linguistic Theory Conference: SALT IV* 61-78. Ithaca, N.Y.: Cornell University.

König, Ekkehard & Gast, Volker (2008) Reciprocity and reflexivity – description, typology and theory. In: Ekkehard König & Volker Gast (eds.) *Reciprocal and Reflexives: Theoretical and Typological Explorations*, 1-32. Berlin: Mouton de Gruyter.

Lincoln, Neville J. and Rath, John C. (1986a) *Phonology, Dictionary and Listing of Roots and Lexical Derivates of the Haisla Language of Kitlope and Kitimaat [sic], B.C. Volume 1. Canadian Ethnology Service Paper* 103. Ottawa, ON: National Museum of Canada.

――――――――――――――――― (1986b) *Phonology, Dictionary and Listing of Roots and Lexical Derivates of the Haisla Language of Kitlope and Kitimaat [sic], B.C. Volume 2. Canadian*

Ethnology Service Paper 103. Ottawa, ON: National Museum of Canada.

Nedjalkov, Vladimir P. (2007) Overview of the research: Definitions of terms, framework, and related issues. In: Vladimir P. Nedjalkov, Emma Š. Geniušienė & Zlatka Guentchéva (eds.) *Reciprocal Constructions Volume 1*, 3-114. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Raley, George (n.d.) *English – Kitamaat*. Unpublished draft from Archives of British Columbia: Raley Collection.

Vink, Hein (1977) A Haisla phonology. *International Conference on Salish Languages* 12: 111-131.

———— (1978) Root-expansion in Haisla. *International Conference on Salish Languages* 13: 1-10.

【付属資料】

【本稿の表記法】

子音音素：

/p/:	⟨b⟩	/pʰ/:	⟨p⟩	/p’/:	⟨ṗ⟩	/kʲ/:	⟨g⟩	/kʲʰ/:	⟨k⟩	/kʲ’/:	⟨k̇⟩	/ʔ/:	⟨’⟩
/t/:	⟨d⟩	/tʰ/:	⟨t⟩	/t’/:	⟨ṫ⟩	/kʷ/:	⟨gʷ⟩	/kʷʰ/:	⟨kʷ⟩	/kʷ’/:	⟨k̇ʷ⟩	/h/:	⟨h⟩
/t͡s/:	⟨z⟩	/t͡sʰ/:	⟨c⟩	/t͡s’/:	⟨ċ⟩	/q/:	⟨ḡ⟩	/qʰ/:	⟨q⟩	/q’/:	⟨q̇⟩	/s/:	⟨s⟩
/tˡ/:	⟨λ⟩	/t͡ɬ/:	⟨ƛ⟩	/t͡ɬ’/:	⟨ƛ̇⟩	/qʷ/:	⟨ḡʷ⟩	/qʷʰ/:	⟨qʷ⟩	/qʷ’/:	⟨q̇ʷ⟩	/ɬ/:	⟨ɬ⟩
/m/:	⟨m⟩	/m’/:	⟨ṁ⟩	/w/:	⟨w⟩	/w’/:	⟨ẇ⟩	/xʲ/:	⟨x⟩	/χ/:	⟨x̄⟩	/l/:	⟨l⟩
/n/:	⟨n⟩	/n’/:	⟨ṅ⟩	/j/:	⟨y⟩	/j’/:	⟨ẏ⟩	/xʷ/:	⟨xʷ⟩	/χʷ/:	⟨x̄ʷ⟩	/l’/:	⟨l̇⟩

※ 子音音素の主な異音変異（allophonic variation）：

/p/:	[p ~ b]	/t/:	[t ~ d]	/kʲ/:	[kʲ ~ gʲ]	/kʷ/:	[kʷ ~ gʷ]
/q/:	[q ~ ɢ]	/qʷ/:	[qʷ ~ ɢʷ]	/t͡s/:	[t͡s ~ d͡z]	/tˡ/:	[tˡ ~ dˡ]

母音音素：

/i/: ⟨i⟩　　/a/: ⟨a⟩　　/u/: ⟨u⟩

※ 母音音素の主な異音変異（allophonic variation）：

/i/ → [ei̯] / [+uvular/glottal] ___　　/u/ → [ou̯] / [+uvular/glottal] ___

その他：

⟨e⟩ ＝ シュワー　　⟨ ´ ⟩ ＝ アクセント

【直接法における主語・直接目的語の人称接語】

主語の人称接語：

	単数	複数
一人称・除外的	*=n* / *=nug^{w}a*	*=nux^{w}*
一人称・包括的		*=nis*
二人称	*=su*	
三人称 – 近称	*=ix*	
三人称 – 中称	*=u*	
三人称 – 遠称	*=i*	
三人称 – 欠称	*=gi*	

※ 一人称単数の主語の人称接語は 2 つの異形態がある。助動詞に付くのは、*=n* のみであるが、それ以外の環境では自由変異の関係にある。

※ ハイスラ語には、/s/ + /s/ → /t͡sʰ/ という音韻規則があるので、二人称の主語人称接語である *=su* は場合によって前の ⟨s⟩ と合体し、*=cu* となることがある。例えば、=su が否定助動詞の *k'us-* という異形態の後ろに付く時に、*k'ucu* (AUX.NEG.2) となる。

直接目的語の人称接語：

	単数	複数
一人称・除外的	*=enƛ(a)*	*=enƛanux^{w}*
一人称・包括的		*=enƛanis*
二人称	*=uƛ(a)*	
三人称 – 近称	*='ix* / *='exḡ*	
三人称 – 中称	*='u*	
三人称 – 遠称	*='i*	
三人称 – 欠称	*='exḡi*	

※ 筆者のデータの中には、三人称・欠称複数の直接目的語の人称接語として、先行研究の記述でこれまでに見ていない *-'i'exḡi* という生産性が低い接語も見られるが、この接語の振る舞いに関する詳細は不明であるため、表の中に入れていない。

受理日 2019 年 4 月 16 日

岩崎　崇雅　(2019)『言語記述論集』11：181-196

ルシャンの昔話—猫とおばあさん—

岩崎崇雅

京都大学大学院文学研究科

0　はじめに: ルシャン語について

0. 1　ルシャン語の位置づけ

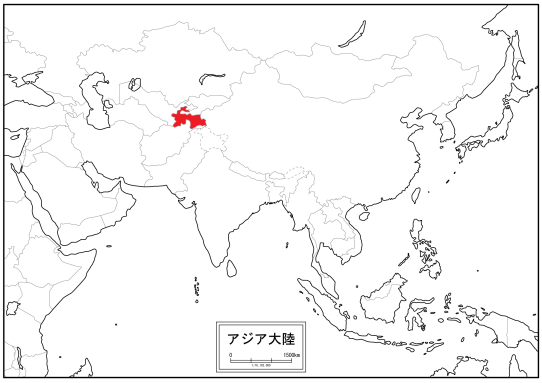
ルシャン語 (ルシャン語 rixůn ziv) は、インド･イラン語派南東イラン語群に属し、タジキスタンのゴルノバダフシャーン自治州･ルシャン地区（Gorno-Badakhshan Autonomous Region, Rushan region,　地図 1.）と、隣接するアフガニスタンのバダフシャーン州の一部（地図 2.）で話される言語である。話者数はおよそ 18000 人である。 タジキスタン側の住民の全員が多言語併用者で、母語のルシャン語に加え、タジク語またはロシア語を話すことができる。アフガニスタン側のルシャン人に関しては、ダリー語との二言語併用者である。

タジキスタンのルシャン語の方言はパンジ川下流で話される下ルシャン方言とそれより上流で話される上ルシャン方言の二つに分けられる (Zarubin 1937) 。

また、ルシャン地区の南部で話されるフフ語 (Khufi) をルシャン語の三つめの方言に含めることもある。

本稿はタジキスタン側の上ルシャン方言を記録したものである。

地図 1.　タジキスタンの地図



地図 2.　ルシャン語の話される地域　（丸囲み）

表 1、2 ともに白地図専門店 http://www.freemap.jp/item/asia/の地図を筆者が一部加工した。

テクストの提供と文字起こしに協力してくださった Sebarga Shozodalajsov 氏　(1984 年生まれ、男性、Vomar 出身）に心よりお礼を申し上げる。

0. 2　ルシャン語の類型的特徴

ルシャン語の基本語順は SOV であり、修飾節は被修飾語に先行する。 名詞は性（男性と女性）と数（単数と複数）の区別をもつ。一部の形容詞でも性の区別がある。

多くの代名詞は数と格の区別をもつ。格は直格と斜格の 2 種類を区別する。指示代名詞の単数斜格には性の区別もある。 直格は全時制で主語に用いられうる。斜格は全時制で直接目的語と、側置詞（前置詞、後置詞および両置詞）の補語に用いられる。過去時制の文では主語に斜格を用いることが高齢者の間では普通である。

また、指示代名詞は冠詞や、三人称の代名詞としても用いられるため、本稿では文脈に応じてグロスを指示詞、冠詞、三人称の代名詞を使い分けている。

ルシャン語の動詞は現在語幹と過去語幹の区別をもつ。 現在語幹からは現在形が作られ、過去語幹からは過去、現在完了、および過去完了形が作られる。

1　表記法

本稿の表記では Sokolova (1953, 1959) を参考に、以下の表記法を用いる。 IPA 記号と異なる形のものは () 内に対応する IPA 記号を付した。

表 4：母音

(a) 長母音

ī				ū
	ē		ů(ʊː)	
				ō
		ā		

(b) 短母音

i			u
			o
	a		

表 5：子音

	両唇	唇歯	歯	歯茎	後部歯茎	硬口蓋	軟口蓋	口蓋垂	声門
閉鎖音	p b			t d			k g	q	
破擦音				c (ts) ʒ (dz)	č(tʃ) ǰ(dʒ)				
摩擦音		f v	ϑ (θ) δ (ð)	s z	š (ʃ) ž (ʒ)		x̌ (x~ʂ) γ̌ (ɣ~ʐ)	x (χ) γ (ʁ)	(h)[1]
鼻音	m			n					
ふるえ音				r					
接近音						y (j)	w		
側面接近音				l					

2　物語について

この物語は sugak と呼ばれる短い物語の一種である。 sugak は sug「物語」に指小辞の-ak をつけたものである。これと同語源の語はシュグニー語 (Shughni)、バルタング語 (Bartangi) など近隣のパミール諸語にも見られる。 ルシャン語で「物語」を意味する語は他に、(h)iqoya というものがあるが、これはルシャンにもともとなかった物語に対しての名称であり、一方の sug, sugak は一般にルシャン語に古くからある物語のことを指す。

[1] 散発的に借用語に観察されることがある。

3　テクスト

(1) *viǰ na viǰ,* *yi* *piš* *viǰ.*

once upon a while one cat be.PRF

むかしむかし、猫がいた

(2) um piš=ā sōib na viǰ.

ART.F.OBL cat=POSS owner NEG be.PRF

その猫には飼い主がいなかった

(3) *yā* *bisōib* *dōim* *kuč-ēn* *ar* *kuča* *garde kiǰt=at,*

ART no-owner always street-PL to street stroll.PRS.3SG=and

dozday *kiǰt=at,*

theft do.PRS.3SG=and

ar *xōn-ēn* *indīzd,* *mardom=ā* *uf* *ǰuvd* *birēz=at,*

to house-PL enter.PRS.3SG people=POSS their milk drink.PRS.3SG=and

ik-id *um* *awōl* *viǰ.*

EMPH-this that.F.OBL. state be.PRF

その野良猫はいつも通りという通りをうろつき、盗みをしたり、家に侵入して人々の牛乳を飲んだり、そんな有様だった

(4) *yi* *rūz* *atā,* *yā* *piš* *sat* *ar* *kuča,*

oneday and ART cat go.PST.F to street

i lāv *kuča garde kiǰt* *xo,* *bād* *mawz kiǰt.*

some stroll a street.PRS.3SG and then become hungry PRS.3SG.

そしてある日、その猫は通りに出て、いくつかの通りを歩き回り、お腹がすいた

(5) *bād* *ar* *yi* *kampīr* *ar* *um* *čod* *indizd.*

and to one old woman to her house enter.PST

そしておばあさんの家に入った

(6) *yā* *kampīr* *ar* *xo* *čod* *tōqā=yaϑ.*

ART old woman to REFL.OBL house alone=EMPH

そのおばあさんは自分の家に一人で（住んで）いる

(7) *bād* *um*[2] *x̌uvd birēzd,* *um=ā tāč=and* *x̌uvd xo.*

and her milk drink.PRS.3SG her=POSS dish=LOC milk eat.PST

（彼女は）牛乳を飲んでいた、彼女の皿にある牛乳を

(8) *yā* *um* *x̌uvd* *birēzd.*

it.DIR ART.F.OBL/ her milk drink.PRS

（猫は）その牛乳を飲んだ

(9) *yā* *kampīr* *bād* *um* *inǰivd* *xo,*

ART.DIR old women then that.F.OBL catch.PRS and

um *piš=ā* *um* *δum* *kīpt.*

ART.F.OBL cat=POSS ART.F.OBL tail cut offt.PRS3SG

おばあさんは猫を捕まえて、その猫の尻尾を切った

(10) *yā piš* *bād* *nawd.*

ART cat then cry.

猫は泣いた

(11) *nōlān kix̌t,* *zorā kix̌t.*

cry aloud.PRS.3SG beg.PRS.3SG

泣き喚いて、乞うた

---

[2] *x̌uvd* は男性名詞であるため、*um* は指示代名詞ではなく、人称代名詞の所有形として使われている。

(12) *luvd:* *"mu* *δum-ak* *mur* *dāk".*

say.PRS.3SG my tail-DEMIN I.DAT give.IMP

（猫は）言った、「私の尻尾を返してくれ」

(13) *yā* *kampīr* *bād* *luvd:*

ART old woman then say.PRS.3SG

"*tōnac=at* *ǰuvd* *mur* *na* *vūǰ,*

as long as=2SG milk me.DAT NEG bring.PRF

az *tā* *δum* *tar* *na* *dākum".*

I your tail you.DAT NEG give.PRS.1SG

おばあさんは答えた、「牛乳を私に持ってこないかぎり、私はお前の尻尾をお前に渡さないよ」

(14) *yā* *piš* *az* *xōnā* *niǰtizd* *xo,*

ART cat from house go out.PRS3SG and

tizd, *bīδum=aϑ.*

go.PRS.3SG bob-tailed=ADVR

その猫は家から出て、尻尾のない状態で行った

(15) *bād* *tar* *kuča* *nawt=atā,*

and to street cry=and

pānd=te *kud* *pa um δayt.*

road=ondog to that.F.SG.OBL meet.PRS.3SG

通りで泣いていると、犬に出会った[3]

(16) *bād* *yā* *kud* *luvd:* *"ā* *piš,* *tu* *čīz* *nāwe?"*

then ART.DIR dog say.PRS.3SG ah cat you why cry.PRS.2SG

[3] Lit.「犬が猫にであった」

犬は言った、「おお、猫よ、なんで泣いているんだい」

(17) *yā* *bād* *xo* *awōl* *um=ri* *naqle kiχt.*

it.DIR then REFL.OBL state it.F.SG.OBL=DAT tell.PRS.3SG

猫は自分の状況をその犬に話した

(18) *ik das ge* *ōdisā* *suč.*

such event become.PRF

こんなことが起こったと

(19) *yā* *luvd:* *"xāy,* *i čīz* *gāp* *nist,*

it.DIR say.PRS.3SG well one thing word EXS.NEG

tu *mānd* *sa* *az* *žōw* *xīz,*

you now go.IMP from cow to

χuvd *um=re* *va* *xo,*

milk her=DAT bring.IMP and

yid *tā* *δum* *tar* *dākt".*

she your tail to you give.PRS.3SG

犬は言った、「そうか、それなら君は今から牛のところに行ってその老婆に牛乳を持っていくといい、そしたら彼女は君の尻尾を君に返してくれるよ」

(20) *yā* *bād* *sat* *tar* *žōw* *xīz,* *yā* *piš.*

it.DIR then go.PST.F to cow to ART.DIR cat

猫はそこで牛のところに行った

(21) *bād* *yā* *žōw* *az* *um* *piš* *luvd:*

and ART.DIR cow from ART.F.SG.OBL cat say.PRS.3SG

"čīz *nāwe,* *čīz* *tar* *sut?"*

why cry.PRS.2SG what to you become of.PST.M

その牛は猫に言った、「なんで泣いているんだい、君に何があったんだい？」

(22) *yā* *naqle* *um=re* *kiǰt.*

it.DIR tell it.F.SG.OBL=DAT do.PRS.3SG

猫は牛に話した

(23) *ik=das ge* *kōr* *sut.*

EMPH=such work become.PST.M

こんなことになったと

(24) *yā* *bād* *luvd:*

it.DIR then say.PST

"az=um *mawz,* *mun=ā* *ik-mānd* *ǰuvd* *nist".*

I=be.1SG hungry I.OBL[4]=poss EMPH-now milk EXS.NEG

牛は言った、「私は空腹で、今は牛乳がない」

(25) *"tu* *mānd* *wōǰ* *mur* *va,* *az* *wōǰ* *xām* *xo,*

you now hay to me bring.IMP I.DIR hay eat.PRS.1SG and

čīz *tar* *kinum,* *ǰuvd* *tar* *dākum".*

what to you do.PRS.1SG milk to you give.PRS.1SG

「君がいま干草をくれたら、干草を食べて、そうだな[5]、牛乳を君にあげよう」

(26) *yid* *piš* *vō* *sat* *γamgīn* *xo,*

ART.DIR cat again become.PST.F sad and

tizd, *tizd,* *tizd .* *tizd.*

go.PRS.3SG (diito) (ditto) (ditto)

その猫は再び悲しくなって、歩き、歩き、歩き、歩いた

---

[4] mu (1SG.OBL) の異形態

[5] Lit.「何をきみにしてやろうかな」

(27) *vō* *pānd=te* *id* *kud* *pa* *um* *δayt.*

again way=on ART.DIR dog to it.F.SG.OBL meet.PRS.3SG

またしても途中で犬に出会った

(28) *id* *vō* *xo* *naqli kiǰt:* *žōw=re* *wōǰ* *darkōr.*

it.DIR again REL.OBL tell.PRS.3SG cow=DAT hay need

猫はまた自身のことを話した、牛には干草が必要だと

(29) *yā* *luvd:*

it. DIR say.PRS.3SG

"*to* *walman* *sa* *az* *tor* *zamīn-ēn,*

you.DIR now go.IMP from above land-PL

wōǰ *dum=re* *va".*

hay this.F.SG.OBL=DAT bring.IMP

犬は言った、「君は今すぐ高地から牛に干し草を持って行け」

(30) *yid* *piš* *bād* *tizd,* *tizd,* *tizd,* *sat* *pa* *čīz* *xīz,*

ART.DIR cat then go.PRS.3SG (diito) (diito) go.PST.F to what to

pa *zamīn-ēn* *xīz,* *pa* *dehqōn* *xīz.*

to lamd-PL to to farmer to

猫はまた歩き、歩き、歩き、誰のところだったかな、畑のもとに、農民のところに行った

(31) *yā* *dēqōn*[6] *dum* *wunt* *xo,*

ART.DIR farmer it.F.SG.OBL see.PRS.3SG and

bād *luvd:* *"a* *piš* *čīz gap sut?"*

then say.PRS.3SG oh cat what happened[7]

---

[6] この物語中では *dehqōn* と h の落ちた形である dēqōn が両方用いられている。

その農民は猫を見て、言った、「おお、猫よ、どうしたんだい？」

(32) *"tu kā nāwe?"*

you why cry.PRS.2SG

「なんで泣いているんだい？」

(33) *yid xo naqle day=re kiχt.*

it.DIR REFL.OBL tell him=dat do.PRS.3SG

猫は自身のことを彼に話した

(34) *das ge ōdisa sut.*

such event become.PST.M

こんなことになったと

(35) *yid dehqōn bād luvd: "mun=ā mu zamīnēn=ā qoq,*

ART.DIR farmer then say.PRS.3SG I.OBL=POSS my lands=POSS dry

duf=te, ar duf wōχ rūy na δůǰ."

those=on to those hay grow.NEG. grow.PRF

農民は言った、「私の畑は乾いていて、そこには干草が育っていない」

(36) *"tu mānd sa dum wēδak=te χac de xo,*

you now go.IMP ART.F.SG.OBL ditch=on run water .IMP and

az tar wōχ dākum".

I to you hay give.PRS1SG

「君が今から用水路に行って水を流してくれるなら、おまえに干草をやろう」

(37) *bād, yid piš vō tizd, vō δar=aϑ tizd,*

and ART.DIR cat again go.PRS.3SG again far=EMPH go.PRS.3SG

---

[7] 字義通りには「どんな言葉が（*čīz gap*）行った（*sut*）？」あるいは「どんな言葉になった？」

sat *dum* *wēδ=te* *dum dow* *x̌ac dētōw*

go.PST.F this.F.SG.OBL ditch=on this.F.SG.OBL trial run water.INF

そして猫はまた歩き、更に遠くへ歩き、この用水路の水を流すことを試しに行った

(38) *ar* *dum* *x̌ac* *nist.*

in it.F.SG.OBL water EXS.NEG

そこには水がなかった

(39) *dum* *wēδ* *darūn=an* *žēr-ēn.*

ART.F.SG.OBL ditch inside=3PL stone-PL

その用水路には石が沢山あった

(40) *yā* *bād* *duf* *žēr-ēn* *kix̌t tōza,*

it DIR then those.OBL stone-PL clear away.PRS.3SG

tō *pa* *dum* *sargāz=yaϑ day* *kix̌t tōza* *xo,*

to to it.F.SG.OBL start=EMPH this.M.SG.OBL clean.PRS.3SG and

x̌ac *dum* *wēδ=te* *dēt.*

water ART.M.SG.OBL ditch=on run.PRS.3SG

猫はそれらの石を掃除して、用水路の始まりまできれいに掃除すると、

水がその用水路に流れた

(41) *yā* *x̌ac* *yiδd* *ar day* *dēqōn* *xīz,*

ART.DIR water come.PRS.3SG to ART.M.SG.OBL farmer to

yid *dēqōn* *δiδd* *xo* *zamin-ēn* *x̌ac,*

ART.DIR farmer give.PRS.3SG REFL.OBL land-PL water

zamīn-ēn=an[8] *sat* *wōx̌.*

land-PL=LOC become.PST.F hay

[8] =and の異形態

その水は農民のところに流れていき、農民は自分の畑に水をやり、畑に牧草が生えた

(42) *dēqōn* *dum* *piš=re* *dākt* *wōx̌,*

farmer ART.F.SG.OBL cat=DAT give.PRS.3SG hay

yid *day* *zēzd* *virt* *žōw=re,*

it DIR it.M.SG.OBL. take.PRS.3SG bring.PRS.3SG cow=DAT

žōw *xirt,* *sāwt* *sir,*

cow eat.PRS.3SG become.PRS.3SG full

dum *piš=re* *dākt* *x̌uvd,*

this.F.SG.OBL cat=DAT give.PRS.3SG milk

sat *tar* *um* *kampīr* *xīz.*

go.PST.F to ART.F.OBL old woman to

農民はこの猫に干し草をあげ、猫はそれをとり、牛のところに持って行き、牛は（それを）食べ、満腹になり、その猫に牛乳をあげ、猫はその老婆のところに行った

(43) *bād* *(言い間違い)* *"az=um* *tā* *x̌uvd* *tar* *vo,*

and I=1SG your milk to you bring.PST.

at *tu* *mānd* *mu* *δum* *mur* *dāk".*

and you.SG.DIR now I.SG.OBL tail to me give.IMP

そして、（猫は言った）「私はあなたの牛乳をあなたに持ってきました、さあ私のしっぽを返してくれ」

(44) *yā* *bād* *luvd:*

that and say.PRS.3SG

"ku *awal* *az* *day* *birēzum,*

EMPH first I.SG.DIR this.M.SG.OBL drink.PRS.1SG

yid tuǩp nist=o, yid ǩuvd".

this sour EXS.NEG =whether this milk

猫は言った、「まず私がそれを飲みます、その牛乳がすっぱくないか(確かめます)」

(45) *bād birēzd way, yā tuǩp nist.*

then drink.PRS.3SG it.M.SG.OBL it.DIR sour EXS.NEG

そして猫はそれを飲み、それはすっぱくなかった

(46) *bād um δum um=re dākt, yā*

and it.F.SG.OBL tail that.F.SG.OBL=DAT give.PRS.3SG it.DIR

xo δum zēzd xo,

REFL.OBL tail take.PRS.3SG and

xo=te kiǩt way xaš.

REFL.OBL=on do.PRS.3SG it.M.SG.OBL replant

そして（老婆は）猫の尻尾を猫に返して、猫は自分の尻尾を取り、

それを自分にくっつけた

(47) *bād yā Kampīr um pawst:*

and ART.DIR old woman it.F.SG.OBL ask.PRS.3SG

"tu=ta mānd tar kā sāwe?"

you=FUT now to where go.PRS.2SG

老婆は猫に尋ねた、お前はこれからどこに行くんだい？

(48) *yā luvd: "az=ta mānd tar kuča kučagarde kinum".*

it.DIR say.PRS.3SG I.SG.DIR=FUT now to street stroll.PRS.3SG

猫は言った、「私は今から通りを散歩します。私には飼い主がいないので」

(49) *yid kampīr bād az um luvd:*

ART.DIR old woman then from it.F.SG.OBL say.PRS.3SG

"tu　mānd　niϑ　mu　xōna=ande　purg-ēn inǰa".

you　now　stay.IMP　I.SG.OBL　house=LOC　catch.IMP

その老婆は猫に言う、「お前はいまから私の家に住んで、ネズミを捕まえておくれ」

(50) *"az　mu　xōna　duf　ke ai".*

from　my　house　them　expel.IMP

「私の家からネズミたちを一掃してくれ」

(51) *"az　tar　dākum　x̌uvd　xo,　yak ǰōy=aϑ　zindagi kinam".*

I　to you　give.PRS.1SG　milk　and　together=ADVR　live.PRS.1PL

「私はお前に牛乳をやるから、一緒に暮らそう」

(52) *yid　piš　bād　sat rōze　xo,*

ART.DIR　cat　then　agree.PST.F　and

sat　bād　dum　kampīr　qatay kix̌t zindagi[9]　*xo,*

happen.PST.F　and　ART.F.SG.OBL　old woman with　live.PRS.3SG　and

purgēn　az　dum　čod　kix̌t ai,

mouse-PL from this.F.SG.OBL　house　expel.PRS.3SG

kōre[10]　*xōna　dum=re　kix̌t=at*

work.EZ　house　her=DAT　do.PRS.3SG=and

dum　haq　id　kampīr　dum=re　dākt　x̌uvd.

ART.F.SG.OBL　serve　ART.DIR　old woman this.F.SG.OBL=DAT give.PRS.3SG　milk

猫は同意し、老婆と共に暮らし、ネズミを一掃し、家事を老婆のために行い、かれの働きに老婆は猫に牛乳を与えた

---

[9] *sat* の補語になるときは不定詞であることが普通であるが、ここではなぜか人称形が現れている。

[10]タジク語に見られるエザーフェ構文が借用されているため、本来の「修飾語–被修飾語」の語順になっていない。

略号一覧

ADVR 副詞化

ART 冠詞

DIR 直格

EMPH 強意

EZ エザーフェ

F 女性

FUT 未来[11]

INF 不定詞

IMP 命令法

M 男性

NEG 否定

OBL 斜格

PERF 現在完了

PL 複数

POSS 所有

PRS 現在

PST 過去

Q 極性疑問

REFL 再帰代名詞

SG 単数

= 接語境界

- 形態素境界

[11] 行為の完了が確実視されるという意味でここでは使っている。

1　1 人称

2　2 人称

3　3 人称

参考文献

Sokolova, V. S. 1953. Ocherki po fonetike iranskix jazykov II. Moskva-Leningrad. Akademija nauk SSSR

——————1959. *Rushanskie i Xufskie teksty i slovar'*. Moskva-Leningrad. Akademija nauk SSSR

Zarubin, I. I.　1937. *Bartangskie i Rushanskie teksty i slovar'*. Moskva-Leningrad. Akademija nauk SSSR

受理日 2019 年 4 月 16 日

言語記述論集　第 11 号

言 語 記 述 研 究 会

2019 年 4 月 30 日発行

ISSN 2432-244X